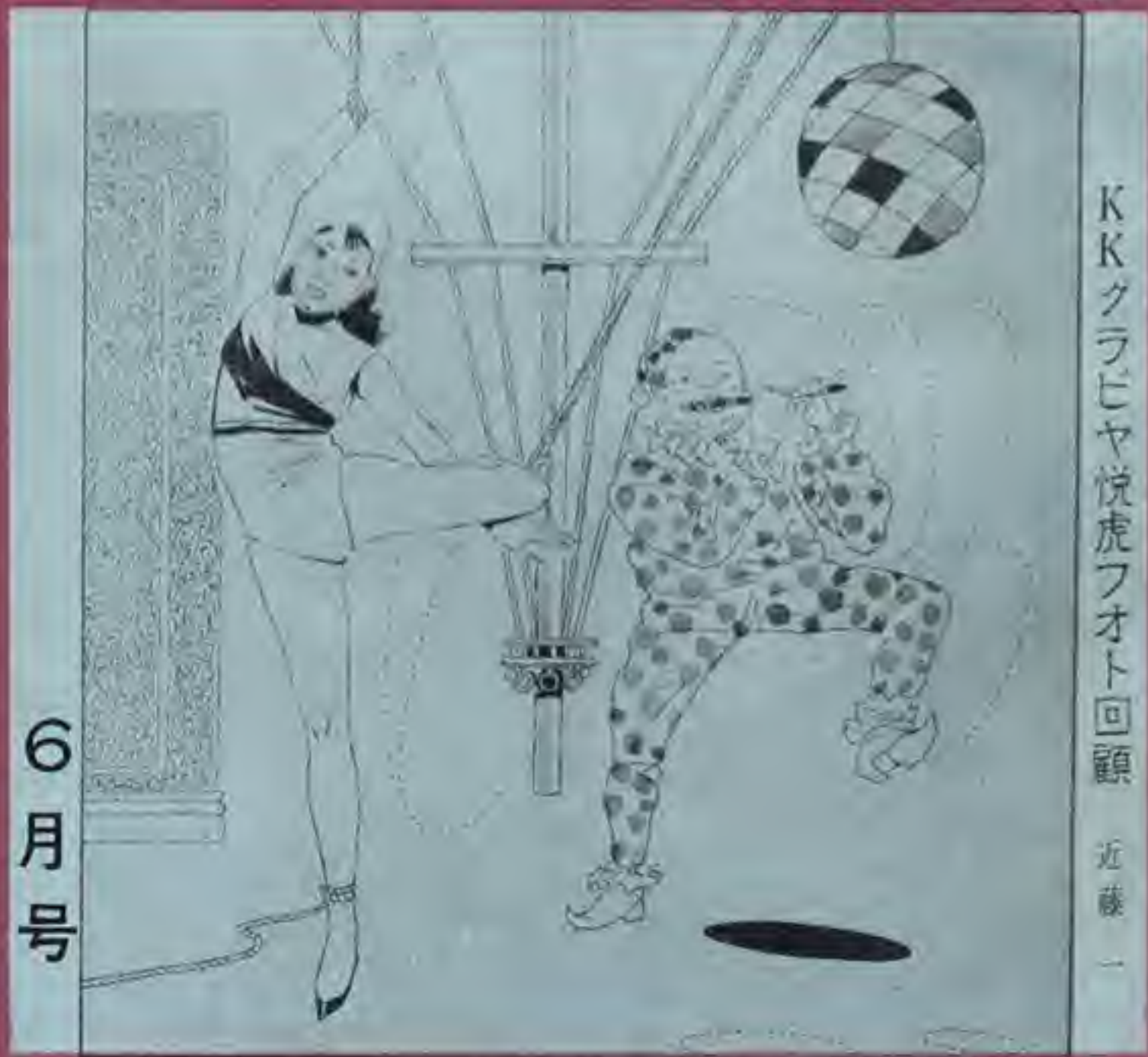


奇譚クラブ

新しい風俗文獻誌

1964・6



KKクラブや悦虎フオト回顧

近藤 一

6月号

奇譚クラブ

6月号

定価二五〇円

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tenseisya

Osaka Japan



6月号

¥250

女相撲と女斗美

女相撲ファン並に女斗美ファンの待望久しい女相撲写真、女斗美写真、裸女組打ち写真の第一作をここに提供いたします。

女相撲組打ち

相撲マワシ着用

大手札印画紙焼付

八枚一組 八〇〇円

略号(すか)

雲斎の相撲フンドシを本格的に締め込んだ若々しい裸女二人。お互いに相手のマワシを上手、下手しつかと握りあって、組み合ったもろもろのポーズ。これから技を掛けようと全身に力をこめたところ、前ミツの取りあい、吊りあい

とさまざまな変化を収める。

女相撲投げ業

相撲マワシ着用

大手札印画紙焼付

八枚一組 八〇〇円

略号(すね)

同じく本格的な相撲マワシを締め込んだ二人の裸女。互いに全身に力をみなぎらせて、内掛け、外掛け、下手投げ、吊り、腰投げとさまざまな技を見せて、相争う女相撲の美しさ。いずれも若々しい女体を相持たせる女相撲マニヤ待望のフォト。

裸女の争斗

白晒六尺フンドシ着用

大手札印画紙焼付

浣腸美媚態

大判判(13×19) 印画紙焼付

三枚一組 六〇〇円

略号(のゆ)

新しい狙いによる四馬孝画伯による浣腸美の極致を最高度に描写した女性の美しさを女体浣腸に求めた芸術的作品

一、令嬢の浣腸

美しい令嬢、二人の看護婦に両

二、BGの浣腸

診療所の治療室にて、花恥しきビジネスガールが、羞らいながら、医師の目の前に臀部をつき出して浣腸ポーズをとるといふ、医療という目的のために、やむにやまれぬ受縛をうけて、浣腸の祭壇に立たされる美しい女性。

五枚一組 五〇〇円

略号(めん)

白晒の六尺フンドシをいなしにきりりと締めた二人の裸女の女斗場面写真。プロレスまがいの技を用いて、互いに相手の最後の止めをさそうとして相争う、女体相搏つ女臭ふんふんたるフォト。

裸女の寝業

白晒六尺フンドシ着用

大手札印画紙焼付

五枚一組 五〇〇円

略号(めき)

激しい争いの結果、一方が勝つていたのか、逞ましい臀の下に相手手を組み敷いて、誇らしげに馬乗りになったポーズ。組み敷かれた女は必死になって反撃に転じ、組

三、女学生の浣腸

セーラー服の可憐な少女が、ズベ公とチンピラ達に、よってたかつて浣腸される。華々しい美の断層の一場面。

処刑場面写真

新宮明夫氏提供

絞首刑

大手札印画紙焼付

二枚一組 三〇〇円

略号(るく)

んずほぐれつの大熱戦。互い相手の急所である乳房に爪を立てあい苦悶の形相も物凄く、二人の裸女の寝業の応酬はつづく。

裸女相搏つ

白晒六尺フンドシ着用

大手札印画紙焼付

八枚一組 八〇〇円

略号(えく)

魅力的な臀部に、きりりと締め込んだ白晒六尺フンドシ一本の凛々しい姿になった二人の裸女が、互いに相手のフンドシをとりあい自分の意のままに屈伏させようと全身の筋肉を躍動させる見事な美しさ。渾一本の裸女の魅力と肉体的美を最大限に発揮させた素晴らしいフォト。

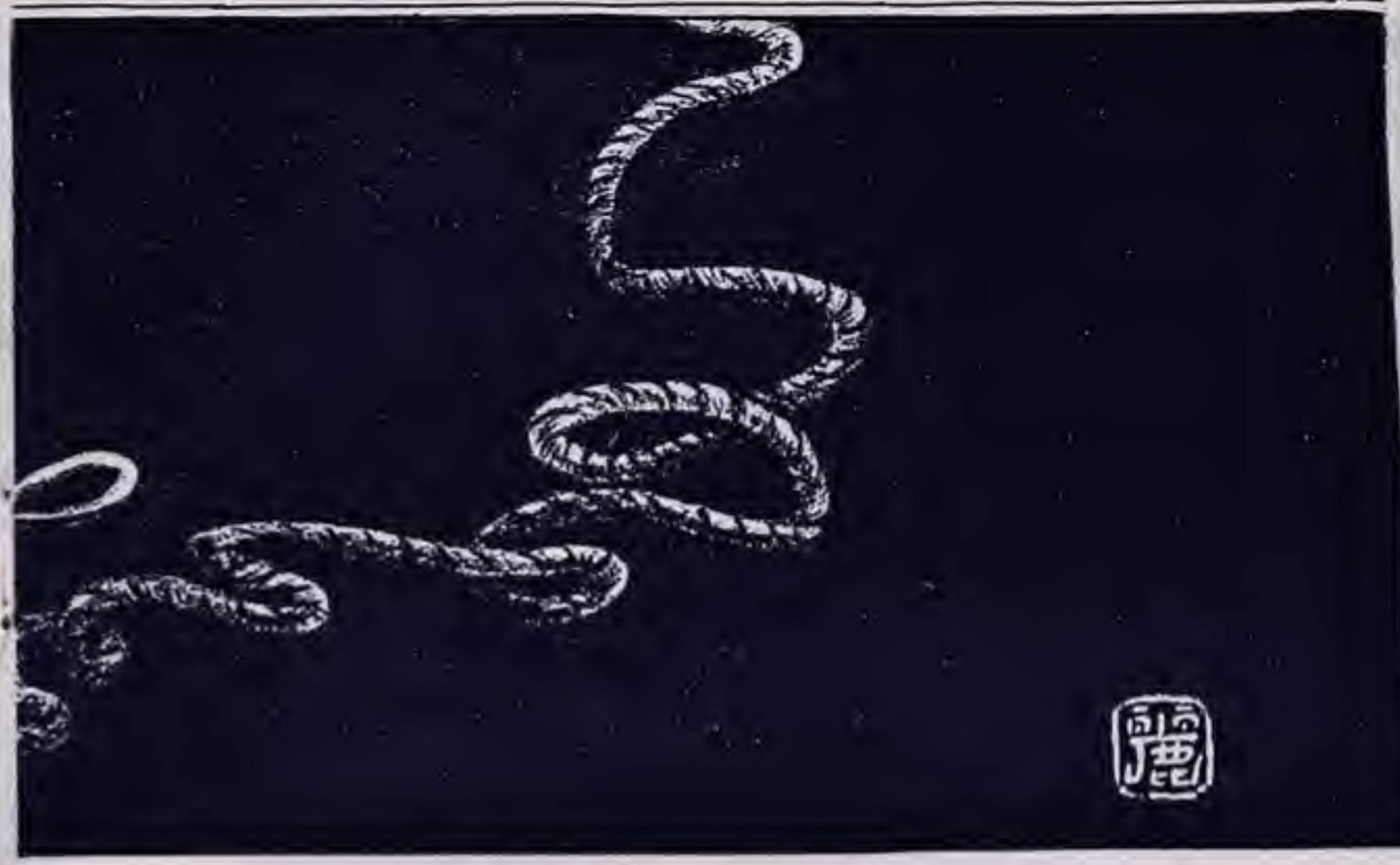
引廻しと晒

大手札印画紙焼付

二枚一組 三〇〇円

略号(るに)

首繩後手高小手にきびしく固められた裸身を縄尻をとられて、引廻される美女の哀れさと、前手縛り目かくしのまま、放置されて晒される裸身の心もとなさ。



奇譚クラブ 6月号 目次

第三者立傍観 大塚啓子
竹棒の小道具利用 大塚啓子
後手吊りの諦観ムード 梨花悠紀子
豆絞りのアクセント 遠藤百合子
猿ぐつわによる表情の変化 大塚啓子
椅子活用の逆エビポーズ 大塚啓子

アイデア画「泥責め」 四馬孝・画
賣画 女体生体実験 四馬孝・画
女相撲「禁じ手五題」の内 雪崎京人・提供
ドミナとスレイフの部屋 10 尻打ち機構
(8) 着衣剝奪 (9) 吊り機構 四馬孝・画
女体切腹「武家娘の切腹」

美 貌 弄 顔 梨花悠紀子
華々しきいたぶり 大塚啓子
流腸具のある風景 大塚啓子
うごめく拘束女体 梨花悠紀子
さるぐつわ哀情 大塚啓子
足首と縄、柔肌と縄 大塚啓子
あえかな女囚ムード 梨花悠紀子

◆奇クサロン◆ 編集部編 (33)
○編集のジレンマ 編集部 (33)
○「8ミリ製移行」第一作「のたうつ女体」
○登映治 (34) ○ヘルセキサン 小山田久美 (35)
○「お祈りの女体」八南方
○男さんへ 多山皓 (36) ○映画通信「或るキス・シーン」めんとりの肉と
り 41 生 (37) ○サロン集我記 2 V 辻村隆 (38) ○愛天古林短信 (38)
○「読後感」四月号を見て 神戸正雄 (39) ○ハマニヤ通信「その瞬間」あ
るマニヤの話 Y T 生 (40) ○映画のお色気攻勢 秋映画通 (41) ○吉行淳
之介著「砂の上の植物群」評 日刊各紙 (42) ○背負い投げ 許幸政久 (43)
○卒業式の午後の思い出 井沢京子 (45) ○女相撲「ロマンスバンド」 S K 生

KK グラビヤ悦虐フォト回顧 近藤 一 (49)
(昭和35年ベスト5について)
「奇譚三十九夜」物語 (第三十六夜) 辻村 隆 (58)
女性切腹の可能性 高野 原美 (88)
(切腹の心理と腹部マゾヒズム)
ガン作・マニケのノート 芳野 眉美 (52)
濡れにぞ濡れし (第三)

「十三人の女死刑囚」 佐出須 登 (78)
△A収容所的大量虐殺△
KK グラビヤ悦虐フォト回顧 近藤 一 (83)
(昭和36年ベスト10について)
長篇SM小説 宇宙のどこかで 佐治 麻造 (96)
切腹研究夜話 忍者TV切腹 中康 弘通 (43)
赤いお腰しと長襦袢 牧 高志 (100)
流腸の部屋 芳野 眉美 (112)
FRAGMENT 三原 寛 (110)
浅き夢見し (悦虐絵燈籠6) 万田 不仁 (132)
サジスチック・ストーリー・シリーズ

ある夜の政代 大中 忠 (111)
解剖マニヤの手記 女体解剖 嶋田 雪子 (150)
KK グラビヤ悦虐フォト回顧 近藤 一 (180)
(昭和37年の10傑について)
新連載サティズム小説

心傷たむ遍歴 西条 操 (162)
連載小説 花と蛇 (第12回) 団 鬼六 (186)
本誌既刊号総目次 (190)
読者通信 (192)

今月の新版分譲品

煙草責めの裸身

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(たく)
身動きもできぬ真白な裸身をも
だえさせて、火のついた巻煙草を
無理にぶかぶかと吸わせられる。

淫らな長髪の乱れ

大手札三枚一組 三〇〇円
長野 良子 略号(ろも)

ふり乱す長髪のもだえ

大手札三枚一組 三〇〇円
長野 良子 略号(ろめ)

肉体美に自信のある長野良子は
もともとポニーテールの長髪を巻
いていたのだが、この二つの写真
集は、その長髪をふり乱して強烈
な縛りにポリウムのある身体をう
ねりにうねらす彼女の最近作。口
絵に不適のため特に分譲品に。

鎌腹を切られる女

大手札二枚一組 三〇〇円
モデル 愛川悦子、田中芳代
略号(らく)

愛川悦子によって背後から抱え
られるようにして、膣の下も鎌に
よって掻き切られている可憐な女
子大生田中芳代嬢。

咽喉笛を刺される女

大手札二枚一組 三〇〇円
モデル 愛川悦子、田中芳代
略号(らみ)

虚空を擲んであお向けに倒れた
芳代の上に跨った悦子が、その咽
喉元へぐさりと短剣のとどめを刺
し、後から抱えて、首を掻き斬ろ
うとするところ。

血紅使用 斬られる女

大手札七枚一組 七〇〇円
絹川 文代 略号(らふ)

美貌の絹川文代の真白い下腹に
或は脇腹に、のど元にドキドキと
する脇差が突き刺って、断末魔の
苦悶にあえぐ表情と、死のけいれ
んにゆがむ四肢と指先、血紅を使
用して斬られる女の真迫的な美し
さとスリルを盛り上げました。

浣腸を施される女

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(ちら)

浣腸を待つ女の足元から、一〇〇
CCの大きな浣腸器が施術者の手
によって、迫ってくる。

自から施す浣腸

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(ちめ)

浣腸器を弄ぶ女

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(ちり)

イルリガートル、エネマシリン
ジ、一〇〇CC、三〇〇CC、二〇
CC浣腸器などを弄ぶ若き女。

縄目にもだえる夫人

大手札三枚一組 三〇〇円
関谷富佐子 略号(ほく)

猿ぐつわも厳しく後手に縛られ
た夫人が、乳房も太股もお臍もあ
らわに、平常のつつしみ深さも忘
れて、もだえぬ魅力的ポーズ。

髪を引き回される夫人

大手札三枚一組 三〇〇円
関谷富佐子 略号(ほむ)

正面向いて顔をはっきりと見せ
た夫人は、強烈な亀甲縛りに全身
をひしひしとしましめられ、髪を

豊満を切り裂く刃

大手札三枚一組 三〇〇円
長野 良子 略号(ほふ)

豊満な柔肌、ふっくらと膨らん
だ下腹に切り込む鋭い刃先。床の
間を背にして演じられる大胆奔放
な切腹の姿態。

雲斎の相撲フンドシ姿

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(ろみ)

全身に皮下脂肪がのり、殊に下
腹のポリウムの増したひかるが、
相撲褌一本で立った勇姿。

凄んだ女賊スタイル

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(へに)

白晒の六尺フンドシをきりりと
締め豆絞りの手拭を弥造にきめて
アイクチを腹帯に差した天晴れ女
賊スタイルで凄んだところ。

バンド、ゴム見せ

大手札五枚一組 五〇〇円
東浦ひかる 略号(へみ)

前開きの各種月経帯の替ゴムの
部分をあからさまにこらんにいれ
た珍らしいフェッティッシュエフオト。

















泥責め

四馬孝・画





女体生体実験

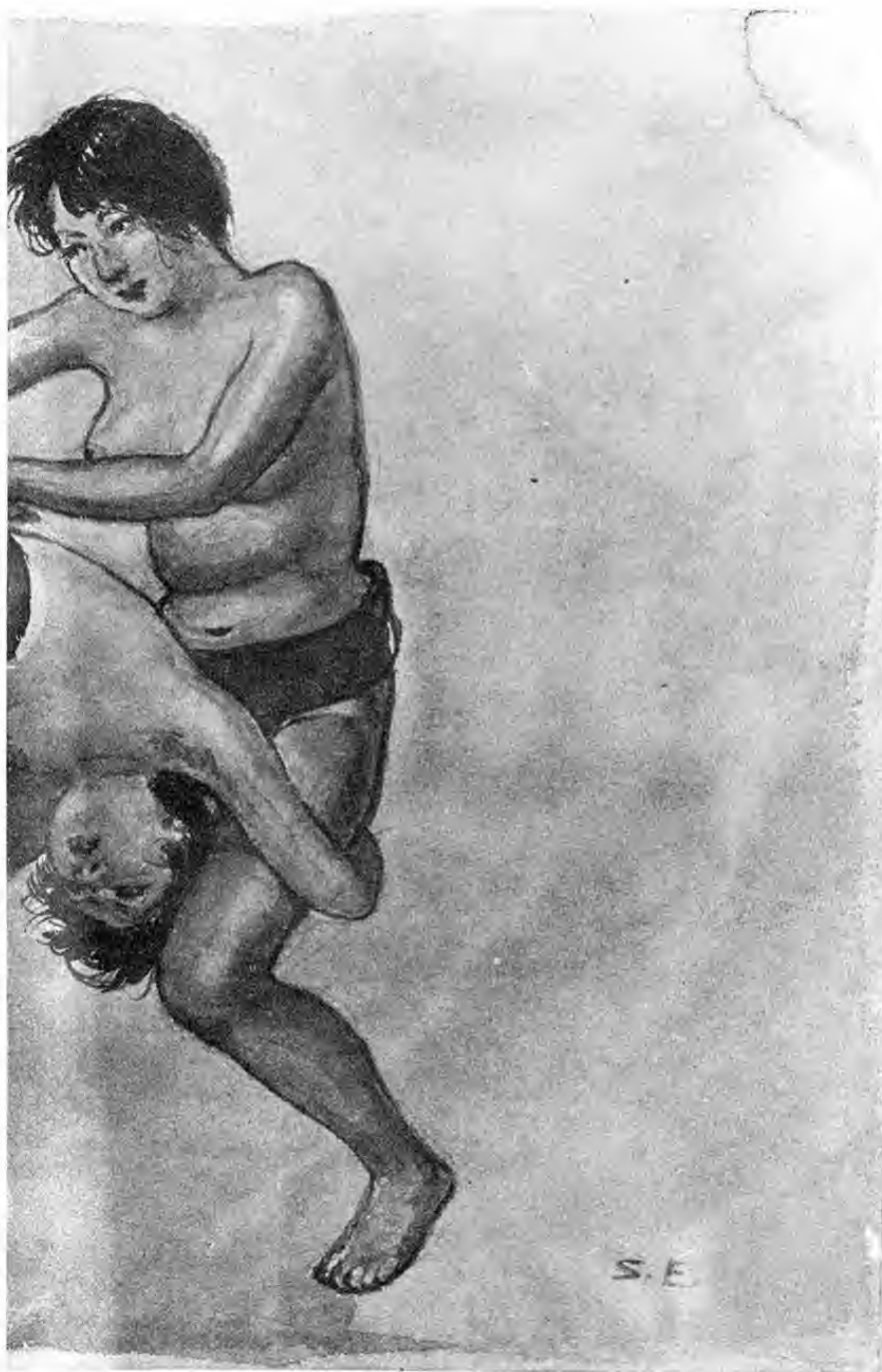


洗車ブラシ

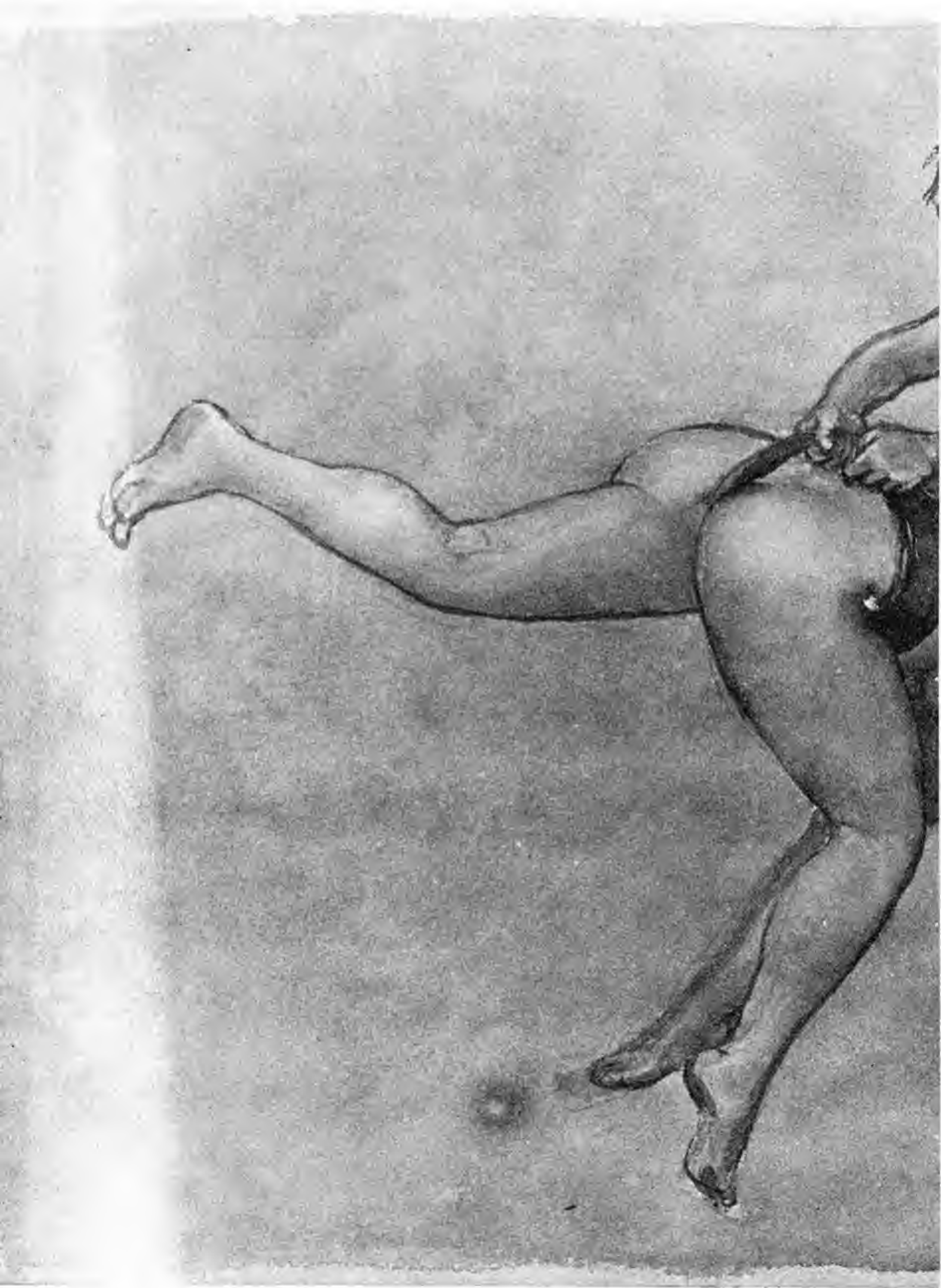
女相撲 禁じ手五題の内

(雪崎京人提供)

一、立禪を取ることは差支えないが、立禪を取って吊上げてはならない。



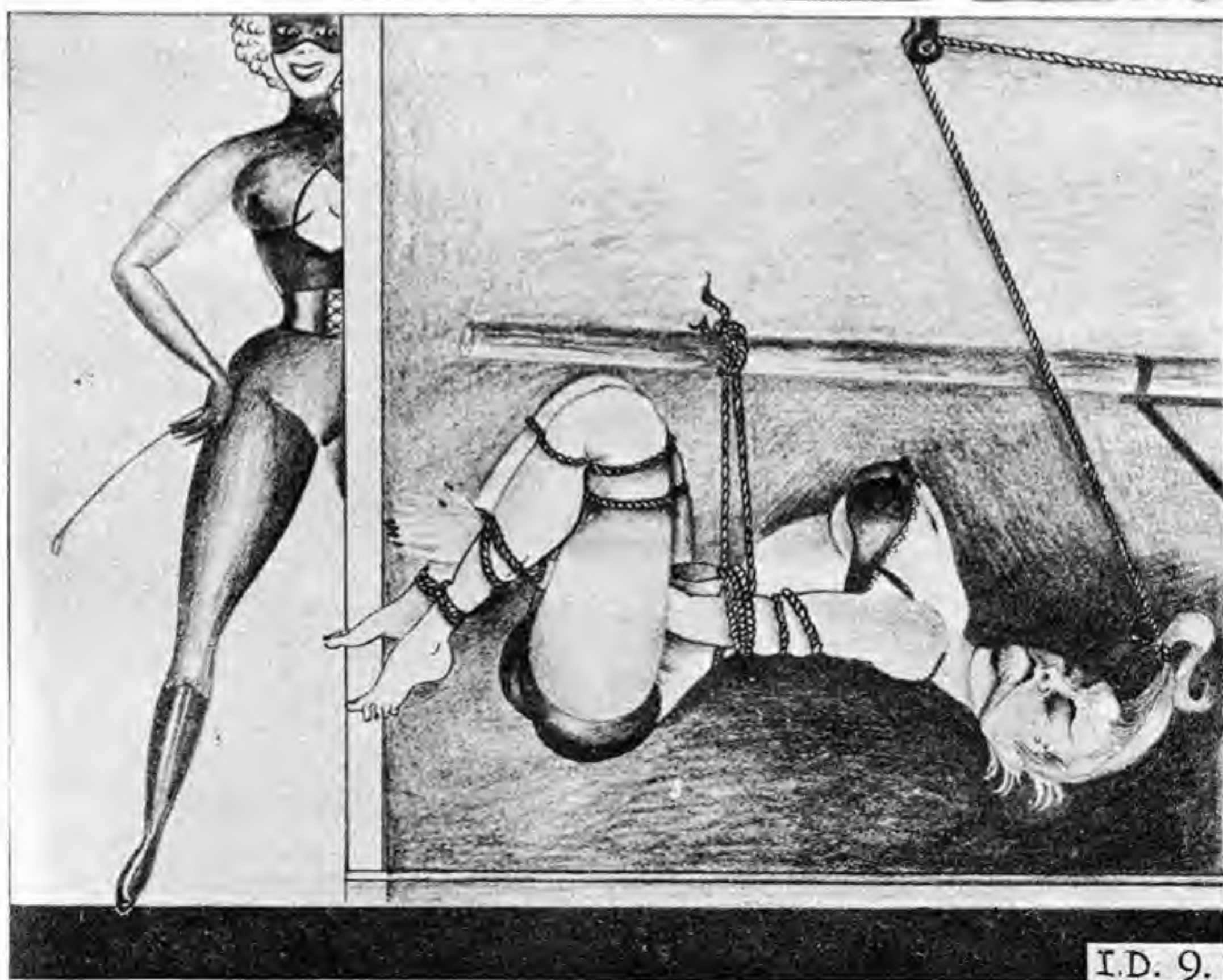
S.E.



(8) 着衣剥奪



(9) 吊り機構





ドミナとスレイブの部屋

武家娘の切腹

四馬孝・画





















雑誌の表紙に「内容刷新」と印刷してあるが、あれは刷新ではなくて、内容の低下であるという読者からのお叱りを受けていますが、こういった御不満はある程度承知の上で、口絵、写真、本文などについて相当大幅の制限を加えております。二月号、三月号と自粛の線を徹底するよう企てましたが、

神奈川県児童福祉審議会から三月号について、グラビヤ・フォト、口絵などは、被虐、加虐を強烈に描写しており、問題があります。また、記事、読者通信なども変態性欲を強調しうんぬんという文面にて勧告を受けました。

この文面を検討しました結果、グラビヤ並に口絵の頃の「強烈」に描写し、という「強烈」というところ。それに記事、読者通信の項の「強調」し、という「強調」の両文句に、今後の編集に留意し

てゆきたいと思っています。

五月号の巻頭で団鬼六氏が「小説作法」と題して述べられているように、「花と蛇」の原稿の肝腎なところがカットされ、作者として何とも残念であるということですが、白状すれば、第三回か第四回あたりでは、全体の三分の一くらいを削ったことがあります。連載順の月号をごらんになって、なんでこんなに半年以上も空白になっっているのかと、不思議に思われた方も多かったと思います。

実際は、そのまま掲載すべきか否かについて、大いに迷っていたわけです。結局作者の方でカットしてもいいということと、大幅に

削除して掲載に踏みきったわけですが、その間意外に時間がかかりかつ作者の方でも、創作意欲がそがれたことと大変相済みなく思っている次第です。

作者の方から削ってもいいといわれても、編集者としては出来るだけ原文に近いものを残したいしその間の苦労は、文字通り彫身鏤骨の思いをしますが、原稿ばかりでなく、第一回のゲラ刷りが出た初校、再校と活字面から見ても、更にどうかと思われるところには、手を加えております。時には、校了のあとでも、どうしようかと迷っていた箇所を電話で訂正することもあるくらいです。

只、盲滅法に削ってゆくというのなら簡単なのですが、最大の効果を残しながら削ってゆくのですから、原稿のときから数えて、校正を含めて実に数十回も繰り返して読むという結果になります。挿絵についても、団鬼六氏が指摘されておりましたように、文中では全裸とあるのに、挿絵ではパ

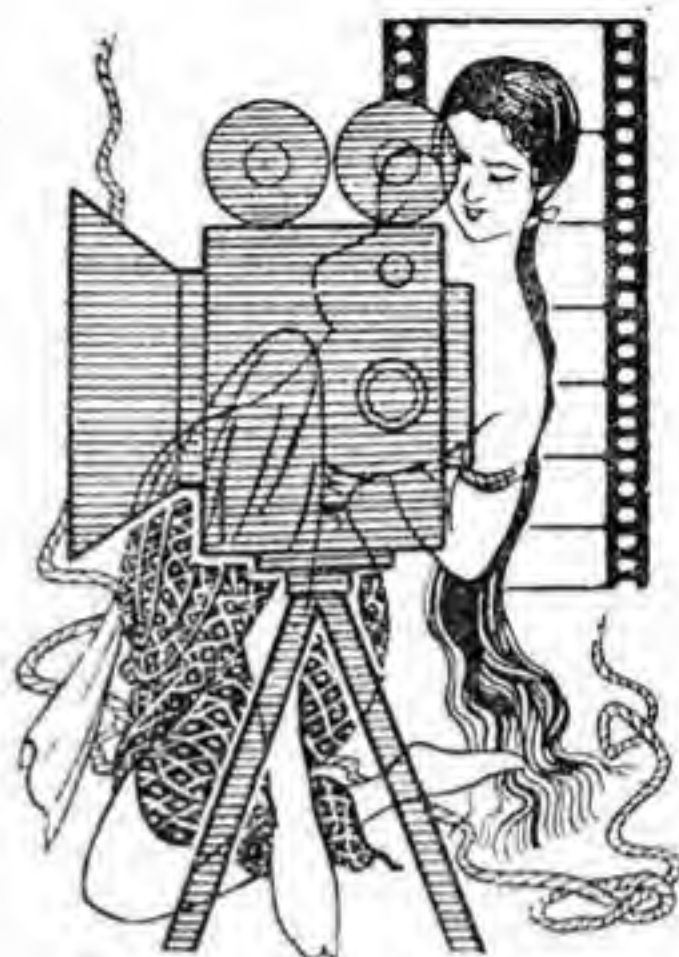
ンツを穿いているという失態も一にかかって編集者の責任です。挿絵画家は本文に忠実に描いてもらっても、あとで穿かせてしまっているのです。出来る限り文中も訂正するのですが、ときにはチグハグになることもあります。

戦力でない筈の自衛隊が、特車と呼んでいたタンクが、いつの間にかやがて戦車と変わり、そして師団という昔の軍隊時代と同じ武装集団が生まれ、戦争を放棄し戦力を持たない筈の日本が、今ではそんなことをいう者を、時代錯誤の精神病者と思うくらい進展しています。最初はたしか、警察予備隊とか言っていました。

本誌も漸次自粛の線を強化していずれば、特殊な風俗文献研究家のみが座右に置く資料として、確固たる地歩を築くべく、更に洗練されたものに、切磋琢磨してゆきたいと思っています。

現在の自衛隊のように、逞ましく雄々しく生長するには、長年の風雪に耐えて黙々と精進してゆく覚悟が必要だと思っています。表紙の文字の「内容刷新」に到達するまで御援助下さるよう、お願い致します。

編集のジレンマ 編集子



「8ミリ緊縛行」

第一作（のたうつ女体）

登 映 治

拝啓、貴社益々御清栄の段大賀に存じます。本日別便書留小包にてお送りしました佳作八ミリ映画「のたうつ女体」御笑覧下さい。（一週間後に書留便で御返送下さらば幸甚です）小生のこれは第一回作品でモノクロですが、漸次撮影順に御笑覧願ひ、箕田氏、辻村氏外編集部の御批判を賜わりたく存じます。唯今第八回作品まで御座います。第四回以後カラー作品です。

ASA二五〇

場所、岐阜県 下呂温泉 K荘の一室

日時、昭和三十八年五月二日午後十一時より三時間余。

モデル——ヌードスタジオの女性、あけみと称する自称二十一才の娘と、ミドリと称する自称二十才の非処女？ 的体格の女。
◎ヌードスタジオでマネージャーと交渉の結果、旅館の出張のOKをとり、彼女達の仕事の終わった一時間前、二人は旅館に来る。

当初単なるヌードと思える二人は、小生の八ミリの意図をきき、多小難色を示したるも、モデル料を奮発する事によって諾す。小生勿論コンテを準備して行けるも、第一回の事とて、思う様に進歩せず、予定時間の三時間の間

小生の作品の大半は奇クの小説やフォトを参考に致しました。尚左に、簡単乍ら、その時の撮影のデーターを附記致します。 敬具

△のたうつ女体▽

一五〇フィート。モノクローム作品、富士フィルム3S使用（感度

に、送附の如きものしかとれず、残念の極みです。電気は三〇〇W二個のバーで、八ミリカメラはキヤノンズーム。絞りは大体、五・六——八で、接写はすべてズームによるも、ズームの望遠を最大限にまで拡大する時は、ピントはボケます。

作品にストーリーらしきものなき様に見えるは、小生の拙劣さにより、当初のコンテでは、二号宅を襲った本妻が、二号をいろいろに嗜虐的に責める様になっておりましたが、考えの十分の一も出来ぬうち終りました。フィルムも五本（二五〇フィート）持参しましたが結果は三本半でした。タイトルのバックには、奇クの梨花嬢のフォトを利用し、これに硝子に白字でタイトルを描き、フォトの上のせて接写しました。ヌード嬢もぶっつけ本番にて、

途迷い思う様に動かず、尚、年上のモデルも、今迄人を縛った経験なく、緊縛もたどたどしく、嘸かし、編集部にて失笑の事と思ひます。

第一回作品ゆえ、その点御諒承下さい。

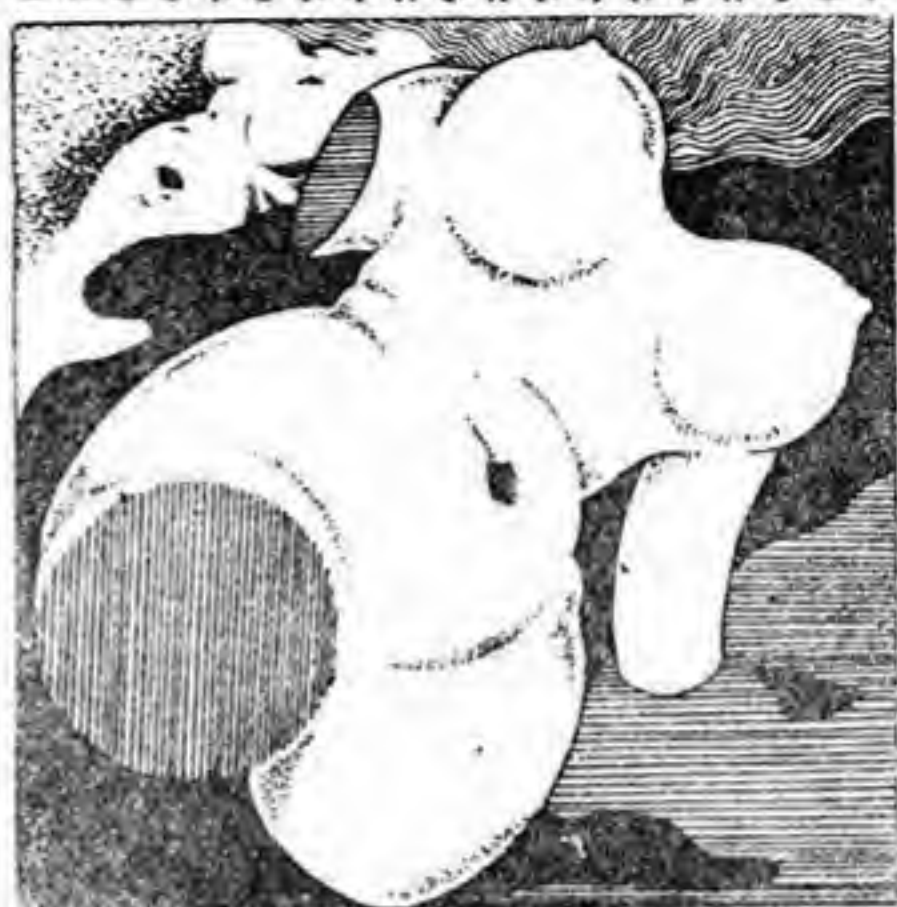
八ミリ愛好家の方あれば、一度、同好のフィルムを一堂に会して、奇ク八ミリ撮影会を開催なされば如何と切望します。

小生大体、一カ月一作主義で、唯今の処、第九回作品（カラー）に取組中です。奇クの小説をアレンジしてフィルムにして行くのは仲々に愉しいことです。小生の嗜好は大体嗜虐とSMプレイ、流腸、処刑等です。（作品御返送下され次第、第二回分発送致します）題名映画でどうも申訳御座いません。今後共よろしく願ひします。

奇クサロン向原稿募集

○皆さまの共通の広場としてのこのサロンは、どなたでも叩けば開かれる、楽しくて身近かな集いにしたいと思ひます。マニア通信、短信、文通、呼びかけ

写真、絵など、何んでも結構です。から、どしどしお寄せ下さるようお待ちしております。
○採用篇には、編集部保有の特写真あるいは、雑誌を贈呈いたします。奮て御投稿をお願い致します。



ヘルセキサン

(長崎)

小山田 久美

始めてお便り差上げます。二十七才、一児ある妻で御座います。最近夫が長崎市内で御誌をかう様になり、朝、夫が出勤しました後、私も読ませて戴いて居りますが、特に拷問や責めにひとしお興味を惹かれるので御座います。

私の生家の祖先は、キリシタン一撥に参加しまして、寛永十四年の、あの天草四郎様を総大将として、島原に籠もりました時、竹鎧をもって、一緒に戦ったと祖母からよく聞かされました。運悪く捕えられまして、それはそれは口に

行所に引き立てられたそうです。幕府方の方も気の殺気立っていた時ですから、その責苦は外道であつたそうです。

女は腰の一枚、男は禪一本で、不浄縄でひしひしと後手に縛られて、見せしめのために、奉行所の門前に逆さに吊り上げられ、転宗を誓うと許されますが、そうでないと一日中逆吊りにされた儘で、寒空で衆人に曝したそうです。粗又木に二間許りもある太い丸木を掛け渡し、五人ぐらいを一組として、その丸木に逆さに吊り上げ、門の両横の長い石塀にずらりと曝してあるのです。不浄役人が、さす又や六尺棒を持って見廻っておりますが、心ない悪戯者が娘や妻の腰のものを剥ぎとったり、石を投げたりしますが、役人共は知って知らぬ振りをしていたということでした。

食事も与えず、逆吊りした儘で放置しますので、餓えと寒さで次々と死んでゆき、苦しみから洩らした汚物が、肌や顔にまみれ、眼は血走り、脳は充血し、堪え難い苦しみだった様です。信奉人は口々にヘルセキサンと呼び、アンジヨ(天使)のお迎えを待ち、イエズス・マリヤの名を唱えて誰一人として転ばなかったとのことです。

祖先は其中でもリーダー格であつたらしく、必死に人々を励まし、頑強に拒んでいましたので、遂々、逆吊りにされた儘、槍で、肛門から芋ざしにされて、血嘔吐を吐き乍ら、それでもデウスの名を唱えつつ、絶命したそうです。

私の生家には、未だにその当時の悲母観音像にかたちどったマリヤ観音像が、大切に保存されてあります。祖先の命日一月の十九日になると、いつも私は言語に絶したヘルセキサンの地獄図絵(インヘルノ)を臉に描くのです。祖先等をヘルセキサンした棟梁、板倉重昌が、日を同じうして一撥の人々によって殺されたのが、せめても祖先のなぐさめだった事でしよう。

ほんの祖先のヘルセキサンの片鱗だけ書いて見ましたが、機会があれば、一撥の同志の、責苦、拷問の様子を精しくお知らせするつもりであります。尚、私自身、責苦や拷問を、女だてらに試みて見たい気持が御座いますが、私の心の分析など、この次に致します。

キリシタンの迫害史につき精しきお方お便り下されば幸いです。

「お 臍 と 女 優」

△南方佳男さんへ▽

多 山 皓

南方さん、ぼくの「お臍十年」もう読んでくださいましたか。

ぼくの場合は映画に限らず、レビュー、新劇、その他広い範囲に及んでいるので、映画に関してだけいえば、あなたの方がはるかにくわしいようです。

しかし、あなたの見なかった映画で、ぼくの見たものもありますので、二三、お話ししましょう。

▽「素晴らしき悪女」の団令子が残念ながらお臍は出さなかったようです。スキーにも上半身のものだけでした。

▽「ローマに咲く花」の瞳麗子は画架ごしに、こちら向きの全裸を見せましたので、ほんの一瞬チラリとお臍を見せてくれました。

▽「悪名波止場」の滝瑛子は、またしてもスチールだけで、実際の画面では、お臍を出しませんでした。残念！ またダメされました。

▽「温泉あんま」の高千穂ひずる、全くの羊頭狗肉で、画面に出た時は、ビキニどころか、ふっつうの水着でした。ウソツキ！

▽「婚期」の若尾文子は、私もスタンド・インだと思います。「夫は見た」のお臍も、もちろんスタンド・インです。

最後に、何らかの形でお臍を出した女優さんを追加しましょう。

まず大どころで、炎加世子を忘れてはいけません。

それから、私が最高のお臍映画としてあげた「真夏の情事」お見のがしそうですね。その中で姫ゆり子、九条咲子、富永ユキ、山科ゆかりがピチピチとはじけそうなお臍をのぞかせています。それに「鍵」の京マチ子はスタンド・インではないようです。

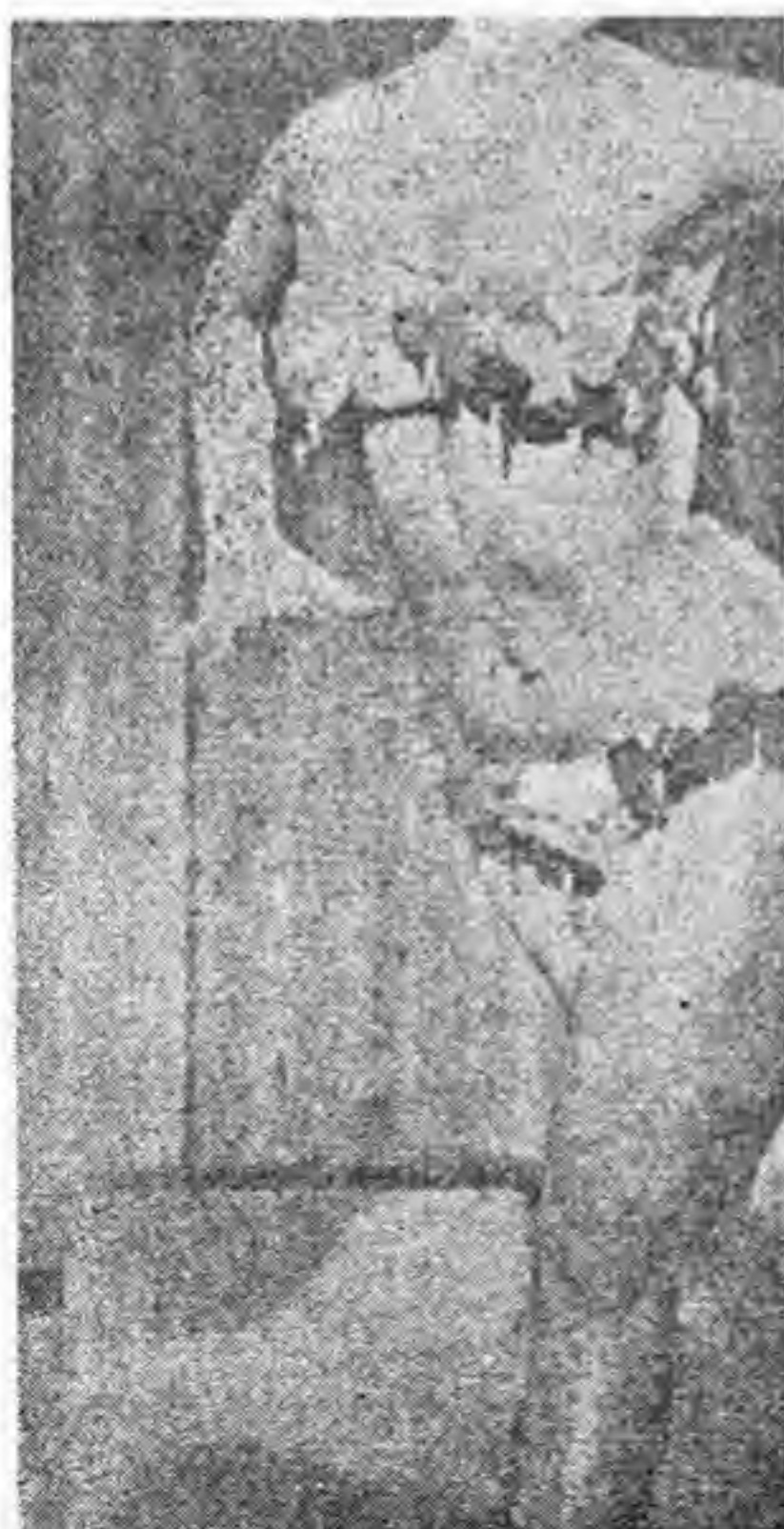
また、今度今村昌平監督が「赤い殺意」の主演女優に起用した春川ますみ、もどうかお忘れなく。日本昆虫記でもオヘソを出していました。

また大映の「ど狸」で紺野ユカと共にトルコ嬢になった金沼アジ

子という妙な名前の女の子もいます。

最近では国映をはじめ小プロでヌード映画を作っていますが、そのスター連に、香取環、沼尻麻奈美、奥多和子、村上美重、ふぐのたまみ、橘桂子、一条美千子等、多士才です。

その他歌手の浜村美智子（画家とモデル、その他ステージショー）水谷良重（日劇夏の踊り）中尾ミエ（週刊TVの表紙）木の実ナナ等もお臍を出しています。ちよっと出て、パツと消えた線香花火女優として



(写真)

筑波久子のお臍



映画
通信

或るキス・シーン

— めんどりの肉より —

(A・T生)

メロドラマの甘いキス。無理矢理力づくで奪うキス。それから、デープと形容されるフレンチ・キス等、凡そキスにも様々の種類があるが、最近封切りのフランス映画「めんどりの肉」に見られるキス程変わったタイプは稀である。

簡単に説明すると、此の映画の女主人公マリア事めんどりは、働き者で実直な亭主を持ち、生活に何不自由ない一家の主婦でありながら、過去の暗い経歴がたたって

一途に金を欲しがっている。所で夫は莫大な財産を金庫に蔵しており、為にマリアは夫を殺してしまう。然し、生憎金庫はしまったままである。

そこで一計を案じたマリアは、折から宿泊していた脱獄囚ダニエルを利用して、ベッドへ誘い肌身を許す。

が、ダニエルは美しい年増の女性を貪りつくすと、金庫は元通り身の危険を感じて逃走の手筈を整える。

それではならじと、マリアは執拗なキス攻めで「金庫を開けて」とダニエルに囁く。色恋を抜きにした哀願型のキスが目に沁みるまで強烈だ。

さて、本番のキスはこれからである。マリアとダニエルの別離の間際、共犯の前科を持つポールが訪れる。亡夫の遺産を諦めきれないマリアはポールとも青かんした上、金庫破りを依頼する。そしてその代償に、彼女は悪党のポールから多額の報酬を要求された上、「俺にキスしろ」と命令される。

今や抜き差しならぬマリアは、最早や拒む自由すらなく、犯される意識から憎い男の唇を存分に吸い取る。

正に外国映画ならではの非情性と呼ぶ外はない。

撮影所——ヘラルド映画社
題名——めんどりの肉

「赤いパンツ」の柴田葉子、田中美智子、柏木優子をはじめとするグラマートリオ大津絢。それに映画にはほとんど出ずにビキニ写真ばかりに出ていた鈴木朝子、などが思い出されます。

おどろきます。

また、スレスレスタイルとして

「海蛇大名」の近藤美恵子

「月給泥棒」の司葉子

「こつまなんきん」の嵯峨美智子

その他多勢。これからますます多くなつてゆくことでしょう。

ところで外国の大女優は、わりに平気でお臍を出すようです。

ジーナ・ロロブリジーダ、ナム・ノバークをはじめ、エリザベス・テラーも「クレオパトラ」では全裸になっていきますし、子供を連れて海岸へ行くとビキニスタイルになっていきます。

それに比べると日本の女優さん達は少しお高くとまりすぎているのではないのでしょうか。

もっとも裸になるほどのギャラも、もらっていないというかも知れません。

「春のめざめ」のクレオパトラ・ロータは美しいですね。日本でもああいふ若い美しい女優さんのお臍は見られないものでしょうか。

——。さし当っては、高田美和さんとか、和泉雅子さんあたりになるのでしょうか。

また楽しい文を発表してください。

サ
ロ
ン

楽 我 記 (2)

辻 村 隆

後の祭りである。

深夜書斎で仕事をしていたら、家内が扉の外から大声で、「お父ちゃん！縛りよ！縛りよ！早く早く」と呼び立てる。何事ならんと飛出して茶の間にかけてつけるとテレビの深夜劇場で、古い新東宝の時代劇で、若杉嘉津子が梁から半裸で吊されて、弓折れで責められているシーンだった。テレビを見ていた上の子供が二人、妙な顔をして私を見た。縛りシーンで騒々しく、告げる妻も妻なら、慌ただしく駆けつけて半座りで見ると私も私——。緊縛を好む事を常日頃知り、家内自身緊縛の対象にもなった夫婦の間柄であれば、妻としては私を喜ばせたい気持で呼び立てたのに違いないのではあるが、所詮縛りなどという言葉は二人切切りか、同好者同志の言葉で、子供達にはきかすべきではない。あとでハッとしたが、これも狙れから来る失策である。「駄目じゃないか、子供の前で——」と叱ったが

二月二十五日——朝起きると大雪で、この辺りでは珍らしく十センチ以上も積って、尚もサラサラした粉雪がちらついている。伊藤晴雨さんの雪中裸責めの写真を見たことがあるが、庭の雪景色を背景に、荒縄で緊縛した絹川さんが梨花さんを撮つたら、随分美しいだろうと思った。晴雨さんは雪責めに相当苦労したらしいが今なら暖房器具万全の体制だから、部屋を暑い位にしておいて、雪中に飛び出すと、二、三分は充分堪えられるだろう。ストロボでパチパチやれば忽ちO・Kなのだ……形よい松あり古井戸あり、泉水ありで舞台効果は万点だが、雪の降る日にうまく条件が合うかどうか、いつかは是非実現したい構図である。陽照りと共に、キラキラと輝やき乍ら解けて行く雪を、私は惜しい様な気持で見つめていた。

新宮明夫さんと文通し出してから、俄然生首や処刑に興味を持ち出した。そうなると思議なもので、そうした処刑的なフォトを撮りたい慾望にかられ出す。鬼と亡者、町娘と非人、首斬り役人と女囚人等々の設定で、種々の構成を考えて見る。二眼レフのセミ・オートマツトまでのカメラなら二重撮しが出来る。この種のカメラは慌ててフィルムを廻さずダブルさせてしくじる事もあるが、反面、こうした二重撮しも可能の特徴があつて、生首斬殺のシーンなど、バックを黒幕にして、首を黒幕の方に向けて下げ囚衣の後手縛りのやや斜め後方から撮すと、首はない様にうつる。こうして一枚とり、更に今度は黒幕のうしろへ入って、黒幕の裂け目から首だけ出して、やや前回の位置より離れてフィルムを廻さないでもう一度撮ると、現像の結果、首は如何にも斬られて転がっている様に撮れる。多少構成の巧拙はあっても、漆黒の黒幕なら大抵このトリック撮影は成功する筈である。いつかサロンに私の作品を発表するつもりである。

◆ 変天古林短信

○戦後、売春婦の生態を描いて一世を風靡した「肉体の門」が十七年ぶりで再び上演された。

○昭和二十三年、劇団空座が新宿の帝部屋で初演し、翌二十四年には映画化もされた田村泰次郎原作の「肉体の門」がそれである。

○今回、大阪道頓堀の道劇ミュージックホールで上演され、不入りで閉館寸前だった道劇が、肉体の門の大入り好評により、閉館せずすんだという威力を発揮した。

○この「肉体の門」の好評を見た東京浅草の常盤座が舞台俳優による本格的な再演をきめた。

○道劇ではストリップパーによるもので、焼け跡のビルを根城とする売春婦の一人ボルネオ・マヤ(南ユリ)が、復員浮浪者伊吹新太郎(岡舞二)に愛を感じて身を捧げたことから、仲間たちの激しいリンチを受けるという筋。

○いやはや、「肉体の門」がこのような大入りを続けるというのは驚きであるが、そればかりではない。日活では、十字架にくくりつけられてリンチを受けるボルネオ・マヤの役に浅丘ルリ子を選び凄

(読後感)

四月号を見て

△グラビヤ及び口絵△

神戸 正雄

梨花さんの「物置き小屋」は、いつもながら演技の良さに感心させられる。だが、残念なことに足に草履をはいているのがおしい。素足の方が迫力があると思う。大塚さんの「責絵のある部屋」は、背景、演技共に満点。殊にバック

の責絵の配置は効果があった。花本さんの縛りは、ただ縛られているだけという感じである。大塚さんの「鼻責め」関谷さんのプレイは余り変りばえない。四馬孝氏の「オラン・ウータンの檻」と女性切腹画とは、オラン・ウータンの方がよいと思う。女性切腹画はマンネリ化の傾向がある。新企画のもとに生まれたのであろうか「ドミナとスレイブの部屋」という題で五枚の責絵が掲載されているが、やはりこの様な



(足首の縄をほどく)

絵よりは四馬孝先生の画の方がよい。女相撲マニヤの私には、女相撲の画は、どのようなものでも価値がある。これからドシドシ掲載されるよう待っている。

第二グラビヤでは、第一に遠藤百合子の可愛い猿ぐつわの姿、後手縛りには目を瞠された。こないだいい写真を一番あとに載せるなんて勿体ない。せめて二番目か三番目にでも載せてくれていたら、こんな悪口を書かなかったのに。梨花さんの「光と影の双曲線」も良かった。大塚さんのは表情がよくでている。演技派としてはナンバーワンだろう。

以上で私の四月号のグラビヤと口絵についての読後感を終るが、私の嗜好以外のものについて悪口をたたきフアンの方々にお詫びをする。でも最近の二、三カ月を見ていると、どうもフォト並に口絵が少なくなったように思われるのだが、どうだろう。悪書呼ばわりされたためだろうが、なるべく多く載せてくれることを強く望んでいる。小説だけのKK誌にならぬようお願いしてペンをおく。これから新しく生れかわろうとする奇巧に栄光あらんことを祈って――。

惨な異色作を作る由。

○ハダカになって、リンチを受けるシーンは吹き替えを使うというお話でしたが、わたしとしては、ハダカになる必要があるのではありません。と、女優歴十年の浅丘がこの「肉体の門」を勝負作と考えているそうだから、きつと見たえのあるものが出来るだろう。○最近ストリップ劇場が再び往年の盛況をとり戻しつつあるが、トビタOS劇場では、なんと出産五日目のストリッパーが踊っていて当局からお目玉を頂戴したとか。臨月のお腹を見せてはしかった、とあとで羨やむこと羨やむこと。○「砂の女」の大ヒットでグッと株のあがった岸田今日子。やはり体当りの演技でないと、今日では相手にされないのだ、とフアンが言ったとか言わないとか。責めの映画もこのあたりで、体当り演技のスターの出てほしいところ。○木下恵介監督は「香華」で初めて岡田茉莉子を主演に「生理」シーン撮った。スポイトで落したのではぐあいが悪いので、手のひらから落した。という苦心のシーンは、マニヤの目に果してどのよう映るだろうか。

△マニヤ通信▽

『その瞬間』

—あるマニヤの記—

Y・T 生

寝てもさめても、私の頭から離れない「その瞬間」のシーンがあります。もし、私が、そんなシーンを目撃することができたら、しかし、現実にはかなえられそうにもありません。それで毎晩、独身寮の自分のベッドの上で、私は一人二役を演じながら、一人の女性とその瞬間の恍惚境と、それを見ている男のサジスチックな喜びの両方を味っています。

私は二十六才になる某石油会社のサラリーマン。私のサラリーのほとんどは、私の楽しみのための小道具代にあてられています。私の押入れの中のカギのかかった大型トランクの中に秘められているもの——白、黒、ピンク、黄などのナイロンパンティ。黒、ブルーのメンスパント。女学生用の運動ブルマー。黒ナイロンのストッキング。ガーター、コルセット、シ

ュミーズ、ペチコート、セーラー服、白ブラウス、ワンピース。

それに最近やっと入手することが出来た大人用のオシメカパー。

(総ゴムアメ色)などです。ときには、それらの下着をみんな穿いたり着けたり、ときには、部屋中にヒモを張って、一面満艦飾に色とりどりの飾りつけをしたりしてその中で、私のあやしいシーンの夢がくりかえされてゆくのです。

満員のバスの中で、頭から足先まで一分のスキもなく盛装した若い婦人が立って、みんなに押されながら、その瞬間の近づくことに緊張して、唇をかみしめて堪えているところ……。

スタイルブックから抜け出したようなモダンなデザインワンピースのスカートの下で、足が小さみにふるえている。あと五分。



下腹からつきあげてくる尿意に全身は汗びっしり。目の前が暗くなって、気が遠くなりそうな一秒、一秒が過ぎて、隣に立っている男が、ときどきわざとらしく肩をすりつけてくるのを、よけようとすするゆとりもない。ガタンとバスが大きく揺れて、立っている人が一斉によろめく、瞬間、アアッというかすかな溜息とともに、婦人の忍耐力の限界がきれる。ジュ——と音をたてて、やがて、パンティからコルセットをにじみ出した

液体は、ストッキングの太腿をつたわって床へ。みるみる足もとの洪水と、放心したようにつつ立っている婦人の顔。シュミーズまでたっぷり吸いこまれた液体が、スカートの裾からしたたりおちている……。

○女学校の校庭。バレーの試合があつて、黒いブルマーの選手たちが、とんだりはねたりしている。大勢の見物人と応援団。その中でさきほどから動作の鈍くなった少

映画のお色気攻勢

軟映画 通

中村錦之助と結婚して、他人には絶対肌を見せないだろうといわれていた有馬稲子が、その予想をくつがえして、カラーパントリーがかすかに見えるネグリジェ姿で、その白い肌を惜しみなくみせてくれるのが、「充たされた生活」であった。松竹にいた当時も、彼女だけは、山本富士子と同じように、水着撮影も許されなかったらしい。

その有馬が、ネグジェ一枚になり、ベッドシーンまで演じたというのは、それだけ芸に対する欲が出てきたのである。ファンや批評家を驚かせたり感心させたり、やはりこうした体当りの演技が次第に大物女優たらしめるわけである。

ところで、このネグリジェというシロモノは、元来がすくみえるように出来ているようだ。有馬の着用したのも、そうだった。だからパントリーがすくみえ、且つ彼女の乳房も完全にみ

えた。ネグリジェを着用してベッドに入る時は、ブラジャーはとるものらしい。

ブラジャーをしていない有馬はだから、その隆起も形のいい乳首も、かすかにすくみ見え、これほど悩ましく妖しい気分を観客にみせたのは、彼女の映画では、空前絶後といってよい。

さて、入浴シーンについて特記すべき二人の女優がいる。一人は福田公子、一人は筑波久子。この二人とも、生まれたまま、つまりノーパンティという健気さである。私のおどろいたことには、福田の肌の白さと、かたぶとり。ああいうタイプはさぞかし男性をよろこばせるであらうと思う。筑波も同じことだ。この人の腋毛の多いのには驚かされた。

いずれにしても、このころの映画のお色気攻勢は続きそうだ。

女がいる。とび上る腰にも力がないう。つづけさまに三つエラーをした。試合の緊張で激しくおそってくる尿意に氣をとられて、ボールがよく見えない、無理にジャンプしようものなら、そのまま、どーんとしかぶってしまいそう。

応援団から声がかかる。「がんばれ、何してるの！」少女のヒタヒに冷汗が光っているのを誰も知らない。ああ、しかし、意外に早くその瞬間がやってきた。相手の強いシュートを反射的に右とびにレシーブした瞬間、グラウンドの上におおむけに横転した。

そのまま少女は全身がしびれるようなショックに身をまかせて動かなかった。泥まみれの黒いブルマーがぐっしり濡れて大地にときなならぬ大きなシミができた。控えの席から二、三人の同僚があらわてとび出してきて、両側から支えるようにして場外へつれ出している。下半身びっしり濡れて歩きにくそうにさってゆく少女。

○ 不良少年たちに山小屋につれこまれたB.G. 荒い柱の前に後手に縛られて、今からはじまろうとする少年たちのオシオキの不安にうちふるえている。

ストッキングのサルグツワ。やがて男たちによって、素裸にされる。そして花恥しい娘の腰にガボガボと音をたてて、オシメカパーが穿かされる。少年たちの酒宴。いたずらな少年が、ビールを娘の口にそそぎこむ。やがて娘に、その瞬間がきて、少年たちにとりまかれて、みられている中で、赤ん坊のように、ジューと音を立てて、ほとばしるもの、白い太腿に一筋。ゴムの間から洩れた液体が足もとに伝わってくる……。

○ このほか私の夢はつきません。試験の最中に失禁する女学生。デパートの中で転げかけた瞬間、洩らす婦人など。そして、私の頭の中で、グッシヨリ濡れたズロースやパンティがうずまいて。気がつく、私の女装した下半身が尿に濡れてしまっています。

このように、私は若い女性が失禁するという『その瞬間』に異常なまでの執着を持っています。そして自分が、その女性になっているという気持ちにしたりたいための女装。更に女性の下着愛好へと思いは馳せてゆくのです。こんな私は、一体なになのでしょう。



△サンケイ3月22日▽読書欄

深く鋭くついた

「人間の性」

欲望の正体にいどむ

成功した

科学実験的企て

人間の性というものは、欲望のもっとも原始的なものであるうがそれと同時に、またきわめて人間的なものであるのだ。

それが証拠には、人間のばあい

吉行淳之介著

砂の上の植物群

についての評

サンケイ、日経、読売各紙

本能的、衝動的な性欲の達成で、満足するということとはほとんどない。ではいったい人間はどうすれば満ち足りるのか。

これにはさまざまな意見があり、なかなか議論のつきない問題ではあるが、その解答が人間の本質にかかわっている以上、わいせつだなどと、のんきに見過ごしておれる事柄ではないはずである。

吉行淳之介の「砂の上の植物群」も、ただ筋をたどると、被虐

し好の濃い津上京子と、それにひきずり込まれるように加虐的に凶暴になっていく中年男の伊木との変態的な欲情の起伏である。

が、作者が、性という欲望のもっとも人間的な満足というナゾを解こうし、それによって人間とはなにかという、われわれの最大の関心事にいどんでいることを見逃がすわけにはいかぬ。

この作者は、人間的な満足そのものをとらえようとしても、対象は散るばかりで、とらえようのないことをわきまえている。そこで本能的な満足をめざす欲望をギリギリまで追究することで、人間的な満足をめざす欲望の正体をあらわにしようとしている。

だからこそ、ゆがんだ性の欲情を、ようしゃなく織り込み、そこから主人公の伊木の女体との関係で味わうもっとも人間的な充実の瞬間を、根こそぎえぐり出そうとしたのに違いない。

そして、作者のこの科学的実験に似た企ては、みごとに成功している。

女体は、性の反復によって、関係をたた荒廃に導くばかりの凶器になりがちである。主人公の伊木は、この奇妙を長い間、亡父の幻

(まぼろし)の手のせいとのみ思いついてきた。「ハデな生き方」をして三十四歳で死んだかれの父親は、なにかあるたびに幻にあらわれて伊木をそそのかすのである。が、亡父よりも年上の年齢に達したかれは、ようやく女体そのものが、もともと性におぼれて退廃の凶器になりやすいものなのだということに気づき始める。

人間的な満足を、それでもなお求めずにはいらぬ伊木は、痴漢、加虐あるいは被虐的嗜好、多人数の同時性交といった、良風美俗とはまったく反対なものに女体をひたして充実感をさがし出そうとし、作者も力の限り応援する。

たとえ絶望的なものが基調になっっているにしても、一層の充実をつかみたいとする作者の祈りが力一杯に羽ばたいて生んだ、深く鋭い人間の性の文学である。

(文芸春秋新社・三八〇円)

△よしゆき・じゅんのすけ氏作家。岡山県生まれ、三十九歳。東大英文科中退、昭和二十九年芥川賞を受けた。著書に「すれすれ」「二人の女」「娼婦の部屋」など▽

△日経、三月二十三日▽読書欄

性への独創的視点

吉行淳之介著

「砂の上の植物群」

この小説の主人公伊木一郎は、妻と一人の男の子をもった中年に近い化粧品店のセールスマンである。彼の内部には人生に対する一種の挫折（ざせつ）感が、けだるい疲労と屈辱に似た感情を伴って深く内攻している。それはしかし平常では彼の意識の表面に浮かび上がることはあまりない。

だが、ある瞬間、彼のからだの内部で何か凶暴なものが爆発し、憤怒に似た感情が突如としてふき上がるとき、そのときはじめて彼は何ものかに襲いかかって行こうとする積極的な挑戦の姿勢をとることができるのだ。そしてその彼の挑戦の対象となるものは、女であり、女の肉体であり、そして「性」なのだ。

ここには、そのような人物を主人公として、少女姦（かん）が描かれている。その少女の姉との変

態的な肉交の世界が描かれている。かと思えば、小説の中の一つの挿話（そうわ）として、一人の男と二人の女の同時性交の場面が描かれている。しかもこの小説の主人公は、被虐症的な嗜好（しこ）（う）を持った姉の両手を縛りつけその目の前で妹である少女のからだを犯す、ということまでやるのだ。

充実感をあたえるかぎり、その破倫すらも拒否すまいとする一つの決意を自身に課する。しかし、このときすでに女との性の営みは「性」そのものの必然の法則にしたがって、機械的な情性となり、生命の充実感に代わって退廃の様相を呈しはじめる。そして、女が彼の異母妹でないことが判明したとき、彼は女との関係は「終わった」と思う。だが、時すでにおそく、女の肉体はいまや彼に対する復しやうの「凶器」と化して、彼の前にながながと横たわっているのだ……。

作者の独創的な視点によってとらえられた「性」の形而上学が、柔軟な肉づけをほどこされて、ここに純度の高い一つの小説世界がみごとに展開されている。私は新鮮なよるこびをもって全編を読了することができた。（文芸春秋新社・三八〇）

作家 八木 義徳

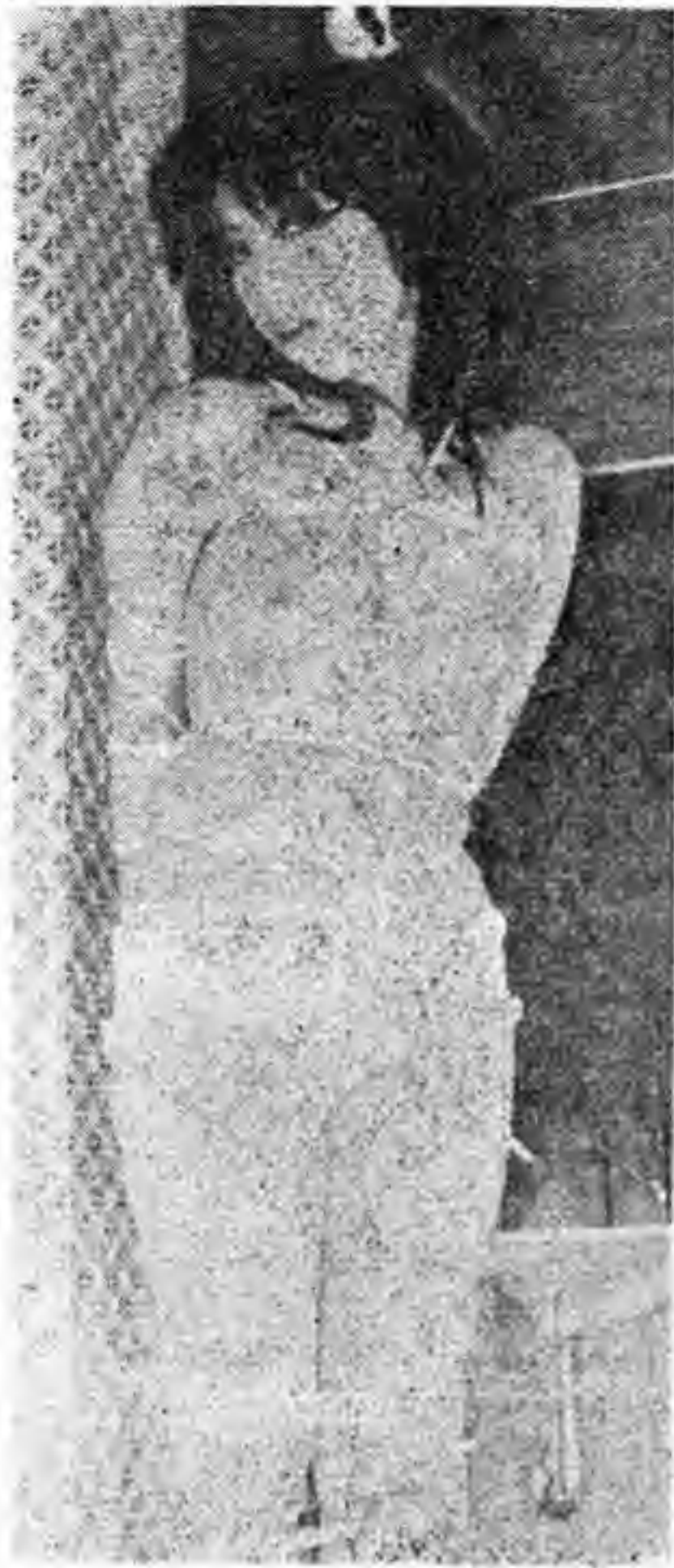
△読売、三月二十九日▽読書欄

性を主題の「抽象小説」
絵画的な描写も効果をあげる

セックスを主題とした、これは



背 負 い 投 げ 畔 亭 数 久



一種の抽象小説である。抽象絵画ということは、いろいろやかましい定義があるらしいが、写真よりも色彩や線による構成に重きをおいた作品を、かりに抽象画とすれば、この小説はまさにそれに近いだろう。色彩や線は、少女の唇紅（くちべに）や肉体の曲線なのだ。

主人公は化粧品店のセールスマンをつとめる四十に近い男である。彼は一人の男が、死にのぞんで自分の若い妻を将来抱くかもしれない人間に嫉妬（しつと）し、復讐（ふくしゅう）のてだてをくふうする、というすじの推理小説を考える。問題は自分が死んでしまっ

てからあのことなのだから、復讐（ふくしゅう）といっても雲をつかむようなはなしで、その手段は、生残る若い妻の肉体自身に、しかけるほかない。どうしたらよいのか。

主人公の空想はここでとぎれるのだが、このことから彼は、死んだ父親と自分との関係を連想する。十代で自分を生み、はやく死んだ父親が、ことごとくに自分を呪縛（じゅばく）し、支配し、凶器のようにおそいかかってくるのを彼は感じていたのである。こんな推理小説を思いつくのも、父の呪縛（じゅばく）を自分が痛感しているためかも知れない。

あの日は彼は港のそばにある塔のうで「セーラー服に似た」服を着た高校生の少女に出会う。彼女

はおしろい気のない顔に、唇紅（くちべに）だけは真っ赤につけている。唇紅（くちべに）はよいだ、と彼は言わでものこと、を言い、その見知らぬ少女といっしょに旅館に行った。少女は処女だった。彼女は唇紅（くちべに）をつけているのは、バーにつとめている姉、京子への反抗からだと言ひ、姉を誘惑（ごう）して復讐（ふくしゅう）してほしいと、男にたのむのである。

男はバーに行つてその姉の京子を誘ひ出し、情交を重ねる。京子は被虐症（びくしやう）だからだをしばてくれと彼にたのむ。彼はいくどめかに京子を裸にしてしばった部屋に、妹の明子をつれて行くのだ。

「明子は…体を堅くして畳の上に立っていた。蒼ざめた顔と、血の

氣を失つて白くなつた唇とが、セーラー服に相応しかつた。（中略）泥絵具を塗りつけたような部屋の景色の中で、明子の立っている部分だけが淡々澄んだ色にみえた」

こういう絵画的な描写について作者の手腕には定評

があるが、この小説では、方々に挿入（そうにゅう）されたクレイの絵「砂の上の植物群」についての感想が、その描写と照応して、全体をひきしめる縁の役割りを演じているのである。なお、作中では妹の面前で姉を犯すこの場面が圧巻であり、そのあと主人公は、姉娘の京子が、父の生んだ私生児で、自分の異母妹ではないかと悩む。

作者、吉行が好んで書く性の頽廢（たいはい）は、一面ではことごとしい精神主義にたいするシニカルな反抗であり、いわばコワばつたものにたいする、屈折した形での自由への欲求がこめられている、とほくは思っている。（戦争中は大言壮語と、奇妙な精神主義がはやったから、いわゆる戦中派には、一様にこうしたシニズムが濃い）

彼は肉体のもつ表情を微細にえがいてきた。そしてそれが、この小説では、幾何学的な域にまで達しているのである。一例をあげる

「ついに女は大きく頭上に持ち上げた腕を畳の上に落した。そこに脱ぎ捨ててあつた肌着を五本の指が掴むと、その腕は硬直して動か



卒業式の午後の思い出

井沢京子

なくなった。軀も、少しも揺がな
い」
「五本の指」は、もはや女とは関
係のないオブジェのように見え
る。男女の性交のさまざまな姿勢

は、抽象画のキャンパスの上の色彩
や、複雑な線のような、独特な美
しい効果をあげているのだ。
吉行の作風に抽象化の傾向が見
えだしたのは、一昨年あたりから

である。父親の呪縛というもう一
つの主題と、この部分とは必ずし
も溶けあっているとはいえず、そ
れが後半、力を弱めているが、と
にかくこの小説は、彼の新しい努

力を示す一応の達成だろう。最近
の佳編である。（文芸春秋新社、
三八〇円） 村松 剛、文芸評
論家

もう八年経ちますが、卒業式シ
ーズンがくると、私にとって忘れ
られない痛恨事がいつも臉に浮び
ます。
私が卒業した〇〇学園は、関西
でも可成り程度の高い女子許りの
ミッションスクールですが、三月
二十日の卒業式の午後の、あの口
惜しい苦い思い出は、結婚後の今
も私の脳裡から一生消す事が出来
ません。

私は自分でいうのも可笑しいで
すが、よく出来て、卒業式当日の
生徒代表に選ばれて、答辞を読み
ました。自分ではそう気付きませ
んでしたが、たしかにガリ勉一途
のところもありました。
無事証書を戴いて、仲のいいM
さんと我が家に帰る途中、同級生
のUさんから四人のグループにうし
ろから声をかけられました。
この人達は、常日頃不良グルー
プで、先生方も度々注意なさって
Uさんは一度は退学処分を言い渡
されたのが、PTAのとりなしで
やっと卒業した人です。
フト、厭な予感がしましたが、
彼女達はMさんを追っ払う様にし
て先に帰らせると、私を取囲む様
にして、学園の裏山の方へつれて
行ったのです。

裏山の凹みで、Uさんはいきな
り私の頬を平手で殴ると、「よく
も先生にいろいろと告げ口してく
れたわネ。今日はたっぷりお礼を
差上げるわよ——」といったので
す。

私はUさんの告げ口などした覚
えはありませんが、クラスの委員
長なので、己むなく、先生にUさ
んの事を報告したことはあります
が、それを勘違いしているに違い
ありません。

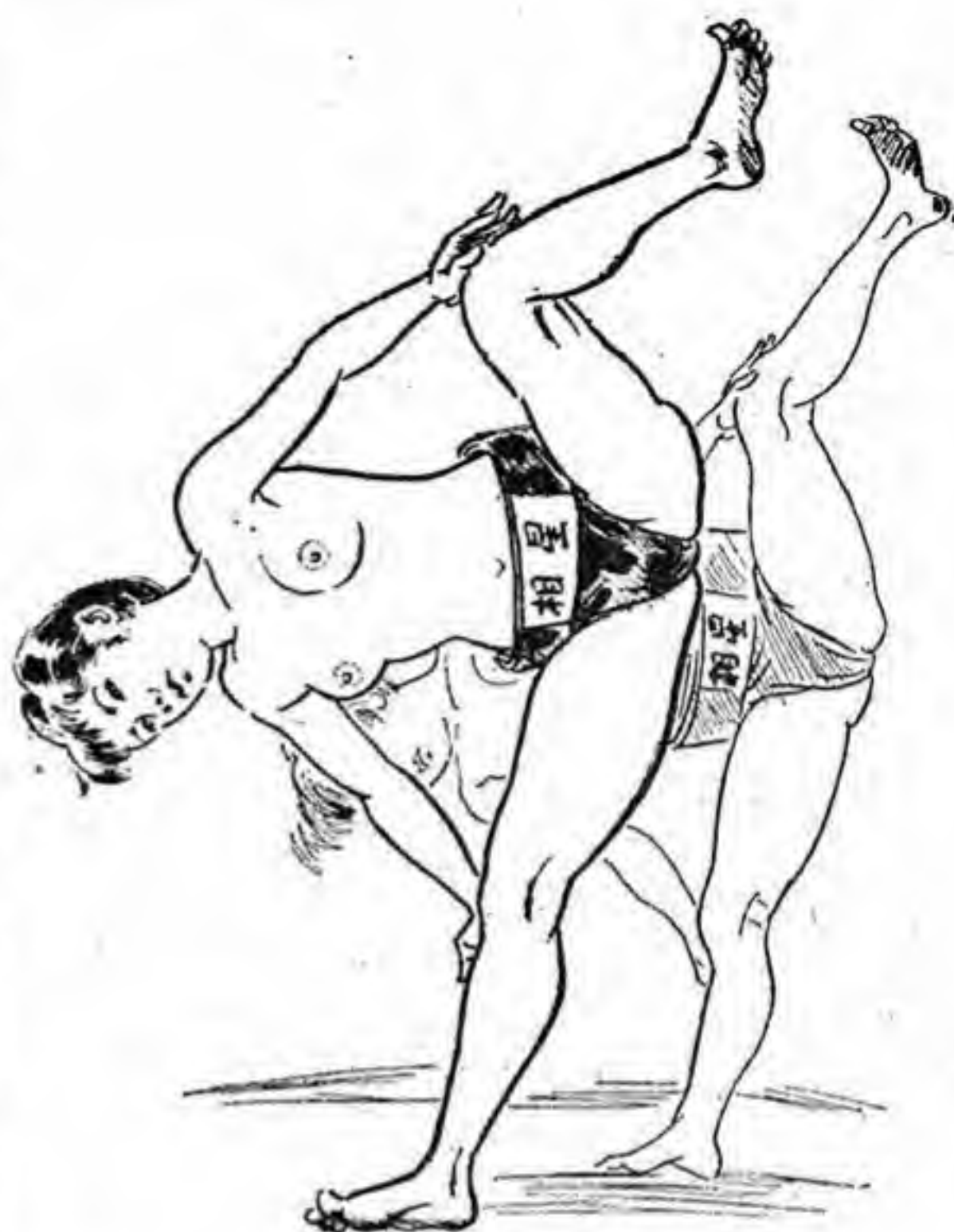
私は彼女達によって、寄ってた
かって、制服を剥ぎとられ、シュ
ミーズも引き裂かれて、あられも
ないパンティ一枚の姿にされてし
まいました。Uさんは三人の仲間
に手伝わせて私を松の幹に後手に
して縛りつけ、それから、私の眼
前で、ベンジンを私の制服やブラ
ジャーや下着や靴に振りかけて、
マッチをつけて燃やし始めまし
た。私の成績表や卒業証書も、忽
ちメラメラと灰になって行きまし

た。

私は悲憤と羞恥で、あらん限り
叫びましたが、その度に彼女達は
枝ぎれや、平手で私を打ち、拳句
には私の靴下で口を強く蔽ってし
まいました。

「喋べるとこれだからね——」U
は嘲笑う様に、西洋剃刀をとり出
し、ペタペタと私の顔を、刃の峯
で叩いて、斬る真似をしました。
私を裏山の松の樹に縛りつけた
まま、仲間が口々に「いい気味だ
わ」と叫んで去っていききました。

ポロポロと口惜し涙が頬を伝い
私は死にたい気持でした。半時間
許りもその儘、私は縛られた姿で
放置されていました。その時、お
友達のMが、私の担任K先生とか
けつけて来ました。K先生は私の
裸に眼をそむけ乍ら「ひどい——
これはひどい……」と蒼ざめた憤
どおりの顔で仰有いました。私は
我知らず先生の厚い胸に顔を埋め
て泣きじやくっていたのでした。



女相撲とメンスバンド

S・K生(兵庫)

女相撲とメンスバンドには、少なからず興味を持っております。雪崎京人氏提供の「女相撲」はいつも本誌を開く度に、まず目につきます。可愛い女の禪をしめた姿態は、ほんとうにすばらしい。女相撲マニヤの方が、私以外に多くの方達がおられるのは当然でしょう。奇クから切り抜いた女

相撲の画を、一枚一枚丁寧にスクラップしてゆく時の喜び、これはマニアならではの、おわかりにならないでしょう。色刷りの頁になればいいのと思っています。

メンスバンドの写真は、少量しか手持がありませんが、代理部に注文して取り寄せた百合子の写真は、ゴムのムチムチした感じがよく出ていて、気に入りました。だが、雑誌の方には、メンスバンドを着用した写真は、少ないようです。(私の知っている限りでは)

しかし「文献」では、東浦、遠藤梨花の三人の方の着用写真がのせられていたのは、ほんとうに有難い気持ちでいっぱいでした。

特に美人の梨花さんのボタンもハッキリみえている着用写真は実にすばらしいものでした。これからも、遠藤、東浦さんだけでなく、五月、新井、梨花の三方の写真を載せて下さい。五月さん、新井さん、梨花さん、恥かしがらないで、私の望みをかなえて下さいね。編集部の皆様にもお願いします。

"SM"クラブへの

お誘いとお願ひ

泉 かおる(京都)

当SMクラブでは、新しい会員を求めています。

当会はSMプレイを目的として月一回の会合を持ち、座談会や体験の発表と、合せて会員同志のプレイを楽しんでいます。

皆様御心当りの方もあるでしょうが、一対一でプレイを楽しむ分には場所の選定は、さほど困難ではありませんが、多数ともなりま

すと(当会は現在十六名、常時出席者は八名乃至十名)。・会場の選定に大変苦勞致します。今回迄は会員のG氏の御好意で琵琶湖畔の別荘を使用させて頂いておりまして、この度十月末にG氏のニューヨーク転勤の為、その会場が使用出来なくなりましたので、皆様の御力にお頼りしたいのです。

どなたか有志の方がいらっしゃいましたら、御申出下さい。また御心当りの方がございましたら御知らせ下さい。少しくらい高くついてもかまいません。会場を御推挙下さった方には、無条件で会員の資格を御与え致します。

尚御断りしておきますが、当会は営利団体ではございませんので、なたでも会員になって戴くわけにはまいりません。当会の厳重な身許調査の上、当会の理事(現在三名)が認めた上で会員としての可否を決定しております。

当会は現在M男性三名、M女性四名、MS男性六名、S女性三名の計名ですが、出席者の都合でプレイの均衡を保つ事が出来ない時がありますので、皆様の御参加を御待ちしているわけです。

△むつみクラブ▽

泉 かおる

スリルの快感

すべての刺戟は、ある程度まで強くなると、質が解消して量だけになるのが原則のようだ。つまり

か。
戦争も当時の職業軍人にとっては、一種のスリルに違いなからうが、今のような平和な時代には、他人が人工的につくってくれたスリルを味わうか、それとも自分自身の手製のスリルを味わうよりほ

<SMの視点>



かない。

はだして火を踏んだときと、ドライ・アイスを踏んだときと、足の裏にうける感覚は、ほとんど違わないということである。
人間が刺戟によって味わうスリルも、人が喜びが頂点に達したとき、思わず泣けてきたり、悲しみの極には笑さえ浮んでくる、あの心理に通じているのではなからう

○ 即ち第一の作為的なスリルでは「肉体女優」とか「グラマー」と呼ばれるセクシーな女優の演ずる映画。濃厚なベッド・シーンを展開する舞台劇とか、全裸に近いストリップ・ショー。煽情的なメロデー。推理小説とか、和製実存主

義文学等々、現在の日本の感覚文化の諸文化は、さながら各種のスリルのデパートメント・ストアの感がある。

スポーツも単なる勝敗だけではスリルの度が弱すぎて商売にならない。ホームラン賞、打撃賞、優秀投手賞、三冠王といったたぐいがファンの人気を集めている。

危険を冒しての登山、スキー、モーター・レース。競艇なんかもスリルを味わう点に於て、決して前者に劣らないだろう。

○ 第二種のスリルは、賭博または投機で、この方スリルも又盛んである。昔から道楽の三拍子として、飲む、打つ、買う、の中の打つ方である。この方は十分にスリルを味わった上で、うまくゆけばカネの儲かる点が更に魅力的であるといえる。

一躍巨万の富を握ることもできるといふ夢が、更に大きなスリルがかくされているわけだが、その反面、必ずその反対の人と損金とが横たわっているということ忘れてはならない。但し、損ということも、一つの大きなスリルには違いない。
身近かなところでは、マージャ

ン、競輪、競馬など、また他人のやる野球や相撲に賭けている者も少くない。ゴルフなんかも、いろいろの高価な景品を賭けてスリルを楽しんでいるようだ。職場などでひいきチームや好きな力士をきめて勝敗を楽しみ、賭け金の受け渡しは、月給日というところもあるようだ。

○ 第三番目のスリルは「犯罪」である。第一種は金を払うだけだし第二種は大いに儲かる可能性もあるが、損をする可能性も多い。しかし、この方は他人の財物を奪い取るのだから、より確実で、しかもスリルの度が強い。その代り、もしやりそこなったら最後、何年かの自由を放棄した上、社会から葬りさられることになる。

性的な面でも、昔から「一盗、二婢、三妾、四妻」といわれて、この第三種性を加味したものが、その首位を占めている。

要は、スリルを味わうといつても程度の問題で、この特効薬を適度に利用するときは、人生を豊富に愉快に過すことができるし、利用法を誤ると、社会の落伍者として沈没しなければならない。



拝啓

編集長様

見上伏男

編集長様。

賤しい僕である見上伏男が、身のほども弁えずお手紙を差し上げる失礼をお有し下さい。

奇々四月号うれしく拝見致しました。発売日は毎月二十五日となりました。

っておりますが、当地方の書店には、いつも月末頃になります。如何した事でしようか。毎月奇々の発売日を首を長くして待っている我々ファンにとりまして、誠にもどかしき次第です。田舎の都市の書店に於ても二十五日の発売日が厳守されますよう御願います次第です。

例によりまして小生なりの読後感をのべさせていただきます。先ず読物として、第一に「真夜中の昭子と重子のレスリング」と大奥女中対小姓の肩車面取り遊びの趣向はマゾ物として興味深く読みました。ことに「重子と昭子のレスリング」中の挿絵は、なかなか迫力のあるものですが、惜しい事には、下に組み敷かれてるのが女性である事です。

大奥女中対小姓の面取り遊びのアイデアは、大変結構だと存じます。若いグラマーの女中が組打ちよろしく肩車から落馬させ、レスリングもどきの揉み合いの末、小姓を仰向けに押さえつけて、裾もあらわに胸の上に馬乗りに跨り、両腕をむっちりした太腿の下にふまえて自由を束縛し、悠々と首を刎ねる如く小姓の面をはぎとるという趣向。挿画があったらいいこ

とはないと存じます。其の他これは最近、テレビで見たのですが、忍者ブームの折柄、「月光忍者部隊」で森根子扮する女忍者隊員三日月が、山林で敵の将校に出合い、格闘の末、相手を仰向けに投げ倒してその上にムンズと馬乗りに跨って押さえつけるシーンがありました。僅か数秒の時間であって惜しいことをしました。

又、同じく「隠密剣士」の女忍者及びへの一等につきましても、よいアイデアがあると存じます。黒装束に身をかためた女忍者が、単身敵を探りに城内に忍び込み殿の寝所を襲い、有無をいわさずあて身をくらわせた殿様を気絶させ、手、足首をしばって置いて、活を入れて息をふき返した所を仰向けに押し倒して胸の上に馬乗りに跨り、短刀をつきつけて城内の様子、秘密、宝のかくし場所を白状させるといったもの。

今月号にサド、マゾ、フェチ、ホモを網羅した絵画と写真の分譲販売の広告が出ておりますが、これこそ我々ファンの永年待ちが果たたもので、期待にお応え下さいました奇々の各位に心から感謝の意を表しますと共に、小生のアイ

デアが少しでも役に立てば、これに過ぐる喜びはないと存じます。

編集長様

どうか、私の好む挿絵並に口絵も、御発表下さいますよう、今から伏して御願い致します。

前にも申し上げました通り、私は女対女の組打ちが好みません。組敷かれています方が必ず男性でないといけません。従って前記「昭子と重子のレスリング」にしても私なりの空想をさせていただきますと、美しいグラマーの昭子と二つ年下の腕白な従弟といった取り合せになります。

平素ことごとく美しい従姉昭子にいやがらせをしたり、からかったりするくせに非力な従弟を、父母の手前、がまんしているのです。が、或る日父母が揃って出かけた留守に、従弟を自分の部屋に連れ込むと、胸の上に馬乗りに跨り両膝で肩口をしっかりとふまえてしまふ。といった空想にふけたものでした。

奇々は私の空想のもとを創り出す貴重な資料です。今後ますます充実発展されますよう心から御祈り致します。

× × ×

KKグラビア

悦虐フォト回顧

近 藤

△昭和35年のベスト5について▽



数多い制約の中で、奇譚クラブが着実な歩みが続けているということは、大きな喜びです。風俗文献としてもユニークな存在で、S Mの探究に功績もあり、かなりの人々の生活の潤いとなり、人生の支えにもなっているのです。このようなKKの歩みを、時おり、ふり返ってみることも面白いと思うのです。むづかしい議論はさておいて、旧号のグラビア評でもやってみましょうか。

私自身は、絶版ともいえる旧号の中に、捨て難いフォトを発見するのですが、現在入手できない分については別の機会に譲るとして分譲可能となっている昭和35年6月号以降について、回顧することにします。

昭和35年6月号

丁度、KKが表紙にカラーを復活させたときでした。文字通り淡白な調子に抑えて、永

い間過として来たKKは、この間に幾人ものモデル嬢を、誌上に発表して来たのです。勿論、すぐに消えてしまった女性もありましたが、また、今日まで美しい肢体と見事な演技と華麗なM性を誇示しているモデル嬢も生まれたのです。

この号のフォトは、絹川文代、大塚啓子、愛川悦子、桜井葉子の皆さんの作品ですが、美人モデルとして売出中であった絹川嬢が抜群の使われ方をしているのは自然の成行でしょう。これはこの号だけの現象ではありません。

確かに絹川嬢は新鮮でした。明眸で、整った眼鼻立ちの美顔は輝やいていましたし、四肢は伸びやかでスラリとした全身は素晴らしいものでした。唯、口許と顎の辺のふくらみが角度によっていやらしく目立つのです。またヘアスタイルが額の佳さを活しきれないと下品になってしまふのです。そのために、全く別人のような作品が屢々生まれたのです。絹川嬢にとって、猿轡が重要な装身具だということ、この号あたりが示したのです。

大塚嬢のお化粧も、改善の余地がありました。総じて、この号の前後は、人工の作為が目立ちすぎ、モデルの個性とか独特の演技が充分活用されなかったようです。

「冷光」の左下一葉、「声なき表情」の右上と左端中の二葉「陽光にはじらう女」の中央

二葉「円転舞」の左一葉（以上絹川）、「追
い曳き」「白壁反転」（大塚）「囚女の祈願」
（愛川）という所が、この号から推奨したい
フォトなのです。

昭和35年7月号

登場メンバーは絹川、津川路子、桜井・大
塚・春丘リル・愛川の六人。

一人のモデルにストーリーを追わせるフォ
トは嬉しいアイデアでしたが、完全な成功
でない所が残念です。それも、絹川嬢が切角
の柱縛りで宙に浮きながら、物足りないのは
皮肉です。カメラアングルや表情と腹部の
縛しめに工夫が欲しい所でした。

この号で推奨できるのは、「折檻場への道
程」（桜井）「新入荷品陳列」の第一葉（津
川）「縛られポーズの好演戯」（春丘）とい
う所で、絹川嬢はむしろ「新教祖様出現」の
ような徹底したポーズがよく、大塚嬢はお化
粧とヘアスタイルに工夫が望まれますし、愛
川嬢は迫力不足で、桜井嬢の好演が印象的
でした。

昭和35年8月号

「葉子ちゃんの立木とまり」（桜井）三葉は
トップを飾るにふさわしい作品。何しろヴォ
リューム充分で、個性的なマスクのモデルだ
けに、こういう受縛の迫力は強烈です。

絹川嬢は「落ちそうなパンティ」が佳く、
折角の野外縛りは落ちます。

津川嬢の「青い囚長の女」が美しく、桜井
嬢の「轡と蠟燭」の下の一葉も立派な作品で
す。

新しく登場の若原明子嬢は余り活躍もせず
に消えたモデルでしたが、好感の持てる明る
いムードの女性で、裸身も清潔な美しさがあ
りました。

凄味を帯びて来た肉体派の大塚嬢はベテラ
ンらしく無難な出来、美貌と謂われた春丘嬢
は些か硬い表情が残っていました。

昭和35年9月号

佳作三編「不安と羞恥と嘆願」（津川）、
「囚女引廻しの図」（桜井）「ひっ捕えた妖
獣」（絹川）。

津川嬢の被縛姿は哀愁に包まれて見事とし
たが、さらに成熟した女を見せることなく、
消えさったのは、彼女が和服の、それも囚衣
の似合う美女だっただけに淋しい思いです。

桜井嬢の女囚や女奴隷は天性とも思える一
流の演技。マスク、ヘアスタイル、背恰好と
もにうってつけのモデルですから、この作品
に前後する就縛・拷問・処刑の種々相などを
欲しいと思うのです。囚衣に本縄で裸足が佳
く、笞で小突かれて振向く恨めしげな視線。
石畳にへばって笞うたれる表情は見事です。

絹川嬢の肉体美も見事です。丸顔に近くな
り、裸身もムチムチ脂づいて、丸みと柔らか
みが出ていました。7月号の作品に似たムー
ドですが、組んだ足首を吊り上げられて、ヒ
ップだけで体重を支える柱縛りは一種の海老
縛りのムードを醸しており、最近の彼女には
見られないポーズです。

その他絹川二作、春丘一作。

昭和35年10月号

この号から、またKKの装いが新しくなり
増員が実現し、グラビアも一層変化に富んで
来たのです。

「豊臀鞭撻」「防声具と乳房責」「顔枷の装
着」の桜井嬢は、今日まで他の追隨を許さな
い独壇場といえるでしょう。囚衣を着せられ
間種の拘束具や枷を装着され、およそ人格を
無視された境遇に突落とされると、最も美し
くなる女性の典型なのです。

絹川嬢の「佳人鼻難」も美しく迫力ある作
品でポイントをよく捉えています。その他
はもう一步「女奴隷呻吟」は折角の装身具が
活かしきれずSムードと迫力に欠け、むしろ
「慟哭」が優っています。「統肌」は美しい
ヴォリュームというだけで甘い作品ですし、
「諦観と観念」も弱いのです。

柳初子嬢の二作は、可憐なムードで無難。
ただ、マスクや髪を考えると囚衣が似合いそ

うですし、実際、後に発表された「女囚第十三号」の方が充実していたようです。

若原嬢の「放心」「羞恥」や大塚嬢の作品は目先の変化というだけの効果しかないように思います。

昭和35年11月号

新装を謳ったKKのモデル顔見せというところ、

登場する女性も新旧入混って、杉美美、花本京子、加賀利江子、花坂道子、須川令子、桜井葉子、絹川文代、萩千恵子、平野笑子、中富綾子、村井知可子、愛川悦子、中塚文子、村田那美子、伊吹真佐子、坂口利子と賑やかです。各人それぞれに代表的なフオトの一面を覗かせてくれるのですが、それでもポーズ・表情・緊縛度・肉体等の諸要素を検討すると優劣は出るものです。

杉嬢の鞭撻はなかなかの傑作でしょう。

桜井嬢の「後手吊り」は無残美の極ともいえませんが、下半身の縛しめや吊りを怠ると醜悪に墮すことにもなりましょう。

萩嬢の被縛姿態は上品な艶と思いきりの良いアクロバティックなポーズが状色ですが、「優美と柔軟」の左ページ四葉や、「丸沢」「ハンモック」など貴重な作品で、裸身の美しさも格別。

伊吹嬢の「ローソク」と野外縛り、坂口嬢

の海老縛りも印象的でしたが、一般的にいつて、中途半端な縛りで緊縛をよそおっては囚われの美や責められる輝やきが生まれませんし、モデルの個性にマッチした悦虐ポーズの工夫が無いと、印象的な作品は期待できません。その意味で、絹川嬢は平凡、むしろ、愛川嬢が活気に満ちていました。

昭和35年12月号

「木洩れ陽」(桜井)と、「冷い休息」(絹川)が佳作。緊縛の強度といい、ポーズ・表情といい、女体のポイントを巧みに捉えて極めて妙。

この号も新人の顔見世が多く、その間にベテランが色を添えています。大塚、絹川両ベテランは概して平凡で、初登場の大井小夜子嬢のヴォリュームと弾力的な柔軟さが愉しく、同じく新人加茂良子嬢のエキゾティックなムードや悦虐の表情が期待を抱かせてくれるでしょう。

山路ミヨ子、熱海容子、浜千代子、花本京子、四方清美の諸嬢は、一応紹介程度で、情感・緊縛度・嗜虐方法などで、もう一度突込んで頂きたいと思います。

さて、ここで一通り、昭和35年の展望を終わった訳です。この年にKKのグラビアを飾ったフオトについて、私なりのピックアップをしてみましょう。本来ならベスト10と行きた

い所ですが、この年は6月号からですし、現在入手困難な旧号の分を入れては話になりませんから、ベスト5にしてみました。

1. 木洩れ陽(桜井) 12月号
 2. 佳人鼻難(絹川) 10月号
 3. 折檻場への道程(桜井) 7月号
 4. 顔枷の装着(桜井) 10月号
 5. 声なき表情(蓋川) 6月号
- 優美と柔軟(萩) 11月号

第5位が二作ありますが、甲乙つけ難いためです。私の評価基準は、演出面で構図背景との融和・陰影・苛責内容を考え、演技面で表情・姿態・責め衣と責め具・緊縛度を検討し、要するに、何をどこまで忠実に表現しているかを重要視するもので、それだけに、美しさとは迫真力が不可欠であろうという訳です。そこで、モデルには演技力以前の問題として、ヴォリューム、柔軟性、四肢の美しさや乳房の美しさ、眼鼻立ち、髪の毛というような肉体的条件が要求されるのです。

昭和35年に最も活躍したモデルの絹川嬢が綺麗事になるのはともかくとして、迫真力に乏しいのは何故か不審です。さらには、愛川・大塚両ベテランが、当時素晴らしい作品を創れなかったのも、残念に思います。

桜井嬢の大活躍と、津川・春丘・加茂というような美人モデルの登場が、この年の収穫という所でしょうか。

「奇譚三十九夜」物語

第三十六夜

辻 村 隆

彼岸の訪れと共に、めっきり春は近づいて、早や南国では、桜の便りもちらはほらです。クラブの部屋の中は、スチームを入れて暑くなければ肌寒く感じる季節の境目の、ひんやりとした空気が、退屈男達の周囲にヒタヒタと流れておりました。紫煙とワイン——。やがて空気は仄々と温まり、と共に、人々の口にはいつしか滑らかに綻ろびて行きます。

ステッキ氏が推されて、さらばと今宵の口を切りました。

第八十三話 或る日突然に——

或る日突然に——。

激しく電話のベルが鳴った。可奈子は午後の、よろめきドラマのベッドシーンに胸をわくわくさせていた折も折で、不精無精立上っ

て受話器をとった。男の声ができばきと聞えて来た。

『もしもし……青野さんのお宅ですね。こちら管轄の警察の者ですが、実はお宅の前が花園団地の窃盗事件の事につきまして、内密で一寸御参考にお訊ねしたい事がありますので、防犯の為御協力願えないでしょうか。もう三十分したら、四十年配の眼鏡をかけた刑事で、松岡と申す者が参りますから、よろしくお願いします』

それで電話はガチャリと切れた。何とも押つけがましい高飛車な調子なので、可奈子は少し気を悪くしたが、防犯の協力とあれば致し方ない。最近花園団地内で、頻々と盗難が続いているので、団地夫人連の仕立物を内職にしている手前もあり、彼女とても物騒に思っていたので、警察に協力する気になり出した。

可奈子はテレビのスケッチを切り、拡げ放しにしてあった仕立物

を手早く片付け終りそそくさと辺りのちらかったものを始末した。

三十分後、きっかりに玄関の格子が開いた。

迎えに出ると、痩せすぎの少し色の掛った眼鏡を掛けた中年の男が立っていた。

「警察の松岡刑事です。御多忙中恐縮ですが、少しお話を御伺いたくして参りました」

「さあさあ、どうぞお上りになって下さい。私で間に合いますことやら……」

可奈子は先に立って座敷に招じた。

松岡刑事は女の前の座布団に座ると、辺りを見廻して、

「そうそう、これは内緒でお訊ねするのですから、私がここに居て話するところを団地の人にも見られちゃ拙い。雨戸をくって頂けませんか——どうも表通りから丸見えじゃね……」

と、にこにこし乍ら可奈子に促がした。彼女は何か、重大な秘密を、自ら自身が知っている様な錯覚に捉われ、いわれる儘に雨戸を繰った。部屋が仄暗くなって、螢光灯のスイッチの紐を引こうと、手を上に伸ばした途端、可奈子の腕はムズと掴まれていた。

「呀っ！」と叫んだ唇は、男の手で逸早く塞がれ、可奈子はぐいと引寄せられて、男の顔すれすれに自分の顔があった。

男は無言で色眼鏡の奥から、不気味に可奈子の瞳の底を凝視していた。

可奈子には長い長い時間に思えたが、数分も経っていない。彼女の瞳が弱々しく細まり、恐怖の瞳の色は消えて、鈍くうつろに虚空を見つめていた。

男は手を離すと、可奈子の体が、ユラリと傾むいて、崩れた。

男は囁れた声で、何か呪文のようなものを唱え出した。催眠の暗示であった。

ゆらりと立ち上った可奈子は、無雑作に羽織を脱ぎ、帯を解いた。機械的に着物を畳にすべらせた。身に纏ったすべてが、自らの手でとり払われ、彼女の身につけているものといえば、妙に白々しい足袋だけが、不似合に両足首を蔽っていた。三十六才で子供のないうい女体は堅くしまり、熟し切った肌が、薄暗い座敷にマヌカンのように佇立していた。

男は一条の縄を可奈子の手握らせた。そして後ずさりする様に、静かに後手で玄関を開き、戸外に出て行った。

二分—三分—五分——、可奈子は片手に縄をだらりと垂した儘、魂の抜けた空蟬の肉体を、声もなく部屋の中央に曝していたが、急に電波でも通った如く、ゆるゆると歩き始めた。男は安全圏まで身を退けた上、遠隔操作（リモートコントロール）による催眠の術をかけていたのであった。

陽ざしの暖かい戸外へ、可奈子は愚かれた様に、その一糸纏わぬ体を選んでいった。

その足は団地の方へ向いていた。しかも、片手に握られた縄を、両手に持ちかえると、いきなり、団地前の広場を、軽やかに縄飛びし乍らゆるやかに走り出した。

忽ち団地内は蜂の巣をつつく大騒ぎになった。団地の夫人連は、呆氣にとられ、顔を赤くし、幼児は面白そうに、パチパチと手を叩いた。何という事だろう。人々はまるで白昼夢を見ている思いだった。常日頃淑やかな、しかも洋服さえ着ず、いつも和服で過す。あ

の可奈子夫人が、事もあろうに、足袋はだしで裸の姿で、いとも軽やかに、縄飛びし乍ら、団地内を右へ、そして左へと飛び廻っているのである。不思議な力が働いているのか、近寄って止めようとすると同姓の人々を、はねとばし、押しのけ、可奈子は飽くことなくさんさんと降る太陽の下で飛躍していた。

前触れもなく、彼女は芝生に倒れた。ドッと人々が駆けよると、うわ言のように可奈子の唇から、（テンシンのダイヤ……テンシンのダイヤ……）という言葉が、途切れ途切れに吐き出されていた。急を聞いて夫の青野竜吉がかけつけたのは、それから四十分後であった。

或る日突然に――。

真由美はくらくらと軽いめまいに襲われた。劇場のどこかの片隅から、自分を凝視している眼を、先程から感じていたが、明るい舞台に較べて、効果をたかめる為か、場内は暗かった。舞台には今、ダイナミック・ガールズによる、激しいラインダンスが始まっている。

真由美は自分を見つめる眼を探したが、ぎっしり満員の場内ではその視線は何処から流れてくるのか、確かめようもなかった。唯、激しい何ものかが、ぐいぐいと自分を磁力の様に惹きつけているのを覚えるのである。

彼女は思わず、横に並んで座る、恋人の潤二の腕を掴んだ。

力任せに掴んだつもりが、いつしか真由美の手は力なく垂れていった。潤二があわてて体を抱く様にしたのを覚えていたが、それも束の間、真由美は昏迷の谷間に陥落していった。

音もなく真由美は立上った。慌てて恋人の潤二が袖を引こうとしたが、それをスルリと脱けて、混雑の人ごみを巧みに縫うて、場内の前列へ前列へと歩いていった。既に潤二とは二、三米の距たりが出来ている。

歩き乍ら、いつどうして脱いだのであろうか――。舞台のかぶり付きの最前列に出た時は、真由美は桃色のボレロだけで、下に着ていたワンピースはおろか、シュミーズもブラジャーもとリ払っていた。人々は舞台のけんらん華やかな群舞に夢中で、誰一人、この異様に気付かなかった。

舞台は一瞬暗転して、歌劇団の主役スターのソロが始まった。青いスポットが一点に固定すると、徐々にキラキラ銀色に輝やく衣裳をつけた主役スターがうずくまった姿勢から立上り、伸び上って跳躍し、狂烈なサンバの曲につれて、スポットライトの中で、五体は伸縮して踊り廻った。

その時、舞台のエプロンステージに、サッと一つの黒い影が、場内から飛び上ったと見るや、主役のスターの前に立ちはだかつて、ぐんと彼女を強く押しのけると、パッと着ていたボレロを脱いだ女がいた。

観衆は瞬間ざわめき、激しい嬌声と歓声が上った。なんとその娘は、黒いタイトのみのすべてをとり払った。ヌードの姿で、若々しい女体を臆面もなく大衆に誇示したからである。娘は腰をくねらせ奇妙な手振り、足振りで、それでも不思議にサンバの曲に合わせて踊り出した。

場末のストリップ劇場なら問題ではない。しかしここは、大都会の劇場でも、一流に属する場所であり、演しものは優雅をモットー

とする東都歌劇団の公演である。

ケンケンゴウゴウたる歓声と悲鳴が、劇場を坩堝と化した。

この飛入ショウを喜ぶ客の中で、唯一人誰よりも驚愕し、動揺したのは、外でもない立花潤二であった。今更説明する迄もない。痴人に化して、奇妙に踊り狂うのは、恋人の真由美に外ならなかったからだ。

スルスルと幕が降りると、歓声と弥次が一入高くなった。その収拾のつかない舞台から、真由美は身軽く、体をひるがえすと、妖精の如き、美しい肢体と黒髪を振り乱して、パッと幕外へ飛び出すと飽くことなく、楽団連中のボックスを囲む、エプロンステージで、大歓声に応えるかの様に、身をくねらせていた。そして力尽きたように、バタリと倒れ伏した。劇場の警備員が、かけつけて、布で彼女の体を蔽うた時、きれぎれの彼女の口について出る（テンシンのダイヤ：テンシンのダイヤ：）という。意味の分らぬ言葉に小首をかしげ、丸まっちく愛らしい真由美の顔を、不慙そうに見つめ合っていたのである。

潤二の電話で、駆けつけた彼女の父の、赤井虎之助は、蒼ざめた顔に、冷汗を浮べ、尚も楽屋で（テンシンのダイヤ）と口走る真由美の顔をじっと覗き込んで、激しい苦痛に歪んだ面持で、体を慄わせていた。真由美の母は既に彼女が六才の時この世を去って、今は父と二人暮らし、驕る婿に迎える筈の、立花潤二と、楽しい婚前交際の、そんな時の出来事であった。潤二の姿はいちか消えていた。騒然たる場内から、その時、快心の無気味な笑みを洩らして立去った。色眼鏡の中年の紳士の存在を、湧くに湧く人々は、誰一人として気付かなかったのも当然である。

× × ×

或る日突然に――

玄関が荒々しく開く音に近子はドキリとした。今日は、彼女の旦那の黄瀬熊太郎は出張中である筈もなかった。

△押売りかしら？。気味が悪いわ……▽

二号暮しの、妾宅の女の一人住いは特に心細い事もある。

彼女は怖々、玄関へ出て、更にギョっとした。眼を血走らせ、虚空をにらんでそこに立っているのは、外でもない黄瀬の本妻の泰子だったからである。

泰子は近子の存在を無視して、うつろに見開いた眼で、じっとつ立った儘であった。

髪かたちは乱れ、着物の前もはだけて、裾もだらしく開いていた。

泰子は何者かに操られてでもいる様に、暫らくしてうなずくと、玄関から草履の儘、上にあがって来て、まるで勝手知ったる様に、傍らに立すくむ近子の腕を強く引いて、ドンドンと奥の寝室へと歩いていった。

寝室に入ると、扉をピタリと閉め、中より把手を廻して、鍵をかけた。

異様な泰子の眼が、じっと近子を凝視し始めると、近子はグングンと奈落へ惹き込まれそうな昏迷を覚え始めた。

例の色眼鏡の男が、泰子を催眠術の媒体として、リモコンの中継所の様に泰子を使ったのである。泰子の眼を通して、催眠の遠隔操作は、近子に作用し始めた。

二人の爛熟した女が、寝室で向き合った儘、しばし直立して、呆

然と立っていた。

やがてノロノロと泰子が着物を脱ぎ始めると、まるで呼応した様に、二号の近子も着物を脱ぎ始めた。

二人の女体には、白々と足袋だけが体に残った。痩せすぎの泰子と、少々脂肪の乗った太り気味の近子とは、極端な対照だった。泰子は瓜実顔で神経質そうであつたし、近子は丸顔でどちらか。というのんびりしたタイプの女であつた。

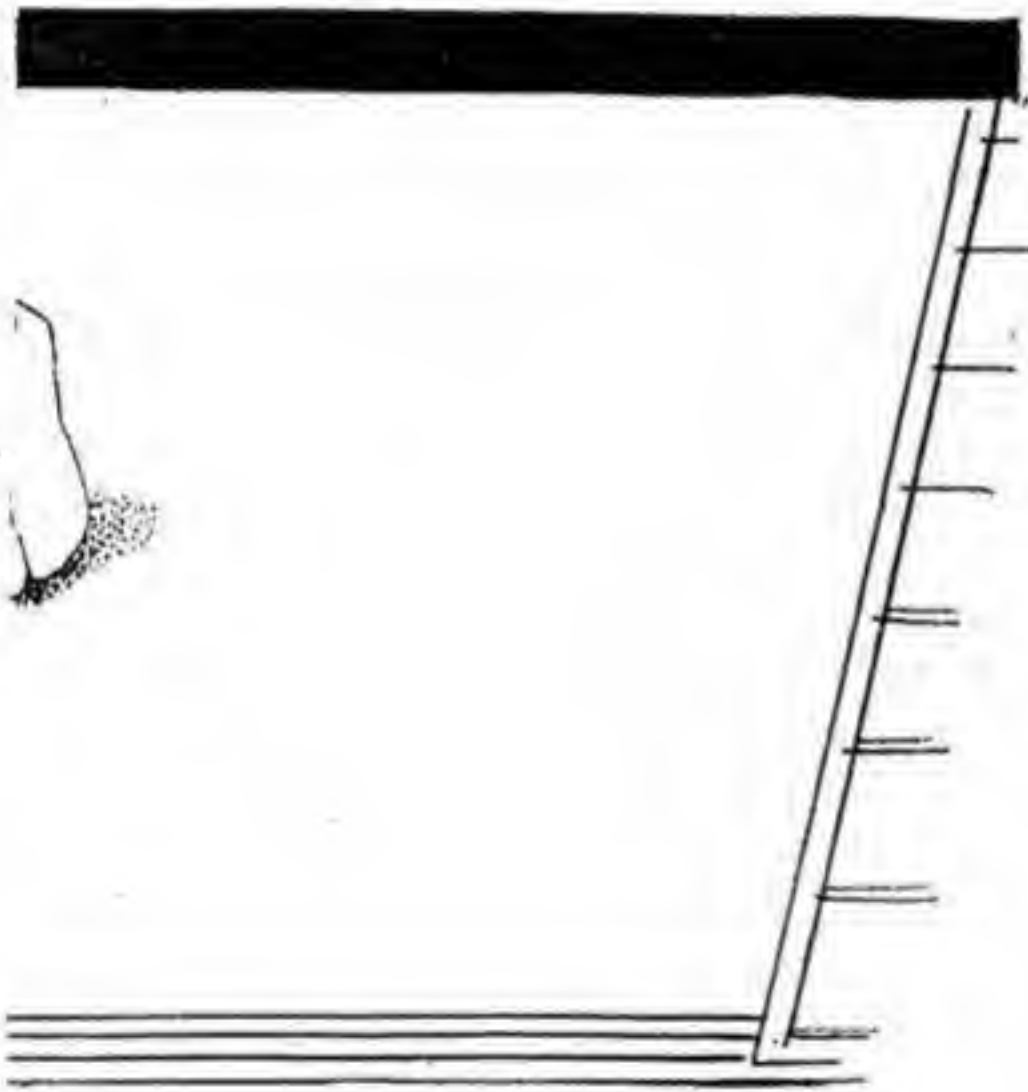
いわば利害関係に於ても、又肉体的にも精神的にも、全く相反する二人の女が、一人の男を中に挟んで、暗黙の決闘を演じていた筈であつた。

しかし今の二人には、敵愾心のカケラも見出せなかつた。同じ様な状態のもとに、催眠による暗示にのみ、二人は動かされていたのである。

泰子は徐々に歩一步と近子に近づくと、くるりと背を向けて、両手を後ろに廻した。暗中摸索の恰好で、泰子は辺りをウロウロ立ち廻ると、数条の縄を手にしていった。

後ろに両手を廻した泰子の手首に縄をかけ、両腕を引き絞って首に廻し、胸で結んで、更に腕に廻し、近子は実に巧みに、轟々と泰子を本縛りに縛り上げていった。

更に大きなクリップで、ダラリと出した泰子の舌を挟むと、それに紐をつけて、舌が戻らぬ様、腹の辺りで引き絞った。



寢室の鳩時計がポツポツと午後四時を告げる。足袋だけの二人の女は、フラフラと玄関の方へ歩み出した。

縛った泰子を先に立て、近子はその縄尻を握っていた。

戸外へ出ると、出会頭に走って来た、燃料店の三輪の運転手が、吃驚してクラクションを鳴らし、数米行き過ぎて止ると、窓から顔を突き出して、鳩が豆鉄砲を啖った様な顔で、裸道中の二人を啞然と見送った。そして、店員はいきなり車から飛び出すと、近くのお得意の家に転がり込んだ。

広い大通りを、悠然と二人は歩む。縛られて痛々しそうな泰子の縄尻を、近子は傲然とした態度で引き乍ら、背を反して、スーパーマーケットや、公設市場のある、この辺りの繁華街へと差ししかつて来た。

この街始つて以来の大騒ぎで、数百人の弥次馬が、黒山の様になって、二人の前後左右を右往左往した。二人の白い肌に夕陽が、赤く輝り映えて、夕焼けが次第に空を赤く染め始めた。急を聞いてかけつけた警官が、二人を捕えようとして、いきなり、強い力で近子に押し倒された。その拍子に縄尻を強く引っ張ったので、泰子はヨロヨロとよろめいて、バタリと地上に転倒した。縄が、轟々と肌に喰い込み、長く突き出された舌は、ザラザラに砂ほこりにまみれていた。

近子はその体を引き起こそうとして、瞬間、

これも折り重なる様にバツタリ倒れた。そして二人はもう動かなかった。唯、近子の自由の唇から微かに（テンシンのダイヤ…テンシンのダイヤ…）といううわごとが洩れていた。

「これは、黄瀬さんの奥さんと二号さんだぜ——。一体どうしたというんだろ…。ああ、何てこった……」

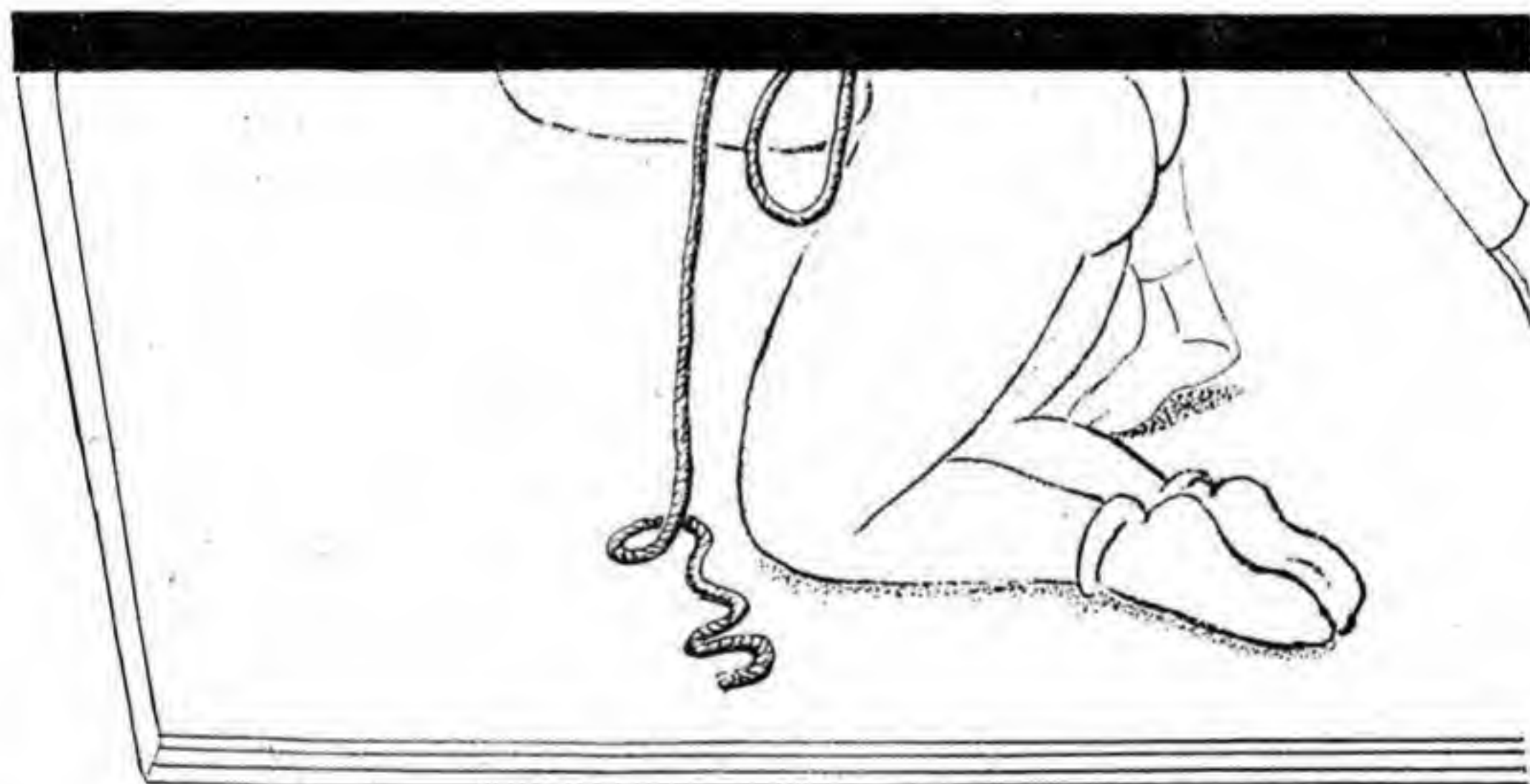
顔見知りには呟やいて、好奇心にかられて二人を覗き込み、女達は眼を伏せ、両手で顔を蔽い乍らも、成行きを見守っていた。子供達は、警官や、謹厳人種に追っ払われ乍らも、砂糖にたかるアリの様に、又ぞろ遠巻きにとり巻いていた。

警官は近くの家で毛布を借りて来て、大急ぎで、二人の体の上にかけた。

数百米離れた、私鉄のこの街の駅のベンチから、一人の色眼鏡の男が立上った。そしてひっそりと立去っていった。

× × ×
或る日突然に——

青野竜吉、可奈子夫婦は、夜逃げしてしまった。彼等の行方は沓として知れなかったが、廃品回収のある男の話によると、青野夫妻によく似た男女を、釜ヶ崎の一隅の



木賃宿で見かけたという話である。同居の連中の話によると、青野に似た男は、まるで痴呆症のようになって、『ダイヤは返す…許してくれ』と口走っていたということであるが……。

× × ×

或る日突然に——

赤井真由美が、自宅の物置で首吊り自殺を計り、あたらず十九才の若い青春を散らしたと、新聞は小さく報道していた。報道によると失恋自殺と書いてあったが、真由美の死後、父親の赤井虎之助は精神病院に隔離され、小豆を摘んでは、ゲタゲタと笑い『赤いダイヤだ、ハハ、赤いダイヤだ』と口走っていたそうである。

× × ×

或る日突然に——

黄瀬泰子が、出刃庖丁を振りかざして、妾宅の白川近子を襲い、ズタズタに刺し殺したと、ニュースが大々的に報道していた。

人々の同情が黄瀬泰子に集まり、助命嘆願運動実施中の処、泰子は屢々、衣服を剥いで露出的になり、誰彼の見境なく、縛ってくれと叫ぶので、精神鑑定の結果、極度

の被害妄想と判断され、精神病院に入院したとある。

黄瀬熊太郎は、病床に臥し、うつつにたわ言に『すまない——済まない』と繰り返しているとの附添人の噂であったが……

× × ×

二十年前の或る日突然に——。

車軸を流す様な、激しい夕立が沛然と降り出した。青野兵長、赤井軍曹、黄瀬上等兵、黒木一等兵の四人の敗残兵は辛うじて、洞窟に駆け込んだ。ぐっしりと全身ずぶ濡れである。

天津駐屯部隊だった彼等の配属する連隊は、日と共に敗色濃く、四人はE中隊のR地区分遣隊だった。敵の夜襲を受け、応戦したが退却を余儀なくされ、いつしか、この四人が行動を共にして、辛うじて、R地区を山越えに、この辺りまで命からがら逃げのびて来たのだった。

既に乾パンもなく、僅かな煙草やマッチも今の雨で濡らし、彼等は洞窟で、暗然たる思いで、お互いに黙りこくって、座っていた。

嘘の様に夕立が上ると、斜陽が洞窟の奥へも差し込んで来た。

陽差しで見ると、洞窟内は人の住んだらしい形跡があった。或いはこの辺りの匪賊か山賊の住居ではなからうかと、一同は一樣に危惧した。何かないかと辺りを探すと、かめが洞窟の奥に三つ許り並んであって、鉄蓋がしてあった。黒木一等兵がそれを開いて見ると、中には乾魚や、高粱がつめられてあった。

天の幸いと貪り喰ったが、かめの底に、灰色のよごれたボロ布で、何か包みもののあるのを黒木は発見した。手にとるとドシリと重く、開いて見ると、中から燦然たるダイヤが転がり落ちた。時価何千万円もするだろうと思われる宝石であった。

四人は夢中になった。四等分して雑囊の底にこれを忍ばせ、この洞窟の住人が戻らぬうちに、ここをあとにした。

済南まで行けば何とかなる——という。赤井軍曹の考えで四人は磁石を頼りに、昼は畑に潜み、夜に歩いた。

運悪く黒木一等兵が激しい下痢を起した。

必死に三人に追いつがるが、ともすれば遅れ勝ちになる。放っておかれては死を待つ許りだった。黒木は懸命にこらえて歩いたが、遂に倒れた。三人は眼くばせすると、いきなり黒木の雑囊をとり上げ、彼の宝石を三等分して自分らの雑囊にしまい込んだ。黒木は夢中で叫んだが体の自由がきかなかった。

既に三人の眼の色は変っていた。一樣に暗黙の了解が成立していた。黄瀬が介抱する振りをして近づくと、帯剣を抜きざま黒木の腹を刺そうとした。呀っと体をねじったが、帯剣は彼の股間をぐさりと刺した。血塗れの彼を引曳って、黄瀬と青野が、見つからぬ様にと穴を掘って、三人がかりで黒木を穴に埋めたのである。

「未だ息がある——。首だけ出しておいてやれ——」

赤井がいった。それで、無情にも首だけ出して生理めにした儘、三人はスタスタと立去っていった。

万死に一生を得たというか、彼はここを通った中国の老爺に助けられた。しかし男の機能は破壊されていた。中国で十年——。

老爺劉奇生の不思議な催眠呪法を会得して、彼は故国に帰りついた。復讐の鬼となって……。

復讐鬼は、四人で逃げた頃の、故国の思い出話をたよりに、必死に彼等の居所を探し廻った。そして時は来たのだった。或る日突然に何の前触れもなしに、復讐は始まったのである。

或る日突然に——。

x

x

x

黒木豹作元一等兵は、中国の天津の一隅に姿を現わしていた。

復讐のあとの空しさのみが、黒木の胸中を去来していた。彼は街角でマーチョを拾うと何か命じた。マーチョは街を離れ、街道を超えて奥へ奥へとコトコトと去って行く。

老師劉先生は健在だろうか——。色眼鏡の黒木の眼から懐旧の涙が細く一筋つたわって来た。

「どうも駄足の物語りで恐縮です。こんなテーマで、もっと嗜虐趣味を横溢させて、ゆっくり語りたかったのですが、まるで映画の梗概みたいで申し訳ありません。ではバトンをパイプ氏に廻しましょう……。」

こういつてステッキ氏は、ホッと一息ついて、グラスのワインをぐっと一気にのみほしたのです。二番手はパイプ氏——。やおらにこやかに一同を見渡すと、さてと口を切りました。

第八十四話 蔵の中

「久宝寺町のおしなさんを訪れると、私と趣味が合うというのか、よく責めの昔噺をきかせてくれました。その当時の極彩式の刷絵や押絵などを見せてくれるのです。おしなさんはもう七十に近い品のいいお婆さんですが、昔は船場の御寮人さんで、なくなった旦那は入婿でした。戦火で焼けた土蔵には、彼女も若い頃には、随分いろいろの思い出があるらしく、私に責絵を見せては、淡々とした口振りで、往時を話してくれるのでした。枯淡の老境にあると、昔の娘

時代の自分のそうした体験も、今は懐かしい思い出となって、まるで他人様の様にいえるものなのでしょう。

以下はおしなさんの昔噺です——」

x

x

x

(……)……そうですね。若い時に私は歌舞伎の外題が変る度に観に行ったものですが、そのうち、私は若い女の責場に、人知れぬ興味をもつ様になっておりました。特に吊責には、胸の疼くような、激しい心のたかまりを覚えたものです。未だに忘れませんが、私の記憶では、

「皿屋敷化粧姿見」の腰元お菊の井戸吊し——

「月欠皿恋路宵闇」の娘欠皿の吊責め——

「松庭前月影模様」の腰元八重の吊責め——

「好色敷島物語」の遊女敷島の吊責め——

「琵琶景清物語」の腰元人丸の吊責め——

「子持高尾松貞操」の娘おかよの吊責め——

「東都花今長兵衛」の茶屋はるの吊責め——

などが、未だに私の脳裡に焼きついております。この様な題しものが、近頃薩張りないのは、どうした事なんでしょうかね。特に今でも覚えておりますが、遊女敷島の吊し責めでは、たしか訥升であったと思いますが、おなかに剣道用の胴を巻いて、吊し責めにし、青竹や弓折れで、敷島を力一杯叩くのです。舞台から観客席にまでパシリパシリという割竹の音が響き、それはそれは凄惨で御座いましたよ。脱疽で両脚をきった沢村田之助も、絶世の責めの女形でした。田之助の浦里の、あの雪の責め場には、今以てあの人の右に出る女形がないでしょ。何でも田之助は相当の被虐症で欠皿になった

時も、本当に立木に縛られて吊され、相手に実際に力強く打つ様申し、それが決して着物の下に腹綿や、当て布をしなかったそうで、打たれて、よよと泣く水のしたたる姿は、自分から、縛りや責めを飲こんでいる様に見えたものですよ。

私の娘の頃は、未だ鬘を結って、箱枕を使っておりました。近頃の娘さんなら想像もつかないでしょうが、髪結いが仲々大変だったものです。何しろ一人娘の箱入りでしたからね、お芝居はいつも乳母がついて行きましたものです。

私は役者の似顔絵や、押絵や、それに刷絵をよく集めました。特に責絵には人に言えぬ興味をもって、それだけは土蔵の奥の、つづらに秘かにしまっておりました。時々土蔵に入っては、つづらを開いて、それらの責絵を見るのが、隠れた私の、何よりの愉しみでもあったのです。

あれは土蔵の前の中庭の、沈丁花が、激しいむせかえる様な、強い匂いを庭一杯にまきちらしていた頃でしたが、その日も私は退屈のあまり、土蔵へ入って行きました。

お店は昔からの綿布問屋でしたが、その頃は主に麻を扱っていましたが、丁度その時、蔵の中で、手代の唯七とん、そう、ただひつとんと呼ぶんですよ。その唯七とんが、一人で、麻の梱包を、土蔵のずし（天井上の物置）に上げているところでした。蔵の上の太いはりに丈夫な滑車を取りつけ、太繩を通して、繩の一方に鉄鉤をつけてあるのですが、梱包の粗繩を鉤に引っ掛けて、太繩を引っ張ると、梱包は徐々に吊り上って参ります。ずしの高さまで引き揚げると、太繩の頃合のところに、二、三個くくりつけてある鉄環を、柱の曲釘に引っ掛けるのです。梱包は蔵の上で、小さく揺れて止まっ

ております。唯七とんは横手の梯子を昇ってずしに降り立って、梱包を鉤から外してずしの奥へ転がして行くのです。私もそれは時々見掛ける仕事でしたが、大概是、丁稚を使って、二人か三人で、上と下とで仕事しておりますのに、その日に限って、何か人手でも足りなかったのか、唯七とん独りでした。

私は土蔵の奥の、畳敷きの床に座布団を敷いて坐りました。土蔵が出来たのが嘉永四年とかで、蔵の中は、その頃未だ電気がひけていませんでしたので、私はいつもの様に、ランプのホヤを拭いて、灯をともしました。

古めかしい行灯も置いてありましたが、灯芯では余り暗いので、数年前からランプを使う様になっていたのです。

「とうさん（お嬢さんの意）えらいほこりしてすみまへんなあー」唯七とんは、かぶっていた手拭をとると、前垂れを、二、三回ポンとはたいて、私に会釈したのです。桃割れ姿の華やかな装いの私が、ランプの下に浮かび上っているのを、唯七とんはまぶしそうに見ておりましたっけ。

「いいえ、うち（私）こそ、仕事の邪魔してすんまへん——。ちょっと刷絵を見とうなったださかい……気にせんといて」

私はそういって、刷絵をつづらから出して、好きな責絵を並べかけましたが、土蔵の中央で、梱包を再び吊り始めた唯七とんが気になって仕方ありませんでした。ぎりぎり滑車で吊り上って行く梱包が、ともすれば、吊責めの姿を連想させるのです。

梱包の代りに、この私を吊り上げてくれと唯七とんにせがんだら彼はどんな顔をするだろう——。しかし、私自身一度吊し責めされて見たい激しい欲望にかられ、うるんだ瞳で、私はじっと吊り上っ

て行く梱包の行方を追っていました。恐らく私は放心状態だったのでしょう。しかし主家の一人娘である私は、使用人の唯七とんに、その様なはしたない、異常な事をどうしていいえましょう。私はそれを思うだけで、胸は早鐘の様に激しく高鳴り、カッと頬の赤らむのを覚えました。

土蔵の湿っぽい、仄暗い陰鬱な雰囲気、尚更、私に妖しい幻想を抱かせ、静まり返った土蔵の中で、唯った二人きりで居ることが私の欲望をきり出す絶好の機会の様にも思えたのでした。――

おどろおどろと鳴り響く、責め場の太鼓の音、ヒュッヒュッと風を切り空になるささら竹の音、苦悶に呻き、責めに悶える、お菊、人丸、照手姫、中将姫、欠皿、浦里、雪姫、遊女薄雪、松虫鈴虫、清姫、唐衣の顔、顔、顔、が空間に浮んでは消え、走馬灯のように私の脳裡をぐるぐると駆け巡るのです。

私は極端な幻覚に襲われました。唯七とんの姿がいつしか、青山播磨に見え、景清の様に思え、法界坊に変わりました。

「あッ、とうさん、どないしはりました――」

はっと気づくと、いつか私はふらふらと立上り、唯七とんの前にただずんでいたのです。心配そうに、唯七とんは私を今にも抱きかかえん許りの姿勢で、覗き込んでおりました。

「唯七とん、お願い……うちの言うこときいて――」

「へえ――えらい改まって、何ですらう。私に出来ますことやったら……」

私は蒼褪めてブルブル震えていました。切り出す刹那の、あられない女心の激しいときめきを、彼は果してきき入れるだろうか、それが心掛りでした。けれど私は堰を切ったように叫んでいたの

す。

「唯七とん――、変なこというおなごやと思わんといて――。一ぺんでいいから、梱包の代りに、うちをくくって吊り下げてほしいのや。芝居でよく女形が吊されて責められるを見て、うちもいっぺんそんなめにおうて見とうなったんや――、な、おかしいこというと思わんと、うちをくくって……」

私は娘心の羞かしさに、消えも入りたげに、それでも懸命に頼みました。

「あのう、とうさんを私がくくりまますので……そんな勿体ない事私はようしまへん。そんな事旦那さん（主人）に知れたら、私は首くくってお詫びせんならしまへん。こらえとくれやす――」

吃驚して、唯七とんは冷汗をかいて、どもり勝ちに言って、二三歩後ずさりをしました。

無理もないと思います。仮初にも主家の娘を縛って吊り下げたことなど分ると、唯七とんは、無事ですまなかつたに違いありません。

でも、私もいい出したからには必死でした。

「かましまへん。もし分ったとしたら、うちからお父様に頼んで、唯七とんをうちの婿になってもらいます。うちもこんなはずかしいこといい出したからには、その儘引き下りません。なあ、お願い、うちの頼みきいて……」

私は喰い下り、駄々をこねました。一旦いい出すと女は強いものです。私は唯七とんの腕を掴みました。彼は尻ごみする許りです。私はいきなり土蔵の重い扉をガラガラとうちらから閉めると、中からしっかり芯張棒をかったのです。

「しようおまへん。ほんならとうさんのいわはる通り、さして貰います。大好きなとうさんの為に、私は八年の御奉公を棒に振るつもりでやりまっさ。さあ、覚悟おしやす」

唯七とんは度胸を据えたのでしよう、片隅に積んである縄束の中から、手頃な縄を数本掴んで、私の前に立ちはだかりました。

さていざとなると、今度は私が躊躇しました。あれ程頼んでおき乍ら、やはり、縛られる事に私は恐ろしい程の緊張感を覚えたのです。

何度も「よろしおますな」と駄目を押し乍ら、唯七とんは私の着物の上から両手を後ろに廻わしました。帯が邪魔になって、私は両手が仲々うまく後手になりません。思い切って重い帯を解くと、私は唯七とんに、しっかりと後手に縛って貰いました。別の縄で、胸にかけて数条廻し、両手の縄につないで、足許も乱れぬ様、膝の辺りで揃えて縛って貰うと、あとは吊りを待つ許りです。唯七とんは太縄の鈎を私の後手の縄と胸の縄の両方にかけて、

「そんなら、ひっぱりまっさかい。よろしおますな——」

と声をかけたのです。私がうなずくと、唯七とんは満身の力をこめて引きはじめました。

十一貫たらずの私の体は、やがて爪先が床を離れ、二、三寸許り吊り上げられた時、両手の縄と、胸の圧迫の苦しさに堪え切れず、私は思わず、

「唯七とん、痛いわ。おろして——」

と叫んでいたのです。何も知らない二人でした。単に縛って引張れば、吊り下るものと、私も唯七とんも簡単に考えていたのですが、吊責めには、余程の忍耐か、苦しくは、縛る要領のあることを、私

達はあとになって始めてしりました。

兎も角私は、あれほど吊責めを切望しておき乍ら、僅か二、三寸吊り上ただけで、辛抱出来ず、再び床に足をつけたのですが、責めと名のつく以上、大なり小なり苦痛の伴なうのは必然的で、私は単に、吊責めのその妖しい美しさの形式美のみを追求していたようです。

縄をといてから、唯七とんは怒ったような顔で私をじっと見守っていました。余りにも激しい昂奮が、その顔を緊張の為硬ばらせて怒った様な顔にしたのでしよう。私は両手首をさすり乍ら、

「唯七とん、今日のことは、うちとあんたとの二人だけの内緒事にしときましょ。誰にもいわんといて——。今度からはうちが合図するよってに、そしたら蔵へ来て……」

私は、唯七とんの、梱包でささくれだった硬い手を握りしめました。その当時として、それが娘に出来る、最大限の愛情の交歓のしるしでした。

私達は月に一度か二度、人眼を忍んで土蔵で、秘密の愉しみを持つ様になりました。

と申しても決して猥らな、男女のことではなかったのです。

唯七とんも落着いて、上手に縛る様になり、私も、お芝居の光景をあれこれ想い浮べては注文しました。私の好きなのは主に吊責めでしたが、流石にこれは四、五分もすると、呼吸が苦しくなり、二の腕が痺れてきます。

私は唯七とんに、いろいろと刷絵や芝居絵を見せ、二人で相談しては、次々とお芝居の責場を実現して行きました。

その為に、私は唯七とんの休みの日に、人に知れぬように責めの

小道具をつくってもらいました。責めの必須品として、割り竹、弓折れ、木製の鎗穂、真剣に代る銀張りの竹光、囚衣、立札などでした。

一般の責めを入れるとなると、お芝居には随分あります。特にお芝居の場合美的表現を念頭に入れた戯作の多くは、雪責めをよく使いました。有名なところを挙げますと、

「明烏夢泡雪」の遊女浦里

「雪月花薄雪物語」の遊女薄雪

「雲雀山古跡松」の中將姫

「清水清玄曙草紙」の松虫鈴虫

「妹背山女庭訓」のおみわ

「お杉お玉の由来」の遊女お杉お玉

などがよくお芝居になりました。舞台も又、打ち返しやドンデン返し、居所変りの大道具が使われ、眼も綾な色彩に、お芝居は全盛を極めていたのです。その頃からは新派でもかなり責めを入れたものも多く、一つの劇場に入りまして、題しもの、四題か五題のうちには、必ずといっていい程、一つぐらいは責め場をとり入れた題しものがあったものです。

唯七とんという、よき協力者を得て、私は娘時代の数カ月間を、この遊びに没頭しました。蔵の大黒柱に、唯七とんは私を容赦なく縛り上げ、時にはかなり手強く、ささくれ竹でぶつ事もあり、責めの妖しさを出すため、裾の乱れる事もかなりありました。唯七とんの眼は血走り、想念は千々に乱れるのか、時には、ハッとする様な時もありましたが、辛うじて自制心で抑圧しているのが分る日もありました。白木屋が火事の時ですから、未だ店員の中にはパンティ

をつけていず、飛降り損ねて焼死した時代でした。和服で通した私も腰巻の下は勿論、下穿きはつけておりませんでした。それが当時あたりまえの事でした。今と違って、裾の乱れを、女は如何に気にしたか、恐らく想像もつくまいと思います。

浮世絵の膝立てで爪切る美女や、風に裾を吹かれる女が、昔いかに色っぽく思えたかは、私ぐらいの年代のものでないと分りません。唯七とんは、若い男として随分苦しかった時もあったと思います。しかし主従の度を踏み外した行為は数カ月の間一度としてありませんでした。私達は秘密の洩れるのを恐れて、どれ程自制したかもしません。せめて一週に一度でもと思って、多くの奉公人の眼もあって、月に一度の忍び逢いですら、仲々に容易ではなかったのです。しかし、私と唯七とんとは何かおかしいと感じていた奉公人はあったかも知れません。蔵の中で何が行なわれているか、恐らくは一樣に猥らな男女の仲の空想に終始したでしょう。けれど、私達は奇麗な間柄でした。その人柄に私は心では既に許容しており、唯七とんが若し、縛りや責めの最中、或る行為に出たとしても、私は許していたかも知れません。責めという被虐想念が、私の肉体を与えたがっていたのかも知れないのです。肉体を征服されることも又、被虐的なものではないといきれないからです。

責められ、さいなまれる縄目の私の姿に、唯七とんは深い愛情を私に抱いていた様です。縛る時、私の体に触れる彼の手は熱く、フト肩や、腕を、縛ったあと強く抱きしめたりしました。

忘れもしない桃の節句の日でした。私は角座のお芝居に「松前騒動」の外題がありまして、見に参りました。お松の方の雪責めに堪納して、帰りになると、春の雪でした。牡丹雪の霏々と舞う中を、

人力車に揺られて乳母と家に戻り、こんな雪の中で、お松の方の様に、半裸に近い姿で雪責めにされたい想念にかられたのです。しかしそれは到底不可能な事です。夕暮れの庭を横切って、私はボンボリをもって土蔵に入って行きました。

土蔵の奥の畳に坐って、風情のある行灯に灯を移すと、ボウツと土蔵内が明るくなりました。

「もし、とうさん——私です……」

突然上から声がして、ビクツとして振り仰ぐと、ずしから黒い影が浮かび上って、梯子を伝って降りて来たのは、二番番頭の忠助でした。

「どうしたの、今頃——」

私は折角の興趣を壊されて、やや詰問したとがった声でなじりました。

「いやね、先刻、唯七奴を仕置致しましたんで——、とうさんにずっと以前から滅相もない事を致しておりましたのをききまして——懲らしめたんで御座います、ハイ」

私はカッと頭に血ののぼるのを感じました。そのくせ体中がゾクゾクと鳥肌の立つ怖気に襲われたのです。私はせき込んで……

「唯七とんは？——」

ときいていました。

「お目にかけましょう——」

いやに落付いた忠助は、例の梱包を吊上げる太縄のところへ近寄りました。太縄の鉄環が、柱の曲釘にかかっています。

忠助は太縄をその儘で、ぐいぐい引っ張りますと、ずしの辺りで何かのすれ合う音がして、やがて、蔵の天井高く、一個の物体の吊

り下っているのが、私にも判っきりと見受けられました。それは今迄、ずしで転がっていたのが、縄を引っ張って浮き上り、蔵の空間に浮かび上ったのです。

徐々に忠助は縄をゆるめました。ずしより少し下にその物体は下っております。

ぼんぼりを手にとると忠助は、それを高々とかざしました。「あツノ」と私は思わず声をのみました。

それは紛れもない唯七とんの、変り果てた浅間しい姿だったからです。

裸にされて、下帯一本の姿で、粗縄で、すの子の様にぐるぐる巻きにされ、足をくくった縄に鈍をかけて、逆さに吊り下げられていたのです。体のあちこちや、顔の辺りに点々と黒くうす汚れてみえるのは、或いは血痕であったかも知れません。

「忠助！ 降しておあげ——何て事をするの」

私は怒りで体を震わしてきめつけました。

「左様ですか——、私は又散々とうさんを縛った罰に、あいつを少し痛めつけただけですが、いけませんでしたか。私にこの事を知らせた丁稚は今日暇をやりました。唯七ととうさんの事を知っているのは私だけなんで、ハイ。婚礼前のとうさんに傷がついてもいいかんと思いましたんですが、どうせ唯七とは、いい仲と思います。ととうさんの御思案一つで目もつぶりますが、ただちよいと、その……」

無気味な笑みを洩して、忠助は近づいて来ました。お店でも時々掛金をくすねているのがばれて、お父様も近々、やめさすとかいっていた性悪な男です。それが、私に何かの代償を求めて、歩一歩近



づき、矢庭に手を伸ばして、私を引寄せようとした。彼の意図は判っきりしております。邪念に満ちた、慾情の権化となった顔でした。

私はその手を振り切って、力任せに、忠助の頬を平手でぶつと、蔵の外へ飛出しました。追っかけて来た忠助も、庭までくると、流石に諦めて、

「へへ、とうさんのこの噂が、船場中に流れたって知りませんよ。その覚悟だけは、しておいて下さい——」

と捨台詞を残して、スタスタと裏口の方へ消えて行きました。どうせ又くすねた金で、寝酒でもあふるのでしょうか。

私はすぐさま土蔵に引き返すと、懸命になって、鉄環を釘から外し、引曳られそうになり乍ら、かうして唯七どんの体を床に降しました。縄切のこで粗縄をきっても、唯七とんは相当ひどく痛めつけられたのか、暫くは起き上げませんでした。私は床の片隅につくねてあった、木綿の普段着を、そっと彼の体の上から着せてやりました。

「とうさん——ほんとにえらい御迷惑かけてしめてすみまへん。丁稚の音松が告げ口しりました。」

「何も唯七とんの知ったことやおまへん。それよりかあんだ、えらい体いたむのと違うか」

「ハイ、散々、蹴ったり、殴ったりしよりまして。

それはこらえますけど、若しあの性悪の番頭はんが

私等のこと、あちこちでいい触しよりますと、えらいことです。私に任しといくなはれ——」

「ほんまに私の為にえらいことになってしもて——済みません……」
私は、唯七とんの痛む体を、犇と抱きしめたくりましたが、辛うじてこらえました。

びっこを引き引き身支度を整えて、唯七とんは蔵を出て行き、その儘街の方へ出掛けました。夕食の箱膳が、ぼつんと侘しく台所に一つ残っていました。

夜中の十時頃、唯七とんが裏口から帰ったと、下女のお松が知らせてくれました。私は寝巻の上から羽織を引っ掛けて、もしやと思つて、蔵の鍵束をもつて庭に出ました。

果して残月に淡く照らされて、唯七とんが蔵の入口に立っていたのです。

私は、大急ぎで錠前を外すと、二人して蔵の中へひそと入りました。

「とうさん、安心しとくなはれ。もう秘密の洩れることはおまへん。忠助は私がやりました。一眼だけとうさんに逢つて、自首して出る覚悟だす。とうさん——」

「まあ、唯七とんたら……、私の為に……」

私は動顛して、思わずふらふらと唯七とんの懷に倒れ込んだのです。がっしりと彼は私を受け、力の限り私を抱きしめました。

唯七とんの唇が、闇に私の口辺に近づきました。

「私をあげる——いい様にして……」

私は彼の懷の中できれぎれに叫んでいました。膝黒の蔵の中で、私達は結ばれたのです。

それは、恐らく唯七とんの一生の記憶に残るひとときだったでしょう。そして私も又、身なりを整えた上彼に私は巾着ぐるみ彼の手握らせ、いつも愛用していた紅屋の花カンザシを、そつと手渡しました。

自首して出た唯七とんでしたが、それでも当時は厳しく、懲役七年をいい渡されました。

私は父親のいう儘に、心ならずも入婿を迎えました。

唯七とんとは其の後逢つておりません。もし生きているとすればもういいお爺ちゃんでしょうね。

想い出多い蔵も、空襲ですっかり灰になり、疎開しておいた、刷絵のつづら一杯の芝居絵が、昔を偲ぶ、せめてものよすがです。おや、いい年をして、すっかり色っぽい話を致しましたこと——。さあさあ孫達が学校から、そろそろ帰る頃です。又お守りで大変ですわ……」

× × ×

「おしなさんは私に一礼して立上りました。腰もシャンとして、往時を偲ばせる残香が、おしなさんの老体から、そこはかとなく匂ってくる様です。見せてもらった芝居絵を一枚一枚丁寧に納め乍ら、私は尚も、じつと最後の一枚に目を落していました。

遊女歌島の吊責めの刷絵がつづらの一番上に、過去の愉しい芝居道の名残りを惜しむかの様に鮮やかな極彩色を、春の陽射しに輝やかせて居りました」

パイプ氏の昔噺は終わりました。何れも明治や大正に生を享けた人々は、感慨深げにしばしこの話を反芻している様でした。

更に今宵の三番手ワイン氏に順番は廻って、酒豪ワイン氏は、漸やく盃を放すと、既に赤くほてった頬をゴシゴシ撫でて、さらばと口を切ったのです。

第八十五話 クリス交歓会

「ショックだから是非見てみろよと奨められて、『地球の皮を剥ぐ』という記録映画を見ましたが、予想していた程でもなかった様です。八魔女の黒ミサVのシーンで、鶏の生血を縛った女の顔から体一面にふりそそぐのは、一寸凝ったサドシーンでしたが、私はそれよりも、フランスかでの、八お尻鑑賞会Vが、コミックで、奇抜な集いのように思えました。この映画を見られた方は、既に御存知のことと思いますが、新たな入会者は眼かくしされて、二人の男女の互いのお尻を撫でて、性別を鑑別するのですが、眼かくしをとると、豈はからんや二人とも女性であったりして笑わせます。更に額縁から、番号と共に、次々に立派な女性のお臀が開陳され、投票で一位をきめると、当の女性が現われて、見事なるおしりに、リボンの賞を受けるといったオチまでついています。

『地球の皮を剥ぐ』を私に見るよう奨めた友人のKは、にやにや笑い乍ら、一枚のパンフレットを私に手渡しました。表紙に（入会のしおり）と刷られてあり、下欄に（クリス愛好会）——、それには……

△腹臍なく語り合える友よ来れ！ 吾人は洗腸、浣腸を通じて、すべて凡俗を洗い流し、同好の士の項（肛）門の一針（珍）となるべく、茲にクリスの愛好者を募る▽

◎入会金不要。成年男女年齢制限なし。

◎既婚者は夫婦共に入会出来る場合、配偶者の許可を必要とす。
◎新入会員は耐久試験をパスせる者に限る。
◎毎月一回定例会を開催、時に応じ斯界のベテランを招聘して講習を行なう。

◎器具、溶液、その他備品は会員相互にて、分担する。

◎会場は会員の奉仕によって差支えあるまで一個所に設定する。

◎会長は耐久力の最優秀なる会員を、相互に推薦する。

◎会員は本会の内部事情を、猥りに外部に洩らさぬ事。万一違約せる時は退会せしむ。

◎会員同志の私生活には触れざること。

クリス愛好会

右の様な奇妙な趣意書と共に、最後に連絡電話のみが捺印されています。

「どうです、面白そうでしょう。私はふとした機会から、この会に入会することになりましたが。恰度その日は、第九回目の定例会の日でしたが、私の外に女性が一人、新規に入会することになったのです」

「是非話して下さいよ。その模様を……」

「猥りに外部に洩らさぬこと……。ハハハ、規約にはそうなっていますがね。今更黙っているわけにもゆかないでしょう。あれはもう半月前になるでしょうか……」

以下友人Kの話である。

× × ×

紹介したSはバーでの知合いだった。ゆきつけの『クライム』で度々顔を合わす内、すっかり意気投合してしまって、私はその夜、

彼から奇妙なパンフレットを見せられた。クリスマス愛好会である。ホステスの蘭子が、意味あり気に笑った。

「面白いですよ。この娘（蘭子）も会員でね——。実は私はここでおつき合いするうち、暫く貴方を観察、いや失礼——しましたが、どうも私と趣味の点でウマが合いそうなので、奨める気になりました。どうですか——」

「結構ですね。是非是非……それでいつ？」

「今夜——それもこれからですが……。この蘭子もクリスマス仲間の或る奥さんに、御主人の諒解を得て入会をすすめ、今夜一緒に行くことになっています——。貴方の個人として、又、社会人としての秘密は絶対厳守します。事実、貴方も私の素姓を御存知ない——。このバーでナーサンで通っている私だけしか知らない筈です。私も亦貴方をKというお名前しか知らない。私は必要がないから知ろうとしないからです。蘭子もホステス名の蘭子でいいのです。私達会員はお互いの私生活を知ろうとしないのが一番いいのです。だから、会員には、社長や重役や、未亡人や、ホステス、時には妻の座にいる人、医師、教師、まあその外いろいろの職業に携さわる人がいるでしょう。私達は表の生活を見ず、裏だけで充分なのです。だからこそ、我々は自由に伸々と振舞い、あるが儘の姿で、天衣無縫であられるのです。どうやら御快諾を得たようですから、それじゃソロソロ参りましょうか。蘭子もいいのだろう」

蘭子は妖しい笑みをたたえてうなづくと、そっと立上った。

私達は揃って『クライム』を出た。Sは通りまで出て、タクシーを拾うと、助手席に坐り、うしろに私と蘭子が乗った。

未知な猟奇の世界へ走る車中で、私はいいい知れぬ不安と昂奮にか

られた。

数分走って、車は川べりでとまる。そこで蘭子は闇へ消えた。橋を渡って暗い道を暫く歩くと、Sはとあるしもたやの前で立ちどまり、軒灯の灯で、ポケットから出した紙片を克明に覗き込み、やおろろなづくと、ベルを押した。

表は一見和風であったが、表戸を開きに來た女中が、Sの差出したカードに眼を落して、一礼して植込みの横を廻ると、洋館めいた玄関口へ案内した。

入口の扉を開いて、黙々と一礼した女中は二人に黒い眼鏡マスクを手渡し、再び扉をしめて消えた。

正面に入口が一つ、廊下の両横ははめこみ鏡という、一風変わった鏡廊下である。

扉の前で私達はマスクをつける。Sが扉を重々しく開くと、室内の十数人の男女が、一斉に私達を見た。私はマスクの下でドキマギする。Sが新入会員の私を一同に紹介する。

未だクリスの実習は始まっていない。人々はめいめいクリスに関する話に夢中になっている。

私もSの傍らに座って、拝聴している。

その時、再び扉が開いて、二人のマスクをした女性が入って來た。髪恰好や姿から、その一人は、蘭子である事がすぐ私には分かった。とすれば、もう一人の長身のスラリとした女性が、今夜の、私ともう一人の新入会員でもあろうか。

果して蘭子の声で、その女性の紹介をして、二人はグループに解けて入った。

「ではメンバーが揃った様です。本会の規約により、今夜新らしく

加入されたお二人に対して、 그리스耐久テストを行うことにします。男性の方はこちら、女性の方はここへ——」

会長の命で、私と女性はいわれた所定の位置についた。部屋は香水スプレーを存分に撒布したのか、得もいわれぬ芳香に満ち満ちていた。

会員等が手馴れた動作で、私と女の前へ、高さ一尺許りの馬木を運んで来た。三角の頂点に当る個所に、柔かい当布をとりつけてある。

「下半身の衣類をとって頂いて、この馬木におなかをつけて下さい。心持ち足を開いて、浣腸し易い姿勢をとって下さい。両手は頭を下げ床について下さい」

私と女は期せずして顔を見合せた。しかし承知でここへ来た私達であって見れば、いわれた通りの姿勢をとらざるを得ない。近來にない羞恥が体中を走ったが、いわれる儘に、私はズボンを取り、下着をとった。衆目が、マスクの奥から、私達の一举一動を見つめている。しかし、私より女性の方への着目が多かった様だ。その女性も度胸をきめたのか、パニヤやパンティをとると、スカートとシュミーズの裾をたくし上げた。馬木に腹をのせて、腰高の姿勢で四つ這いになると、会員が二人私の両側に立つ。一同はゾロゾロと浣腸の見え易い位置に移動する。一人がイルリガートルの大瓶に一リツトルの線まで、緑色の液体をたたえて高々と掲げ、一人がゴム管の尖端の水止めを持った。

会長が合図すると、水止めが握りしめられた。粘稠な緑液は、音もなく、私の体内へと移行していった。液体は適温で、グルグルと腸深く潜行し、馬木で圧した私の腹部は徐々に苦しくなってきた。

一リツトルの液体の移行はものの三分もかからない。

私は床上から、そっとマスクをねじ曲げて横を向くと、くだんの女性も、腰高の姿勢で同じ液体の移行を終った処で、豊かな胸の隆起を弾ませて、じっとしていた。マスクの奥の両の臉はきつと苦痛に歪んでいるに違いない。

「唯今より秒読みを始めます」

会長はタイムウォッチを握った。

「一分：二分：二分三十秒：三分——、ハイッ」

加入テストの耐久時間三分は無事経った。

私は必死にこらえた。少し力を入れても、スッと液体が洩れそう、いい様のない腸内の重圧感を懸命に押し殺した。馬木で圧する腹部にチクチクと疼痛を覚え、激しい排泄感に襲われる。もう私は隣りの女性に対する関心どころではなかった。

「起立して下さい——」

会長の声で私はゆるゆると立ち上った。激しい動作によって洩れることを恐れた。うかうか動くと、緑の液体が股に伝うかも知れない。

部屋の片隅へ、会員が、中国で使う様な花瓶型の便器を運んだ。

しかしそれは透明のプラスチックで出来ていた。

「排出して結構です……あれへ——」

私は恥も外聞もなく、それへ小腰をかがめ、両手で腹を押えて小走りによった。さながら洋式便所の様なその透明壺の蓋をとり跨がると、私は忽ち激しい瀉痢を始めた。

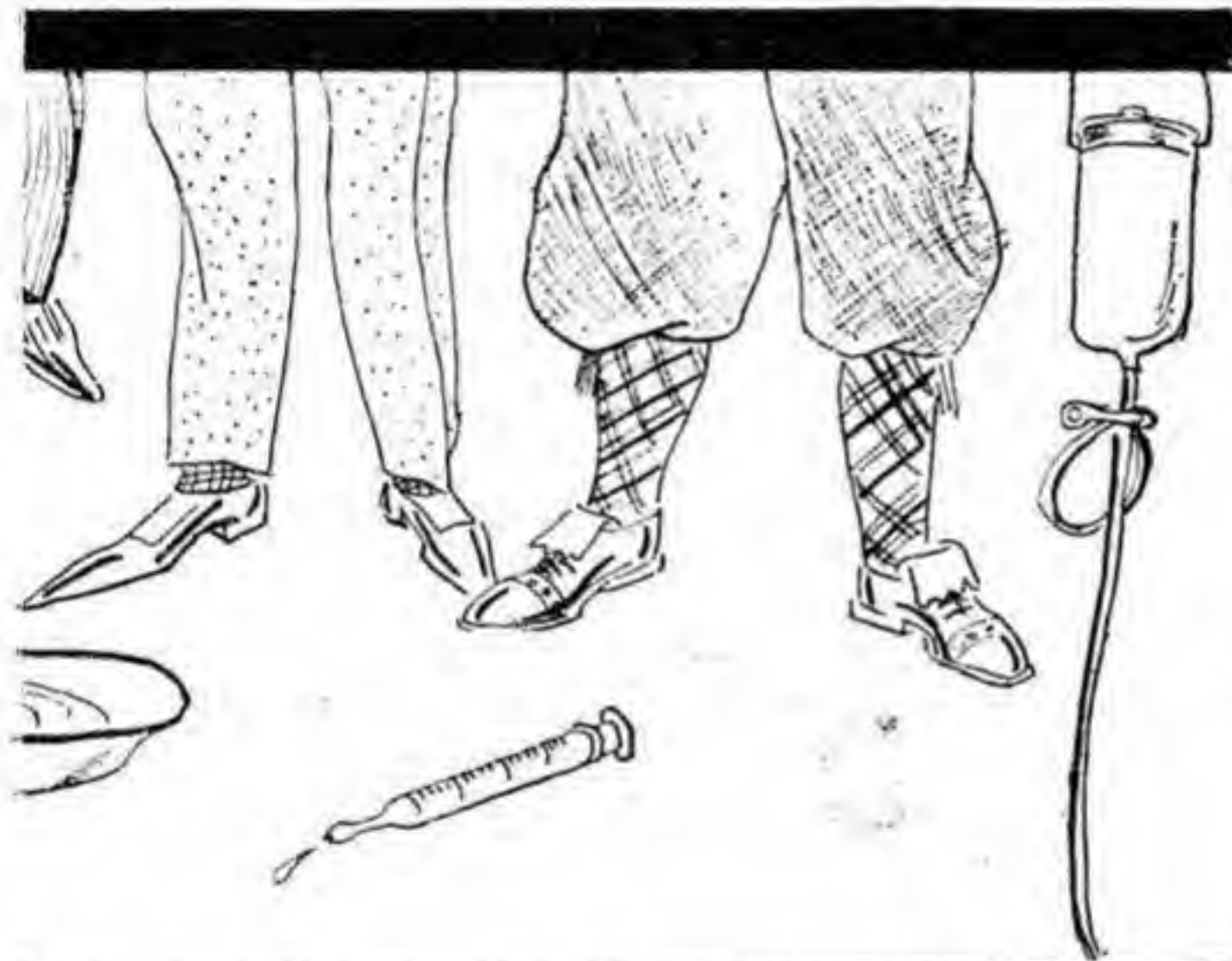
透明壺は女のもの、恰度向い合せにおいてある。幾分液体が腸内に残っている様であったが、私は激しい排出後の快い爽やかな感

覺に、胸のつかえが一度に降りた様であった。逸早く会員が駆け寄り、私に温かい蒸しタオルを手渡ししてくれた。それで拭うと、その辺りが涼やかに薩張りして薫香が漂った。

私はMの十七号、女はWの十三号と命名をうけた。愛好会では、各人を番号で呼んでいる。マスクをしているし、姿だけでは誤り易いので、各人は胸にその番号札を垂らしていた。私等二人は新たに番号札を恭々しく戴いた。クリス愛好者のメンバーの一員となったわけである。

「新入会員のテストは終わりました。では今夜のテーマである。浣腸プレイの第五課、体内移行を行って見たいと存じます。その前に各自は腸内洗浄の目的で、めいめいの容器を使用して、腸内の残溜物を排除して下さい。自由に向い合って並んで下さい。先ず今夜は左列の方が右列へ、イルリガートルによって一リットル注入します。終れば直ちに右列は左列に、注入して下さい。では始めましょう。ああ、それから、新入会員は既に清掃済みだから構いません。見学して下さい下さい」

会長は素晴らしい終って、彼自身も列に交り向い合せて二列になった。裸になる者、下半身を脱する者、まくり上げる者など、めいめい溶液を注入し易い姿になり、左列の者は、部屋の片隅の釘に、ズラリと掛っ



た、イルリガートルを手にとり、部屋の上段に置かれたドラム缶から、杓で、緑の溶液をイルリガートルに満たし始めた。あとで知ったが、その溶液は、洗浄と殺菌を兼ねた、アルボース石鹼液の二〇倍にうすめたものであった。

会員の女子の中には、巧みにパンティの一部分のみ穴を穿って、かがんで腰を上げると、その注入部分のみがあらわれる様になった特別なパンティを履いている者もいたし、勇敢にも、すべてを脱ぎ捨てて、豊満な臀部をこれ見よがしに誇示している女性もいた。この集いでは、服装はすべて自由であって、

クリス可能な肢態ならよかった。

銘々の相手に、左列の人々は近寄り、溶液の注入を始めた。交替して右列が左列に同じ行為をくり返した。横たわる者、腰を持上げる者、座って足を開く者、しゃがむ者等、人々は楽なポーズで相互浣腸を行った。彼とW十三号は、このクリスの饗宴に眼をみはり、呆然と、見つめていたのだった。余りの壮観さに声もなかった。

彼等二人が使った様な透明壺が、部屋の片隅の物入れから、次々運び出され、それにはMは黒字、Wは赤字で番号が大きく書かれてあった。人々はあちこちで、それに跨がり、悠々と、さも愉しそうに、液体の流出作業を行っていた。

異様ないで立ちの人々が、平然とこうし

てその作業を営んでいるのを見ているうち、彼の心から、次第次第に羞恥心が剥がれていった。少なくとも部内の人々は、これを愉しんでいる風であった。そこには邪気も嫌悪もなく、唯夢我の状態のクリスが人々の腸の洗浄と共に、心までも洗い浄められているように見受けられた。

「洗浄作業は終わります。皆さん、容器を片隅に片付けて下さい。では二人一組で、今度はくじを引きます。くじの同番号の方同志、一組になって下さい。」

リーダーは一同を制して、素早く、くじをくばった。私もN十三号も、勿論その仲間に入っていた。

「カップルが出来たようです。ではプレイの方法を説明します。先ず赤字の番号の方がクリスを青字の方に実施して下さい。方法は、イルリガートル○・五リットルの微温湯です。これを青字の方に注入して下さい。次に注入を終ると、ここにおいてある一メートルのゴム管を挿入して下さい。ゴム管の両側にはどちらもベークライトの嘴口がついておりますから、どちらでも結構です。ついでその一方の嘴口を赤字の方は自分の方に挿入して下さい。相当量もれると思いますが、少しでも多く青字の方から赤字の方へ、水溶液が移行した方が勝ちです」

始めの掛声で、一方は力を入れ、一方はそれを吸収しようとし



た。管でつながれたカップルの相互の臀部は揺れ、動き、所定時間の二分は、またたく間に経過した。

ゴム管が外れて床上に撒水する者も相当数あり、空気の圧力の為、力を入れただけでは仲々液体は移行しなかった。一方が低い姿勢をとり、一方は椅子にのぼって、徐々に下部に移行するのが比較的うまくいった。

改めて赤字の人々は、計量カップを受取り、一同の前で、液体の移行量を計って見た。

やや白濁した液体がチビチビとコップに移り、その結果、四五〇ccという、殆んど完璧に近い移行に成功した、W六号の女性が、一等だった。私は幸い青字の方に廻り先に注入される方で、○・五リットルなら大した圧迫感も覚えなかった。私と組んだM三号は巧みに、色々と私をリードしてくれたが、何しろ新米の私の事で、少し強くいきむと、ポツリとゴム管の嘴口が外れ、それに伴って液体が外部に流れ出し、幾度も私を慌てさせた。

盛んな一同の拍手に迎えられて、W六号の若い女性は、頬を紅潮させて、計量カップを隠した。真紅のリボンの中央にXの花文字の入った銀メダルが彼女に送られた。Xの花文字と見たのは誤りで、或いは、それが、臀部の双つを現わした、アーヌスを意味するもの

であったであつたかも知れない。試みにXを花文字で、左と右にくるりと跳ね上げて書いて見ると分るだろう。

なごやかな雰囲気の中に、珍妙なプレイは終つた。最後の余興として、W八号が、自分の提案による、新らしい試みを公表することになった。既に新会員のW十三号は、すっかりこの会合にわけ込んで、恐らくは、マスクの下で、好奇に充ちた眼で、これらをみつめているのであろうか、彼女から既に硬さはとれていて、いやむしろこの集いに、激しい興味すら覚えている様に私には受けとれた。W八号は外ならぬ蘭子であつた。このグループで、私の知る、唯一の女性であつたろう。

彼女は持参したバッグの中から、カクテルのミニチュアセットを取出すと、赤いポートワインと、ジンを巧みにシエーカーした。

出来上つたカクテルは真赤に美しかった。彼女はそれをグラスに移すと、合成樹脂のストローをとり出し、このワインを口に含んでストローで、腸内へ注入してくれと求めた。

流石にバーにつとめるホステスらしい思い付きであつた。直ちに一人が進み出た。蘭子は腰を上げると、みずからストローを挿した。

ワインを口に含んだ、会員が、ストローに口をあて、徐々にそのカクテルを注入した。

二回ばかりに口に含むと、その作業は終つた。しかし、床から両手を挙げ、体を起した蘭子のマスクに包まれた白磁の頬に、徐々に赤味がさし、彼女はさながら酔つた如く、ゆらゆらとよろめいた。そしてそのワインは彼女の体から、遂に流出しなかつた。カクテルは完全に彼女の体内に吸収され、それは流行のアンブルワインのよ

うに、直接体内の五官に働らきかけたに違ひなかつた。

会員内の某が、クリス愛好会の為、特別に提供した、この一室には、微かな臭気と、香水スプレーの芳香と、酒気の甘酸っぱい香りとが、ミックスして、一種異様な匂いを空気ににじませていた。

人々はすっかり腸内を洗い終り、すがすがしげに衣服をととのえ始めた。そして会長の閉会の言葉と共に、三々伍々にこの部屋を出ていった。巷に出れば見知らぬゆきずりの他人同志となつて――。

× × ×

「次の会合が待ち遠しいと彼はいつていましたよ。そして彼は最後につけ加えたのですが、彼と同時に入会したM十三号なる女性は、ひよつとすると、羽村京子さんではないかというのです。蘭子が彼女と肩を並べた時、（じゃあ、京子さん、又ね――。貴女の凄腕前を期待してるわ）と洩れきいたというのです――。

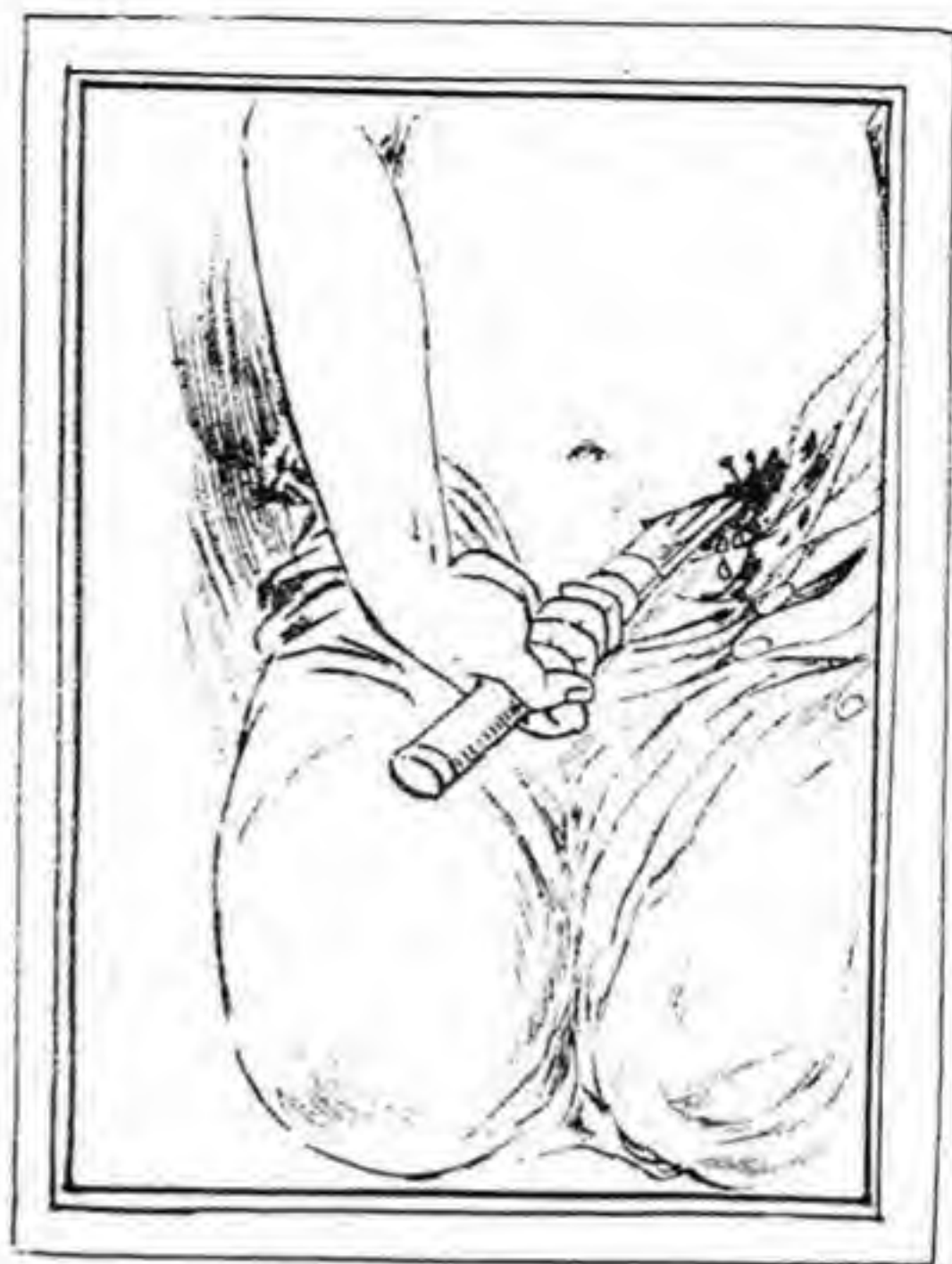
京子、恭子、貴代子、清子、今日子、きょう子……京子という女性には外にもいるかも知れません。併し、クリス愛好会にとっては、羽村京子さんこそ、もっとも入会するにふさわしい女性ではなからうかと彼はいうのです。

△書かないで下さいね。私は退会を命ぜられますからね――VとKは駄目を押して分れたのに私は茲にそれを発表してしまいました。宥せよK君。何故なればそれは私も同罪であります。クリス愛好会の会長こそ、外ならぬ私自身だったからです……」

ワイン氏の話は終わりました。既にあと、三回の会合を残して、三十九夜とは別れを告げるのです。どの退屈男にも、去りがたい、一抹の郷愁に似た想い出が脳裡を去来するのです。

女性切腹の可能性

△切腹の心理と腹部マゾヒスト▽



高野原美

四 切腹と凄惨な

女性美の世界

誌上において、女性切腹の多くの文章を見出す。これらの文章の共通している点は、切腹する女性が美しく健康的であって張り切った肌をしている点であり、切腹の過程において自分自身で豊かな腹を切り裂いていることに喜びを感じ疼痛を快感として味っている点であり、もう一つ、この美しい女性を徹底的に苦痛に耽らせ悶えさせ、その凄惨な中に異常美を妖しく浮彫りにしている点である。

△女性の切腹マニアとして若い女性を責めてみたいというサディズムをもっています。女性の豊満な腹部をたち割り、内臓の露出するといった凄惨な場面に自分の趣味の昇華があります▽

△女性切腹の場面には、一種いわれぬ未知の男性にあたえる優越感のようなものがうかがえます。町を通る美しい健康的な女性を見ては、この女性がああ氷の刃で切腹したならばどんなに壮烈なものであり、私ら男性の心をうつものがあるかと空想したりします。私は、若くピチピチした女性の切腹に強く憶れています。あの豊かな女性の下腹部に突き刺

さる刀を考えるだけでぞくぞくします▽

△私は女性の切腹とか、妊婦に魅力を感じます。切腹は壮絶ですが丸味のある女体の腹部に刀が突き刺る様な快感を覚えます。前かがみすると腹にシワが出来て女の腹の美しさが半減するので、むしろいくらか反身になってぱんと張り切った腹部に刀を当て、そこだけがくぼんだのは美しいものです。この点、妊婦になったら巨大な腹部ですから、いやが応でも張り切っており迫力のある切腹美になるのではないのでしょうか。▽

私は、ここに美しいものを汚したい欲望、即ち自らにない女性特有の美を異常な手段で破壊することによって陶酔する男性の心理を見るのです。

確かに女性の処刑及び責めの図は、妖しい異常美をかもし出します。だが女性の最も女らしい豊かな美しさを描いている腹部への責めは、その最高であると思います。

△……乙羽さまのお腹から吹上った血の美しさ、目もくらむような下腹の切り口からはみ出した脂肪の黄色さ、抜けるように白い肌を無惨に切る切腹の美しさ、そんなことが断片的に頭をかすめる▽

△……豊かなお腹の丸味と刃の青白い光、そ

れと血の色が妙に調和して思わず、まあ奇麗なことといった妖気に充ちた美しさを見せている。この美をこわすのが、おいしい様に思われる。▽

△……苦悶のうめきを上げると、ぐっと盛り上った双の乳房を、はちきりさせた胸をのけぞらせた切り口は、ガバツと拡がり、ぞろぞろと腸が続いてはみ出して下腹から膝の方へ垂れ下って来た。苦痛をこらえる美しい顔、喘ぐ息に波うつ乳房、血汐と腸にまみれた丸い腹、割腹美の極みである▽

これは丁度既製のクラシック絵画が發展して幻想絵画が近代芸術として出現したのと同様に、正常な姿の女性像を超越して、その異常さの中に美を発見しようとしているものであると思われる。

三島由紀夫は「仮面の告白」の中で、血を流して処刑される男をたくみに、彼の空想の中で描いているが、女性切腹美は今後芸術の中で大きく取り上げられ、その妖しい美の再発見をされる必要があるのではないか。

絵画の世界においても、西欧画壇では、宗教画としてキリストの磔が画材となり芸術の香りを放ち、その他、ギリシャ、ローマ神話上の美女の鮮血を流した姿態が、芸術の対象

となり美術の中で生き続けているのである。然るに、日本武士道の華とうたわれた切腹は殆ど有名画家の手で描かれず、女性切腹画に到っては皆無であるというのは残念なことである。今後、本誌上だけでなく大画展において有名画家の手で描かれ、展覧会場を飾る日のくるのを待つのです。

さて、私は女性切腹の作品に現われた、女性の腹を切る姿の表現について、どう云う点に共通した美を見出そうとしているか探ってみたいと思うのです。

まず、自分の可愛い愛すべきお腹に別れを告げた女性は、鋭い氷の刃を無惨にも豊かな下腹部に突き立てるのですが、女性の豊かな皮下脂肪は、無情にも刀を弾ね返して切り裂かれることにさからおうとします。そのため女性は、腹に刀を突き立てる初めから切腹の困難さを味うのです。

切腹美を描く場合には、刀が簡単に突き刺る様な女性の下腹部は魅力ありません。厚い皮下脂肪のために豊かな下腹部は、弾力性を秘め丸く隆起していることが必須条件です。

山田さんは「一思いに深く刀を突立るといふことは生易しいことではなく相当な覚悟と

力があるということですね。初めて自分の皮膚の強靱さに驚きました。皮膚は相当な弾力で余程鋭利な刃物でも容易に突き立たないと云うことです。大きく息を吸って下腹部がピンと張り切った時をねらって左手で口紅の位置を押えるようにして一気に突立てました」又、第一回の時には「最初の一突きは失敗でした。思い切って刺した積りでしたが皮膚を破っただけで刺さらないのです。私は夢中になって、たたきつける様に第二突きを刺しました。『ブスウ』と鈍い音と手触りが感じられ思わず呻くような痛みとショックを感じました。」と告白している。

弾力に富んだ女性の下腹部には、そう簡単に刀は突き刺さらないので種々の方法がとられている。

△切先を思いきってグッ！と突き立てると切り裂かれるのに抵抗して下腹部は弾力を示して大きくグッと凹んだ。まだ切先は五ミリほど突き刺っただけだった。ありったけの力をふりしぼるように右手に力をこめるとプスリノ 厚い皮下脂肪を一気に刺し通して刃は腹腔内へ深々と突き刺った▽

△丸くふくらむほど腹一ぱいに力を入れて左の脇腹に押当てた短刀をぐいっと突立てた。

十五才の若い女の肌は弾力に富み徒らに腹の皮をくぼますだけであつた。あきは腹に力を入れて膨らますと、そのまま強く力を入れて腹に当てたまま短刀を右に動かした▽

藤村さんも、これと同じ様に「下腹部に短刀を突立て、そのまま力をゆるめずに右へ引廻し」てお腹を切っています。

△左手で短刀を下腹にあてがうと柱にぐっと下腹を押しつけた：見ると刃の先端が五分ばかりしか腹に突刺っておらず白い刃は、まだ光を放って腹の外に残っている。しまった、もっと深くと思うと今度は腹が丸く膨らむほど力を入れて、体を思い切り強く柱にぶつけるとブスツと大きな音がして短刀は腹の中に二寸程深く刺った▽

△短刀を徐々に垂直に押付けていった。お腹の皮はだんだんひっこんで凹んでいるだけであつた。今度は短刀の柄頭を畳について、お腹にぐっと力を入れると、それにのしかかるように自分の体重をかけて行くとブスツと音がして短刀は見事に腹に突立った▽

こうして、困難な女性切腹の刀の突き立ては終り愈々、苦痛に耐え乍ら血汐に下腹部を染めて右に刀を引廻して、無惨に切り裂くのである。

弾力に富んだ腹壁は、やはり女性の場合、刀を引廻すのに抵抗し、山田さんは「引廻すのには思ったより力があることです。充分腹壁を切るためには、両手引きは勿論、刃を上下に動かして切る様にするか、刃をねかせて引き切る様にした方が女性の場合はよいのではないか」といい「一息ついて右手に力を籠め引廻そうとしましたが刃は容易に動きません。『これでは駄目だ』と思い、手をお腹に添えて力一杯引きました。途端に鋭い痛味を感じ五分程も一気に刃が右へ移動しました。一気に思う存分切り廻すなどということは切腹の場合とても出来そうでないと思いました」と告白している。

△左手を右手の上に添えて、右の下腹めがけてキリキリと斜めに切り下した▽

△ふくれ上った豊満な下腹を縦一文字に切り開こうと焦ったが、意外に手強い皮下脂肪の抵抗に、のしかかるようにして上半身の体重を刃の上かけると、砥ぎたての短刀の切れ味は物凄く、無気味な音を立てながら豊満な腹壁をアツと云うまに一直線に切り下げて、パツクリと左右に切り離してしまった▽

△右手に、けなげにも力を加えて身をよじって、おのが下腹部にいどむが刀身は刺った場

所から容易に動かない。右手に力を入れ、左手も柄に添えて腰を浮かせて無我夢中に横に引っぱるとブスブスと無気味に臍下まで刃は切り裂いた▽

下腹部に力を入れ、抵抗する皮下脂肪と斗いながら冷酷な氷の刃を温かい腹に突き立てて力一杯右へ引廻す女性の姿は、神々しいまでに美しいものがある。白い豊かに隆起する腹、青白く光る冷たい刀、粟粒のような黄色い脂肪片、真赤な血汐は調和して、美しく女体を彩っている。美しいものを汚すサディズム美の極致であろう。

しかし、その静寂な美は、やがて非痛な呻きと苦悶に破られ、悲哀と凄惨なこの世の地獄絵図を描きはじめる。

△短刀の柄を持ち直して、両手に上体の重みをのしかける様にして縦に押し下げると、豊かに波うっていた腹も完全に、そのあとをとどめずパツクリと大きく口を開けた。鉄の刃に思う存分に柔かな生体を掻き切らせて、血を吸わせ苦痛にもだえる凄惨な光景を展開した。「ウツ：痛い」自分の下腹の中から流れた血まみれの腹の上を七転八倒で呻きのたち廻る▽

△文江は夢中で右手に力を入れて引廻した。

痛かった。焼かれるように引裂かれるように――実際、彼女は自分の腹の皮を引裂いているのだ。今までに経験したことのない劇痛が下腹部から脳天まで響いた。彼女は眉にハの字を寄せ、口をゆがめ、歯を喰いしばってこれに耐えた▽

△「うーむ、く、苦しい：は、はらきりとは：こんなに苦しいものとは、く：苦しい」美也子は腸を露わにして絶え絶えにのたうち廻るのだった――憑かれた様に意味もなく繰り返せるもの、腸をしばり上げて苦しむもの、凄惨な、そして妖艶な断末魔であった▽

△女は苦痛のため身体が少々反身になった。女の両眼は稍々上向きにカッと開かれ、口は大きく開いた。両唇はわなわなと痙攣し歯は苦痛のために鳴った……女の顔中から脂汗が吹き出している：女は両頬を硬直させ、下唇はわなわなと痙攣している。眦は両方ともつり上っている。短刀が右の大腸を切断したと思われる頃、女は二三度両手で乳房を押し上げた▽

△歯を喰いしばって、腹に入っている短刀を両手に握った君子は「ウ、ウムーッ」悲痛な叫びとともに臍下から今度は右上へかけてガパツと引いた……君子の表情は蒼白になり、

その生えぎわには脂汗がつぶつぶと鈍い光をうけている：苦痛を一刻も早く耐えて、もう死のみが頭にあり、短刀に再び手をかけ「ムム：ウウッ」ごろごろと床をのたうち廻りながら彼女は上向きに肋骨を切り上げていた。

「ウツ、くくッ」美しい顔は苦痛にゆがみ、のけぞるたびに乳房が躍る：彼女は「ウツ、ウツ、ウウッ」と呻き苦し気に胸をまさぐってパツと床に胃液を吐いた。ああ腹切りとはこんなにむごたらしいものなのだ。でも、このような苦しみがあればこそ切腹は、その光栄ある死が約束され死んで行く身に最後の誇りが刻み込まれるのである▽

生き地獄とは、このことを指して云うのかと思わせる様な疼痛と苦悶に耐え、切腹の誇りを痛切に味わいつつ、哀切な妖艶な凄惨な最期を遂げて行くのである。

作者達は、この女性達を冷酷に突き放して苦悶の限りを嘗めさせたり、又可愛い女性に同情と哀れみの眼で描いたり種々である。しかし、切腹死と云うことが女性本来のナルチズムに発生することからするならば、凄惨な悲愴美は余すところなく描き切りつつ、哀れな女体の最期の姿は、美しく飾ってやりたいと思うのである。

△ユミ子は、大好きな人に腹を切られた喜びに酔いながら苦痛と斗い悶えている。あれ程美しく可愛らしかったユミ子ではあるが均勢のとれた真白の裸身をくねらせて下腹部を朱に染め、血の海の中によこたわっている。：
：左の乳下を力一杯ぐさつと突きさして「ギヤッ」と叫ぶと十八才の処女の裸身を痙攣させて息たえた▽

△しばらく呻きのたうっていたが、やがて四肢は痙攣にかわって両眼はカッとひらき、苦痛にゆがむ頬、くいしばる口もとをついてはとばしる断末魔の絶叫を残し崩れるように倒れ伏した。生きようとする若々しい肉体を自らの手でさいなみ苦痛にのたうちながら花の生命を絶ていった▽

△呻きのたうちながら左手を傷口から腹の中に押し込むと腸を握りしめ、がばつと草の中に倒れ伏し苦悶を続けていたが、その均勢のよい肉体を二三度ピクピクと痙攣させると、そのまま動かなくなった。あたらしい青春を、こうして太陽のもとで痛みと苦しみにのたうち廻りながら血の海の中に失って行ったのである。日頃愛しんで来た恥しい裸身を曝し惨状を人々の眼に触れさせるであろうが、心ゆくまで満足して死んで行ったのである▽

△咲代は仰向きに転がり美しかった弾力に富む豊満な腹も今は無惨な姿に変え、腸を露出し血だるまになって悶えていたが、柔かく盛り上った双の乳房を白くくつきりと残し、哀れにも凄惨な、しかし満足な最期をとげた▽
△軽く脂肪を切る程に腹を切り乳房を深く突いて伏した。乙女の感傷とでも云うのか、眼の前で腸を露出して腹部を無惨に痛めつけた死に姿をさらしているのを見て、耐え得なかったであろう。死後の姿を美しく飾って死んで行った▽

△彼女は最後の力で両手で盛り上った腸を押えるようにしたが、ガックリと頭を垂れて右手で腸をつかんだまま左手はダラリと垂れて静かになった。彼女は柱に縛られているので絶命しても髪を乱してうつむいているだけで血まみれの内臓の腹部と真白く盛り上った処女の乳房の胸とが対象的で、あまりにも悲惨な痛ましいものであった▽

△吐き気とも目まいとも云いようのない不快な感じが、こみ上げて来たかと思うと、あきの若い花のような肉体は無惨に腹の切り口を上向けて仰向けに倒れ、手足をぶるぶると震わせてもがいていたが、それきり静かになってしまった▽

△絞り出すような声でム……と呻ると右脚をぐっと伸した。手は草をかきむしる様にして、土は爪の間に喰い込んだ。息はまだ絶えず咽喉がヒューヒューとなった。苦しさの余り手について体を起そうとしたがその力はなく、又ばったりと倒れた拍子に横向けになり斜面を転がり、やがて仰向けになって止り、ウーンと体を突張るように反らせたと思うと咽喉がゴロゴロ鳴って、そのまま息絶えた▽
△創口が二寸以上も割れ右脇腹に不気味な紫灰色の動めきが走った。臓腑と誰の目にも明らかである。礼津がのけぞり頭が胸をはなれた時に甚七は機会をつかんだ。かっとな椎を断つ音がひびき、ほとばしる血汐とともに美貌の首は凄まじく歪んだ形相で一間ばかり前に転んだ。首をなくした半裸の美しい二十一才の若々しい身体が臓腑をはみ出してどっと前に倒れ、裾が割れると形のいい脚が膝近くまであらわれた。その足の白さは異様に生々しく無惨な光景であった▽

△白無垢の裾がひるがえり、すんなりと形のよい脚がびくびくと痙攣すると太腿の辺りまで裾がまくり上った。疵改めに臨む女のたしなみの腿化粧がどこされてあった。折から赤い西日に一段とそれはなまめいて既に骸と

なつた勝子の豊満な肉体は血汐の中で弾正達
の眼にまぶしく映っていた」

結 論

私は誌上にあらわれた切腹マニアの声を分類、体系化して、女性のナルチシズムと自虐性、露出性という女性特有の複雑な心理分析を行ないながら腹部マゾヒストに発展して行く姿を追求め、この特異で妖艶な女性の運命的な心の像を浮き上がらせて、それが疼痛と苦悶に耐えての切腹という凄惨な行為にまで進展して行く姿をみてきました。

このナルシス（ナールシサス）は、国民百科辞典によると「ギリシャ神話中の美少年、彼は多くの少女やニンフに言い寄られるが受け入れなかった。ニンフの一人エコーは、ついて実らぬ恋にやつれはて、声だけがこだまとなって残った。アフロジテの罰により彼は水に映る自分の姿にみとれながら泉のそばで死に、そのあとに、しおらしい花が咲き出た。人々はその花をナルキッソス（水仙）と名付けた。」とあり、ウィーン性問題研究所の「肉体の讚美」によると「太った女は、エロチックな点では利己的で、特にナルチシス的な瞑想に耽る癖があると見られている。自分の脂

肪に陶醉しているケースは人の口の端に上っている。」と説いている様に、女性特有の肉体の曲線を現わす皮下脂肪の豊かな腹部に限局されてくることは想像されるものです。又

ブランドームは「艶婦伝」で、このナルチシズムと露出癖のある婦人について「われとわが身がお氣に召して、おのが裸身をしげしげと眺め入りナルシシサスさながらに、その美しさに恍惚とせられる」又「一糸もまとわぬお美しさを白日の下に曝すのを、ちっともお憚りなく、情人をさらに悩殺魅惑して、惹きつけようとの魂胆から、ことさらにさよう遊ばされる」と記しています。又、フックの「風俗の歴史」によると、「ルネッサンス時代に女性が威張って、自分の裸身の美しさを饗宴の大広間や市場で示し、男の欲求に応えて女性が羞恥をかなぐり捨てて、裸体美を見せびらかすことにより陶醉に耽る模様や、特に国王の行幸の場合に奉迎の主役の一部が、いつでも裸美人に割り当てられ、裸の女性が何万の市民の前で、王をたたえる詩を朗読したり、君主の行列の先端にたつて進んだということ」があきらかにされ、女性が生贄として裸身を異性の前に曝すのに誇りを感じる心理と似たもの、自分の裸の肉体をたたえられ、

又多くの人に認識されるのを好む心理を説いています。その故に、女性は雄々しく異性の前で勇敢に肌のものを取り去り、その肉体を曝すに至る。

又マゾヒズムについて、梶山季文氏の「残忍な紳士」の中で「異性の意志に無条件に屈服し、その支配を受け、圧迫され暴行を加えられることによって恍惚境に到達する異常性欲である。男には大なり小なり、女に乱暴をしたいというサディズムの欲望があり、女にはその逆な欲望が潜んでいることは医学的に証明されている。だが、マゾヒストは、受動的に、皮の鞭で打たれることに憧がれ、奴隷のように乱暴に扱われることを望む」とのべている様に、女性は全てのものが潜在的にもっているようである。しかし、これが臀部の鞭打ちから、同じ厚い皮下脂肪におおわれた下腹部に転じて、腹部マゾヒストとして具体化されたものが女性切腹の心理であるようです。丁度、西欧では昔から、豊満な臀部の鞭打ちが多数描かれ愛好者も多いらしいが、吾が国の場合、これが腹部に加える虐待―切腹として表現されるようになったのは面白い現象であります。

次に、男性によって描きだされる女性の切腹の姿であります。先にも述べたように全ての女性は豊満な豊かな肉体を持つものとして扱われています。即ち「肉体の讃美」によると「グロテスクなほど肥満した型の女を尊重する。そして、そういう型の女は、最後に或いは最初から、もちろん、エロチックな意志や趣味も表現を求める。豊満で脂肪太りしているのは、女の最高の刺戟手段とされているのである」とのべている。そうして、女性の切腹を愛好する男性は、多かれ少なかれ、その豊満であるがために愛する腹部フェティシズムの状態にあるといえよう。これとでも西欧では、豊かに隆起を示している女性の臀を愛好し、臀鞭打ち愛好者が多いことから考えると興味深いものがあります。

この腹部は、それ故に厚い皮下脂肪でおおわれた豊かな腹でなければならない。これも「脂肪が発達し過ぎると、筋肉で与えられた輪郭が全部消えて、いわゆる『蛙腹』ができる。この蛙腹も、特に太った女たちを好む男たちには、正しい愛の皮下脂肪としてフェティッシュになり得る。私自身、或る男が特に乳房の直ぐ下に豊かに発達したそういう女に熱を上げ、それを見ただけでひどく興奮した

というケースを一つ知っている。私はなお、もう一人の男について、かわが球のようにまるい女の腹を何よりも珍重したのを知っている。腹に脂肪が豊かに沈着している女の特に性的な美しさということを考えて、時に、妊娠している女を肉体的にいちばん美しい型と感ぜざるを得なくなることがある。十五世紀及び十六世紀には、ブロッホもいっているように、モードはすべての女たちや娘たちに妊娠の風を装わせている。否、妊娠した女を裸で人の眼に曝すことさえ躊躇しなかったのである」(同前)と記して腹部フェティシズムが妊娠腹部フェティシズムまで当然の結果として進むことを暗示しています。切腹マニアが、丸く大きく豊かに隆起した妊婦腹を切り裂くことを想像するのは、西欧の鞭打ち愛好者が「相手として考えられた女たちの臀ができるだけ大きくて、白くて豊満であって貰いたいという願いが特徴である。……かれは頭の中でサディズム・ム・フェティシズムの空想を描いていた。この空想は、次第に極端なものになった。――女の臀を覗いたり、この臀を鞭打ったりすることから、この臀の肉をずたずたに切り裂くところまで、かれの注意を惹くものは相変らず女の臀だけで、かれはこの臀を肥大な形に画

くのを好んでいた」(同前)と同様に、女性が腹部マゾヒストの立場を取るのに対して、男性は腹部サディストの立場をとります。

このサディズムが、女をして、豊かな腹を切り裂かせ、激しい疼痛と耐えがたい苦悶で苦しませ、凄惨な死を演じさせるのです。ですから、この腹部サディズムは、単に皮下脂肪を切るにとどめず、刃を腹腔内に深く突き刺させて、腸まで露出させ、地面の上に溢れた腸の上を、凄惨な女の肉体が七転八倒の苦しみを味わうという悲愴美の世界を空想しそこに安心と満足を得るのであります。

私は長々と女性切腹に関する男女両性の異常な妖しい心理を、多数の資料より裏付けしつつ分析しました。この中で特定の方以外は全て氏名を省略しましたことと、資料を無断で拝借したことを最後にお詫びしつつ、この文章が切腹愛好者ばかりでなく心理学者の眼にもとまり、今後の参考にもなれば幸せだと思ひます。

(前篇は五月号に掲載しています。)

× × ×

× × ×

ガン作・マニヤのノート

濡れにぞ濡れし

【第三】

芳野眉美

A ホモ・ルーデンスであれ
B ファンタジイその後(1) 只今使用中 (佐川奈津子)
(2) 優雅なSM (山辺まゆみ)

C ホモとブーツ

D 雪子夫人点景

(イ) つくばい

(ロ) 舌人形

E 近親相姦と文学的感動

F 精通

A ホモ・ルーデンスであれ

よくもまあ、身勝手な、的はずれの批評を恥かしくもなく書けるものだ、文芸批評を読む度に思うのだけど、奥野健男の「文芸批評家に提言する」(東京新聞三月六日七日夕刊)は面白かったから、紹介します。

志賀直哉と谷崎潤一郎の文学的評価の逆転を指摘し

「少し前までは、現代日本文学を代表する作



家と言えば志賀直哉であった。しかし今日では、日本文学を代表する作家は谷崎潤一郎であると考えられている」

このことは、最近の文学全集の第一回配本の多くが、谷崎文学で飾ってあるのをみてもわかるように、読者の文学に対する読み方、好みや関心が変わって来たためである、というのである。

「この変化は今日の文学の根本にかかわる重要な問題を含んでいるように思われる」

ここが重要なのです。

志賀直哉で代表された日本文学、それはまた、島崎藤村、夏目漱石、森鷗外といった文豪たちの作品であり、人生論的、道徳的であるが故に、日本文学の主流として、尊敬されてきたわけである。

「ところが、今や七十才過ぎて（鍵）や（瘋癲老人日記）を書く作家が、一般の読者に受け入れられ、文豪として尊敬されている」

この事実を認めないわけにはいかない。

そこで、わけのわからぬまま、唯美主義だ、デカダンスだ、老年芸術はグロテスクだと、批評にならない言葉を吐いて逃げ出してしまふ。実になさけないことだけど谷崎潤一郎、室生犀星、川端康成の、絢爛妖美な世界の本質を的確に論ずることが出来ない。

ここから面白い。

「どうも日本の文芸評論家は、倫理的、人生論的な作家、テーマがはっきりしている（説明しやすい）作家、生活や人格や社会や時代からその作品を意味づけられる作家、ヨーロッパ的文学理論でうまく料理できる作家にはみごとな批評を展開するのだが、その範ちゅうからはみ出した作家には無力のようだ」

と一刀両断は胸がすつとするね。

「つまり、真と善には強いが、美には弱い。

まじめには強いが、遊びには弱い。美や遊びを論理化する方法を持っていないのだ」

日本の文芸評論家は、美人にはれられたことがないらしい。まあ、遊ぶことを知らない聖人ばかりだから。

「現代の有力な作家の新作を理解し得ず、そのうえ、読者の好みの変ほうを論理化し得ない。これは明らかに文芸批評の怠慢であり、敗北である」

痛快なり、奥野健男。

奥野健男の肩書きも文芸評論家である。

従来の日本文学の主流は、日本人の真面目さ、勤勉、苦勞を尊いとする生産性向上という至上目的の上に成立していた。それが、現在産業社会の技術化、分業化により、働くことにたのしみを見失った人々は、せめて、芸術文学の中に愛を捜すようになった。道徳や科学とは違った。それと無関係の人間本来のたのしみを見いだそうとする、と解説している。

人間本来のたのしみ、それは何か。

一月二十七日東京新聞夕刊の「大波小波」に、

「遊戯の原理」

と題して

「遊戯は文化より古い」

というホイジンガの言葉をあげ、

「遊戯という分母でわれは、歴史のなかのほとんどすべてが見事に割り切れてしまふ」とあり、

「これまでの私たちの前には、ホモサピエンス（知識人）ホモファアーベル（工人）」という二つの大きな類別があったが、ホイジンガは、ホモルーデンス（遊戯人）はそれらに先行するといっている」

表題の「ホモルーデンスであれ」は、この意味です。

奥野健男の評論にもどりましょう。

「おのれの快感原則によって、たとえば女の足に対するフェティシズムを（刺青）から仏足石の（瘋癲老人日記）にまで昇華したゆうゆうたる谷崎潤一郎の世界が、一回しか生き得ない人間の生涯として、まことに立派に見えるてくる」

うれしくなりますね。

「室生、川端の女人の美だけをひたすら追ひもつめ表現した文学が、人間存在の深淵をついているのに気づく」

こうこなくちやいけない。

「大江たち新進作家が（性）の異常を、倒錯を執拗に追求しているのは、現代の文明社会が現実原則によって、倒錯としてタブーにした人間衝動の中に、人間の本来性を、今日の疎外社会を破り得る決定的な武器を見いだし得るのではないかと考えているからにはかならない」

これが結論です。

悪書追放も結構な事ですけれど、人間性を否定しているのに気がつかないのだから、いうことないね。

その意味で、これを書きました。

B 読者通信による

ファンタジイその後

(1) 只今使用中——佐川奈津子（大阪）

「奴隷募集」その後の報告である。

「あれから、三人の奴隷志願者を選び出して只今使用中——」

とは泣けてくるね。

「——沢山の中から選び出ただけあって、一応私としては満足しています。人手不足の折柄、このような奴隷男を使っていることは大変当を得ているようで、面白いアイデアだと、喜んでおります」

そりや面白いでしょう。

「選に洩れた方々には、お気の毒でしたが、無報酬で女の人に酷使されてもいいというところが徹底したら、案外——」

文章が上手ですね。

「——多くの人から注文があると思います」

注文——だって。

「今のところ、男たちをいじめるのが面白く文章の書く暇も気持ちも起りません」

美しい女王にいじめられている三人の、

「飼い殺しの派出夫」

に幸あれ。畜生、うまくやっていやがる。

佐川様、

「奴隷男の生態についての報告」

をお待ちしております。ハイ。

三十八年七月号読者通信。

佐野光子さんの公開状に対する反論は、全くすさまじい。こうでなくちやいけない。

「私を何かサジストのように感違いしておられますが、私は普通の、あたりまえの女性です」

とあり、

「ただ金があって屋敷が広いので、私の下で喜んで下働きする男があったら使ってやってもよいといっただけで、何もプレイしてやろ

うとか、遊んでやろうなんて気持は毛頭ありませんのよ」

この次です。すごいのは。

「遊ぶんだったら、あんたじゃあるまいし、そんなうすぎたない男を相手にしなくなったら凄く紳士がたくさんいるんですからね」ときた。

「私はただ、そんなマゾ男をこき使ってやったら面白いと気まぐれに思っただけ」

これでは勝負にならない。芦屋夫人だけのことはあります。ウン。

三十九年一月号読者通信。

二月号佐渡耕作氏の通信には、

「佐川さんは、奇クを楽しむといった貴族趣味をお持ちでないようです」

と、やはり気になった様子。

私は、佐川さんのほうが貴族趣味だと思うんです。解釈の違いですか。

どっちでもいいけれど。

(2) 優雅なSM——山辺まゆみ（東京）

「女と女の遊び」その後の報告です。

「高田の馬場で待合わせ下さるはずだった同性の方（浜田玲子さんじゃないのかしら）、まゆみは出向きましたが、それらしい方は見

えず、がっかりいたしました」

残念でした。ひとごとながら、私もがっかりしました。関係ないのにね。

「その後も、私と秘かなプレイを楽しんで下さる同性の方を求めています」

どなたかいませんか。

「もし今度実行するとしたら、Sに廻り、いじめ抜く方に廻りたいと存じます」

がまんできなくなったらしい。

「まゆみは決して乱暴いたしません。優雅なSMといったプレイができると存じます」

とやさしい。

私じやいけませんか。

「男性の方とのプレイは敬遠しておりますすみません。」

通信の文章から空想するまゆみの女体は、

「陶器のはだ」とおぼえたり。

三十八年十二月号読者通信。

C ホモとブーツ

二月下旬、赤坂のUSトレードセンターでアメリカ農務省主催の「アメリカ皮革屋」が開かれたらしい。

そこで展示された新しいレザーウェアの一つに、全身皮づくめのドライブ・スタイルが

あった由 全身皮づくめとは、憎いね。

帽子は、牛の胎児の皮をゼブラ風に染めたもの。ブルオーバーは、薄い配合色のバックスキン。コートは晴雨兼用で、スカート、手袋と同様濃色の表皮、流行のブーツは表皮だが色は淡色、といったいでたち。

ドライブに最適だそうです。

そこです。

「最近アメリカのハイファッションが、女性の曲線をことさらかくそうしたり、ブーツや男物のようなスーツなどを大いに奨励する傾向にあるのは、デザイナーたちが、女性を女らしく見せず、わざと少年的に見せようとしているからだ」

二月四日東京新聞夕刊「ふだん着のニューヨーク」から。

面白い説だと思いませんか。

ニューヨークは、同性愛（ホモセクジュアル）が盛んであり、そのホモの数は世界最大といわれているらしい。ニューヨーク中に十萬から六十萬という推定だそうです。

「カムフラージュに結婚して子供のある者も大勢いる」

と記事にある。どういうこと、これ。

「化粧して、女の服装をまね、イヤリングな

どをぶら下げて、女性言葉を使う連中は、クイーンと呼ばれ」

「タフを気取って長ぐつなどをはいた若者連は、ハスラーと呼ばれる」

とある。

「裕福な男が若いハンサムな恋人を囲っている場合も多い」

正妻は女で、二号が男というわけかしら。

「芸術家や、婦人に奉仕するデザイナーや美容師が圧倒的に多い」

そんな気がする。孤独で内面的な生活をしたり、女性的な生活をしているうちに、次第にホモになるわけでしょう。

問題は、女性の足にブーツを履かせたことです。

私としては、ホモのためのブーツでなく、女王のためのブーツであってほしい、と思います。

アメリカ農務省も粹なこと。

D 雪子夫人点景

(イ) つくばい

夜尿症が高じて、雪子夫人襦袢がはなせなくなつた。毎夜、寝室に入ると、夫の夏彦に襦袢をしてもらう。赤ちやんのように、無心

に、夫の前に夫人はまっ白な両脚を投げ出す。

夏彦が、デパートの小児用品売場で、大人用のゴムのオムツカバーをさがしてきてからは、夏彦に責められても、夜具の上に粗相をするような事は無くなった。夫人のはなやかな浴衣が、何枚も襦袢になった。

ある夜、由紀彦は、異母兄の寝所に呼ばれた。別に、用は無い。

兄に添寝している雪子夫人を見るのは、十八才の由紀彦には刺激が強すぎた。

枕元に坐れという。雪子夫人は、夏彦の胸に顔を埋めていた。まろやかな肩は、裸だった。

何か聞えないか、夏彦が静かにいった。

「水の流れる音がする」

茶室のつくばいの水音が聞こえる、と由紀彦はいった。

「つくばいは雪子だよ」

雪子夫人の裸の肩が、かすかにふるえていた。

「雪姉さまがつくばい？」

「そう、美しいつくばいだろう」

その水の流れは、小さく、静かに、細く続き、やがて、消えた。

「新しい襦袢を持って来てくれないかな」

夏彦が由紀彦にいった。

「雪子の襦袢をとりかえるからね」

柔らかな夜具にすっぱり埋まったつくばいは、泣いているようだった。

由紀彦は静かに立ち上った。

(四) 舌人形

襦袢ばかりでなく、この頃の雪子夫人は、すっかり赤ちゃんになっちゃってしまっただけで、赤ちゃんにさせるように夫人を抱きあげる

のが、夏彦の日課になった。

病気になるのである。婦人尿閉という。

出産とか開腹手術のあとなどには起り易い

そうだが、雪子夫人は妊娠などしていない。

外に理由がある。

夏彦の責めが続き、それがあまりにも過激であり、長時間にわたった為らしい。

腹圧が一時的に高くなったため、その後腹圧をかけることが怖くて、腹部に力が全然入らなくなった。だから、自分の力で排泄することが出来なくなる。

夏彦の留守の時は、雪子夫人は、安心してあと始末の処置を由紀彦にゆだねる。

由紀彦は、雪子夫人の舌人形。

精神的障害だから、気ながにしていれば、やがて、雪子夫人の病氣も直るだろう。

それとも、病氣のほうで、甘えられていいのかしら。

今日も、舌人形は、雪子夫人の命令を待っている。毎日が楽しく、待ち遠しい。

湯上りの雪子夫人は、いつ見ても、匂うように美しい。

E 近親相姦と文学的感動

二月十七日東京新聞夕刊に

（「新潮」二月号に、珍しく近親相姦を題材とした小説が三編並んでいる）

として、

倉橋由美子「わたしの心はパパのもの」

森茉莉「悪魔の仔たち」

沢野久雄「双面」

をあげ、また、単行本である

円地文子「鹿島綺譚」

に就いて、福田宏年立大助教授の評論があった。面白いから紹介します。また、近親相姦に興味のある方は、四作品を御覧下さい。

（近親相姦という主題自体は決してショッキンクなものではない）

と断言し、二例をあげている。

その一（私自身、郷里の田舎で、中年の男が母親と二人きりで暮らして、それが人々の陰微なうわさの端にのぼるのを聞いたことがある）

その二（兄妹の間に生まれた子供を、兄妹の母親が、その兄妹の弟として育てている例も聞いたことがある）

近親相姦は法律で禁じられているが故に、一般社会の道徳的倫理感覚上は、嫌悪感を催すのが通例になっていますが、否定は出来ない。ここに問題がある。

といって、近親相姦を是定しているのではない。

要は、近親相姦をテーマにすることの必然性が、何処にあったか、ということです。

（たかが六七十年の人生を、少しでも平穩に生きようと決めた約束事の背後には、どれほどの衝動が圧伏されてきただろう。私たちの魂を深いところでゆさぶるのは、そういう圧伏された衝動かもしれない）

この衝動が、必然性だというのでしよう。

（文学的感動の本質は、無道徳的な衝動にあるというふうに思えてくる）

と助教授はいつている。

これが結論です。

文学的感動の本質、それはまた、人間性をゆさぶるものなのですから。

トーマス・マンが、晩年には、精魂を傾けて近親相姦と取り組んでいるのも、人間性の本質の末踏の領野を開こうとした意欲のあらわれだという。

人間って単純なんだな。

F 精通

乾隆丙子年間、文官試験の受験生潤玉は、迫まり来る試験準備の為、日夜勉強にいそしんでいた。その名の通り、眉目秀麗の美青年である。そういうことになっています。

ある夜、勉強疲れのひまに、裏庭を歩いてみると、ふと、塀の向側で、女がうがいをしているような音がするのに気がついた。

うがい、ですよ。

隣家は、尚書某公の邸宅であった。そして公の令嬢は、この世の者とは思えぬ高貴な、絶世の美女であった。

彼、令嬢の姿を見掛けても、軽々しく口をきくわけにはいかなかったのである。

彼は好奇心に駆られて、柳の木にはしごをかけ葉の茂みに身をかくして隣家を窺った。

潤玉は何を見たか。

奥野信太郎慶大教授の筆をかりると、こうなる。即ち、

「霜のように白い、まろやかな臀の輝きが、眩しいばかり彼の眼を射た。うがいの音と聞いたのは、勿論そうではなく、尿の走る音を聞いたのであった」

潤玉、美女が廁でしゃがんでいる姿を見てしまったのである。

これでやめておけばよかったものを、真白な豊満な美女の臀部が眼に散らっただけで勉強どころではない。それから毎日、彼は飽かず眺めては喜こんでいた。

「そして、最早、彼女の下半身に就いては、これをことごとくそらんじるくらい精通してしまった」

と文学部教授は書いています。

令嬢、秘められた柔肌に、朱色のあざがあったらしい。事実、そこまでわかっている。

そこまで知られては、観音様（だと思っただけ）が怒るのは無理もない。

潤玉、たちまち、盲目となった。

盲目物語。美意識の昇華。

東洋思想の粹というべきである。

文芸春秋新社、奥野信太郎著「中国艶ばなし」より。文学鑑賞のため、紹介しました。

十三人の女死刑囚

ΛA収容所の大量虐殺Ⅴ

佐 出 須 登

1

一九四五年春。ポーランドにあるドイツ軍のA収容所では大変な忙しさであった。自軍の敗走と共に惨虐行為に関する一際証拠をなくすため、現在収容中の女囚すべてを処分せよとの命令をうけたのだ。

最大を誇るこの収容所には約五、〇〇〇人が居りしかも大半は二〇台の美女であった。一人づつ楽しみながら処刑するのでなく、一〇〇人、二〇〇人とまとめて殺すのでは、極めてもったいない話だが接迫した戦局から見れば止むを得ない。

女囚たちはすべての持物を没収された。死んでゆく人間には何も要はない。衣類その他すべて本国に送り、不自由な生活をしているドイツ市民へ。女囚にとっては敵国人を喜ばせることになるのだった。

2

ジャクリーヌはガス室に一〇〇人ばかりの仲間と共につめこまれた。中は身うごきも出来ない、泣くもの、わめくもの。やがて上から毒の液が滴りおちる。床の上にたまり熱気によって白いガスとかわり、女たちを四方からとりかこむ。けんめいに叫んでも叩いても

戸も窓もあかない。こらえきれずに息を吸ってしまおうと、喉が肺がチクチクと刺すように痛む。ジャクリーヌの目から無念の涙がこぼれおちた。前の女がぐったりとなって自分の方によりかかり、後の女もくずれおちんばかり、目の前がかすみ悲鳴も次第に遠くかすかになってゆく。床がぐらりと動いたように感じたのを最後に彼女は気を失い、やがて呼吸も心臓も止っていった。

十五分後、高い煙突から死の煙は大空に放ち戸が開かれる。美女たちは立ったまま倒れる余地もなく全員息絶えていた。丁度かんず

めのイワシのようにぎっちりつままったまま。床がもちあがり死体はゴロゴロとこぼれおちてくる。口やその他から金歯や指輪などかくしたものをぬきとり、死体はトラックにつめて焼却室に送り、何一つ残さず灰にしてしまった。一日一、〇〇〇人という恐るべき早さで片附いていったが、処刑係にとっては単調極まるものであった。

別の組は潜水艦の上部にある通称「とりかご」の中に入れられた。潜航すると海水は遠慮なく浸入し、しかも出ることはできない。五〇人位づつ簡単に溺死させられては、そのまま海にすてられる。これも単調の上に能率はあまりよくないので更に次の方法が採用された。

木造船に三〇〇人ほど詰めこみ、これに砲撃を加える。八センチ砲弾が次々とふりそそいで船体にも女体にも穴をあけた。首をふつとばされるもの、腹部を貫通されるもの、あつというまに身体をまっぴらに引き裂かれ右舷と左舷と別々にとび散ってしまうもの。これなど首がどちら側についていたのかわからぬ位の早さだった。ザビーネの如きは足もとから火柱が立ったと思うとその身体は消え

去って、あとには血と肉の細かいかけらが散乱しただけだった。サンドラは甲板に伏せていたがちよっと顔をあげたとたん、飛び来った破片で首をスポリともっていかれ、その首をひろったキャサリンも、次の一弾に直撃されて何もかもこさなかった。

沈みかけた船に対し魚雷が発射され、轟音と共に船体と女体は砕け散った。あとには、ばらばらになった死体が波間に浮いているだけ。スーザンが幸に傷一つつかぬまま潜水艦に引きあげられる。彼女はほっとしたが、そのとたん首にロープをまかれ、それこそあつというまにマストから吊られてしまった。あまり簡単だったので悲鳴をあげる暇もない。潜水艦のマストは二メートル位なものだが、小柄な彼女を絞首刑にするには十分だった。続くダナはこれを見てあわてて逃げようとしたが、手斧がきらめいたとみるや、その首は甲板の上をころがっていた。

四発の大型飛行艇に乘せられた組は、まず一人づつ投げおとされた。目標は地上に敷かれた白いマットである。悲鳴をあげ身もたえしながら落ちてゆく女体。途中で失神したのは幸運だったが、大地がぐんぐん近づきた

きつけられるまで生きているのが多かった。岩にぶつかって砕け散るもの、木の枝に引っかかるもの、地上に落ちて一塊の血泥と化するもの、泥沼の中にすっぽりと、もぐりこむもの。結局五〇人のうちマットの上に命中したのは二人だけだった。

次にパラシュートをつけて降下した組は、一端が首にまかれてあった女は傘が開く時の恐ろしい力で絞めつけられ息絶えた。それでも身体は辛うじて地上に着いた。足に爆弾を結ばれた女は、大地が近づくにつれ身もたえして叫んだが接地と同時に爆発して消えた。或は又射撃の的となったものもある。殆どが一整射で死んだ、炸裂弾で胴体がふつとぶものの、焼夷弾で黒焦げになるもの、面白かったのは曳光弾で身体を貫いたあと煙がすうっと通過している。無事に地上に着いたかに見える数人も、下から槍で突き上げられたり、木の板にぶら下ったところ火をたかれて焼き殺されたり、結局生存者はなかった。最も悲惨だったのはプロペラにのりかかられて血の霧を散らせて消えたポーラだった。

3

五〇〇〇人といえはあまりにも多すぎた。所員だけではさばききれなくなり、女囚中よ

り助命を条件として処刑係をつのった。五〇人が志願する、彼女らの助けを借りいよいよ本格的処刑が開始された。

六台のギロチンによる斬首競争である。

一台で五〇人、合計三〇〇人の首を刎ねるのだが、一番早く片附けた組が優勝するかわり、一番おそい組の処刑係は、助命を認めぬという。早くも各台には最初の処刑者が首をつきだしている。髪をふり乱し、泣きわめく上方にはとぎすました巨大な刃が光っている。今迄のレコードは三〇、即ち一人あたり三六秒であるが、今回はこれを破るものと見なされていた。

合図と共ににぶい音がひびき渡り、六つの首がころげおちた。ただ一瞬に六人の女の生命が断たれたのだ。ぐったりうつぶした死体は投げ落とし、早くも次の犠牲者を引っぱりあげる。斧の下に首をおき、つなをぐいと引くともう首はおちている。ザクリザクリと人間の首を斬るとは思わぬ位だった。台の下に血を噴きながらころがる首は次第にその数を増す。美女たちはもがきあばれちよっと前まで仲間だった処刑係に許しを乞うても運命は変らない。各台五人づつのその処刑係もまた必死だった。おくれれば自分



の首の問題になる。一人の女囚が足をふみはずす、三十秒ほどのおくれ、罰として下腹に短刀を刺しこみ一番最後にまわす。それまでもがき苦しみ続けるわけ、刺したのはクロー、

刺されたのはテリーだった。

あまりいそぎすぎたり、首を刃の下におかれても抵抗を止めなかったりしたため、首が頬のところから斜めにザクリ斬られ、ぞっ

とする姿で死ぬものもあった。首がおちる、又おちた。ポロリ、ポロリ。血しぶきと共に山をなす生首と胴体。泣き叫ぶ声も次第に少なくなつてゆく。とうとう第三組で最後の首が胴をはなれ、ナタリーがその首をつかんで高くかかげる。実に二六分一五秒。一人あたり三一・五秒という早さ。続いて四番台でテリーが引き上げられる。彼女は首を刃の下においた時ほっとした表情を見せた。ようやく苦しみは終りクロウが首をあげた。一番五番の台でも殆ど同時に、最後の女が首をつきだす。この二人は親友同志で、五秒位の差で仲良くあの世へ去っていった。二番台が遂に最下位となった。三〇〇人の最後の首がバスケットへ落ちてゆく。三〇分四〇秒、結局五位までが新記録で六台の平均は二八分一五秒、一人あたり三三・九秒で全部あわせると五・五秒に一人の割で首がおちたわけである。彼女たちの生首は血にまみれたまま長い梟首台にズラリと並べられた。その数はいつのまにか三〇五個になっていた。

4

遂には一人づつでは間に合わぬというので大型六人用がもちだされ、女囚たちは横に並んで首をつきだす。巨大な刃が光ったとみる

まに、血しぶきあげて六つの首がゴロゴロと先を争う様にころがった。すばらしい効果、クロウは次々と、この首を拾ってはかますに投げこむ。一〇〇人位あつというまに片附いた。鮮血はおびただしく飛び散り血の海の中に生首が浮いている様、順をまつ女囚たちが恐怖の叫びをあげたのも当然だろう。

ミレーヌがさかんに働いている。ふと思いついた彼女はブロンドの女ばかり集めた。ドロレスやローラなどがこの犠牲になる。五人までが首をつきだし横たわった。

「あと一人はいるんだけど……」

ミレーヌがあたりを見まわしたが、もうあとブロンドの女は品切れになっていた。

「そんなら、お前が入ったらどうだ」

刑吏がいきなり彼女の首すじをつかむと台上にひきすえ、五人の間におし入れる。ミレーヌはあわてて抵抗したが、ナタリーが喜んでかけよると首わくにはめてしまう。まさに生命にかかわる大失言だった。

ほかの五人は今自分の首が落ちるというのも忘れ、こんなミレーヌを気持よさそうに見つめていた。次の瞬間、六つの首がゴロゴロところがりおちる。

「バカ奴、自分もブロンドっていうの忘れた

の」

ナタリーがミレーヌの首をぶら下げながらつぶやいた。

斬首刑はギロチンだけでなく、大刀や短刀斧も使用された。比較的確実なのは斧で、重量があるだけに、完全に斬れぬまでも殆ど一撃で即死する。ただ女囚の方であれば逆さに最もみじめなことになった。狙いが狂って三度も必要になり、それでもまだ生きているものもある。血を噴きながら悲鳴をあげてもがくのを皆でおさえ、あの世に送ってやる。

ピアは大刀をもって身がまえた。十三人の女がずらりと並んでいる、その首すじへはっし、はっしと斬りつけていった。コロリ、コロリと落ちる首、マリサの番になり一撃を加えたが十分には斬れない、悲鳴をあげてもかまわず次の番に移る。こうして第一回一撃づつで完全に首のとんだのは八人、絶命したのは二人で、まだ三人が死に切れずもがいている。第二回はすでに絶命した二人の首を簡単に刎ねてから三人の番となる。しかし今回はマリサを殺しただけで首はとれず、しかもジョーンとクラウドはまだ生きていた。三度目でやっとマリサは身首を異にし、ジョーンの首も高く刎ねあがり、クラウドも息絶え

た。四回かかって遂に十三箇の生首が並ぶ。デビーは短刀で首刈りをやっていた。もがくのをおさえて、刃を首にあててゴシゴシとかき斬る。殺される方は、それがはつきりわかるだけにひどかった。ロッサナは背後から抱きしめられ目の前に刃が光る。もがき、よけようとしても刃はじりじりと迫る。左頸部にグサリと刺さり激痛が全身をつらぬく。そのまま一気に喉をかき斬られ、ぐったりとくずれおちる。殆どもう少して首がおちてしまう程の完全な斬り方だった。

この様にして斬りとられた生首はベルト・コンベアではこび、かますにつめてもってゆく。方々の兵営に送って獄門に梟け、兵士たちの目を楽しませるわけである。今日も一、〇〇〇人ばかり消されてしまった。いま最後に残ったイベントが断頭台へ足取りも軽くのぼっていく。生来楽天的な彼女は、すべてをあきらめ、死ぬことなんか何ともないといわんばかりだったが、残念にも殺す方でも人間の首を斬るとは思っていない。葉巻の先をハサミで斬るように、チョンと彼女の首は斬りおとされ今日の死刑は終了した。あとにすてられた死体は火焰放射器で焼き、ブルドーザ

で圧し潰し、最後に残った灰は一、〇〇〇人分としてはびっくりする程少なかった。

5

エレオノラの番がきた。ミッチイが短刀で首をかき斬って殺すという、じっと目をつぶり手を胸の上に組んで死をまつ美しい姿。ミッチイは何となく苦しめてやりたくなり短刀は喉でなく腹部に突きたてた。さすがのエレオノラの口からも悲鳴がもれた。二度、三度と刺してから柔かい首すじにピタリと刃をあてる。力をこめてぐいとひとひき、ところよい手ごたえと共に首の筋肉深く刃が入ってゆく、ぶるぶるともがく身体をおさえつけ、更に力をこめて頸骨をゴトリと斬った。急に抵抗を失った刃は一気に反対側にまで達する。パツクリあいた傷口からおびただしい血汐が噴きだし、それと同時にエレオノラは全身の力がぬけでるのを感じ、目の前が暗くなり、やがてすべての意識を失った。ミッチイは残る一枚の皮をのこり惜しそうな気持でぐいと斬りはなす。斬りたての生首はエレオノラのひろげた両脚のつけねにおかれた。

デボラが静かに優雅な姿をあらわした。後に斧をもったキムが立っている。特製のけや

きで作られた首斬台が使用される。鏡の様にきれいにみがきこまれたなめらかな面、前方は彎曲し白布が前に敷かれている。デボラは台の前に坐ると膝で立ち背をこごめ、両手で台の両脇のかんをつかんで身体を支え、首を前にさしのべた。キムが力まかせに斧をふりおろす、首はコロコロと白布の上をころがった。血汐がみるみる白布をそめてゆく。胴体は手をのばした姿のままがつくりとのめり、まるい、まっかな傷口からはこれまた鮮血が噴きだしてあたりをいろどる。斧はしっかりとけやきの台に打ちこれていた。キムはその首を拾い、例の如く高く、かかげて検死を終る。女神の如き気品を秘めた美しい彼女の首は、ほかのものと一緒にするにしのびず、きれいに洗われてから防腐液の容器におさめ、永久に生前と変らぬまま保存されることになった。死刑につかわれた斧と首斬台もそっくり、首を刎ねた瞬間のまま、即ち斧が台に食いこんだまま保存された。

6

一方では絞首刑が行なわれている。二〇〇人が五列に並び、その前に五本のロープが犠牲をまっていた。グレースがまず絞首台にあがり一番はしのロープが首にまかれた。合図

と共に床がおち彼女の身体は首を絞められて
キリキリとまわる。無惨な、無造作な執行だ
った。十五分で確実な死が宜せられたが、そ
の後も吊り下ったまま晒されている。

この間五分おきに二人目、三人目と吊り下
り、五本のロープに五人の裸女がぶら下って
もがいている。番をまつ女たちは次々と床の
落ちる音を数えていた。ボタンという度に一
人の女の生命が消えるのだ。

オードリイが二十五分後六人目として引き
だされた。最初の台である。涙を浮かべなが
ら十三階段をのぼっていくと、頂上からピン
とはったロープが見えてくる。その端がグレ
ースの頸に食いこんでいるのだ。傍を見ると
更に四人が同様の恰好で吊られている。ロー
プはスルスルとおり、死体を地上に降し輪を
はずす。死体を手押車にпойと投げこみ、ロ
ープは上にまきあがり血のにじんだままオー
ドリイの頸にかけられ、ふるえながら一步前
に進む、下を見ると死体が運ばれていくとこ
ろ、頭を下にし脚はひらいたまま。思わず
目をつぶった時床がはずれ、彼女も又ロープ
をぴんとはって吊り下り……死体となりグレ
ースと同じ恰好で死体置場にはこぼれた。

五基の絞首台は、この様に休むことなく常

に五つの女体を吊り下げていた。一本のロー
プは四〇の首を絞め二〇〇人は丸一日で片附
いた。ちょっと前まで生きていた美しい女性
が、頸に無惨な絞めあとを残して死体となり
処分されてしまうのだ。哀れとも何ともいい
様がない。

7

次に四〇〇人が死体置場から谷をへだてた
反対側につれだされた。交通しているケーブ
ルに多くのロープを結び、その先の輪が一人
の美女の首にかけられた。モーターが動きケ
ーブルが動くにつれて首をひっぱられる。も
がいても泣いても崖は次第に近づき、一声叫
んだだけで吊り下ってしまった。次々と同じ
ことをくりかえしているうち、約三〇分で彼
女は反対側の死体置場に到着した。勿論完全
な死体となっている。こちら側では三十二人
目がぶら下ったところだった。ひとわたり眺
めてみると十五人目までは、もう動かなくな
っているが、二十三、四人目以後はまだもが
いていた。

死体置場では到着した死体をロープからは
ずして横にころがし、使用済のロープはまた
ケーブルで帰り、ひとまわりしてから新しい
犠牲をぶらさげる。谷をへだてて常に三〇人

余の女体がブラリブラリと運ばれてゆく。死
体は次々と数を増していった。

処刑係を志願した女たちは、この時まで三
十八人に減っていた。あまりのことに耐えか
ねて死を願ったものもあり、或は刑吏にたわ
むれに殺されたものもあって、この数となっ
たのだ。彼女たちは首にロープをかけられ、
上のロープを手でつかんでから、この深い谷
の上を特別ゆっくり通ることとなった。手を
放さぬ限り首は絞まらぬ、だが次第に手はし
びれてくる。目をつぶって恐怖と闘うのだが
対岸についたのは二十六人だった。十二人が
折角魂を売り渡しての希望も空しく手を放し
哀れ絞首刑となったのだ。

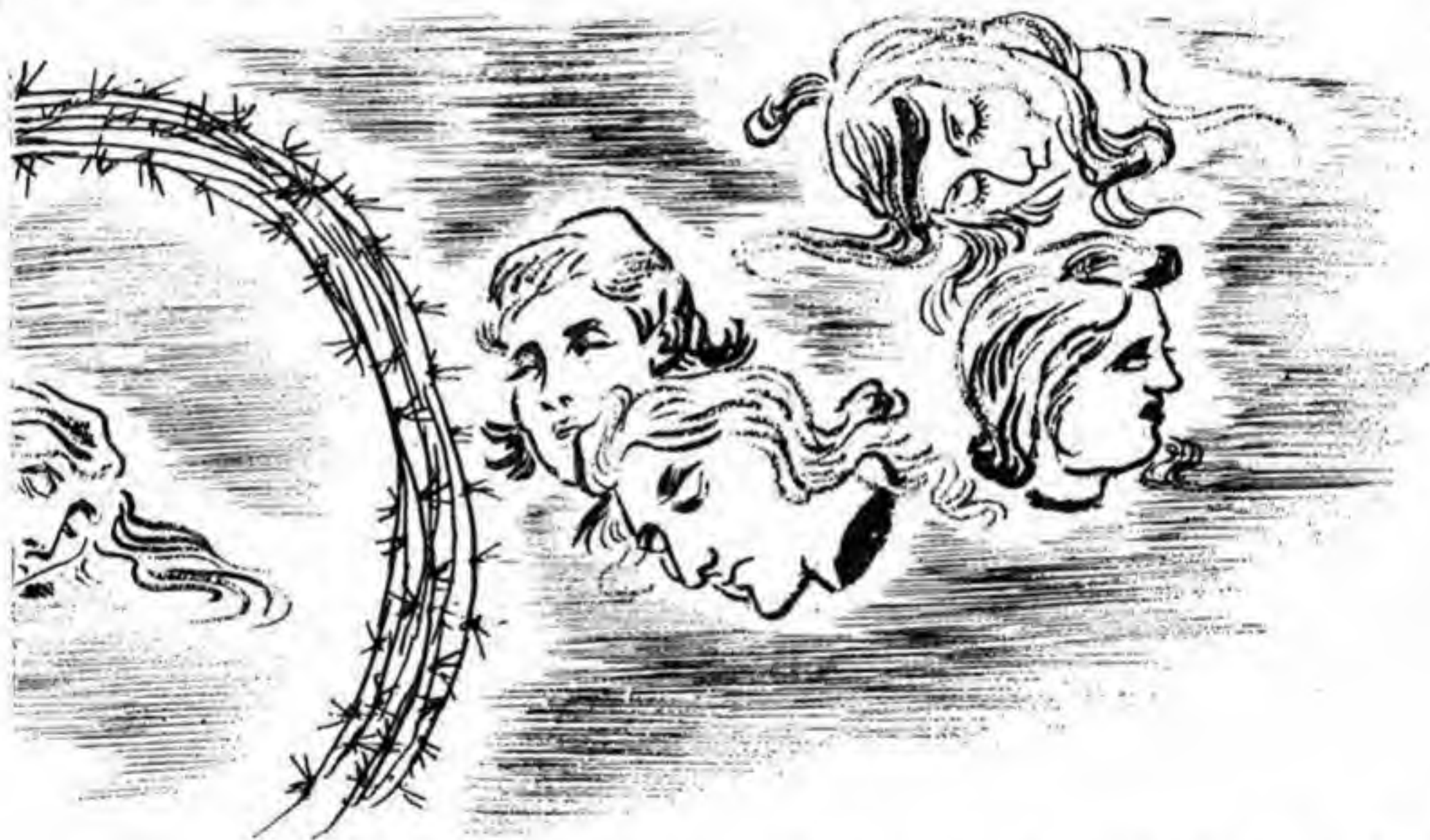
このほか一般女囚三〇人が同じ形でぶら下
げたままいつまでもおかれた。この方は助か
る望みは全くなく、三時間後には全員が死ん
だ。次の三〇人は上のケーブルをつかんで運
ばれたが、ロープはかけられなかったので、
手を放せば絞首刑のかわり谷底へ落ちて砕け
るのだ。一人又一人、悲鳴をあげ手足をバタ
つかせながら落ちてゆく。一体どんな気持だ
ろう。落ちゆく女体の影がうつる、体と影が
ひとつになった時が彼女たちの最後の瞬間で
ある。岩にあたって砕けとぶ首、胴体だけ長

くのびているもの、木にひっかかって逆さ吊りになるもの。顔は下に、上半身は上を向き下半身はまた下をむいているもの、さんたんたる光景だった。

8

シルビアは、一番崖の近くにおかれていた。力つきて手を放したのだが、必死の本能は次の瞬間崖につきでている岩をつかんだ。が、再びすべりおち、今度はその下にあった木の枝に手がかかる。根が、ずるずるとぬけかける。絶望の悲鳴をあげながら隣の僅かなひっかかりをつかみ、なんとかはい上ろうとしている。信じられない程の力でとうとう崖のはしに指が一本かかった。それは二本となり三本となり、とうとう両手十本の指が見え、身体さえも上にあがりかけた。蒼白の顔にいくらか赤味がさしてくる。あと一息だ。

だが非情の刑吏はその指を靴でふみにじった。恐ろしい叫びと共に身体は崖にそってズルズルと落ちてゆく。途中の岩棚の上に長くのびている姿、まだ生きているらしい。銃をとって狙い射ち、腹部に命中した。このままでも死ぬだろうが、特別親切な刑吏が苦しみを早くなくすため岩の塊を



おとす。『ギャッ』という悲鳴が上まで聞え、彼女は死体と変っていた。ミッチイは、四本のロープを両手両脚にかけ猪吊りとなった。一体どんな目にあるのかとふるえている首に、もう一本かけられる。五本のロープは、それぞれ中間に火のついたローソクが結ばれた。やがて右手を縛ったロープにローソクの火がもえうつり、ぶつんと焼き切れた。首にぐんと重みがかかる。最後にはどれか一本で吊るされるのだが、それが首だったら……絞首刑である。

左脚のが切れた。必死になってこらえる美女、どうせ死ぬのならひと思いに吊るせば良いのに、ああ左手の方も切れ残りは右脚と首のだけ。両手でもって首にかけられたロープをつかんで首の絞まるのを防ぐ、ブツン、軽い音と共に脚がダランと下り、彼女は吊り下ってしまった。両手を頭の上にしてロープをおさえていたが、その力は次第に弱くずるずると下り、首を絞める力は次第に強くなってくる。間もなく彼女の悲鳴は絶え、口もきけぬ身体となってしまった。

9

ピアが全裸のまま広場につれだされた。そこには気球がおかれている。これは彼女の体重より僅かに大きい浮力を持っていた。その端の輪が彼女の首にかけられ、まいたる気球によって喉が絞まった。一瞬身体が浮きそうになり必死にこらえる。ちょっとでもロープをおさえる力をぬいたら浮き上って絞首刑になる。しかも、風が吹いてきて気球がゆれ、このため彼女は右往左往せねばならなかった。とうとう突風が吹き、一直線に引きづられる様に走る。その先は土手になっており、あっと叫ぶ間もなくピアの足は土手をとびこえ宙に浮いていた。こうなっではいくら足をバタつかせても体重だけの力しかかからず、彼女の身体は空中をふらりふらり動いている。そのうち気球のロープをつかむ手も次第に固くなり、遂に指ははなれ、ピアは多くの仲間のとを追う様に吊り下った。足と地上までの距離は、僅か一〇センチ位、ピクピクとあえいでいるのが見える。こうして無念の最期をとげたピアは冷たくなっても尚気球に下げられたまま、翌日も同じ様にブラリブラリゆれていた。恐るべき晒らしの附加刑である。やがてガスがぬけ、彼女の身体が地上に横たわるのだが、残る浮力のた



め首だけ持ち上っているのが見出された。

この死刑は好評だったので何度も行なわれた。一本のロープに何人か下げるもの、二個の気球の間に六本のロープを下げ六人の女を吊るすもの、ズラリと洗濯物を干す様に絞首された美女が並んだまま、地上をわずかに離れ風のまま動いている。夜など幽霊の様だった。高さは低くとも足が地上を離れているかぎり死なねばならぬのだ。涙を流しつつ死んでゆく哀れな美女たち。ひどいものになると夜光塗料をぬってぶら下げ、夜間射撃の練習台にされるものもあった。或はまた浮力が強すぎて空高く飛びさり、そのままどこに行ったかわらぬものも何人かあった。

10

五、〇〇〇人の処刑はこの様にして殆ど終了した。斬首された死体は山の如く積み重ねた火放射器とブルドーザーで処理される。生

首は板の上にズラリと並び、所々に槍が立てられて特に美しい女の生首が突き刺されている。その斬口にはなかなば凝血した血汐がこびりついている。クロイやナタリーら処刑係がこれを洗ってはかますにつめていく。記念のため持ち去られ紛失した首もかなりあった。青竹に髪の毛でもってぶら下げたものも居たが、一ダースも吊るすと太い竹もくにやくにやにたわんでいた。

一方絞首刑の方も木という木から、又は軒先から鈴なりになっていた。高い旗竿から縦にズラリと下っているもの。二本の木の間から幾つも吊られているもの。どうしてもこれが人間とは思われない。

ところで死刑には種々の音が生ずる。悲鳴は別として、ギロチンでは、まず台をのぼる音、首を固定する板の音、それからドスンと鈍い音、次いで軽い響き、何か滴る様な……始めは強いざあというのが次第に低くポタポタと変り、最後にドサリという音で終る。始めの音は巨大な刃が落下して首を断つ音、次は刎ねられた首がバスケットに落ちる音で更に斬口から血汐が急いよく噴き出て、次第に低く弱く僅かに滴る様になる。最後のは死

体が断頭台からけおとされる音である。いろいろ変化に富んだ面白い死刑音であった。

絞首刑、外で絞首台を作る音、何人かつれだされ、同じ数だけボタンと台がおちる。その前にも十三階段を上る音、頂上で手足を縛り、首にロープをかける時の肉とふれ合う音、そしてボタン。これで万事休す。断末魔のうめき、喉のおし潰される声がもれ、最後が近づくと身体がそり返り、肉が裂け骨のきしむ音、呼吸も心臓の音も次第に弱まりすべてが終ってしまう。

大刀による斬首は、大刀を引きぬく音、風を斬る音、短い鋭い音は刃と頸骨がふれ合った音か、ドサトと首が転がり血汐の噴き出す音、この音は女囚が完全に死んだことを意味するのだ。そしてくずれおちる身体の音。

銃殺、砲撃、生埋め、刺殺或は溺殺と死刑の種類は数多く、種々の音を生じたが最も恐怖をまねいたのは終了後の様子だろう。ぶら下げられた死体の群、生首の山、四肢を大きく開けたまま横たえられた首なし死体、股の間に槍を突き刺され、その柄に首がついているもの。これらがもはや何一つ音をたてず、しんとした静けさであった。

11

収容所ではようやくほっとした空気になった。不可能かと思われた大量処刑が終ったのだ。処刑係を志願した女たちもさすがに疲労の色があらわれ、そのため却って理性をとり戻したのか、自ら絞首台にくびれるものもあった。又ぐっすり眠りこみ、そのまま永久にめざめることなく終るものもあった。僅か十三人となっていた。

所長はこの十三人を集め正式に死刑を宣告した。理由は何もない、元来助命という約束そのものがあてにならぬのだ。あわてて何人かが逃げだしたが何の役に立つものか、追いかけた刑吏が刃をふるうと、ブリデッテの首が宙に舞い上る。その斬口から血汐を噴出しながら五六歩よろよと進みどっと倒れる。ナディヤは槍で背から腹まで見事に刺し貫ぬかれ、悲鳴もあげずに横ざまにころがる、走りよった刑吏は何なくその首をあげた。モナは一番遠くまで逃げたが組み伏せられ、必死の抵抗も長くは続かず、たった一声の叫びを残して首を渡す。パトリシヤの場合は首を斬り離すかわり、両腕でそのかわい頸を絞めつけた。手足をピクピクとふるわせもがいていたが、充血した顔は次第に蒼白となり、更に紙の様に白くなり、遂にすべての動きが止

まるまで絞めた指は離れなかった。

タイナとメリーは捕るや直ちに絞首台の方に引れて行かれた。仲間の血がにじんでいるロープを首にかけ、僅かにつま先がつく程度に吊られた。もうちょっと引れば一巻の終というところ、必死にこらえる姿を見ながらさっとタイナの首を刎ねる。胴体が前のめりに倒れその上を首がころがっていった。

メリーに対しては、大刀で両膝から切断する。この結果、身体は宙に浮き首が絞まって、あまりの意外さに驚きと苦痛の目がみひらく。両脚からの出血もひどく、これだけでも死んだらうに、その上絞首刑が附加されたのだ。

ロンダは丸い柱に全裸にされてしばりつけられた。両腕と両脚を後に引きしぼった縄が円柱の彼で結ばれている。大の字をはりつけた様な恰好だった。しかもその上首にロープがまきついていて、身体が重みでほんの少しずれたのが、このロープのため致命的となった。三〇分後やってきた刑吏は彼女の下腹をけとばしたが、もうピクリともしない。

「なんだ、もう死んだのか」
つまらなそうにいうと、短刀で無造作に首をかき斬って持っていく。

12

あとに残った六人はいずれも粒よりの美女ばかりであった。恐怖に満ちた表情が更にその美しさを増した。

「お前たちは放免したところで、同胞の手でなぶり殺しにされるのがおちだ。あんな事をしたのだからな。それよりここで死んだ方があとで悪口をいわれずにすむぞ」

六人は六つの分隊に一人づつ分けられ処分されることとなった。

アンは全裸にされ食堂に入れられた。そのテーブルの上には水を満した洗面器が置かれてある。両腕を後にまわしておさえ、首の後をつかんでその水の中に顔をひたす。彼女は身体をくねらせて顔を外に出そうと、激しくもがいたがどうにもならぬ。その苦悶の経過はデザートがわりの見せ物となった。「こんなわずかの水で死ぬなんて……」彼女は口惜しかったが、これだけでも生命を奪い去るには十分だった。

鼻から、口から水が吸いこまれ、胃にも肺にも入りこむ。ブクブクと泡がたつ。アンを意識は次第に遠くなっていた。最後にポツカリと泡が一つ、これが彼女の肺に残された

すべてであった。そして窒息の快感と疼れんの末、身体ががっくりとくずれおちる。

フランソアーズは、暗い地下室に入れられた。何をされるのかと不安がるうちに一本の矢が風を切って飛んでくる。中は真暗なのでどこから射たれたのかもわからず、射つ方でもどこに彼女が居るのかわからない。壁にあたってはねかえる音のみ聞え、フランソアーズは無駄とは知りながら、あちらこちらと逃げまわる。やがて「ギヤァ」という悲鳴が遂にあがった。

あかりがつけられてみると、彼女は下腹に矢をうけてもがいていた。今度は狙い射ちである、脚のつけ根から身体の正中線にそっと胸骨柄直下まで、八本が突き刺さった。ようやく絶命したと見るや無数の矢が放たれる。右の乳房だけで七本、全身で五〇本ものの矢が命中し、フランソアーズをはりねずみにしてしまった。

キムは新型首斬器にかけられた。早くから計画していたのだが、今頃になってやっと出来上ったのだ。ドーナツの様に中央に丸い穴のあいた板のまわりに、十数枚の円型の刃が

並び、回転するに従って内側に入り、円を次第に小さく遂には点にしてしまう。この穴に入れられたものは、すべて完全に両断するわけである。直立したままのキムの首が、この穴の中央におかれた。

いよいよ執行である。刑吏が彼女の髪をなでながらからかう。

「美しいブロンドだ。アルコール漬にしてとっておきたいな」

そういつている間にも、キムの白い首すじに早くも刃がふれ、さっと血汐の一線が画かれた。それはみるみるうちに太く、深く入りこんでいく。「ワアッ、キヤアッ」とわめく声。直立している身体に血汐が流れおちる。肩から乳房へ、そして腹部から大股を通過して足もとへと。遂に頸動脈が断ち切れ、どつと噴き出す血汐と共に息絶える。

刃は更に喰いこみ、完全に首を斬りはなした。ぱたりと倒れた首なし死体は、ずるずると脚を引っばって傍に投げすてる。美しい首は刃の上にちよんとのったまま、まだぐるぐるまわっていた。

「もう少し苦しむと思ったが、案外あっけなかったな」

刑吏はこういいながら、キムの生首を髪

毛をつかんでぶら下げた。宣告通りアルコー
ル漬にするのだろう。

デビーは水車に手足を大きくひろげた恰好
で縛りつけられた。せいっぱいにのけぞっ
た形で、ふたつの乳房がくっきりともりあが
る。死ぬまでこの姿でおかれるのだ。

水車がまわりだし、ザアザアおちる水の中
に首が入りこむ。続いて胸、腹、水の流れと
顔が垂直になると一直線に鼻に入ってくる。
ひろげた脚の間にも水がじゃあじゃあとおた
り、やがて顔は水底をくぐりぬけ、ぐいと水
面にあらわれ大きく息をつく、そしてまたひ
とまわり。

アンの様に水に漬けらればなしなら、割に
早く死ぬことが出来たが、デビーの場合時々
呼吸が出来るので却って苦しみは長びいた。
デビーは覚悟をきめると、顔が水面にでても
息を吸わずにがんばった。生き様とする本能
との恐ろしい争いだったが、遂にデビーは勝
った。彼女は死体となって尚もぐるぐるまわ
っている。水は依然として、その身体をたた
いていた。

13
残るは僅か二人、サジスチンの本領を発揮

してきたクローとナタリーである。時間が少
しあまったため、新趣向がもちだされた。

それは一人が他の一人を五十時間かけて殺
すというのだ。この時間内に殺してしまっ
たら殺し屋も死刑だが、首尾よく苦しみぬくこ
とが出来たら助命するという。二人はさすが
に顔をこおばらせながら運命のくじを引く。
勝ったのはクロー、負けて惨殺される方にま
わったのはナタリーだった。

ナタリーは全裸にされ、四肢を大きくひろ
げて縛られた。クローが空気銃をもってかま
える。午前十時、まず第一弾がナタリーのか
わいいオヘソに射ちこまれた。続いて一分ご
とに一発づつ、主として下腹めがけて発射す
る。肉体には三センチほど食いこむだけ、血
汐も殆ど流れないが、五十時間も続くのを考
えると気も遠くなりそうだった。

三時間経過、約二百発のBB弾が下腹部に
射ちこまれた。今度は左右の乳房を狙う、肺
まで達するおそれはないので安心だった。
「悪く思わないでね、ナタリー。五十時間た
ったらひと思いに片付けてあげるわ」

一分おきに平然と銃をとるクロー。一発射
ちこむたびに心がときめく。こんな気持の良
いことがあるだろうか。しかし十時間、十五

時間と時間は徐々にしか過ぎず、次第に疲労
が重なってくる。クローにとっても相当の刑
罪であることがやっとわかった。

第二日の夜が明ける。全身綿の様に疲労し
ているが、それでも一分ごとに立ちあがって
銃をとらねばならぬのだ。もう一千発も射ち
こんだか、死ねば仕事は終るのだが、自分が
死刑になってしまふ。クローは必死だったが
ナタリーの方はそれ以上の苦しみだった。

「お願いよ、早く殺してくれないの」
「こちらこそお願いするわ、あと二十時間だ
け生きていてね」

ナタリーの全身は熱をもち火の様にほてっ
ている。出血は少ないにしろ鉛の毒が身体に
まわるのだろうか。空気銃の小さいBB鉛弾
といっても、もう二千発以上も射ちこまれて
いるのだ。最終予定は三千発。クローは何度
かナタリーの細首を絞めて、自分も死にたい
と考えたかわからない。

第三日も午前十時を過ぎる。あと百二十発
で終りとなり、どうやら助命の見込みがつい
てきたが、銃弾の包みをひろげて「はっ」と
した。BB弾でなく尖頭の鋼鉄弾だった。

射ちこむ場所は胴体前面に限られている。
下腹に一発、ナタリーの身体がぶるぶるとふ

るえる。二発、三発。ああもうだめだ。

「お願いよ、死なないで！」

必死の叫びも空しくナタリーは息絶えた。四十八時間十五分。これでクロウの死刑も確定した。

「バカ、バカバカ」

クロウはナタリーの身体を切り刻んだ。腹を断ち割り、乳房をそぎ、首を刎ねる。だがもうどうにもならない。不眠不休の奮闘空しく、四肢を大きくひろげて横たえられ……。

鋭い針が女体で最も鋭敏な乳首に突き刺される。悲鳴をあげてもがきまわるのもかまわず、二本、三本と刺してゆく。十本も刺すと別な側に移り、更にそのまわりの豊かな乳房を文字通り針の山と化してゆく。

針のふえてゆく速度は一分間に一本、刺し手は大勢で入れかわり立ちかわり刺して楽しんでる。その根本には小さな血汐の滴が出来るだけだが、苦痛は甚だしくしかもいつ果てるとも知れない。ナタリーに対したことが倍以上になって返ってきてるのだ。

オヘソにもプスリ、プスリと刺され、その度に身体はとびあがらんばかり。何十時間たったら死ぬことが出るのか、くじで勝ったの

が今では後悔する様になっていた。

いつのまにかふくよかな、雪をあざむく下腹に針でもって字が画かれている。カポー・クロチルドと読まれた。これ以上の恥があるだろうか、このまま息絶えたとしても彼女の罪ははっきり公開されるのだ。

苦しみを長くするため、針は背中や臀部にも刺されてゆく。もう五十時間を越え、三千本の針が肉体に加えられたわけだが、まだ生きている。ナタリーがそうだった様に全身に熱をもち、赤くはてしている。

「もういいだろう」

この声が耳に入り、クロウはほっとしたがその期待は裏ぎられた。やっと殺してもらえるかと思っただのに、新らしく加えられたのは例のBB弾だった。

右の乳房に一発命中、同時に数本の針がぬけおちる。なかには針の頭に命中して却って深く刺しこむものもあった。六十時間、七十時間。さすがに悲鳴も次第に弱ってゆく……。

意識を失いかけたクロウの背にザブリと水が浴びせて、はっと気がつくその背にピシリとむちが鳴る。今度は、手加減はしないらしい。もう身体の針はことごとくふっとんで、めりこんだ弾のあとが痛々しい。

遂に百時間経過。これまで生きていたのが不思議な位だった。美しい首こそすこしも傷ついてないが、胴体はもはや血と肉の塊にすぎない。

「よくがんばった。楽にしてやる」

最後の宣告と共に、火のついた薪がおしあてられた。一本づつ燃えつきるまで、手や足から焼いてゆく。

クロウの息は絶えた。三千五百本の針。二千五百発のBB弾。ムチの数は二百。使用した薪は三十本。百十二時間にわたる苦しみだった。これにくらべれば地獄など少しも怖れることはないだろう。

収容所の焼けあと近く、誰も見むきもしないごみすて場に、一つの生首が捨てられてある。これがクロチルド二十六年の生涯のなれの果てであった。

(終)

次回は両軍二〇〇人の美女(全裸、ビキニふんどし、スラックスETC)入り乱れての大血戦。果して生き残るのは、誰か? 正解者には、美女の生首をさしあげます。(これはウソ) 御期待にそえれば幸い。

KKグラビア

悦虐フォト回顧

(昭和36年 ベスト10に いて)

近藤 一

昭和36年1月号

年頭の号から、リアルな残酷美の追求が盛んで、縛りや猿轡から、拷問の手法に至るまで、容赦ない厳しさが実現されました。そして、モデル嬢もフルイにかけられ、本当に素質のある女性が、美しく悦虐の性を伸ばして行ったのです。

1月号では、まず猿轡の重視が目立ちました。本格的で、肌につけるらしい布片を口中

に押し込み、丸めて溢れた詰物を抑えて非情な縄目が噛ませられ、覆われてしまうのです。

呼吸も止められそうな堅い猿轡に、就縛の女の瞳が潤おい、輝やきを見せるのは、素敵な眺めです。

大塚啓子嬢の活躍ぶりは見違えるばかり。

黒く見えるスリップやパンティが窺われるのも美しく、美顔術も進歩して、一寸左幸子に似たボーイッシュな軽快さも愉しみです。肉体美は云うまでもなく、髪の佳さも高く評価

されていていましたから、清潔な艶が出て来れば申し分ない訳です。彼女の佳さが充分に活かされていて、1月号のトップも又当然です。

「表情とアップ」で、ドキリとさせられますし、「引立てられて」「ぐるぐるに」「非情の紐」「どうしてこんな」という数篇の作品では魅了される美しさが満ちています。

絹川文代嬢は、なかなか量感豊かな美体の持主でありながら、奇妙なことに、素肌よりも、ピタリした着衣の縛しめの方が艶め



かしいのです。「レンズの前に」が、本来の上品な色気を示していますが、他の作品はポーズや着衣に工夫が欲しい所でした。

桜井葉子嬢の囚衣姿は、スリッパ着用の股間縛りより、遙かに安定度があり、水を得た魚のように活気があります。

四方清美嬢の「小さな事から」「香りある息吹」「一方的」という作品は、体当り演技の佳作で、着衣・ポーズ・被虐の表情などが巧まずに表現されています。

他に花本京子・前本妙子嬢の作品があるが迫力に乏しく平凡と云えましょう。

昭和36年2月号

猿轡をはめられた女の瞳の輝やきを、三人のモデルが競演していますが、いずれも口の中に詰物が感じられない点で不満でした。リアルな嗜虐ムードで加茂良子嬢がトップを行きベテラン絹川嬢も凄艶な全裸黒縄縛りで貫禄を見せていますが、前本嬢は平凡です。

革ベルトで撻たれて苦悶する四方嬢、足首を括られて脚線美を活かす絹川嬢、水槽に漬けられる大塚嬢、長縄絆で胸も露わな被縛の桜井嬢という所が印象的な好演でしたが、その他の作品は平凡で、特に絹川嬢の晒される

者の演技は苦悶に乏しく不満、熱海容子嬢と花本嬢では、柔軟な姿態だけでも前者が有望ですし、花本嬢はお化粧のせいか表情が硬く変化に乏しいので力不足でしょう。

昭和36年3月号

梨花悠紀子嬢が初めて奇クのグラビアに登場した号ですが、各モデル嬢に異なるポーズをつけて競演させており、愉しいものです。

ベスト3を選ぶなら、桜井嬢「微風に揺れる像」四方嬢「被襲の像」、大塚嬢「珠玉の像」を採ります。完全に宙に浮いている桜井嬢の後手吊りの重量感は、前年の「木洩れ陽」の系統ですが、正に圧巻と云えるでしょう。四方嬢の被虐ポーズはSMプレイのムードに満ち、明るさと親近感を漂わせている所が好感を呼びます。そして大塚嬢は、女体の美しさを髪の流れと純白の猿轡が強調して凌辱の佳美を創造しています。

最も期待された絹川嬢は、ファンも多く、出演作品も多く、美女として謳われながら、まだ物足りません。女体の柔軟性が活きず、逆海老縛りも手と足が離れすぎていて、萩嬢ほど忠実ではありませんし、手足吊りも括り猿にならず、宙に浮いてもいないのです。ア

イディアとしては印象的な「捌かれるものの像」も、リアルな迫力はありませんし、夢幻の美も中途半端です。絹川嬢が美貌であり、美体を誇る女性であって、長所も多く、出演頻度も高いだけに、物足りなさが強くなるのです。

3月号では、前本・花本・加茂の諸嬢が、それぞれに熟演を見せ、梨花嬢は顔見せだけの登場ですが近代的な美貌の片鱗を覗かせています。そして、梨花嬢の被縛フォト撮影のレポートが、辻村氏のペンで、写真入りで掲載されているのです。

昭和36年4月号

梨花嬢が一躍巻頭に進出して、「華やかなモンタージュ」を作ったのですが、何としても初めての経験では、表情も硬く、折角のアイディアも充分に活かされませんでした。唯「門のある家から」は面白い着想でした。

4月号のポイントは首縄ではないでしょう。女の細い首に強く喰入って締上げる非情な縛しめは、悦虐美の極致とも云えます。そのポーズが、エキゾチックな美貌の加茂良子嬢と頓に洗練された大塚啓子嬢によって、競演されていて、この首吊りのポーズがトッ

プという感じです。

四方嬢のSMプレイは4月号も続き、鼻責めを演じて愉しませてくれました。前本嬢は相応の活躍ぶり。ベテラン絹川嬢と云うように貫禄づいた絹川文代嬢は、胴のアップで膚の白さと縄の黒さを対照的に見せていますが受縛のないS役や切腹写真では、やり難そうな表情で、文字通りの緊縛と拷問を加えたいところ、「弄花」というタイトルの鼻責めはカメラアングルが悪くて表情が捉えられていませんでした。

昭和36年5月号

梨花嬢が本格的に責められ始めた様子が朗報でしたが、同時に、5月号では「私を責めて下さい」と宣言して、東浦ひかる嬢がデヴユウしました。

「摔げられたもの」「放置されて」(大塚)
「吊り準備完了」「チャンスの把握」(絹川)はそれぞれ貫禄充分の好演ですが、絹川嬢には本式の吊りを望みたいところです。

「苦痛」(四方)、「期待」(加茂)の二作も表情の佳さに好感が持てます。

東浦ひかる嬢の顔が明らかでないのは残念ですが、グラビアでもレポートでも、かなり

遠慮のない苛責が加えられていて愉しみですし、他方、近代美人の梨花嬢も、かなり思い切った屈辱的ポーズで責め立てられていながら、さしてひるむ色も見えない所は、読者にとって程良い贈り物と云えましょう。

昭和36年6月号

6月号は、「お仕置ムード」が特色でしょう。テーマにも艶容清美とあるように、ドギツイ嗜虐と云うよりは、洗練されたSMプレイと云う感じで、それは吊りと猿轡を重点にしています。それも中心に梨花・東浦という新鮮な女性の活躍があるのです。

猪吊りと滑車吊りはまず特筆すべき作品で梨花嬢ならではの体当り演技です。顔が判然としないために不満もありますが、いかにも厳しいお仕置を表現していて素敵でした。

「高手小手」(梨花)はもう立派にトップクラスの美しく肉感豊かな佳作です。梨花嬢の小手は本当に小気味良く引上げられ、背中に高々と躍っているのが愉しく、また猿轡も忠実に美しいのです。一方東浦嬢は、些か野暮ったい感じもありますが、それが却って親近感を呼び、また従順で忍耐強いのも嬉しいものです。

「影法師」「白く輝やくもの」「目下飼育中」など、秘かに味わっている歓喜の戦慄が感じられるようで、責められて歓ぶ女体の輝やきが、巧みに捉えられています。

「諦観」「床にうごめく」「黒髪乱舞」の大塚嬢は、実力発揮というところですが、特に「喘ぎ」の佳さは、一入増した清潔な量感に支えられて、女体の美を示しています。

絹川嬢はやや荒れ気味で、折角の美身が活かしきれず、汚れ役は役不足なのか、ミスキャストなのか、品の良い色気が薄いのです。

もう一人の出演者前本嬢は、ここ数号に登場していますが、個性が弱く、髪の手入れが悪いため、折角の熟演も活きていません。それに彫の浅い目鼻立ちで、臉を閉じていますから、顔や瞳の変化など期待できず、息をのむような作品に出会わないのです。

昭和36年7月号

7月号の悦虐女性特写フォトは、極めて充実しています。

絹川嬢が「恍惚のムード」で、女盛りの色気を撒き散らしていますが、「艶視」もそうであるように、処刑とか拷問とかの刺戟的な残酷美を追うよりも、女体が男心を誘う技巧



絹川文代の真に迫った表情

の一つとして被縛姿態を晒しているという傾向で、それだけに余程の妖しさを発散できないと、生ぬるくなり、物足りない憾みも出て来るのです。絹川嬢が吊りや海老責などを演じないのならば、せめて7月号の水準を保って欲しいものです。

大塚嬢の被虐ポーズも見事です。何と云っても肉体が佳く、ムチムチと張切っているの

れ、縄目は厳しく喰込んで美しいのです。お化粧もすっかり洗練され、髪の手入れも行届いているので、豊かな演技力に支えられた被虐美はすぐれたものと云えるでしょう。

四方嬢の「サルグツワ哀歎」も佳作です。若妻のお仕置と云ったスタイルで、こういった作品に関しては、表情もよく、充分に愉しめる作品としてくれる実力を持っています。「燭台」は東浦嬢の代表的な忍従のポーズですが、彼女の豊かなヴォリュームと喰入る縄目がローソクの炎と融合して夢幻の美を醸しています。「滅茶苦茶」も面白い作品。

初登場の小竹知子嬢は遂に縛られなかったモデルですが、顔立ちも佳く、裸身も美しい、髪の美しさが極上なので、柔軟な姿態による思き

った責写真が期待されるモデルでした。

7月号で特筆すべきは梨花嬢の活躍です。ゴムのオシメカヴァをかぶせられ、白縄で裸身を縛られ、色物の紐で頸を縛られているのは、彼女が美貌だけに、念願の貴婦人畜化ポーズを思わせます。

さらに「荒縄」が思いきった作品です。囚衣に荒縄の厳しい海老縛りで猿轡を噛ませられ、股を開き、竹の棒で責められて、髪を乱して苦悶する素晴らしさ、デヴィウ後の短時日に、これほど長足の進歩を示したモデルはありませんでした。並ならぬ得難い資質の女性であり、紹介によれば、吊責を渴仰する女人だとか。大塚・絹川あるいは川端・伊吹・萩という先人たちとは違った意味で期待できるモデルです。7月号では「甘美なお仕置」が大塚嬢の「逆海老責め」と並んで推奨できるフォトと思いますが、「破られたシャツ」は少々ギョチなく不自然な感じで、ゴム帽子と荒縄縛りが見事と云えるでしょう。

切腹と浣腸の大塚嬢のほか、東浦、絹川、梨花各モデルの他の作品には、読者によって高い評価もあるでしょうが、ここでは触れずにおきましょう。

昭和36年8月号

テーマの特異さで惹きつけるフォトと、モデルの佳さで魅了するフォトとに、二分すると、前者では各種の拷問や畜化が挙げられ、後者は同じ縛りで表情の変化や女体の動きを追求するものが挙げられます。大ざっぱに分けると、前者では梨花・東浦・桜井の諸嬢が目立ちますし、後者では絹川嬢が代表的存在で大塚嬢は両方を兼備したモデルと思います。

「春愁」「美畜第三十五号の観察」（絹川）や、「耽溺」「陰翳」「喘ぐ柔肌断片」（大塚）などは、女体の被縛美の変化を愉しむ作品と云うべきでしょう。

一方、「虜囚の強制診断」（桜井）「オシメカバーの悪用」（大塚）や、「座敷牢の麗軀」「雨装束とチューリップ」「女体逆さ吊り図絵」（梨花）というような作品は、テーマの持つ残酷さとか極度に屈辱的な処遇とか云うものを愉しむ作品になっているのです。

山路ミヨ子嬢の晒し者や四方嬢の乳房責めや東浦嬢の調教という作品も、ムードはあり将来を期待できますが、表情にもう一步の工夫が欲しいのです。実際には、苦痛を受忍すると睡いような表情になるのが普通ですが、瞳を活かした苦悶の演技ができるかどうか

モデルの優劣を決めると思います。

昭和36年9月号

悦虐プレイというよりはリンチや拷問というべき作品が多く、その意味ではすっきりと娛しめます。美人と云える梨花嬢を中心に、新鮮なモデル嬢を思い切り残酷に扱うのも見事です。吊責めを好む梨花嬢や女奴隷志願の東浦嬢とは云いながら、髪を乱しての荒縄縛りの拷問など、汚れ役での大奮闘は嬉しいものです。

他方大塚嬢が美しい表情の変化を誇り、凌辱の幻想を抱かせてくれるのは、KKと切離せないベテランモデルだけに、演技の中の広さを感じ楽しくなります。

9月号も佳作が多くありました。「手足吊り」（絹川）、「逆さ吊り」（梨花）、「鯨縛り」（愛川）、「美しき吊人形」（大塚）「恐怖の塩水」（梨花）、「海老責」（東浦）、「ローソクの拷問」「柱と荒縄」（梨花）、「逆エビ縛り」「彫像」（大塚）、「珍妙な飾物」「鼻責め二題」（東浦）、「花羞しき」（大井小夜子）等々の諸作品で、「手足吊り」「ローソクの拷問」「彫像」が、それぞれのモデルを活かして、特に

すぐれていたと思います。

昭和36年10月号

10月号のグラビアは、「お仕置」ムードというか、とにかく女奴隷の若くて美しい忠実な姿態がいっぱいで、愉しみでした。

まず大塚嬢が貫禄充分で、豊かなヴォリュームと艶を誇り、女体の美しい悦虐性を見事に展開してくれるのです。「輾転」「さるぐつわ愁顔」「首の下に」は秀逸。「洋服簞笥の娘」も新鮮で可憐な姿態美があります。

次には桜井嬢の「豊満美の縦縄」が佳く、このヴォリュームと柔らかみで演じる女囚や女奴隷は、他の追蹤を許さないものです。

女奴隷の東浦嬢も活躍しています。「私の愛読雑誌」では小道具のKKと、乳首と鼻を挟んだクリップが利いています。野暮ったい着物や豆絞りの手拭が古風な縄目と責め具の竹棒にマッチして効果を収めているのです。

「硝子戸の彼方」もなかなか残酷な縛りですが、「鼻輪の引廻し」は面白いフォトで、前縛りが却って佳く、表情も観念と屈辱、羞恥と喜悅が感じられる初々しいものでした。

絹川嬢の折角の「片足吊り」「浣腸責め」も、10月号ではサディスティン役ほど精彩は

ありませんでしたし、期待の美女梨花嬢も、「自白の強要」が特に充実してただけに、「美の冒瀆」は、なくもがなの作品でした。「美しい玩弄物」は幻想的作品、「灸責め」二葉はリアルの内にも夢のある作品として、梨花ファンには歓迎されるかも知れません。

昭和36年11月号

正直な所、この号は大塚・梨花のトップ争いという所です。一年足らずにここまで生長した梨花嬢の素晴しさは驚ろくばかりです。梨花嬢の代表作と云えるのは「涕泣」と「責めに憑かれて」の二作であり、それに加えて「庭園の美観」「美しき干物」「人身御供」という吊り責めのフォトが、発表されています。唯、吊り責めのフォトは、完全な吊りで苦痛が大き過ぎたのか、それとも憧憬の吊りに陶醉したためか、表情が恍惚としていて、ドキリとさせられる要素が乏しいのです。私の好みからは「涕泣」が第一位で、所謂「縛りの無い縛りフォト」という新しい試みの成功と云えますが、この種のもものは、モデルを選ばないとマイナスにしかならないものなので、なかなか困難の企画と思います。「責めに憑かれて」は烈しい苛責の労作で、ギリギ

リの極限まで責め上げた姿態は独特のもので、清浄可憐な残酷美と云えるでしょう。

梨花嬢の活躍に対して、巧まずして実力を感じさせるのは大塚嬢です。彼女が肥満体と呼ばれるか否か分かりませんが、彼女の肉体美は弾力に富んでいると私は思うのです。

「燭台」では縛りが見えず、ヒップの美しさが誇示されているのを別としても、「膚はコードにくびれて」「エビしばりプレイ」「バンドの猿轡」等々、嚴重な縛しめを弾ね返すような女体美は見事です。しかも被虐に身を委ね、反抗し、苦悶し、愉悦し、陶醉する表情の佳さは、安心して見ていられます。何よりも鞭が佳く、またお化粧も洗練され、眼鼻立ちの明るい持味も得難いもので、以前無茶な縛りや責めに耐えた人だけに、猿轡や首提ちの演技も素晴しく、その意味で「バンドの猿轡」の本格的責めが第一位と思います。

この二人の活躍に花を添えて、絹川嬢の「ゴム布の嵌口」四葉と、桜井嬢の「豊満と乳房」の上段二葉が、精彩を放っています。上品な被虐美や個性豊かな裸身を最大限に駆使した残酷など、読者の好みに従って、アツピールも違うでしょうが、それでも奇クの誌上で読者の好評を博すモデルは限定されたよ

うです。大塚・愛川・絹川・四方・梨花・東浦という諸嬢が、佳作出演の常連という所で新鮮なモデルの出現がない限り、この状況は変わりそうにありません。

昭和36年12月号

流石に梨花嬢の吊り責めは素晴しく、独壇場という所。「揺れる女体」の逆さ吊り八葉は圧倒的残酷美と云えます。サポーターで股間を覆ったことも面白いし、全身が真逆様に伸びきって、吊上げられる瞬間の表情が見事です。この作品の美しい出来栄は、梨花嬢なればこそで、デヴィウ当時よりもポツテリと肉づいた裸身が一層好感を呼ぶのです。

「宙に耐える」五葉は、11月号の「責めに憑かれて」の完成で、四肢を手摺に縛りつけられ宙に浮いた美少女とも云える清楚な女体を踏みつけた黒帯で喉を締上げたり、半死半生の眼に遭わせる暴虐に曝すのです。そしてそれが少しも醜悪にならず、全身が美しい苦悶に輝いているのは流石と云えましょう。

更に「美しき女囚吊り」「回転する囚衣」がスケールの大きい責めです。囚衣で棒縛りにされ、その姿で松の樹に吊られ、丁度十字架にかけられたように、完全な宙吊りです。

梨花悠紀子の表情



すべての縄目は喰込み、荷重は股間にまで及んでいます。これが苦しくない筈はなく、流石に演技でない苦渋が梨花嬢の全身から発散しています。

「喘ぐ猿轡」（絹川）は、美体の動きが妖艶で、口の中に押込まれた布片も多く、息づまのような完全な嵌口が美女の全身を輝やかせていると云ったポーズです。絹川文代というトップモデルの実力の一端を覗かせた作品と云えるでしょう。

「縛り過程の變化」（大塚）は六

ページに亘って、肉体派モデルを後手高手小手に縛り上げ、首縄を締めつけ、足首を括って繋ぎ止める手順を、過度と思うほどに丁寧に綴っています。緊縛に陶醉し、被虐に瞳を輝やかす女体の變化を美しく表現するのやはり演技力を持つ実力派モデルの大塚嬢なればこそと云えるでしょう。

この12月号に、読者から飛込んだ被縛モデル竹野ひろ子嬢の紹介記事がフォト入りで掲載されています。古川裕子に共鳴し、本格的猿轡やゴム布に憧れる悦虐性は、大いに期待されます。スタイルもよく、ヴォリュームも適度なので、思いきった責めを加えて、マゾの喜悦に悶えさせてやりたいものと、楽しみにしています。

昭和36年の総まとめ

この年は、後半に至って、憂愁の美女梨花悠紀子の圧倒的成長によって、見違えるほどの充実を示しました。小柄な女体ながら、単に四畳半の遊戯でなく、伊吹真砂子を凌ぐスケールの大きい責めを受忍してくれたのは、作品の質は別論としても、素晴らしい収穫でした。この新人の活躍に刺激されたのか、優秀な資質を誇る先輩モデル嬢たちが、洗練された姿態美を見せ、また新しいモデルを女性愛読者の中から幾人か引き出して来たのです。

昭和36年の優秀作品を選んできると、梨花嬢の体当りを中心にした下半期が圧倒的に充実しているのです。勿論撮影時と発表時とは違い、同種の作品が幾回かに掲載されることがあるでしょうが、この下半期に佳作が集中したのは、その背景に愛読者の強い要求があったとも考えられます。

ベスト10を選ぶ基礎として、各号からの優秀作をピックアップしてみます。

- 1月号 革製嵌口具装着（大塚）
- 2月号 凝視するもの（加茂）
- 3月号 微風に揺れる像（桜井）
- 4月号 光と影の悪戯（加茂）

5月号 苦痛(四方)

6月号 高手小手(梨花)

白く輝やくもの(東浦)

7月号 惑溺の瞬間、甘美な仕置(梨花)

さるぐつわ哀歎(四方)

8月号 オシメカバーの悪用(大塚)

女体逆さ吊り図絵(梨花)

9月号 手足吊り(絹川)

逆さ吊り、柱と荒縄、ローソクの

拷問(梨花)

海老責(東浦)

10月号 豊満美の縦縄(桜井)

自白の強要(梨花)

11月号 涕泣、人身御供(梨花)

バンドの猿轡(大塚)

ゴム布の嵌口(絹川)

12月号 宙に耐える、女囚吊り(梨花)

喘ぐ猿轡(絹川)

これらの諸作品の中では、やはり梨花嬢の活躍が眼覚ましく、しかも彼女の好みの吊り責めが多いことも注目されます。確かに吊り責めは、殊に逆さ吊りにおいて、それを実行したと云うことだけでも素晴らしい業績です。それだけに演技として観賞することが躊躇されますし、梨花嬢の表情が余りにも真実の苦

悶を表現しているのか、陶醉にひたっているのか、芸術を感じさせる変化に乏しいと思うのです。例えば、6月号「猪吊り」や11月号「人身御供」が完全に吊られた貴重なフォトでありながら、9月号「手足吊り」(絹川)に及ばないと思えるのです。受ける苦痛が極度に激しいと被虐者は眠ったような顔になるらしいのですが、それでは折角の労作の評価にマイナスで、その意味から、私は梨花嬢の吊り責めフォトを思いきってはずしました。

8月号「女体逆さ吊り図絵」、9月号「逆さ吊り」、11月号「人身御供」、12月号「女囚吊り」はいずれも惜しい作品ですが落としました。これらは3月号「微風に揺れる像」(桜井)の圧倒するような迫力に及ばないのです。桜井嬢のこの作品は、前年の「木洩れ陽」と同系統の作品であり、彼女はこれを凌ぐ作品がなかったので、残念ながらベスト10に入れませんでした。桜井嬢の豊満な女体の吊り責めは、余りにも強烈な魅力を持っています、それとの比較では大部分が敗れてしまいます。

エキゾチックな美貌で期待された加茂嬢の作品「凝視するもの」(2月号)と「光と影の悪戯」(4月号)は、彼女の瞳の輝やきや

肢体の美しさで独特のムードを醸しだす佳作でしたが、今一步、迫力に欠ける憾みがありました。

梨花嬢に続いて「私を責めて下さい」と登場した東浦嬢は、女奴隷らしい献身のポーズで活躍し、6月号「白く輝やくもの」、7月号「燭台」、9月号「海老責」などの佳作を生んだのですが、瞳は勿論、顔の表情もまだ判然と出なかったため、折角の肉体美も活用しきれません。肉体的に苛酷な拷問よりは、屈辱を受忍させるような精神的苛責を加え、表情の変化を愉しむのが本筋でしょうし、畜化や晒し責めや浣腸が好適でしょうが、まず顔を露わにすることが先決だと思います。

小粒ながらキリッと引締った感じの佳作を発表して来た四方清美嬢も見落とせないモデルです。若妻の悦虐プレイというムードで貫かれる一連の作品の中で、襲われ、鞭撻たれ、猿轡をはめられ、いたぶられるというポーズをリアルに演じているのです。彼女の持つ明るい清潔感が第一に尊いものと思いますし、その意味で佳作は多いのですが、1月号「香りある息吹」、5月号「苦痛」、7月号「さるぐつわ哀歎」などは代表的でしょう。殊に1月号の作品で、猿轡をはめられ、口の

竹野ひろ子のムード表情



中に布片を詰込まれた女体の喘ぎは見事でしたが、全身を悦虐プレイに委ねきっている感情は7月号によく現われています。そして作品の持つ迫力は1月号の方が強烈なのですが、彼女の作品を総合評価して、7月号の姿態を代表作に選んでおくことにします。

猿轡という点で、1月号「香りある息吹」を凌ぐ作品は、そう多くありませんでした。1月号と10月号に発表された大塚嬢の本格的

で強烈な嵌口、11月号「ゴム布の嵌口」(絹川)と「バンドの猿轡」(大塚)、12月号「喘ぐ猿轡」(絹川)や9月号「彫像」(大塚)くらいのもので、大塚嬢の体力や忠実な被虐性が目立ちます。よく、肺重で呼吸もままにならない猿轡の身悶える苦痛と歓喜が云われますが、猿轡のフ

ォトには、瞳の輝やきと全身の喘ぎが見られなければいけません。その点で絹川嬢は抜群の演技を見せ、12月号の「喘ぐ猿轡」は昭和36年中に発表された彼女のフォトの代表的なものと言えらるでしょう。他方、大塚嬢の猿轡フォトは、彼女の肉体美にマッチした妥協のない嵌口が要求され、息詰まる実施が見られます。9月号「彫像」は彼女独特の被虐美です。傑作と言えらるでしょうが、惜しむらくは

下腹部から脚部はカットされ、髪もカットされているので、中途半端な感じがします。むしろ、猿轡だけを注目したアップがよかったのではないのでしょうか。それに彼女の豊かな裸身に対する拘束も、余程思いついて施さないと弱くなるのです。大塚嬢については1月号と10月号を総合検討して、1月号の「表情とアップ」に集約評価したいと思うのです。できればこの一葉に、「どうしてこんな」を加えたものを、この一連のものの代表にしたいものです。それと同時に、彼女の豊かな女体の弾みに対する嗜虐を買って11月号「バンドの猿轡」を残してみました。

ベスト10に絞る場合、違ったモデルが同種のテーマで演技するケースでは、相互に比較検討することが必要となるでしょう。その典型が7月号「ゴム帽子、惑溺の瞬間」(梨花)と8月号「オシメカバーの悪用」(大塚)それに多少変った感じの11月号「ゴム布の嵌口」(絹川)の三作品の競艶です。いずれも美体のモデルであり、文字通りの緊縛もよく、甲乙つけ難い所ですが、責め手の存在と云うことと悦虐の陶醉を買って、前二者を残して比較してみました。瞳が活きている絹川嬢も「喘ぐ猿轡」の成熟が勝っているので

す。同じいたぶりでは、体力に勝る大塚嬢の方が耐え易い理屈か、それとも梨花嬢の感受性が鋭敏で、被虐の幻想に耽溺し易い道理か、「惑溺の瞬間」の右上の一葉が最高のフォトと云えるでしょう。結局、この姿態の柔軟さ、忍従の喘ぎ、膚の美しさ、キツチリ喰込んでいる縄目、責め手の男性や背景の明るさが物を云って、7月号の「惑溺の瞬間」を選びました。

後に残ったのは梨花嬢の傑作フォトばかりで、それを各観点から絞ってみましょう。まず清らかな持味をフルに発揮した被縛フォト6月号「高手小手」を買います。この種のフォトでは今までで最も洗練されており、モデルの匂うような美しさと優しさで、立派な芸術品になっています。

このエレガンスに対して、汚れ役の荒縄縛りでは7月号に「甘美な仕置」と「荒縄」、9月号に「柱と荒縄」があります。この作品は、女体の胸許から石を吊るすアイデアを活しきれなかったり、荒縄で雁字搦目にした女体を竹棒でこじったり突上げたりする拷苦も表情を充分に掴み得ず、清楚な美女と囚衣、荒縄の醸し出す惨虐の痛々しさが弱いのです。いろいろ勘案した結果、9月号の「ロ

ソクの拷問」に集約して整理してみました。

梨花嬢の吊り責めを落としたのですが、梨花嬢には、苦痛の激烈な拷問をリアルに受忍して貰っており、この境地では他のモデルに真似られないファイトと被虐性を持っていますので、その代表作として12月号「宙に耐える」を採りました。11月号「責めに憑かれて」と同系統であり、その完成品と云うべき作品です。

梨花嬢の成長を論じる場合、必らず話題に出そうな組写真が、9月号「恐怖の塩水」と10月号「自白の強要」でしょう。責め手に憎悪が乏しく、彼女に背筋を走る冷い恐怖がなく、愛情に基づく合意の拷問プレイというのが実感です。説明文を俟つまでもなく、彼女の表情には責め手への信頼感が溢れ、それだけでも優秀な作品と云えます。しかしそれがまた弱味となっており、前者では土瓶より薬缶か一升ビンにジョウゴなどを使った方がよく後者でも縄目の変化や布団を拷問台に変えるような配慮が欲しいと思うのです。それと梨花嬢の髪の活かし方を考えないと、低級なフォトに堕してしまう危険があり、この組写真の集約として、11月号の「涕泣」を選びま

す。「涕泣」の持つ新鮮さ、企画も演出も演技も見事に結晶して、梨花嬢の忘れられない名作となるでしょう。

以上の結果、私が選んだ昭和36年グラビア悦虐フォトのベスト10は次の作品でした。

- 1、涕泣（梨花） 11月号
 - 2、表情とアップ（大塚） 1月号
 - 3、宙に耐える（梨花） 12月号
 - 4、高手小手（梨花） 6月号
 - 5、惑溺の瞬間（梨花） 7月号
 - 6、手足吊り（絹川） 9月号
 - 7、喘ぐ猿轡（絹川） 12月号
 - 8、パンドの猿轡（大塚） 11月号
 - 9、ローソクの拷問（梨花） 9月号
 - 10、さるぐつわ哀歎（四方） 7月号
- 最後に蛇足ながら、未見の方にお奨めしたい作品を挙げて擲筆します。
- 微風に揺れる像（桜井） 3月号
- 逆さ吊り（梨花）海老責（東浦） 9月号
- 女囚姿の吊り（梨花） 12月号
- （おわり）

× × × × ×

「長篇SM小説」

宇宙のどこかで

△或る混血老婦人の話▽

佐 治 麻 造

ある混血老婦人の話 (二十)

「ローラの奴、檻にぶち込んでやったわ。後手のままで残り物を喰べさせてやったの。世にもみじめな顔してたわ。後手錠を外してくれて檻の鉄格子に顔を当てて泣いて頼むのよ。顔に唾を吐きつけてやってさ、手錠の鍵を檻の外の眼の前において来てやったの。ああ面白かったこと!!」

ジミーに作らせたカクテルに頬を染めたシルヴィアは寝室に入ってきて、エヴァの傍に横になった。

「けど、ボスはどうして来ないんだろ。電話かけたら、叱られるだろうねえ」

シルヴィアは乳房を両手で押えて微かに身もだえした。

「ねえ、エヴァ……」

身をすり寄せたシルヴィアは片手をエヴァの体に延ばし、片手でエヴァの手を握った。しかし、愛し児や夫や、そして両親のことを想い想って居たエヴァは、其の手を振りのけて寝返りを打って涙ぐんだ。

「フン!!」

エヴァの腰のあたりを抓ってシルヴィアも背を向けた。湖の向うの山脈から細い月が昇った。

翌朝、シルヴィアは化粧品を買いに行く事をジミーに命じた。

「そんな物を買に行ったら、どんな事で足がつくか知れませんぜ。一応の物はたっぷり準備してあるんだから、あるもので我慢して下せえよ。ね、そうでしょう？ エヴァ」

ジミーはぶつぶついい乍ら自動車を駆って出て行った。

「さあて、と……。退屈しのぎに痛めてやるかな」

シルヴィアは裾を翻して立ち上った。昨日のとは別の新しい部屋着だった。地下室からローラを曳き出して庭に立たせる。生理的要求を堪えるローラの額には脂汗が滲んで居た。

奴隷娘が呼ばれ、エヴァに嵌められて居た腰枷と足鎖が施された。自分から進んで足首に鉄環を嵌める奴隷娘の哀れさをエヴァはいじらしく眺めた。

「私も以前には女奴隷に、平気で鎖をつけたりしてたんだわ。今はとても可哀想で出来ないけど。由美とかいったっけ、辛かっただろうねえ。今どうしてるかしら？ 私を恨んだ事だろうねえ」

夫と共に過したジャブー国での事を想ってエヴァが追憶に耽る間に、ローラと奴隷娘は腰を連鎖され、ローラの後手錠が外されて腰枷の後ろにぶら下ってカチャンと鳴った。

「手首を揉んでないで、手をお出し。」

シルヴィアの手にきらりと光る手錠を見たローラは唇を噛んで頬を震わせた。三日前迄は自分が腰の革サックに入れて居た愛用の品なのだ。其の手入れは女囚達にもさせないで自分で磨いた手錠だった。ローラは余りのみじめさに両腕を垂れたままためらった。

「手をお出しといってるのよ。」

シルヴィアの右手が矢庭に動いて握った手錠の環がローラの横面をしたかに打った。短い鎖で垂れたもう一個の鉄環がローラの額の

あたりに当って揺れる。痛さに呻いたローラはおずおずと両手を揃えた。両手首の痛ましい手錠痕に、ローラは顔をそむけて嚙り上げた。

「手の甲を上に向けて出すんだよ、馬鹿!! さんざん私達にそういつて叱ってたじゃないの。そうそう……」

右手首に鉄環が当てがわれ、更に強く押されると環の下半分がバシッと鳴って、三六〇度回転しカチャッと錠の部分に下側から喰い込む。ローラは我が身のみじめさに身を揉んで切ながった。

「じっと出来ないの？ 左手をちゃんと力を入れて出してないと嵌められないじゃないの。お前の手を握るなんて、私は嫌だからね。」ローラの左手首にも鉄環が嵌まり、鎖を握ったシルヴィアがぐいぐいゆする。

「ウッ。いたい……」

傷ついた両手首を、更に鉄環でこすられたローラが呻いた。

「そうして働かせてやるからね。フッフどんな気持？ 何とかいつてごらんよ。」

ローラと連鎖されて横に立っていた奴隷娘が、シルヴィアに両手を揃えて差出した。

「フッフお前はいいのよ。此奴に仕事を教えてキリキリやらせておやり。いうこときかなかったら撲ってもいいわ。手に余ったら、私をお呼び。」

「……あの……奥様。家の中の仕事が残ってるんですけど……」

奴隷娘が悲しげにいった。

「それは後回しにおし。」

奴隷娘は暫くためらっていたがローラも振り向き乍ら黙って歩き

出した。小柄で脚の短い彼女の足鎖は足首の所で長く折れ曲って地面に引き摺られている。連鎖ががっと張ってローラはよろめき、脚を踏み出して更によるよろした。

「どう？ 足鎖って重いだろ？ 歩き易いもんじやないわね。フフ」

足鎖をジャラジャラともつらせ乍ら、奴隷娘に追い付いたローラは、堪え切れない様子で喘ぎ喘ぎ何かいった。奴隷娘は少し困った様に見回して居たが、やがてローラを引張って門の外へ連れ出した様子だった。

其の日の午後、一癖ありげな医師がやって来て、シルヴィアとエヴァの鼻環の孔を整形手術し、枷や鞭の痕を手当して呉れた。

夕食を共にした医師が帰ると、シルヴィアは又ぞろローラをいたぶり初めた。ジミーが帰って来て抗議したので奴隷娘の足鎖だけは除かれたが、ローラは手錠足鎖のまま家内外の仕事を奴隷娘と一緒にやらされていたのだ。

「ローラ、じやなかった二〇七号。ここへ来て私の脚をお揉み!!」

ローラは口惜しげにシルヴィアの足許にうずくまった。

「どう？ よく働けたかい？」

「……」

ローラの横顔が歪んだ。

「何とかいったら、どうなの!!」

シルヴィアはローラの手錠を握って力一杯締め上げた。すべて、ローラにされた通りにしないと気が済まないのだ。ローラが指を反らせて呻いた。

「あら、未だ大分締めつけしろがあったわね。しまったわ。それに

ちよいちよい見てたけど、お前は殆ど何もしないで、うろうろしてただけじゃないの。」

シルヴィアに煙草の火を腕に押し当てられて、ローラは飛び上ったのけぞった。手錠がガチガチと鳴り、エヴァは思わず口を出しかけて思い止まった。

「姐御。そろそろ連鎖を解いてやっておくんないよ。こんな小娘にお役人の婦人をこき使えってのは、どだい無理というもんでさ。それに、娘にや私が用がありますんで。へへへ……」

「そうかい。じや……」

シルヴィアは鍵をほうり出してカクテルグラスを呻った。

「……お願い……少しも手錠、弛めて……」

ローラの哀願に、シルヴィアは眼を細める。

「よしよし。外して上げるわ。」

ローラの両手に喰い込んだ手錠を外したシルヴィアは、ガチャリとテーブルの上において、更にグラスを持ち上げた。

「姐御。今日鼻の手術したんでしよう？ 酒は毒ですぜ。」

「フン。生意気な若僧ね、お前は。けど可愛いところあるよ。化粧品を方々探し回って買って来て呉れたんだからね。ちよっとお待ち。

此の女を始末したら踊って上げるから。レコードは、どんなのがあるの？」

グラスを呑み干したシルヴィアは、ゆっくりと立ち上って再び手錠を握ってローラを見下ろした。手錠を嵌められたローラの右手が引張り上げられて右肩越しに背に回され、左手が下から背にねじ上げられる。悟ったローラは悲鳴を上げて喚き赦しを乞うた。

「泣いたって駄目よ。もっと泣いてごらん。フフフ、お前の手、案

外短いんだねえ。届きやしない。」

シルヴィアは力任せにローラの両手首を背中上下から近付け、左手首に当てがった環を閉めてギリギリ鳴らせた。悲痛な呻きを低く洩らすローラの額に、そして上半身に脂汗がみるみる滲み、肩の辺りがポキポキ音を立てた。

「お立ち」

容赦なく追われたローラは、奴隷娘が解かれた連鎖を腰に引き摺って、呻き苦しみ乍ら、地下室の檻へと急ぎ立てられて行ったのだった。

戻って来たシルヴィアは、ジミーを抱いて踊った。一しきり踊り終えた彼女は頬を紅潮させてソファに身を投げた。

「どうも未だ、脚がうまく動かないわね。何だかブーツとしちゃって……」

とコーヒーを啜る。ジミーが精一杯の身のこなしでエヴァを誘ったがエヴァは微笑して頭を振った。

「おいしいわねえ。どんなに飲みたかったことか……」

二杯目のコーヒー茶碗を奴隷娘から受け取ってシルヴィアがいった。

「看守室へ使役当番で行った時なんか、香りを嗅いだだけで頭がクラクラしたわ。嵌口具嵌められて盗み飲みも出来ないし。一口でも飲ませて呉れたら、どんな事でもすると思ったものよ。」

シルヴィアは思い出しては齒ぎしりした。

エヴァも手の甲の火傷の痕を見詰め乍ら想い出した。看守室の隅のコーヒー沸し器から淹れてローラに差し出したエヴァは、受血が僅かに汚れているとて、そのまま捨てさせられ、そして両手の甲に

タバコの火を代る代る押し当てられたのだ。

「床の磨き方が悪いから性根を叩き直してやるって、背や尻を剥かれて鞭打たれた挙句、其の看守に冷たい飲物を運ばされ、そしてその鞭を磨かされた事もあったっけ……」

エヴァもあれこれ思い出して胸を熱くしたのだった。

ある混血老婦人の話 (二十一)

翌朝ローラを曳き出したシルヴィアは、居間から見える庭の一隅に百個ばかりの煉瓦を積ませた。一晩中、鉄砲手錠で放置されたローラは、体を動かす度に苦しげに呻いたが、シルヴィアは容赦なく鞭を振り上げる。

「積んだかい？　じゃ、それを向うの樹の根元にキチンと積み上げるのよ。」

シルヴィアは三十米ばかり離れた榆の樹を指さした。

「積み終わったらいいって。検査してやるからね。そしたら、又ここへ運んで積み上げるのよ。それを今日一日中おやり」

ローラは世にもみじめな顔をしてシルヴィアを見上げた。

「えーと、一往復一時間として……、十回往復したら今日の苦役は終りよ。フフフ。あ、忘れるとこだったわ。手を出して」

シルヴィアが取り出した手錠を見て、ローラは顔を歪ませ今にも泣きそうにしたが、それでもおとなしく両手を揃えた。シルヴィアは楽しげにローラの両手に手錠を嵌め、更に小さな錠を取り出して手錠の鎖の中央を首環の咽喉の所の金具に連絡してカチリといわせた。

「さ、おやり。フフフいいさまね。いっとくけどサボったら鞭よ。」

日の暮れない中に十回やらないと、今夜も、両手を背負わせるからね。」

微かに歯がみしたローラは足鎖を鳴らして立ち上がり、そして腰を屈めて最初の煉瓦の一個を両手で顎の下で支えて持ち、よろめき乍ら榆の樹の方へ歩き出した。往復するうち、ローラは堪え切れないうちに立ち止って喘いだ。一昨日から嵌められたままの鉄枷に痛められた足首が苦痛なのだ。抱えた煉瓦が音を立てて地に落ちローラはあわてて跪ずいて漸く抱え上げて更に呻いた。

「どう？ 足首がちよっとは痒くなっただかい？ 私達の苦しみが分ったろ。」

鞭を片手に庭の芝生に立って眺めて居たシルヴィアが眼を細めて愉快そうにいい捨てて、居間に戻って安楽椅子に腰を下ろした。

「ジミー。ニュースで何かあったかい？」
「明るい声でシルヴィアが訊ねる。」

「嚴重に捜査を続けるって言ってましたぜ。」

「それだけかい？ ホホホホ」

シルヴィアは奴隷娘に手足の手入れをさせ乍ら笑いこぼれた。

足鎖を引き摺り乍らローラが居間の庭先にやって来て喘ぎ喘ぎいった。

「調べて下さいな。」

シルヴィアの眉がキリキリと吊上って、

「何よ!! その口の利き方は。跪ずいて、ちゃんと申し上げるんだよ。よく知ってるだろ？ 馬鹿だねえ、女囚の癖に。」

ローラの眼に口惜し涙が光ったが、彼女はいわれるままに膝を地についた。

「……二〇七号は……」

ローラはいい掛けて唇を震わせ、更に頬を濡らした。

「……二〇七号は、煉瓦を積み終えました。検査して下さいまし」
シルヴィアは満足そうに笑うと、鞭を片手に庭に降り立った。やがて鞭音と悲鳴が二、三度響いた。

「あらを見付けて難癖つけるのって面白いわねえ。」

居間に戻ったシルヴィアの声を聞き乍ら、エヴァは書物から眼を上げて庭を見た。丁度ローラが立ち止って苦痛に喘いで居る所だった。

「私達も、あんな風にされたんだけど、しかし可哀想だわ。」

エヴァはそう思い乍ら再び頁に眼を落した。

「エヴァ。本ばかり読んでないでさ、カードでもしない？ 私、そんな本は応接間の飾りにしておくものだとはかり思ってたわ。矢張り読む人も居るのね。」

エヴァは苦笑いして書物を閉じ、配られたカードを手にした。ローラが額に脂汗を浮べ、囚衣を汗で肌へばりつかせて、ふらつき乍らやって来て検査を哀願した。

「ちよっとお待ち」

シルヴィアは冷然と見向きもしないでカードを切った。

「あの……お願いです。早く検査して下さいまし。思ったよりも時間がかかるものですから……。おいしいつけの十回をするには、時間が足らなくなってしまうです。」

「うるさいわねえ。黙って坐っといで!!」

シルヴィアは、それでもやがて立ち上って庭に降りて行った。おそい昼食を済ませてシルヴィアは、ジミーに案内させて湖畔の

散歩に出掛けて行った。名作に読み耽っていたエヴァは鎖の音に眼を上げた。庭先に現われたローラが、シルヴィアを探して喘ぎ乍ら跪ずいている。

「済んだの？」

「ハイ」

「シルヴィアは出掛けてるのよ。どうしようかしら？」
エヴァは暫く迷った末、立ち上った。そのまま黙認してもよかったのだが、この意地悪かった婦人看守に君臨して見たいという気持は、エヴァにしても抑え切れなかったのだ。

「何回目なの？」

榆の樹の反対側に積まれた煉瓦を見下ろし乍らエヴァは訊ねた。

「五回目ですの……」

「嘘おっしやい!! 四回目じゃないの。」

エヴァは少し語気を荒げて叱りつけた。

「私だって数えてるのよ。誤魔化そうたって駄目よ」

ローラは肩を落してうなだれた。

「私達がそんな事したら、あなたはどんな罰を私達に加えたか覚えてる？」

ローラは、震え乍ら跪ずいて赦しを乞うだ。

「お赦し下さいまし。私が……二〇七号が悪うございました。」

「そう。そんなに謝るなら私は赦して上げるけど、シルヴィアがどういいうかしら。」

手錠を首環に短く繋がれて顎の所で合掌しているローラの両手の指先に滲んでいる血を見下ろし乍ら、エヴァはわざと意地悪くいつてやった。ローラの両眼が恐怖で見



開かれる。

「それだけは……。赦して下さいまし。あなたが鞭打って下さってもいいんです。あの人にだけはいわないで……」

「ホホホ。あの人がそんなに恐いの？ 私ほね、自分が鞭打たれてよく知ってるから、他人に、鞭を当てる気にはとてもなれないのよ。じゃ、いわないで上げるから一生懸命おやりなさいよ。」

ローラの眼に安堵と、そして微かに後悔の色が浮んだ。

「それはそうと、この積み方は少し乱雑ね。お直し!!」

エヴァにぴしりといわれたローラは、跪ずいたままにじり寄って上体を倒し煉瓦に指を掛けて呻いた。既に何百回も曲げた腰が痛いのだ。エヴァにはよく分っていた。

「そんなものでいいわ。堪忍したげる。けど手首痛いでしょう？ 指は未だ思い通りに動くの？」

「ハイ。もう、手が千切れそうなんです。それに歩く度に足首の骨が飛び上がる程ずきずきして……」

「そうお。一カ月もしたら肉が固くなって楽になるわ。あんた私達にそういったでしよ？口惜しくて情けなくて、それに痛くて寝られなくて独房の床を私、のた打ち回って呻き苦しみ通したのよ。その中に腰枷で腰骨のあたりが堪らなくずきずきし出すわ。そして両脚の外側が鎖でしよ中、打れるもんだからはれ上って来るわよ。」

如何に哀願を繰返しても逃れる術とてなく、どんなに苦しみ呻いたとて一片の憫れみすらかけては貰えなかった監獄の日々が、エヴァの胸中に甦って来て、エヴァは物狂おしくいい続けた。積み積った恨みが胸にこみ上げて来た。

「そりやね、あんた達看守は職務でやってる事は分ってるわ。手錠

も足鎖も規則で決ってるんだから、それはあんたにいったって仕方がない事よ。けど、もう少し憫れみを掛けて呉れてもいいじゃないの？ 特にあんたはひどかったわ。私には鬼みたいに思えたことよ。」

「……」

「分ったでしょう？じゃ、仕事を続けるのよ。鞭も当てないし、シルヴィアにも黙っててやるわ。私のお慈悲よ。」

いい捨てて立ち去ろうとするエヴァに、追い縋ったローラが哀願した。

「何か喰べさせて下さいまし。もうお腹が空いて……もう……」

「あら、そういえば、おひるに何も貰わなかった様ね。」

哀れみを催したエヴァは奴隷娘に命じて残り物と水を与えてやり居間に立ち戻った。ラジオがニュースを伝えて居た。

「………査当局は更に有力な手掛りを得て、捜査網を更に縮めた模様であります。なおこの脱獄はギャング団レイモンド一味が企てたものであることは略々明白ではありますが、それを立証するのは、現段階では困難であります。何れ脱獄女囚達が逮捕されれば、それが端緒となって永年に亘って法の網を巧み潜り続けて来たボス、カーク・レイモンドの逮捕も可能となる見通しで……」

エヴァは耳を掩うてスイッチを切った。

後悔と恐怖の念が又しても心臓を締めつけた。この身は、今や全国に指名手配されて居る身なのだ。晴れて歩き回る事はもはや出来ない体なのだ。肉親の事を思うと胸が締めつけられる思いだった。「坊や、許しておくれ。もう会える事はないのよ。若し会えたとしても、こんなお母さんには会い度くもないでしょう。」

エヴァはソファのクッションに顔を当てて身をもんで泣いた。い

くら諦めようとしても、愛し児を一目見たかった。夫の腕に一度だけ抱かれたかった。忽然としてエヴァは決心した。ここを逃げ出そう、力の続く限り歩いてどんな事してもロス市の両親の家へ辿り着き、想いを晴らしてから自首しよう。この電話は使う訳には行かないわ、シルヴィアに迷惑が掛ったらいけないもの。エヴァがよろよろと立ち上った時、シルヴィア達がはしやぎ乍ら戻って来た。

「靴はいて歩くの、何年振りかでしょ。妙な工合よ。」

シルヴィアは薄いコートを脱ぎ捨て乍ら、エヴァの様子をじっと見やった。

「あんた。又、妙な事考えて居たんだろ？亭主や子供に会いたくうずうずしてるんだろうけど、駄目よ。何度いったら分るのさ。嫌なら無理に仲間に入れとはいわないわ。客分になっておとなしくしてりや、その中、機会を見て会わせて上げるよ。」

エヴァは坐り込んで肩をがっくりと落した。

「それに何だわよ、こんな事いって何だけどさ、あんたの御亭主だって、もうあんたを待ってるとは限らないわよ。もう、他の女と一緒にになってるかも知れなくてよ。」

エヴァは息を飲んで顔を上げた。

「十年以上の刑を受けたら勝手に離婚されても文句いえないのよ。知らないのかい？監獄の奴等が、そんな事一々知らせて呉れはしないしさ、出て来て吃驚するのが落ちよ。」

エヴァの眼前が真暗になった。夫を信じてはいるものの、不安の渦があとからあとから湧いて来る。

「フフフ、何もあんたの御亭主が、そうしたとはいってないよ。あんたのハズは待ってて呉れるだろうさ。念の為に調べて上げようか

しら？」

エヴァは黙ってうずいた。おくれ毛がうなじで震え頭ががくりと垂れた。一時の感情の嵐が過ぎるとエヴァはすべてを諦らめた。

「もう私なんか、あの人の懐に帰る資格はないんだわ。立派な女の人と早く一緒になって幸福に暮して呉れたら、それでいいの。そして坊やだけは立派に育ててくれて……」

ローラが息も絶えに芝生を這って来て、細い声で煉瓦の検査を哀願した。

其の夜、ベッドに入る時、シルヴィアはエヴァの右手の手錠を嵌めた。

「何をするの!!」

エヴァは怒って手を振ったが無駄だった。

「辛抱おし。こっちの身が危くなるからね。あんたの気持が落ち着く迄は用心しなくちや。」

シルヴィアは、自分の左手にもう一個の環を、そっと嵌め乍ら片眼をつぶって笑い、顎をベッドの方にしやくったのだった。

或る混血老婦人の話 (二十二)

「あんたの心が見極めつく迄、鼻環を取って上げるんじやなかったわ。」

翌朝、明るい陽射しのさし込む寝室で、シルヴィアはお互いの片手から手錠を外し乍らエヴァにいった。

「もう大丈夫よ。私、昨夜は寝ないで考えたの。もう弱気は起さないから、こんな事しないで頂戴。」

「さあ、どうだかねえ、フフフ」

笑い乍ら寝衣を脱ぎ捨てたシルヴィアは、エヴァの頬を軽く打つと腰を振り振り浴室に入って行った。

奴隷娘にチャックを開いて貰って用を足したローラが、今朝も檻から曳き出されて庭先に連れて来られた。後手錠が外されて前で差出す両手に手錠を嵌めたシルヴィアが煉瓦の山を顎でしやくる。

「今日、今日もですか？」

「そうよ。当り前じゃないの。休ませる訳には行かないね。」

「堪忍して……。もう、体が動かないんです。赦して下さいまし。」

お慈悲ですから。」

「懲役囚が苦役を休めると思ってるの？」

シルヴィアは鞭をバラリと解き、ローラは顔をひきつらせておののいた。

「ずい分と顔が汚れてるわね。洗ったら、どう？」

ローラの顔にペッペッと唾が吐きつけられ、ローラは顔をそむけて低く唸った。

「今日は、手錠を首環に結ばないでやるわ。お慈悲よ。さあ、キリキリと働くんだよ。」

膝で歩いてにじり寄ったローラは、煉瓦の山に身を投げ掛けて暫くは鳴咽していたが、やがて立ち上って煉瓦を運び始めた。

「そのうちに慣れるわ。ずっとそうやって働いて貰うからね。」

云い捨てて立ち去るシルヴィアの言葉に、ローラは激しくしやくり上げた。

「その中に始末しなくちやいけないわね。」

居間に戻ったシルヴィアは、医師が呉れた錠剤を口に放り込み乍ら冷酷にそう云った。ノイロンと生理中絶剤との中和剤だった。

怠惰で退屈な日が暮れ、煉瓦の最後の一片を積み終えたローラは死んだ様に地面に横わった。

「検査だよ。お立ち!!」

死力を尽して漸く立ち上ったローラの前手錠を外したシルヴィアが顎をしやくる。ローラは悲しそうに両手を後ろに回して涙を流した。

「どう？ 情けないだろ？ 一日中、苦役に精根すりへらした挙句後手錠で檻にぶち込まれる気持は、どんなだい？」

ローラの腰枷の背後にぶら下った手錠が、冷たい音を立てて嵌まった。

「泣いたって嘆いたって駄目よ。規則なんだから。」

シルヴィアは嬉しそうに云って、ローラの背を鞭の柄で小突くのがあった。

夜が更けて、居間で書物に読み耽るエヴァをシルヴィアが寝室へ急ぎ立てた。

「私、もう少し起きて居たいのよ。」

「駄目。私のいう事をおきき！」

寝衣に着替えたエヴァは、シルヴィアが手錠を取り出すのを見て溜息をついた。

「堪忍してよ。大丈夫よ、逃げ出しやしないわ。」

シルヴィアは黙って頭を振ると、エヴァの右腕のゆったりした長い寝衣の袖を押し上げて手首に手錠の環を押し当てた。鎖を手首の外側にしてガチャンと環が嵌まる。

「嫌ねえ。女囚みたいじゃないの。」

「フッフ、今の所は、エヴァは私の女囚よ。あんたがもう少し品が

悪ければ、私も面白いんだけどねえ。」

シルヴィアは、肩からむき出しの自分の左手を持ち上げて其の手に嵌めた。寝衣姿の二人の女の片手宛を繋いだ手錠が、寝室の柔い照明にキラリと輝いた。

「明日の晩からはもう堪忍してね。お願い。冷たくて寝られやしないわ。」

軽い毛布を左手で胸に掻き寄せ乍らエヴァは云った。

「フフフ、せい沢云ってるわね。一週間前は、どうだったのさ。」

「そうねえ。今から考えると、あれでよく寝られたものだと思うわ。思い出しても、ぞっとするみたい……」

エヴァは泌々と云って体を動かした。手錠が掛毛布の下、二人の女の間でカチャカチャと微かに鳴った。

「こんなの私だって嫌よ。あんたにだけ嵌めてベッドに繋いどく事だって出来るんだけど、あんたに悪いと思って、私の手にも嵌めてるのよ。まあ、考えとくわ。どうやら覚悟も決った様だしね。」

シルヴィアは、そう云って白い右腕を伸ばして灯りを暗くした。

寝入ったエヴァは、シルヴィアにゆり起された。眼をこすろうと右手を動かしかけて、顔をしかめて左手を顔に持って行った。

「何なの？ 何時？ ねむいわ。」

「エヴァ。ちよっと起きてよ。私、トイレに行き度いのよ。」

「あまりお酒を飲むからよ。あ、そうなのね。手錠外したらいいじゃないの。」

エヴァは忌々しそうに呟いた。

「そうは行かないのよ。鍵は向うの鏡台の抽出にあるの。どっちにしても、ちよっと起きてくれない？」

「仕様が無いのねえ。そんなに引張らないでよ。痛いじゃないの。」しぶしぶ起き上ってついて行ったエヴァは、右手を延ばして半開きのドアの中に差し入れたまま、欠伸し伸し乍らシルヴィアの用が済むのを待って居た。

「エヴァは？」

「私は嫌よ。こんな恰好じゃ……」

エヴァはキツパリと云ったのだった。

翌日のひる前触れもなく二人の男女が車で乗りつけた。男はシルヴィアの情夫、ギャング団の黒幕のボスだった。庭でローナを痛ぶり辱かして居たシルヴィアは鞭を投げ捨てて化粧室に駆け込んだ。ボスはエヴァが想像して居たより遙かに色白のやさ男であった。渋い背広で長身を包み、跪ずいて迎える奴隷娘の頭を軽く撫でて音もなく入って来た。従う女性はシルヴィアより五つ六つ年下で、茶色の髪茶の瞳の中々の美人であった。口紅を一きわ濃く塗り直しドレスに着替えたシルヴィアが飛び出して来てひしと抱きついた。

「何をぐずぐずしてたの？ 会い度かったわ。もっと強く抱いて……」シルヴィアは全身をくねらせて、何度も何度もキスと抱擁を求めたのだった。

「所で、あのひとは何なの？」

少し落着いたシルヴィアが、茶の髪の若い婦人を見乍ら鼻にしわ寄せ、瞳をきらりとさせて訊ねた。

「お前知らなかったのかい。忘れたのかな。あれはマックの女さ。カモフラージュのために一緒に来たんだよ。」

「そう。本当かしら？」

ボスは苦笑いし乍らシルヴィアの首筋にキスしてやり、シルヴィ

アは軽く呻いてうっとり眼を閉じた。

「このひと、エヴァよ。私と一緒に逃げて来た……」

シルヴィアの言葉に、エヴァは立ち上って怪く会釈した。

「うむ。知ってるよ。」

ボスは頬に笑を浮べ乍ら、エヴァの頭の前から足の先迄ゆっくりと見回して首を微かに振った。

夕食が済むとシルヴィアは全身に媚を見せて身をくねらせ、人眼も憚らず男にしなだれかかった。

「ねえ、あんた疲れたら？早く寝たら……」

貫録を見せて落着いて居たボスは苦笑いし乍ら立ち上った。

「エヴァ、ローラの始末を頼んだわよ。」

シルヴィアは男にしがみつく様にして室を出た。

「今夜は、どうする？」

エヴァがわざと意地悪く訊ねると、暫くして廊下からシルヴィアの声が返って来た。

「ああ……今夜から堪忍したげるわ……」

エヴァは茶の髪の女性と顔見合せて苦笑いした。

「静かでとてもいい所ね。ここなら大丈夫だわ。私、ベス・コロネットよ。」

茶の瞳の若い婦人が話し掛けて来た。

「ボスの子分のマックと云う男と一緒になの。相当な顔らしくて贅沢させては呉れるけど、時々心配で堪らなくなるのよ。あなたは何の罪でぶち込まれたの？」

若いベスは、エヴァの事は殆ど知らないらしく、反逆罪と聞いて首をかしげただけだったが、其の方がエヴァにとっては却って気が

楽だった。

「マックは絶対に大丈夫だって云うんだけど、私、時々捕まった夢を見るのよ。監獄ってどんななの？辛いでしょう？」

「そりやもう、この世の地獄よ。人間扱いして呉れないんだものね。あなたも早く足を洗いなさいよ。」

エヴァは声をひそめて云った。

「もう駄目よ。私、いろいろなことさせられたもの。足に鉄丸をつけられるって云うけど本当？」

「それは大分昔の話だわ。今は鎖だけよ。けど、それでも死ぬ様な苦しみだわ。あ、ローラを始末しなけりや……」

エヴァはあわてて庭に出たが、ローラの姿は見当らずエヴァは色を失った。ジミーも泡を喰って奴隷娘を突き離して飛んで出て来た。話を聞いてベスも力を合せ、三人で広い庭中を探し回った。

「畜生。こりや、外に出たに違いありませんぜ。」

三人が門を出て湖の方を見ると、船着場の端にうごめく姿が、淡い月光に微かに見えた。

「あれよ。どうする気かしら？」

三人が走り寄るより早く、ローラの体は一回転して湖面に飛沫を上げた。

「畜生奴!!」

半裸体で飛び出して来たジミーは其のまま湖に飛び込み、やがてローラは三人の力で引き上げられた。

「重い筈だよ、こんなに鎖つけてちやね。」

ジミーが激しい息使いをし乍ら、足でローラの濡れた体を蹴った。

「何故死なせて呉れないの？殺して頂戴」

ローラは細い声で呻く様に云ってさめざめと泣いた。

「そうは行かねえ。」

ジミーがローラに後手錠を嵌めて担ぎ上げ、エヴァとベスは暗然とした面持ちで後に従った。ボスとシルヴィアの寝室は、この騒ぎをよそにカーテン一つ動かなかった。

檻に投げこまれたローラをそのままに、エヴァとベスは客用の寝室に入った。

「ずい分可哀想なことしてるのね。」

ブラジャーを脱ぎ乍らベスが云った。

「最新版」女体責写真五十粒選

A組五十集 大手札判印画紙(9×13種) 焼付

一組一枚	一五〇円
五組五枚	五〇〇円
十組十枚	九〇〇円
二十組二十枚	一、七〇〇円
三十組三十枚	二、五〇〇円
四十組四十枚	三、二〇〇円
五十組五十枚	四、〇〇〇円

A1	フミツケ汚辱縛り(新井)
A2	手吊り乳房責め(五月)
A3	ハリツケ猿ぐつわ(新井)
A4	全裸正面柱しばり(遠藤)

A5	亀甲強烈乳房縛り(遠藤)
A6	全裸手吊りムチ打(遠藤)
A7	豊満乳房いじめ(遠藤)
A8	乳房責め股間縛り(遠藤)
A9	鼻責鼻梁いたぶり(遠藤)
A10	全裸後手高小手(遠藤)
A11	膨隆臀部さらし(長野)
A12	全裸正面強烈縛り(長野)
A13	うねる緊縛裸身(長野)
A14	色禪の開股しばり(長野)
A15	正面縛蛙股ひらき(長野)
A16	裸自慢縛りヌード(長野)

A17	正面アグラしばり(長野)
A18	正面大の字開股縛(長野)
A19	還ましき裸しばり(長野)
A20	荒縄縛豆絞り猿轡(大塚)
A21	両手前縛り髪首絞(大塚)
A22	両手吊り股間吊り(桜井)
A23	両手膝下しばり(関谷)
A24	疼れんする裸身像(関谷)
A25	両股縄掛け開股縛(大塚)
A26	正面裸身強烈本縄(梨花)
A27	乳房晒し肉体自慢(長野)
A28	責衣にはみ出る肌(東浦)
A29	投げ出した全裸縛(長野)
A30	捕われの全裸緊縛(梨花)
A31	羞らいの両股縛り(大塚)
A32	猿轡乳房いたぶり(遠藤)
A33	荒縄全身縛り豆絞(大塚)

A34	盛り上る乳房縄目(長野)
A35	亀甲本縄鼻いじめ(大塚)
A36	ムチ打悶えポーズ(関谷)
A37	椅子またぎ汚辱責(東浦)
A38	縦縄股間縛り正面(関谷)
A39	ゴム猿ぐつわ全身(大塚)
A40	くさり乳房責め(長野)
A41	強制片足挙げ責め(大塚)
A42	正面乳房くびり縛(関谷)
A43	鴨居正面ハリツケ(梨花)
A44	手吊りパンティ落(絹川)
A45	白バンド後手吊り(東浦)
A46	豆絞り高小手呻(絹川)
A47	裸縛り鼻いじめ(梨花)
A48	ガンジガラメ立縛(愛川)
A49	亀甲本縄股間縛り(絹川)
A50	立木縛竹棒責め(桜井)

「私達もあの通りにされてたのよ。シルヴィアが明日どうするかしら？」

エヴァはそう呟いてベッドに潜り込んだ。

或る混血老婦人の話(二十三)

ボスが来た途端、シルヴィアはローラから関心を失い、其の翌朝ジミーから報告を聞いても笑っただけだった。エヴァはほっとしたが、ベスは少し物足りない様な顔を示した。ローラは其のまま檻の中に放置され、奴隷娘が時々何かと世話してやった。ボスは三日程逗留して独りで帰って行った。ベスはもう少し居たいと云って留ま

った。

「エヴァ。がっかりしないで聞きよ。あんたの亭主はね、とうに故国に帰ってジャブーの娘と結婚したってさ。子供はロス市に居るらしいわ。」

ボスが帰ると暫くは放心状態で居たシルヴィアが、やがて物うい調子でエヴァにそう云った。エヴァの心の中で何か切れ眼が暗くなつた。シルヴィアの言葉は嘘であつたが、エヴァには見抜けなかつた。純真な心を失わないで居たエヴァは、其の嘘を信じて泣き崩れた。ひそかに覚悟はして居たものの矢張り悲しかった。

「ね、だからあんたも、これから覚悟をお決めよ。太く短く面白おかしく送ろうじゃないの」

エヴァは知らなかつたが、其の頃新聞は自首をすすめる次郎の言葉に掲載し、ラジオは次郎の悲痛な声の録音を流してエヴァに訴えて居たのだった。そして当局は例の運送会社の定期トラックの運転手達をひそかに逮捕し、其の網をじりじりと引き絞って居たのだつた。

ボスが帰って一週間目、遂に隠れ家はFBIの手でひしひしと包囲された。真先に気付いたのは矢張りシルヴィアだった。

「畜生!! 早いこと勘づきやがったわねえ。もう三日おそけりや、藻抜けの殻だったのに。」

顔色を変えて立ち上つたシルヴィアは、唇を噛んで地団駄踏んで口惜しがった。

「あんた達。何ぐずぐずしてるのさ。早く着替えて逃げる支度をするのよ。急いで……」

ベスは忽ちシヤンとなつたが、エヴァはいつ迄もおろおろして居

た。そんなエヴァの頬を、ぴしやりと撲ってシルヴィアは早口に云う。

「ほら、お金よ。二千ドル宛お持ち。これが拳銃だよ。七発入ってるわ。私について来るんだよ。若しはぐれたら落ち合う場所はニューアーク市十三番街のオラブ・ホワイト・スノーよ。行きやすぐ分るからね。二人共しっかりおしよ。ついておいで」

しかし、あちこちの出入口や窓から外を覗つたシルヴィアは齒がみした。既に完全に包囲されたのだ。ジミーがライフル銃を持って飛び出して来て叫んだ。

「姐御!! やりましょうぜ。機会を見て裏の山の中へ逃げ込むんです。それしかありませんぜ」

シルヴィアは領いて洋服ダンスの中からライフル銃を取出し安全装置を外し、そして弾丸の箱を抱いた。ベスもそれになつた。

「エヴァ!! あんたもよ。銃位射てるだろ」

シルヴィアは怒鳴って銃と弾丸箱をエヴァの胸に投げた。

庭の外れの茂みから拡声器の音が響いて来た。

「もう完全に包囲されたぞ。抵抗しても無駄だ。シルヴィア・パコール!! エヴァ・ローレンス!! 其の他の者も武器を捨てて出て来い。」

名を呼ばれたエヴァは脚がすくんで、銃を抱いたままへたへたと坐り込んでしまった。

「フン。何を喚いてやがる。ミシン・ガンがあるといいのにねえ」シルヴィアは、そういうと矢庭に居間の窓から銃を出して拡声器のあたりへ一発放った。

すぐさま台所の方でジミーの銃声が轟き、湖面を轟々と駆けり去

った。

「ベス。あんたは寢室から射って!! エヴァは食堂から。早くおし!!」

云い捨てるや動いた影を狙ってシルヴィアは又も発射する。警官隊も応射して来た。窓ガラスが鋭く裂け、壁が飛び散り庭の樹の梢が切れて彼我の銃声が乱れた。隣室へ転げる様に這い込んだエヴァは壁際に震え乍らうずくまった。心臓が割れる様に高鳴り、咽喉がひきつって声も出なかった。

「エヴァ!! お射ち」

シルヴィアが血相変えて飛び込んで来てエヴァの頭上で続け様に

三、四発射ち、素早く元の位置に駆け戻った。判断力を失ったエヴァは夢中で銃を持ち上げようとしたが、その重さはエヴァの硬張った腕では、どうともならなかった。銃を投げ出したエヴァは拳銃を取り出し銃口を空に向けて無我夢中で引き金を引く。生れて初めて射った拳銃の反動にエヴァは悲鳴を挙げた。空に向けて引き金を引き続けるエヴァの指は弾丸が尽きてからも、いつ迄もいれんする様に引き金を絞り続けるのだった。弾丸の出なくなったのに気付いたエヴァは拳銃を投げ出し床にしがみついて、ただ恐怖に喘ぐだけだった。

「手向い等しないから、誰か来て私を捕えて頂戴!!」

〔最新版〕 女体緊縛フォト五十選

B組五十集 大手札判印画紙(9×13) 焼付

各組一枚一組(送料共)

B 1	全裸エビ責仰向け(関谷)	一組一枚	一〇〇〇円
B 2	逆エビ責め全裸像(水本)	五組五枚	四〇〇〇円
B 3	乳首ペンチ挟み(竹野)	十組十枚	七五〇円
B 4	後手十字縛肩口上(梨花)	二十組二十枚	一四〇〇円
		三十組三十枚	二〇〇〇円
		四十組四十枚	二五〇〇円
		五十組五十枚	三〇〇〇円

B 5	足の裏擦り責め(竹野)	B 6	おへソいじめ大写真(関谷)
B 7	剃いだバタフライ(関谷)	B 8	貴方に捧げた裸身(大塚)
B 9	乳房責め絶叫苦悶(大塚)	B 10	無防備双手吊り(絹川)
B 11	豊満臀部エビ縛り(水本)	B 12	糸纏わぬ股間縛り(水本)
B 13	全裸亀甲股間縛り(関谷)	B 14	足踏付け二つ折り(大塚)
B 15	尻突出しムチ打ち(関谷)	B 16	手錠にもだえる(竹野)

B 17	尻突立てエビ責め(水本)	B 18	椅子開股鼻責触手(梨花)
B 19	息もつがせぬ猿轡(竹野)	B 20	投げ出した全裸(関谷)
B 21	美しき尻部の露出(絹川)	B 22	猿ぐつわ悦虐境(竹野)
B 23	後手柱縛り脚線美(竹野)	B 24	強制鼻挟水吞ませ(梨花)
B 25	苦悶にねじる裸身(関谷)	B 26	責めに気を失って(関谷)
B 27	さアどうでもして(関谷)	B 28	豊満乳房膨隆縛り(竹野)
B 29	投げだされた女体(竹野)	B 30	裸身をくびる麻縄(梨花)
B 31	強烈縛りに悦ぶ(梨花)	B 32	全裸逆エビ片脚拳(東浦)
B 33	踏みつけマゾ境地(東浦)	B 34	すべてをさらけて(関谷)
B 35	ムチ打ち失神寸前(関谷)	B 36	クリップ鼻挟み(絹川)
B 37	台上のマゾポーズ(大塚)	B 38	吊られゆく美体(絹川)
B 39	拷問に無惨な美貌(梨花)	B 40	マゾ女性の表情美(東浦)
B 41	喰い込む股間縄(絹川)	B 42	灸責めに悶える(梨花)
B 43	犠牲台の人身御供(大塚)	B 44	美肌無茶苦茶縛り(絹川)
B 45	裸身に立つ蠟燭(大塚)	B 46	手枷足枷大写真(四方)
B 47	鎖に悶える足首美(柳初)	B 48	蛇責めに柔肌栗然(梨花)
B 49	鼻の玩弄恍惚境(大塚)	B 50	女囚菱縄さらし(絹川)

エヴァは叫びたかったが声が出なかった。少し開いた扉から台所の様子がちらと見えた。ジミーが奴隷娘を楯にして戸外に忍び出ようとする有様が恰かも映画のシーンの様にエヴァの眼に映った。後手錠を嵌められた奴隷娘の顔が恐怖にひきつって、ジミーに引き摺られて戸外に消えて行く。

「誰か出て行くぞ!! そっちだ」

鋭い声が飛び銃声が交錯した。

「ジャプーの女奴隷だ。構わん、射て!!」

ジミーの太い断末魔の呻きに続いて糸を引く様な悲鳴が、はつきりとエヴァの耳に灼きつき、そして消えた。シルヴィアが髪を振り乱して飛び込んで来て台所の窓をめがけて二、三発射ち放し、エヴァの腰を蹴飛ばして駆け戻る。阿修羅の様な抵抗振りであった。

ベスがシルヴィアの所へ駆け寄って来て叫んだ。

「ガス弾を射ち込んだわ」

激しく咳き込むベスの様子。

「あっ!!」

居間にもガス弾が二発三発と射ち込まれ、シルヴィアは狂気のように一発は窓から投げ出したが、堪え切れず激しく咳き込んで体をくの字に曲げた。

「武器を捨てて出て来い。無益な抵抗はやめろ。」

拡声器が落着いたさびのある声を響かせる。

「畜生!!」

シルヴィアは矢庭に食堂を横切り台所から地下室に降りる階段を駆け降りて行った。エヴァの所にもガスが這い寄って来て眼が激しく痛んで涙が滝の様に溢れ激しい咳が襲った。地下室の檻から曳き

出したローラの髪を掴んで、シルヴィアが鬼女のような形相で現われた。ローラを楯に飽く迄も逃げようとするのだ。もはやシルヴィアはエヴァには見向きもしない。眼を抑え激しく咳き込み乍らも銃声を絶やさなかったベスが素早く寄り添ってローラの片腕を抱き上げた。もはや殆んど眼が見えないエヴァも死物狂いで玄関へ這い寄って行く。

「出て行くわよ」

玄関の扉を少し開いて叫んだシルヴィアが、ぱっと開け放ってローラを先頭に出て行った。

「此の女、誰だか知ってるだろ。道をおあけ!! でないと、此の女を射つわよ」

シルヴィアは背に隠し持ったライフル銃を前に回して油断なく見回し、ベスは拳銃をローラのこめかみに押し当てて暫く外気を呼吸した後じりじりとガレージの方へ向った。唇を噛んだFBI達は、射撃をやめて鋭い眼でそれを追う。女達が玄関のポーチを離れて十米程進んだ時、それ迄死んだ様にぐったりして居たローラが突如ベスの右手に噛みついた。不意を喰ってベスは悲鳴を挙げ、拳銃は空を射って地に落ちる。拳銃を拾い上げようとするベスがFBIの正確な射弾を喰って芝生に突伏しになり背をのた打たせて動かなくなった。それよりも先にローラは死力を振って駆け出した。FBIの射撃と同時に身を伏せたシルヴィアは背後からローラをライフルで狙うFBIの射弾がシルヴィアの回りの芝生を跳ね上げ耳許を掠めた。十歩と走らないでローラの弱った体は足鎖につまずき後手錠にバランスを奪われて芝生に倒れる。必死に這ってFBIの方へにじりローラの体にシルヴィアのライフル弾が至近距離でめり込んだ。

ローラの最後をじっと見定めたシルヴィアは、銃を前に投げ出し微笑さえ浮べて両手を挙げてゆっくりと立ち上がる。

「射たないで……射たないで下さい……」

玄関から這いずり出たエヴァは哀願の声を咳と共に上げ乍ら、両手を挙げてよろよろと立ち上った。急に眼が楽になり、咳が軽くなった。

「ようし。こっちへ出て来い」

ばらばらと駆け寄るFBI達の拳銃が正午近い陽にきらめき、エヴァはシルヴィアと並んで立ちすくんだ。エヴァとシルヴィアを、それぞれ二、三人の私服が拳銃をして取り囲み憎悪の眼を鋭く光らせた。荒々しく容赦ない手が二人の女の全身を検査した。

「よし、手をおろして背に回せ。」

齒がみし乍ら両手を背後に同したシルヴィアは、手錠を嵌められ乍ら罵しり呻く。

「ち、ちくしょう!!」

前に立った男の激しい平手打が、シルヴィアの頬に鳴った。

「撲ったわね!!」

頭を振って乱れた金髪を額からはね上げ、両腕をもだえてシルヴィアは嗅いた。

「腕時計を外しておいてよ。高いんだから」

「フ、フ、フ、お前にやもう腕時計が要る日もなからうて」

FBIは冷笑し乍らシルヴィアの手首から時計を外して自分のポケットに納めた。カチャッ、カチャッと、背の両手首に冷たい手錠が喰い込んだのを感じたエヴァは、両眼を閉じて深い吐息を洩らした。どこかに一杯に巻かれた大きなゼンマイがあつて、それが切れ様な心地だった。ストッキングはずり落ち、借着の黒いドレスが

乱れて居るのを直せないのは悲しかったが、大きな安堵感がエヴァの胸を包んだ。これも借り物の大きな目のハイヒールが脱げて居ないのが不思議だった。突然エヴァの背を恐怖と不安が貫いて走った。眼の前に婦人刑務官のローラが哀れな姿で死体となって芝生を血に染めて居た。刑はどれ程加重されるのだろうか？ まさか死刑には……。

エヴァは矢庭に膝を地につけて眼前のFBIの男を見上げて唇をわなわな震わせた。

「私、お手向いしませんでしたわ。本当なんです……もう恐ろしくて恐ろしくて……」

眼前で見下ろすFBIの男は、エヴァの髪を掴んで立ち上がらせた。

「そんな事はあとで云やいいんだ。手数を掛けやがって……」

エヴァは強く背を押されてよろめき乍ら歩き出した。二台の自動車にそれぞれ押し込まれた女の両側をFBIが挟んで坐り、車は山道を走り出した。あとには未だ数台の車があちこちに散在して残って居た。

二人の男に挟まれて坐ったエヴァは、じつとうなだれて自分の膝を見詰めた。張りつめた糸がゆるんで生温かい涙が頬を濡らした。両手首の手錠の硬い感触が不思議に懐かしくさえ思え、心は久し振りに和らぎを覚えた。エヴァの横顔を見詰めて居たFBIの男がハシカチで頬を拭いて呉れた。

「すみません。ありがとうございます」

「うん。お前はなかなかおとなしそうだ。落着いた様だね」

「ハイ。こうして捕まえて頂いて手錠掛けて貰って本当に安心しましたわ」

二人のFBI達はエヴァの表情を眺め、そして満更嘘でもないらしいな、と顔を見合わせて苦笑いを洩らしたのだった。(未完)

切腹研究夜話

忍者・TV・切腹

中

康

弘

通

此のところ忍者を扱う映画や文芸作品が多くなった。忍者の持つ隠密性、その超人的な活動並びに耐性が、不安な平和の中に小市民的日常を送る人々の神経を、適度に刺激し、いい意味での大人のお伽噺というか、一種伝説的なムードを以て包んでくれるところに、好奇心で立ち向かう子供のみならず、BGやサラリーマンにまで浸透して行く可能性が生れたものではなからうか。

小説も本格的に忍者の生態を描く村山知義氏の「忍びの者」(映画化)を始めとして、ずいぶん書かれたが、面白さでは山田風太郎氏の忍法帳シリーズに魅力を感じる。人間の肉体的心理的可能性を、あるいは可塑性を追

究することが、氏にとって、娯楽としての忍法ものという以上に、文学する心を唆られての所産ではあるまいか。

その忍法シリーズ、ずいぶん流血が描かれ殊に美姫麗人の自刃には、忍者という特殊な位置付けと相俟って、妖麗にして哀婉という愴美の要素を見せている。中でも庄巻は「忍法忠臣蔵」において、内蔵助の江戸入りに己が腹を堵けた女忍者が、事やぶれて責めを問われ八腹切りまするVと一言云いのこし、その場で腹かき切る姿は、優婉とも悲壮とも見えて哀しくあでやかである。細かく忍法帳の個々を論ずることは未だその時期ではあるまい。

眼をTV映画に転ずれば、流石に女忍者の腹切りは皆無だが、あっても不思議でないほど緊迫した悲愴感の盛りあがりは、「隠密剣士」(朝日TV)に見える。是も子供向き番組らしく、関西では毎日曜の午後七時から三十分づつ放送されているが、些か大人の美意識を要求するような場面もないではない。海彼で「ザ・サムライ」として好評なのもむべなるかなとも云えよう。然しながら、考えようで例えば主人公秋草新太郎を欺むいて危地に連れ込み、俄然仮面をかなぐり捨てて斬りかかる女忍者は、激闘の末、誤まって逆手の剣を我とわが胸に刺し、草むらに四肢を伸べて絶命する。忍び装束にあでやかな女体を

包み、無念を呑んで仰臥したまま苦悶し果てた娘の胸には、非情の剣が突っ立ち風に揺らぐかに見えるとき、愴は更に愴に、婉は更に婉である。然し、レディファーストの米人の眼には、女忍者の横死がどう映るであろう。

それかあらぬか、秋草新太郎が手傷に悩む女忍者を救う場面が出て来た。

この映画で最近おぼろという女忍者が活躍している。女流歌手でヒロインをも兼ねる佐賀直子さんで、この人は秋草新太郎と北条氏の遺宝を争う忍者の首魁風摩小太郎の妹役だが、先ごろ兄の命で新太郎を追ひ、ついに追いつめて、林の中に激闘の際、味方の十字手裏剣で上膊を破られる。風摩一味を斬り伏せた新太郎は、痛みに立ちすくむおぼろを坐らせ介抱しようとするが、おぼろは「何故斬らぬ？」と、恥と苦痛に苛立って新太郎を詰じる。途端に新太郎はおぼろの頬を平手打ちし手早く傷を手当てするので、おぼろは無念の瞳もいたましく唇かみしめるところで此の場は溶暗となる。

そののち、又の機会に小太郎の仕掛けたわなに新太郎が落ち入り、危うく見えたとき、おぼろは新太郎と激しく斬り結びつつ、「林の外れに馬が用意してある」

と秘かに告げる。その言葉をつゆ疑わず、追いつがる風摩一族を斬り伏せて走り去る新太郎の後ろ姿を見送ったおぼろは、是で返した、と呟くが、背後には兄の小太郎が立寄つて、

「誰が馬を用意したもののかう」

思わず顔を背向けるおぼろに返つを促がすともなく呼びかけるところで前回は終った。

女性の容姿をあげつらうのは甚だ礼を失することだが、佐賀直子さんは「振袖剣法」の幸姫さままで美貌の若衆姿を見せた歌手の多摩幸子さんと同じく、スラリとした体軀にクッキリした目鼻立ちの持主で、若衆姿ではないが、忍者に扮すると凛々しく、些か美少年型のマスクになるから、忍者の運命的な悲痛感に耐える表情などは、可成り迫真性がある。

失礼な言葉を重ねるようだが、巧演というより、体当りの真剣さが好ましい。(どうも日本人のクセで、喜劇やユーモアものより悲劇的なサムライものに魅かれるせいかも知らないが、とにかく此の人の演技は、巧さよりも素直さで魅かれるのは筆者だけであろうか。その云えばまた、おぼろの傷を手当てしてやったり、彼女の言を疑いもせず行動する新太郎も、筆者の眼には軽卒とは映らず、む

しろ淡泊な男らしさに見えるのは、筆者だけであろうか)

さて此のあと何うなるかは、この雑誌の出るころには決まっていようが、例えば、忍者のさだめに懷疑的になっているおぼろは、兄の厳命で「秋草を斬るか」と詰め寄られ、斬らねば生きては帰らぬ覚悟で又もや新太郎と決闘の機会を持つが、さわやかな新太郎の心情に魅かれつつある娘ごろの、思う存分には腕を揮えず、太刀打ち落され観念の眼を閉じたとき、

「忍者にも人間らしく生きる途はある、そして、女には女の途があらう」

きびしく、然し心を籠めて云い捨て風の中を去って行く新太郎に、うるむ双眸を向けたおぼろは非力を啣つ無念さと遂げ得ぬ慕情の相剋に

「秋草、待て」

と呼びとめる。新太郎が歩をとめて向き直る間、サッと忍者の装束脱ぎすてれば、下には覚悟の白装束、

「武士の情け、風摩一門の女忍者が最期見届けよ」

云いざま松樹のもとに、心もち両膝開いて支え、揃えた踵にいしきを据えて、おぼろは

かねて心定めた通り逆手に取った脇差の切先を、左の腹に発止と突立てていた。

「おろかもめ、二つとない命、粗末にするな」

新太郎が咄嗟に投げた小柄あやまたず、おぼろの右脇を刺し、痛みに思わず手を離せば脇差は地に落ちて、湧く血汐は白衣を伝い、地上の松葉に滴る。

「腹切ることかなわぬか」

恨めしげに新太郎を見あげてハラハラと無念の涙を落すとき、おぼろは忍者を棄てて世の常の女人に立ち返る……というような……。

是は筆者の垣間見た夢の世界であるが、プロットが何ういう展開を見せるにせよ、おぼろの哀愁こもる動きは見ものである。

忍者ものは更にTVを賑わすとか、東映も今秋は品川隆二と鈴村由美さんで「忍びの者」を毎日TVに乗せる由、この鈴村由美さんは先年、東宝主催ミス剣豪コンクールで、白鉢巻も凛々しく大刀かざして「白虎隊」を舞い、壮烈悲愴にして清純可憐な切腹のポーズを舞台に演じた少女である。「忍びの者」では切腹とは縁が無いが、その意気において男まさり、しかも容姿清婉の美少女であるから、さぞ演技も真剣そのものであろう。期待

される。

現代的な忍者もので「忍者月光部隊」も紅一点森根子さんの活躍が好ましい。この人はお嬢さんタイプの美貌で、男装しての格闘激闘だから、勇ましくもまた、作中人物としては傷ましくもある。(こういうものすべて、お芝居には違いないが、作り演じ撮す方々のご苦労を思えばやはり、作中人物として演技者の方々を見て差上げるのがエチケットでもあろうから……)

是は忍者ものではないが、松山容子さんのお姫さまシリーズ、いつも拝見している。琴姫七変化から月姫峠、霧姫様と、デリケートなお体付きでよくあれ丈け激しい動きが……と思っていたら胃下垂で一時休養はお気の毒だったが、部長刑事あたりの現代ものよりも、やはり松山さんは水ぎわ立った美姫剣士ぶりが似付かわしい。

月姫峠では、敵が腹を切るというのへ、切腹するという者はなかなか出来まい、と笑いとばし、本当にやりそうになったら急いで制止、やがて相手の帰りぎわを、切腹いたされでは困るゆえ送って取らせよ、と家来に命ずる辺り、戦国の女丈夫ぶり、辺りを払うの極がある。

霧姫様では、豊臣秀頼の遺孤という設定でたまたま遺臣が秀頼の遺品を守って孤島に住むのと会い、彼が姫にお目通りし今は思いのこすことなしと、自害するとき、「父上を思う其方の気持は判るが逸まったことを」と嘆ずるところは気合いももって、松山さん扮するお姫さまらしい、凛然たる中に思いやり深いところが見えた。せめて、姫のお手ずからご介錯を、と苦しい息の下から云う武士を疑然と見守る霧姫の表情は、戦国の美姫にふさわしい気品と苦悩に演じていた。

笑劇でも、大村昆、白木みのる諸氏演ずる「丹下左膳」昆氏はニセ左膳で、此の間はこけ猿の壺をだまし取られたところへ、ホンモノの左膳がおふじを連れて登場、委細相分つたおふじが、ニセ左膳に向かい云いすてる台詞に、

「若し取り戻せなかったら」

で一と呼吸して

「切腹だよ」

と、是はきびしい。但しそこは笑劇、切腹には至らず、おふじのニ云いっ放しでおしま。このおふじ役、よくTVに見える女優さんだが、うっかりお名前を見落したは残念。

昨秋十一月ごろであったか、こまどり姉妹

ショーで二本松少年隊の寸劇あり、こまどりの並木栄子さんが剣道着に胴をつけ、大刀を地に支いて白虎隊（歌謡）を歌えば、葉子さんが同じ姿で、戦い敗れ傷ついた美少年を演

じたが、倒の十有九士屠腹シテ倒ルのところでは、お姉さんの吟声に合わせ、片膝ついた蹲踞の姿勢で、逆手の大刀の切先を見つめつつ、みごとに胴の外れを横一とすじに腹かき

切る姿態を見せたのは、可憐悲愁の美にみちていた。

女性の自刃のポーズでは、武田泰淳氏作、「貴族の階段」をNHKが放送したとき、將軍の娘に扮した富士真奈美さんは、短刀を載せた三宝を前に端座した覚悟の表情で、自刃を暗示する一とコマを演じたが、このドラマでは彼女の恋人である青年将校が切腹することになっており、切腹のシーンはなく、彼の妹で二人の恋に同情していた貴族の娘に扮する馬淵晴子さんのナレーションで「兄は切腹云々」という科白が入っていた。

馬淵さんは泉鏡花作「註文帳」で遊女のお若に扮した。お若は雪の一夜に迷い込んで来た青年に恋し、彼を刺してみずからも剃刃で咽喉を突いて果てるのである。

夕方まで勤めて夜は早寝だから、余りTVで時代ものを見る機会もなく、大抵「七人の刑事」とか文芸劇場、ドラマへの招待などを見ているつもりでも、やはり是だけの事が眼に触れたのだから、TVの分野も広いものである。

それにしても、つい此の間、城山夏彦氏が風俗奇譚での論説で筆者に触れ、



「氏の史実に基づく創作は、いまだ戦前の忠節美談の形式をのこしている、云々」

と書いて居られたが、成程、筆者の年代は頭が古いのか、どうも忠節美談とまでは行かずとも、精神的に、忠孝貞義の原則が存在して、それに従い、あるいはそれに背馳する苦悩から生れる切腹の必然性を、実話虚構の何れを問わず、考慮に入れないでは筆が取れないように思う。時には氏の所謂「官能的」に近いものも試みるけれども、どこかで殉国とか殉義というような、ストイシズムとピュア

リティを要素に持たねば書けない。

それは何と云っても、切腹というのは、殊に女人の場合、たしかに非常な行為（異常と書く誤解を受けてはならぬゆえ、敢えて非常とする）であるから、その非常をヒロインが敢えてするだけの精神的なモメントが無くは、ドラマティックなものにはならないであらう。切腹に、死の形態としては一種の官能性があるとしても、である。

藤山秀緒さんとしても、やはり、殉国を一つの大きなモチーフに取って居られた。

その意味で法谷四郎氏の作品は、たしかに注目に値する純粹さを持つていようである。いつかはこうした人々と一堂に会して胸襟を開く機もあるまいかと思つていたが、どうも夢に終るようである。筆者の、百年知己を待つのは、書きはじめて十余年、變つてはいないけれども……とまれ、ヒロイズムとピュアリティニズムの象徴を、今後も筆者は、精神高貴にして氣象勝れ、容姿婉麗にして心情典雅なる女人像に求めてやまないであらう。

緊縛写真と悦虐絵画満載の超弩級版

大好評！注文殺到売切れ近し

臨時増刊 写真と絵画 文献 特集号

目下発売中 直接お申込を 定価一部五〇〇円（送共） 略号（文献）

◎サド、マゾ、フェチ、女斗美、女体切腹、女相撲、浣腸、とあらゆる趣向を網羅した本誌臨時増刊号の決定版。今後二度と再び集録出来ない特殊文献を掲載いたしました。売切れますと、補充がつかまへん故、今すぐ直接発行所まで御注文下さい。着金次第折り返えし急送いたします。

〔第一グラビヤ〕（十六頁）
自己愛の女神を写す……………塚本鉄三、構成
「私の乳房を見て」……………長野 良子
露出癖の充足……………長野 良子
後手縛りのワンカット……………大塚 啓子
転ったエビ縛りの女体……………大塚 啓子
新井マリさんと共に……………由岐敏夫・構成

〔巻頭口絵〕（オフセット八頁）
△絵物語△白ターバンの女……………四馬孝・画
第一図章△捕獲……………第五図章△美容△
第二図章△飼育命令……………第六図章△洗腸△
第三図章△調教……………第七図章△矯正△
第四図章△訓練……………第八図章△仕上げ△
棒責め愉悅……………新井マリ子
ムチ打たれる肌……………新井マリ子
サテンの責衣緊縛……………東浦ひかる
顔なぶり、踏みつけ……………大塚 啓子
押しつぶし、足逆取り……………大塚 啓子
餅肌はくびれて……………東浦ひかる
柱縛り首縄……………梨花悠紀子
海老責二態……………梨花悠紀子
黒いアンネパンティ……………遠藤百合子

〔第二オフセット〕

(八頁)

女体切腹、城主の姫君切腹……………四馬孝・画
女相撲、御前相撲……………雪崎京人提供
マゾ画、犬になった男の告白より……………
マゾ画、谷崎潤一郎「富美子の足」の幻想、
女相撲「海辺にて」グラマーの対戦……………雪崎
女体切腹「侍女の奮戦」……………四馬孝・画

〔第二グラビヤ〕

(十六頁)

五月亜紀子さんの場合……………由岐敏夫・構成
軽い拒否と羞らい……………五月亜紀子
美しい諦観のポーズ……………五月亜紀子
恐怖と怨嗟のまなざし……………五月亜紀子
鼻責「鼻孔測定」……………大塚 啓子
緊縛俯瞰姿態……………大塚 啓子
憧れの優美ポーズ……………長野 良子
両手吊りの構成……………新井マリ子
ズベ公天使(トカゲグループ)……………由岐 敏夫

1、「みんな剥いじまいな」
2、「その顔をめちやくちやにしてやる」
3、「それだけは止めておきなさい」
4、「トカゲ団の掟をよく覚えておきな」
投げ出した脚線美……………絹川 文代
悶悦ポーズ二題……………絹川 文代
厳重な本縄掛け……………梨花悠紀子

〔写真版アルバム〕

(十六頁)

裸女斗争場面……………絹川・大塚 啓子
浣腸部屋の悦楽ムード……………大塚 啓子
浣腸器を握って……………大塚 啓子
縄にくびれた柔肌鑑賞……………大塚 啓子
女やくざ一本刀姿……………大塚 啓子
女ネズミ小僧次郎吉……………大塚 啓子

高手小手二ツ折り……………松本アサ子
エビ縛り二種類……………松本アサ子
血紅使用女体切腹連続フォト……………大塚 啓子
サジスチン宮井美佐子の近影……………宮井美佐子
縛り過程の構成……………大塚 啓子
鼻責めシーンの点綴……………絹川 文代

〔本文・解説〕

(三十二頁)

新人撮影行、五月亜紀子さんの場合……………由岐、
絵物語「白ターパンの女」……………辻村 隆
新しいモデルを写す……………由岐 敏夫
(告白) 宮井美佐子の略歴……………宮井美佐子
(告白) モデルとしての私……………大塚 啓子
自己愛の女神、長野良子撮影記……………塚本 鉄三

〔第三グラビヤ〕

(十六頁)

台所のめしうど……………新井マリ子
飼育のヴァリエーション……………新井マリ子
椅子に呻めく……………新井マリ子
長襦袢と腰巻……………遠藤百合子
豊満への擦過……………遠藤百合子
美しき小鳩の緊縛……………長野 良子
ポリウム自慢絵模様……………長野 良子
床柱縛りに耐える表情……………大塚 啓子
煙草一服の鑑賞……………大塚 啓子
姐上の鯉と料理の仕方……………五月亜紀子
二ツ折り縛り……………大塚 啓子
鼻料理と鼻掃除……………大塚 啓子
上からと横からと……………梨花悠紀子

〔第一オフセット写真〕

(十六頁)

神さまへの人身御供……………絹川 文代
腕と脚の双曲線……………梨花悠紀子
足首の縄を解く……………大塚 啓子

緊縛女体モザイク模様……………愛川 悦子
光と影の表と裏……………梨花悠紀子
縄に狙われたポーズ……………梨花悠紀子
女相撲「四ツに組む」……………A氏提供
女相撲「吊り合い」……………A氏提供
爪切りと白足袋……………浜 千代子
高手小手腰縄……………梨花悠紀子
底園の塑像……………絹川 文代

〔第四グラビヤ〕

(十六頁)

女奴隷の飼育効果……………新井マリ子
ゴム衣着用中……………梨花悠紀子
バンド着用後手縛り……………東浦ひかる
荒縄さらしと折檻場……………梨花悠紀子
下着の散乱する中にて……………新井マリ子
用意周到なる馴致……………新井マリ子
白刃に狙われた柔肌……………大塚 啓子
浣腸器の恐怖と幻想……………梨花悠紀子
くさり、くさり、くさり……………長野 良子
団子鼻をいためる……………長野 良子

〔第二オフセット写真〕

(十六頁)

美しき乳房……………長野 良子
愛らしき羞らい……………長野 良子
仰角のいたずら……………長野 良子
顛倒した瞬間の表情……………大塚 啓子
森の中のニンフ……………絹川 文代
緊迫の演技(斬られる女)……………愛川・田中
ヘッドロックと首絞め……………春日・愛川
SMの魅力プレイ……………三木・浜本
前手縛りと後手縛り……………梨花悠紀子
黒フンドシと白フンドシ……………大塚 啓子
Mフォト陳列——長靴にもだゆ。鉄鎖と手枷
の下で。凌辱される男ドレイ。煙草とローソ
クで——……………絹川 文代
愉悦ポーズ二景……………絹川 文代

赤いお腰巻と長襦袢



牧高志
より

ぶらっと入った映画館で近頃珍しいシーンにぶつかった。

私は元来映画の筋とかスターなどといったものには、およそ無関心といってよい位至ってのんき坊なのだが登場する女のきもの（和服）だけは、どういうものかうるさくピンと来る勿論映画にしろ演劇にせよ、もともとが乙に澄まして壁に掛かった絵では毛頭無いの

だから、目の前であちこち動き廻るのは当たり前だが、この動いている中で結構色んなことが頭の中に悶めてくるのである。

その日は封切館なのに表は珍らしく雪が降っていたため、中の観客は数える位しか入っていなかった。映画はつい最近舞台で演ったものを映画化した大映の『芸者学校』を上映していた。

実はこの何カット目かのシーンの中に問題のシーンが組まれてあったのだ。今度は曾って文学座に在籍していたという丹阿弥谷津子の社長お婆、お静のワンシーンである。映画はこれに吞平という色の褪せた赤いパッチをはいた幫間がからみつくお話しなのだが、このお静という年齢の頃ならさしずめ二十七、八才位であろうか、いわば女としては爛熟期に達した色っぽいお囲いの女――

もっとも2号さんともなれば見るからにカサカサした女は古今東西何処を探しても、まず居ないだろうけれど、この2号さんが今は余程の場末でも行かないと一寸お目にかかれなところの真赤なお腰巻（裾除ならピンクが普通だから腰巻と断定）を勇敢に、事もあろうに締めていらっしやるのである。季節は夏らしくご丁寧に落雷のシーンまで添えてあるが、小奇麗な部屋には、早々と床が展べてあり麻とおぼしき白い蚊帳が半ば吊りかけてあるところから判断すると、打水も終り、まず夕食を旦那と共にするつもりであったのだろう。少し糊のきき過ぎたゴワゴワする白地に菱形の緋小紋の縮み浴衣（？）がさっきから立ったり坐ったりしていたため、裾の方がひどく捲くれ上ってみにくい横皺が下に行く



程深め目に寄っている。

その裾の真下からおよそ3センチほどものに真赤なお腰がはみ出ているのだ。しかも割りとき長いシーンに亘って、このお婆さんが、「まだ、まだ奥さま、二カ月位じや、そんなに目立ちはしませんよ……」と婆やにいわせていると懐妊二カ月目の帯の下からお腹にかけて、さも誇張するかのように、きものの合わせ目が具合よく合わず、立居振舞毎に今度は裾が左右に割れて、その都度本体である真

紅のお腰巻が存分にのぞくのである。

この仕草は演劇畑に育った彼女がし向けたゼスチュアなのか、さもなくば木村恵吾監督のさしがねのどちらかであろう。私はこの二号さんという女にそもそも真赤なお腰が巻かれたという点に月みな言葉だが、忘れられようとする日本の郷愁がひそんでいるような気がしてならなかった。

話は一寸余談になるが、二号さんといえは私の住んでいる近くに昔映画を地で行くよう

な若くてしかも飛切り美しい所謂お婆さんなるものが借家住いをしていたことがある。勿論、私とは何んのかかわり合いもなく、全くの赤の他人ではあったが、この2号さんが折々愛玩用の狎を抱いて川のほとりを散歩していたのに出

くわした時、いつも季節にふさわしい着物を着、お太鼓の帯をきちんと結んで程よく赤い鹿の子の帯揚げをのぞかせているあたりは至極無難であったが、川を吹き抜ける風が土手を歩く白足袋に当たってもろに吹きあげる風に裾があたふたと乱れ、なまめかしい長襦袢や真紅のお腰巻を「御覧になりたいなら存分に御覧遊ばせなさい」とばかりいらめかすのには正真な処、いささか辟易せざるを得なかったのであるが、これにはまだおまけがあった。

それは、毎週火曜か水曜日になると判で押したように2階のひさしに吊るした竹棹に今度は全貌ともいうべきいともなまめかしいご使用済みの真紅の（時にはひとときわ鮮やかな桃色の……）お腰巻がきまって干されたのであった。私は通行御免のパトロールではないから、やたらに故なく歩き廻る訳には行かないが、今しがた海面から上った水しぶきのする海女さんの腰巻のように二号さんの肌から離れた着赤なお腰巻にまともにぶつかった時、すべからず人間を廃業、犬の眼になったら……と思わざるを得なかった。といってむやみに犬が立ち上って爪を立てては大変である。とまあ、それ程第三者には結構あやしくも、心至って娛しく心の衝動を一義的に誘う



ものであるらしい。

話は再び映画に戻るが、こうした総天然色ならではの真赤なお腰巻を、薄目の白地の着物に配したあたりにも大いに問題がありそうだ。映画を観られた方なら、着物の合わせ目の無いまるいお尻の部分に鮮かに透けて見える赤い色をいやという程御覧になった筈である。

裾にちらつくのがさしずめ瞥見の誘惑なら透けて見える赤は隠くされた魅惑の真珠かも知れない。

私は平凡な見方だけど、お腰しの魅力は着物（通常の場合、その下の長襦袢の内側に包含されるものであるが）から四、五センチ内側に吊るされ、止むを得ず蹴出す裾の開閉に伴ってチラッチラッと瞥見される処に、之もいわれぬゆかしさが在るのであって、決して映画『芸者学校』のように事更らに出し放しは実の処どうかと思われるが、是が非でも旦那の心をひきつける為のものなら、また何かいわんやである。以上悪口はいったが、近頃珍らしいシーンだといえるかも知れない。

この映画が上映される少し前に今度はこれまた緋の長襦袢がうってつけの総天然色の色付で封切されたのだから、いく分驚いた次第

である。佐久間色子が今以って開眼するのしないのと騒わがれた御存知水上勉原作「五番町夕霧楼」の一シーンなのである。

勿論この場合、いくら廊の中夕霧楼だからといって何も長襦袢一枚の恰好で遊君達がむやみやたらに構内を歩き廻った訳ではないが、「ここがあんたの部屋やな、よろしおすか。ここでひとり寝起きしはったら、ええのんや……」と差配のおかつに連れられて生れて初めて入った赤い南天の実の見える内庭に面した小部屋——で夕子は悲しくも水揚げの夜を迎える、その折の姿を——作者水上勉氏はこう綴っているのだ。

「紅柄の蒲団に額ぶちの白布をかけ、部屋のまん中に敷いただけのがらんとした部屋であつた。夕子は化粧もしない白い肌を、心もち蒼黒くかえていて、これも、おかつが昔、上七軒で一ど袖を通したことのある緋縮緬の寝巻きに、腰高に桃色しごきをまいて坐っていた……」

ここで緋縮緬の寝巻きとあるが成程寝巻きには相違ないが実は長襦袢なのである。しかも映画ではしごきではなく赤い小縞の伊達締めであつた。この緋縮緬の夕子を田坂具隆監督は腰から下を勇敢にクローズ・アップさせ

て小刻みに震わせ、或る種の恐怖を画面にうつたえていたが仲々以て芸の細かさ……処へ初客の甚造がパタパタと廊下を駆け出して夕子の部屋の入口の戸を開ける、この瞬間のシーンはいささかオーバーと思える程緋色の長襦袢の色が、そのあたりに反映して凄じかった。照明のたっぷりあるスタジオの内だからそんなことは当り前かも知れぬ。しかし実際の場合は長襦袢は発光体ではないのだから、廊下の隅まで緋色の光線が出る訳は無いのだが、眩しいことだけは事実である。

曾って同僚の一人がさる処での宴会の折、賭をして勝った挙句、水も滴る若い芸妓の帯

梨花悠紀子逆吊り写真特集

第一集 略号(さか)

第二集 略号(させ)

第三集 略号(さと)

両足首括り逆吊り

逆吊りの女体折檻

手足逆宙吊り

足首を揃えて括られた縄を滑車に連結されて、足を上に上げて逆さに吊り下げられた美女梨花悠紀子は、両手を背中後手に縛られ胸には乳房がつぶれんばかりの縄目が肌に喰い入っている。全体重を両足首の縄で支えて痛さを耐えている梨花悠紀子。

逆さ吊りにあえぐ梨花悠紀子に対して、更にあくなき暴虐の手は、情容赦なく竹の棒にて女体のあらゆるところを叩き、こじ入れ、踏みつけ激しい折檻を加える。美しい眉をひそめて必死に耐える美貌の彼女の凄絶にして、しかも美しい吊責めフット。

両足首と両後手首を括った縄を滑車に連結して、じりじりと宙に吊り上げてゆく。顔、胸、腹を下にして、足首と背中を上にして宙に浮いてゆく梨花悠紀子。柔肌には恐ろしい程縄がうずまって、吊責めの真価が鮮明な印画紙焼付によって発揮される。

を解かせたことがあった。巾の広い博多織の帯がスルスルと解かれると、裾曳きの長着の合せ目がどういふものかパリりと末広に開いて緋色の長襦袢がちよっぴり顔を出す。「嫌やだ、また負けちゃったワ……」と最後の腰紐の結び目を解くと今度は長着がハラリと左右に散って全身緋達磨の女体菩薩が浮彫りになる。この瞬間は誠に花も恥じらう眩惑そのものなのだ。しばらく目を据えて凝視すると、かつらだが漆黒の高島田、純白の襟、黄縷の伊達巻そしてはち切れんばかりの肉体をふんわりと包んだ緋色一越の長襦袢のコントラストに妙なる調和を改めて認識する

次第だが、その道の通ならいざ知らず、このように不用意に出の衣裳を脱がれては、心臓ものである。

映画の五番町は残念ながら天にも地にも緋の長襦袢のシーンはそれだけで、あとは鹿の子模様の長襦袢と変り、不幸にして映倫で割愛したというシーンに移る訳であったが、

「今時、お長襦袢なんて、おかしいわ……」

といい兼ねない女性はいさぞ多いことだろう。なればこそ、原作者のセリフを借りてそれに尾ひれをつける訳じゃないが、へけどな、夕ちゃん、少しは大人のいうこともきくもんえ……、あんたが嫌やいうたら、旦那はん怒ら

はって、緋縮緬のお長襦袢のまま、あんたの両手を後手に縛って、それはそれは怖ろしい責め折檻しやはる嘘やおまえん本当どすえ、あの人はいさなことが何より好きによって

な……」位なところが静なる置物の長襦袢が動と化する分岐点だといいたくもなる。話は飛躍するが浦里の雪責めは盡しその最たるものであろう。

兎まれ、最近の日本映画において斯くも大胆に伝統の緋の腰巻と長襦袢を採りあげて堂々と公開したのも珍らしいが、果たして一般の反響があったかどうか……それは残念ながら筆者のあずかり識る処ではない。(終)

れた不満で、からだはほてっていた。一度消したスタンドをつけ、枕元のトランジスタラジオをひねった。夫の前では吸ったことのないタバコに火をつけ、大きく煙を吐いた。「危険な関係のブルース」が流れた時、美佐子はおもわずからだを固くした。

二つ並べて敷いた夜具は、今夜もその一つが空いていた。いつものことであった。倦怠期というわけではなかった。冬四郎と結婚して以来の習慣といってもよかった。

そんな状態を、美佐子はどうにあきらめているはずであった。が、この頃寝つけない夜が続くようになった。美佐子のからだは、毎夜、夫を求めていた。

結婚して六年、美佐子は二十七才になっていた。冬四郎とは七つ歳の差があった。子供は無い。

夜の生活に、冬四郎は単白すぎた。無関心といってもよかった。冬四郎が美佐子に求めるのは、月に一度か二度、それもほんのお義理としか美佐子には思えなかった。夫婦生活とはこんなものなのだろうか。

すぐ疲れて背を向けてしまう夫を、美佐子は憎悪した。にくらしいというような甘い感情ではなくなっていた。

大学での研究の外には、酒もタバコもやらない夫、まじめでおとなしい夫、友達からも近所でも、

「幸福ね」

と羨ましがられているのだが。

みじたくを直して隣りに坐った圭子に、

「誰だかわからなかった」

と冬四郎は云った。

「いやに綺麗になったな」

「いやですわ」

圭子は微笑した。冬四郎が圭子に会ったのは、三月ぶりだった。

「君の手紙が家に来たので驚いたよ」

「だって、会いたかったのですもの」

「手紙は困る」

「男の手紙だからいいじゃない」

男の声でもないし、女の声でもない。中性音のつぶれた、太い、それでいてなんとなくセクシーな声なのだから、ゲイボーイの声は不思議だ。化粧と服装が変わると、こうも声まで変わるものなのだろうか。

「とにかく、開店おめでとう」

「有難う御座居ます」

「君が店を持つとはね」

「驚いたでしょう」

「ああ、驚いたよ」

圭子はゲイボーイになってから、まだ一年と経っていない。ゲイボーイになって、最初の客が冬四郎だと圭子は云うのだけど、これはあてにならない。だが冬四郎は圭子の言葉を信じている。その証拠に、圭子の処女を奪った代償に、妻にも買ったことのない高価なダイヤをプレゼントしている。

それだけの金を冬四郎が持っていたのは不思議だが、妻に内緒の金が冬四郎にはあるらしい。圭子から冬四郎は男と男と遊びを教えられた。冬四郎にその傾向があったからに違いない。

「パトロンは誰だ」

「気になるの」

「気になるさ」

「フフ」

「男か、女か」

「女よ、安心したでしょう」

圭子は両刀らしい。男でも女とでも遊ぶ。ゲイボーイといっても、かならずしも同性愛ではない。職業としてのゲイボーイは両刀が多い。どちらでもいいのだ。ゲイバーの客は男だけではない。女もかなり多いのだ。考え

れば、それだけ人生を享樂できるのだから、たいしたものだ。

「出張で京都に行く。どうだろう、熱海で会わないか」

「奥様にしかられますわ」

「出張は一週間と云ってある。仕事は三日で終る」

「いけない先生」

「な、いいだろう」

「あたしみたいな者と浮気してもいいの」

「女には興味がない」

「奥様を愛しては、いらっしゃらないの」

「いつまでも独身では都合が悪いから結婚したんだ」

「――」

「時間だ」

冬四郎は立ち上った。

「列車に遅れる」

客の見ている前で、二人は接吻した。

「妻とはほとんど肉体関係はないんだよ」

「いってらっしゃいませ」

圭子は冬四郎をおくりだした。あたかも妻のように。

美佐子は寢室の装飾に工夫をこらし、寢化

粧に注意し、ナイロンの薄いネグリジェを着たりして、夫の気をそろうとしたりした。

助教授夫人としてではなく、夜はあくまで可愛い娼婦としてふるまってみた。しかし、それが一人芝居であることに気がつかなかった。

たまたま夫が早く寢室に入っても、

「スタンドを消してくれ」

それだけであった。美佐子はだまってスタンドの灯を消す。夫の体臭がむやみに鼻についた。

いつまでも私をほっておくと、どうなるかわからないから、と美佐子は思った。

横になっても寝られるものではなかった。

しかし、美佐子は、勉強中の夫を迎えに行こうとはしなかった。仕事をじゃまされた時にみせる、青白い、ひややかな、軽蔑したような冬四郎の顔を、見たくはなかった。自分がみじめであった。

美佐子は何度も大きく寝返りをうった。早く眠りにつけるように祈った。苦しかった。

美佐子は、冬四郎を憎みこそすれ、もう愛してはいないと思った。

今日、夕食が終ると、冬四郎は急に京都に行くと言った。大学の出張であった。明日で

もいいのだが、夜行列車だと本が読めるといふ理由であった。

出張は一週間。美佐子はあわただしく冬四郎の下着をスーツケースにつめた。

結婚したのは、失敗だったと美佐子は思った。一週間の出張も信用出来ないと思った。

何かある、と美佐子の肌が云っていた。

B

トップにまとめ上げた髪が、自然なカールになった、優雅な髪をした和服の女を見たとき、高城圭二は、どこかで見たような顔だと思った。

私服の着こなしをみると、水商売の女ではなかった。上品な若奥様風なのだが、何か場違いな不自然さを感じさせた。

その女はカウンターの隅に坐って、一人で静かに飲んでいた。誰か連れを待っているのだろうか。何かいらだたしそうにタバコを吸い続けていた。

誰だろう。圭二はなんとなく、その女が気になって、席を女の近くに移した。女がちらっと圭二を見た。

女客一人だとうるさいものだ。しきりに男たちが話しかけてきたが、女がだまっている

ので、前に居るバーテンが適当にあしらっていた。

女は新しいウイスキーの水割りを半分のどに流し込んだ。見事な飲みっぷりだった。

高城圭二はボーイを呼び、チップを渡してボーイに耳打ちした。ボーイがバーから出て行った。

やがてカウンターの電話のベルが鳴り、受話器を取ったバーテンが、美佐子の名を呼んだ。

だ。

その瞬間、圭二は和服の女がストールから立ち上ったのを見逃がさなかった。しかし、その女は電話に立とうとはしなかった。

女がバーを出るのを待って、圭二は声をかけた。

「失礼ですが、牧冬四郎助教授の奥様では」

美佐子はうなづいた。

「先生の講義を聞いている学生です」

高城圭二は自己紹介した。うそであった。圭二は、昨夜冬四郎の定期入れにはさんであつた、美佐子夫人の写真を思い出した。写真より美しいと思った。

四日目の昼頃、冬四郎は京都から帰京すると、圭子のアパートに直行した。

アパートの表札には、高城圭二になっていた。圭子の本名なのだろう。

ドアが開いたとき、シルバーヘヤーの圭子でなくて、ポロシャツで五分刈りの圭子に冬四郎は戸惑った。

「かつらなんです。あれ」

「本物かと思っていた」

「そうでしょう。誰もかつらだなんて知りませんよ」

「アパートでは男なのか」

「そうですよ。ここでは圭子でなくて。圭二です」

それでも圭二の部屋はなんとなく女くさかった。大きな三面鏡にはセールスマンが置いていった高級な化粧品が並び、壁には色とりどりのネグリジェ、女もののブラウスや着物がかけてあった。

「先生、一度、女装してみたいとおっしゃっ

新発足 懸賞／告白、手記、体験／原稿募集

☆賞金☆

優作	一篇につき	参万円
秀作	一篇につき	五千元
佳作	一篇につき	二千元

☆規定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。

一、従来、「告白」の分野で文献味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもって誌面を飾る考えであります。

一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る

手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさとは求めませんから、実際に体験されたもの、真実の裏付のあるものが大切だと思えます。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙を御使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号に発表。

一、入選作には掲載誌発売と同時に、賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別するため「懸賞」とお書き下さい。

ていたでしよう」

冬四郎にコニヤックを注ぎながら圭二は云った。

「背恰好もぼくと先生ではよく似ているし、道具はそろっていますから、今日は先生が女になってみませんか」

洗濯用のロープは、冬四郎の肌をしめあげ、後手にねじり廻された両手を縛りあげ、乱暴に胸に幾重にもまきつけられた。足はロープが無かったものらしく、腰紐で代用された。圭二に、これほど力があるとは意外だった。

女装しただけではつまらないから、S M プレイをしようと云ったのは圭二で、冬四郎が簡単に賛成したのが失敗だった。

ロープで冬四郎を、がんじがらめにしたら、圭二は汚れた白いパンティを冬四郎の口の中に押し込んだ。その上、冬四郎がパンティを口から吐き出さるように、足で冬四郎の口をふさぐと、メンスバンドからゴムの部分を取りはずして、冬四郎の口に猿ぐつわをした。

「そのパンティもメンスバンドも、綺麗ですから御心配なく」

と圭二は冬四郎に云った。

「なにしろ、昨日、先生の奥様が忘れていったのですからね」

圭二は床にころがった冬四郎を、けとぼしながらか続けた。

「汚れっぱなしで、洗濯はしていませんが、奥様のならいいでしょう」

冬四郎はうめいた。が、声にはならなかった。

「先生が京都にいらした翌日、あるバーで奥様と知り合いましたね。偶然です。先生と私の関係は奥様は知りませんから、御安心下さい。奥様のからだは先生にもったいないくらいです」

「――」

「奥様の裸は美しい」

妻と圭二の真昼の秘密を、私は目もつぶらずに見つめていました。圭二は隣室の床に転がされている私に、わざと見易いように縛った妻のからだを、いろいろに動かしました。妻は圭二の言うがままに、易々として従っていました。

私はいつのまにか、そのような妻に嫉妬を感じていました。夫以外の男に、それも夫の

目の前で、縛られた身体を縄目にもだえる妻が、たまらなく魅力に思えました。

疲れて、俯伏せになってふるえている妻のからだは、これほど豊満で、これほど新鮮に見えたことはありませんでした。

真昼の明るい光線は、妻の肌の産毛に輝いて、すんなりとのびた肢体は、若く美しく、とても二十七とはみえない、魅力にあふれていました。

妻は夫の私が、隣室から覗いていることに気がつかない様子でした。覗いている、のではなくて圭二によって、覗かせられているのでした――。

プレイが終ると、圭二は、妻に薄いシルクレフォンの、パイオレットの中国服を素肌の上からじかに着りように命じました。

「食事に行こう」

中国服のエリは高く上品でしたが、裾の切れ目が長すぎて、歩けば、それだけで妻の内股まで見えそうでした。事実、私は、その中国服を着た妻が、かかとの高いハイヒールを履いて部屋を歩いた時、妻の内股につけられた圭二のあざやかなキスマークが、中国服のひるがえった裾の切れ目から、はっきりと見えたのを覚えています。

そればかりではありません。この薄絹の中国服は、妻の肉付きの良い、尻の割目さえあからさまに外にむきだしにしています。

「銀座がいいな」

圭二は有名なレス

トランの名を云い。

許して、と部屋に坐りこむ妻を強引に外に連れだしました。

「歩けないわ」

「歩くんだ」

アパートの階段を下りる二人の靴の音が、やがて遠のきました。

それから何時間たったでしょう。

ふと気がつくと、

中国服を脱がされた妻が、テーブルの四本の足に、大の字に手足を縛られて、私の目の前で苦痛をかみしめていました。

隣室の境の戸は開けはなされ、妻の両足の間に、私の顔がありました。

「お目ざめですね」

と圭二が云いました。

「今、先生にお土産をあげようかと思っていますところですよ」

圭二の手には、子供の頃、それを見るときやで逃げまわった、いちぢくの形をした浣腸

器が、三つ握られています。

「奥様がたべすぎて苦しうだから、先生にもおすそわけしよう、というわけです」

私の顔の上に便器がのせられました。

「夜食の時間ですからね」

妻に浣腸液を注入し終ると圭二はゆっくりと煙草をくゆらし初めました。

妻が何か云っている様子でした。が、口一杯にまかれた猿ぐつわで声になりません。

妻の頬に涙が流れました。もがいて便意を訴えました。

私の顎から便器をとると同時に、圭二はおさえついた手も離しました。



縛られて床に転がされ、美佐子の汚物を浴びた女装した三十男が、自分の夫であり、圭二が愛人だったと知った美佐子は、圭二の皮ベルトで目茶目茶に冬四郎をなぐった。

その傷はまだ消えていない。

冬四郎の女装は、ピンクのショーツの上にフレヤーのついた白いパンティを履き、金具で盛り上った乳房のついたブラジャーをし、銀色のかつらをかぶり、真赤なナイロンのネグリジェを着たものだったが、美佐子にとって、それは学芸会のピエロよりひどい、見られない、夫の資格を奪うには十分すぎる仮装であった。

寝室に二つ並べて敷いた夜具が、その夜から、その夜がら一組だけになっていた。美佐



子だけが寝ていることもあるし枕が二つのこともあった。

枕は、冬四郎のものではなかった。

冬四郎は、本棚で埋まった書斎に、からだを丸めて寝ていた。用があるときはベルが鳴った。用とは、美佐子が命じる用のことである。

冬四郎の新しい仕事に、おしめの洗濯があった。夫婦の間に、別に子供が生まれたわけではなかった。

冬四郎が、かわいたおしめを、妻の寝室に持って行くとき、圭二におしめをさせられている妻を、よく見るようになっていた。

この頃になると、圭二と美佐子のクリステイルプレイも、イルリガートル、エネマシ

リンジ、空気浣腸と進んでいる様子だった。

冬四郎は、美枝子の汚物を浴びて以来、美佐子の命令で、強引に美佐子のネクタールを飲ませられることが多くなっていた。

夫に自分のネクタールを飲ませることが、美佐子は面白い遊びと心得ているようだった。それは、朝に、昼に、美佐子の気まぐれで、書斎でも、寝室でも、庭でも、美佐子の氣にいった処でおこなわれた。

それでも、美佐子は、夫にからだを許そうとはしなかった。ネクタールを呑むことが冬四郎に許されただけだった。

圭二がゲイボーイになったのも、アースに魅せられたのが最大の原因らしかった。

圭二は、今でも、圭子と圭二の二役を使いこなしている。

FRAGMENT

三原 寛

『週刊明星』四月五日号に一寸惹かれる記事が出て居ました。「ミス・キーラーの女友達が貴族と婚約!」というタイトルで、「私は全裸の男を奴隷にした」という見出しの活字が目につきます。

内容そのものは「……私が一番興味をそらされたのは仮面をつけた全裸の男性が奴隷のようにかしずいて、お酒をついでくれた事ね。……」という程度で、それ以上の事は書かれてなく、題字から期待する程の

ものはないのですが、ヒロインのマンディ嬢は「……彼は私に『結婚しよう』といったり、『結婚しても、ほかの男と寝てもかまわない』といったりしたわ。だからそういう風に行動してやったの……」といったり先程の「全裸の男に奴隷の様にかしずかれるのに一番興味をそそられた」という様な事から、私共マゾヒストに君臨する女王様としての天性の素質がうかがえ無限の空想を楽しませてくれます。写真でも傲慢なサディスティックな美貌と発達した脚線美は斯様な空想を十分に裏付けしてくれます。

東郷青児の『新男女百景』——東西文明社刊——にも、かなりマゾヒスト好みの内容が盛られて居ます。いくつかの短篇の集録ですが、「昼でも夜でも養子は養子」というのでは、奉公先の令嬢と結婚した男が妻を「洋子さん」と呼び自分は「おまえ」と呼ばれて徹底的にお臀に敷かれるのですが、若しこの男が自分だったら、彼女をもっと図に上らせて、完全な奴隷の地位に迄転落させて貰えるのに、と惜しい気を起させます。

「拝領した妻」というのも、社長の二号を押しつけられた男が、その横柄な妻を有難がって忠実にお仕えする話で、マゾヒスト好みの夫婦生活が送られます。その次の、

「夫は妻のドレイであるか」も妻にパンティ迄洗わせられる男の話。

「夫は例外なく恐妻家である」には「土下座する夫」というサブタイトルもついて居ますが、これは期待外れ。「かよわきもの男性」暴行した女は女の一時の気紛れで童貞を奪われた青年が女に心を寄せるが、女の方では一寸した遊びにしか考えてなかったという話。次の「女は邪気か無邪気か」女に奔弄された男では、同じ大学の女子学生が自分に思慕を寄せる男子学生の純情を弄ぶ話。最後の「女性の飼育趣味について」では、小学校のプール開きでPTAの余興にパトロンに犬の首輪をはめ鎖を手にした二号婦人がゴムマリをプールに投げ込み男は犬かきでそれを取って来させられるという犬化願望者を随喜させる話が出て居ます。著者の令嬢は奔放な性格で知られて居ますが、一度奴隷奉仕をしてみたい気を起させます。

本誌五月号芳野氏のマニヤのノートで青木順子の緊縛ショーというのがありました。これと男女の立場を逆にしたショーを特集号にも出た宮井美佐子嬢と組んでクラブのアトラクション等に出演して是非実行してみたいと、いろいろの場面を思い描いて居ます。眼かくしをされて美佐子嬢の皮鞭に追われて舞台の上を不様に逃げ廻る私、遂に打ちのめさ

れて床に崩折れた私が彼女の乗馬靴に取すがってお許しを乞うのを情容赦もなく蹴り踏みにじられる場面、空想は尽きません。

同じく芳野氏の「香夜子の神酒」私も、同じ様な持掛けで、いつでも飲ませてくれるトルコ嬢を二・三知って居り「こんな事されたい面白いお客さん、ほかに居ないかしら……」等と言って居りますので、交換条件で香夜子嬢を紹介願いたいのですが……。描写に魅されました。

編集部分嬢のフォトを意識的に終電の中でみて居たら横に居たパー帰りの女性「そんな事されたいの?……」。一度きりという彼女の条件で仕方なく何も聞かず翌朝ホテルの前で別れましたが、思わぬフォトの価値に感謝しました。

吊り皮につかまって、腰掛けた女性のハイヒールの下に草履ばきの足を滑り込ませると何も気付かぬ彼女は、はっと気がつく迄踏みつけて居てくれます。気がついて一層強く踏みつけてくれる女性が居たら……。混んで来たら十円玉を落してストッキングの林の中を這いづり廻って、揺れた拍子に手がハイヒールの下へ……。最近パチンコをする女性も多いのでパチンコ玉で同じ手を……。女性は夢中で気付きません。

(この項終り)

浅き夢見し

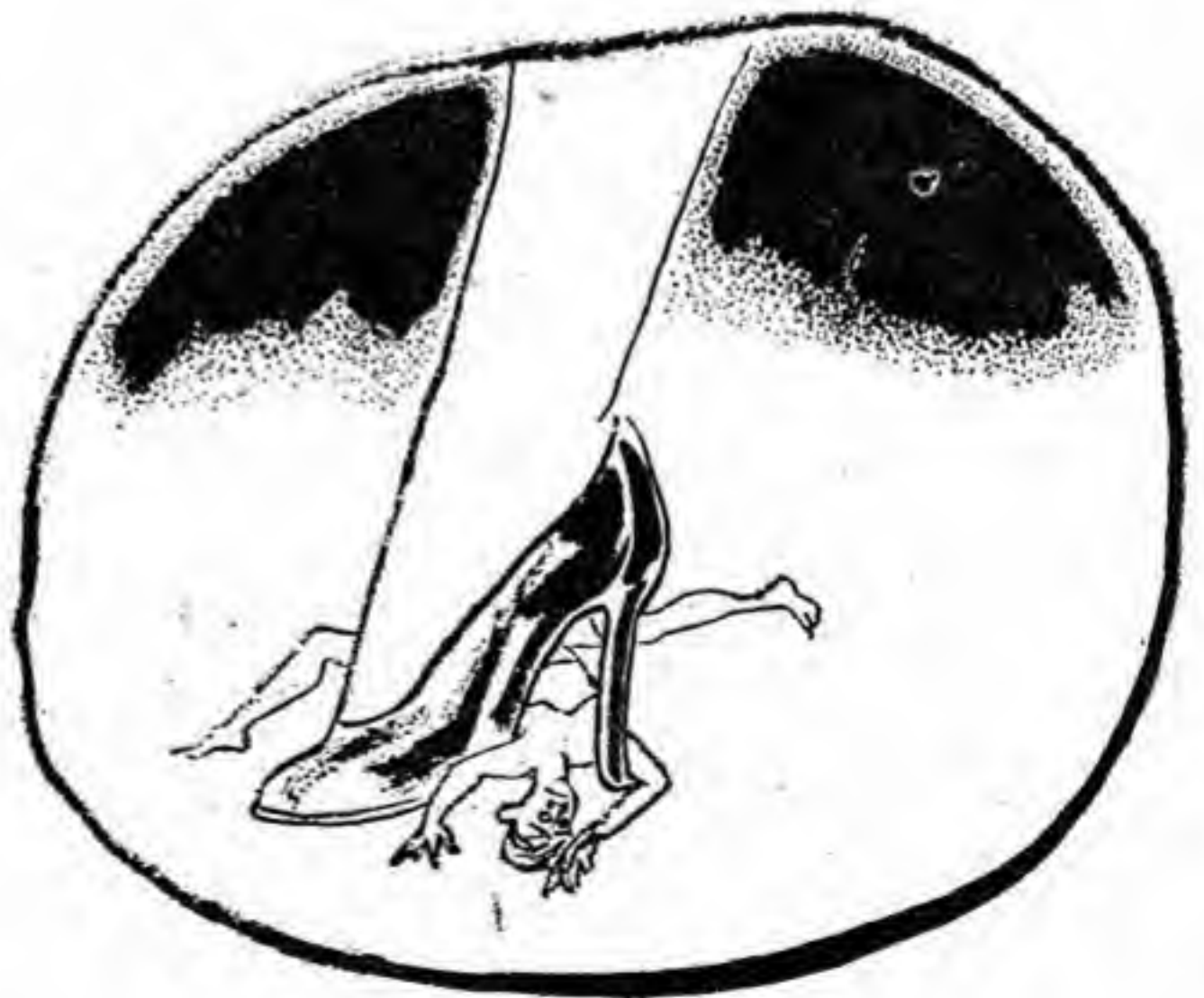
……悦虐絵灯笼その六……

万田不仁

廊下をこちらへ縫れて来る男女、男は遊び人風、既に泥酔の様子、女に抱えられるような、女にかじりつくような恰好。庭はどっと夏の雨、池の面に雨粒が夥しい。画面いちめに白蚊帳、その部屋へ大柄な女は思を入れる、殆ど抱き合うようにして、ふたりは白蚊帳の中へ。

蚊帳の中の男女の鮮かな影。「オイお浜お

れは今日は、しんから気持よく酔ったぜエ」「オヤそうかエ、酒ってものは一升飲んでも酔わねエ時もありやア二合で酔う時もあるワきとお前さんの胸が晴れたせエだよ」「ムウ、ちげえねエ、思いがけなくてめえに逢えてよ、おいら嬉しいぜ、赦免の時も嬉しかったが、こいつアそれぐれエのもんじゃねエ」「ハハハハ相変らず口がうまいねエ、だが大



分飲んだ、苦しいかエ」「ウウム、なあにいあんべえに酔った……ウウム」女は酔い潰れた男の上に夏蒲団を掛けてやり、己れも傍に添寝する。庭の立木に降りしぶく雨、雨、雨。再び蚊帳の中、男はもう高軒で寝入っている。そっと身を起して女は、「長さん、長さん、え、ねエお前さん……」軽く、それから、少し強く男をゆすってみる

が、男はウウウウと唸って、はや正体もない。女は、そっと帯の間に右手を入れ、蒲団の上から男の体に馬乗りになる。「長さん、ゆるしておくれ、わたしは今お前に纏わられたんじゃ、足掻きがとれなくなっちゃうんだよ、ネ、わたしの刃で死んどくれ、話して分ってくれるお前じゃねえんだから……」女の右手に光る合口、ずぶつと男の喉元へ。「ぎゃあッ」女は力一杯合口でえぐる。浴衣の前がはだかって、太腿がきれいに見える。束の間に息絶えた男の苦悶に歪んだ顔を見下し、薄団の衿で合口の血のりを拭く、女の凄艶な笑み。蚊帳を出る女の虚な表情、その大写真。また庭の雨脚、濡れた石燈籠、風に煽られる風鈴――。

☆

映画館を出て間もなく章作は後から肩を叩かれた。

「こんな処まで観にくるの？」

女は驚いたと云うように大きな目をよけい大きくしている。下宿の隣室にいる女画家の関森鈴子だった。

「あすこで小学校時代の友達が映写技手をしてるから……ねえさんも観てたの？」

「そうよ、一寸この辺まで用があったもんだ

から」

今日はその町の縁日らしく、露天商人たちが四角で何か声高に喋っている。

「この縁日、賑やかよ。章ちゃん、おしるこ飲んでこ」

鈴子はさっさと赤いのれんを分けた。隅に女学生が三人お喋りしている、その店の椅子は章作が腰かけるときしつと鳴った。

「章ちゃん、あんな映画好きなの？」

「うん、ねえさんの絵に、よくあるじゃないか、残酷な……毒婦物って云うのかな」

「でも絵とちがって、映画の方はなんか凄いわね、あの蚊帳の中で男を殺すところなんか」「あんなシーンの好きな人が案外多いんだ」「フフフフ、知ったようなこと云って。じゃ章ちゃんも好き？」

「きれいなひとになら殺されたって……」

「いい？ わあア墮落してる」

「ねえさんの影響もあるよ」

「まあ、あきれた、挿絵描くのは、私の商売だから仕方ないじゃないの、そんなこと云うと、もう見せたげない」

「いいよ、雑誌買うもん」

「パカねエ、そんなおあしあったら参考書でも買いなさいナ」

鈴子は若く見えるが、三十に近い、娯楽雑誌の主に時代小説の挿絵を描いたり、マッチのペーパーのデザインをしたり、文芸雑誌へカットを売込んだりして、ひとりて暮らしている。章作は中学四年、もう受験勉強に追われる頃で、戦前のこと、僕は陸士だ、俺は一高だなあとかラスの英才連は額に青筋を立てて勉強していたが、大の苦手の数学の試験のない私大の文科志望の彼は至ってのはほんと構えていた。彼は料理屋の女中をしている母親の私生児で、母は月末に下宿に来て、一箇月分の生活費を呉れる。偶に母の忙しい時、彼は下町の大きな料理屋の裏口に行くこともあった。母はその店で古参の女中で、大分巾が利くようであったが、彼はそこで何時も母が可哀相になり、自分も何やらとても侘びしくなるのだった。

下宿は素人下宿で、階下に家主の老人とその娘の四十に近い女がいる。二階ふた間の四畳半に章作、隣の八畳に前に電燈会社に出ている若い男がいて、そこへ屢女給風の女が訪れて夜遅くまで騒いだりして章作は憂鬱だった。それでもいい塩梅に若い男は他へ移り、その後へ鈴子が入った。ひとり者の鈴子は、章作のさびしい境遇に同情もしたのだろう、

彼を弟のように扱っている。

ふたりは、場末の閑散な店で妹弟のように汁粉を飲んだ。

☆

鈴子の部屋にはよく客が来た。

「雑誌の記者よ、私の絵を取りに来たのよ」

鈴子はよくそう云った。××倶楽部の編集部員だという、赤っぱい髪の毛をチックでテクカと押固めた三十男が来ると、章作は何か厭な気がした。夜、その男はせわし気に訪れて、その癖、すっかり腰を喉え、何時までも鈴子と話込んで、下品な冗談を飛ばしては大声で笑う。芝居や映画に鈴子をしつこく誘う。

「ああ、やっと退散したわ、いけすかない人章ちゃん、こっちへ来ない？」

男を送り出して、軽やかに階段を駆け上って来た鈴子が章作に声をかけた。少しむっとした顔で章作は女画家の部屋へ入った。

「ひどい煙草のけむり、今出してるよ」

開け放した窓から椎の花の甘い、烈しい匂いが漂って来る。春慶塗の机の上に描きかけの絵がある。牡丹の彫物をした女が湯殿に跣んでいる図だ。

「いけすかない人だけど、あの雑誌は稿料が

いいのよ、永ッ尻には毎度閉口するけどネ、お菓子食べなさい、あの人が呉れたのよ」

鈴子は巻煙草をくわえた。毎年、椎の花の匂う時分になると、章作は頭が重たく、体中にどろっと膿んだような血が殖えて、授業時間中に堪らなく睡気ざして来る。一学期の成績は良い筈はなかった。茶を入れ替えて、

「章ちゃんてあれネ」

流目に女は少年を見る。

「何よ」

「あなた、フッフ、少し焼餅やきよ」

「ど、どうしてサ？」

「だってそうよ、私解ってる、何時もそんなんだもの」

「何故？焼餅なんかやく訳ないじゃないか」

「それはそうネ、でもそうなんだから……今にネ、章ちゃんに可愛らしい女学生の友達なんか出来たら……その時、ああボクはジェラシーに悩むたちなんだ、と、まア解るわよ、まア、最中をもっと召しあがれ」

章作は頬を赤らめて、鈴子のセルの膝へ目を落した。

××倶楽部の赤毛の男のふやけたような顔が目に見え。低級な娯楽雑誌のあくどい挿絵、そのいくつかを描いている鈴子の仕事も

何かうとましい。彼が時折見せて貰う鈴子のデッサンやスケッチブックの絵は別人の筆になったような抒情的な美しいもののに。

階段に重い足音がして、家主のせむしの娘が顔を出した。

「大友さんが来てます」

「あら、直ぐ行きます、章ちゃん、お客さんだから……」鈴子はそそくさと立上った。

部屋に戻った章作は、窓のカーテンの間から下宿の前を流れる溝川に添って、市電の駅の方へ行く鈴子と肥った猪首の男の後姿を見送った。男は上等の洋服を着た初老の人と見えた。

☆

文芸部の会合があって、夕方下宿に戻ると直ぐ鈴子と呼んだ。

「章ちゃん、あなた私の机開けたでしょ」

怒った、白目のところが青みがかった女の目が章作を睨んだ。

「いや、そんなことボクするもんか、ボクは黙って他人の部屋に入らない」

「うそよ、かくしても駄目、白ばくれなくてもいいの、私別に怒ってやしないんだから、でも正直に云ってよ」

「冗談じゃない、本当に他人の机の中なんか

覗かないよ」

「うそ、見たでしょ」

「絶対見ない」

「そう、じゃアいいわ、この画帳のはしを御覧なさい、このしみは章ちゃんの指のあとじやないか知ら、あなた脂ッ手だから……」

章作は抗弁しようとして尖らせた唇をふつとゆるめた。争うことを嫌う、と云うより生来の投げやりな気性がこんな時も働いて、白けた顔付で黙りこんだ。それは学校で、退役軍人上りの生徒監に生意気だと云って時々殴られそうになる、ふてぶてしい態度とも取れた。

「ネ、章ちゃん、あなたもう私をおなかの中で嗤ってるでしょう、私は裏の仕事にこんなことしてる女よ。何時かあの映画館の処で逢った時も、あの傍の侍合のおかみさんに絵を買って貰いに行った帰りなのよ。私、もうあなたを咎めはしないけど、でも他人の秘密をあばくのはよくないわ」

「ボクはどうも解らない」

章作は項垂れた。鈴子がきつく責めないの、居直った気持が挫け、却って濡衣を着せられた不快感が犇々と身を包んだ。彼は彼の部屋を掃除して呉れるせむしの四十女を疑っ

ていた。彼が登校し、鈴子も外出した二階、襖だけの鍵の掛からない部屋、せむし女の青白い陰気な顔がそつと鈴子の部屋を覗く……。彼は湿った、鬱陶しい思いに胸塞いだ。

「いいわよ、こんなの世にも珍らしいってもんじゃないんだし、何処の家でも簞笥や本箱の奥なんかにあるもんだから……でも罰を加える訳じゃないけど、章ちゃん、あたしの見ている前でこの画帳を一頁々々御覧なさいナ、どうせポンチ絵みたいなものだから」

鈴子は陰った微笑を浮かべて、章作の膝へ画帳を乗せた。

☆

○半間の押入の飛び出している四畳間、西側に大きな腰掛け窓、床の間に大黒様の軸。三十一、二才の粹な美人、男は五十才くらい、五分刈面長のいなせな遊び人風の男、蒲団に仰向けに寝ている。赤いしごきを用いて、女が男の首を締める。女は男の胸板へ跨っている。

○酌婦お隅、お召縮緬、頭は達磨返し、玉のついたかんざし、櫛を横の方へよけてさす、白縮緬の湯巻。夫惣次郎の仇富五郎が嫖客、酔った富五郎を寝かせ、搔卷を富五郎の目の上まで被せる其上に乗る。隅「私は馬乗りに

乗るわ。富「何をするのだ息が出なくて苦しい、何をする、切ないよ。隅「本当に富さん不思議な縁だね。」といいながら隠してあった匕首を抜いて、――

○吉原江戸町二丁目大阪屋の遊女花鳥、遊客梅津長門の爲めに大阪屋に放火、伝馬町牢の女牢に入れられる。同じ女囚の、お兼が恋人長門の情婦だったと知り、お兼を殺す。女囚お亀（子殺しお亀という老婆、花鳥を愛す）が立て濡紙を一枚、お兼の顔へ張りつけ、腹の上へ乗り、両手を押えて力に任せて、その身の重みを掛ける。お兼は声も出さず苦悶、動す足を花鳥がしっかり抑えている。花鳥十五才。（これは女と女なれど甚だ残酷美、異常美を感じさせる。花鳥を可憐而も悪性の萌しある俤に、お兼は艶に、お亀を恐ろしげに描くこと）

○巴御前、御田八郎師重を鞍の前輪に押しつけ、頸をねじ切る（師重の苦しげな表情と血汐をよく描くこと）

「はじめの粹な美人と云うのは、ホラお定のことよ。次ぎのは円朝の真景累ヶ淵、面白いわよ、読むんなら本箱にあるから持っていきなさい」

時々鈴子を訪ねて来る初老の紳士の帰った

後の外国煙草の匂いの籠った鈴子の部屋、洋紙にHBで書いた原稿のようなものを鈴子は章作に見せた。

「あの人は私のお得意なの、ああ云うのがもう一人二人いると良いんだけど……」

「そんなに高く絵を買って呉れるの？」

「そうよ、普通の絵じゃないからネ、と云って枕絵なんかじゃない。ただ男がきれいな女に虐げられたり、殺されたりする情景を描いたもんだから……。つまり芳年なんかの無残絵ネ、あれを逆に女を男にすればいいんだから」

「この鉛筆の字、あの紳士の字？ 筋書みたいなもの書いて来るんだネ」

「まア、云わば註文書って訳よ、そんなの他に新聞の三面記事を切抜いて来たりする。日大生殺しなぞ続き絵で描かされたわ、変な趣味ネ」

「あんな立派な人がねエ」

「いいこと、章ちゃんも毒婦物の映画や小説なんが喜んでると、だんだん変態になっちゃうから」

鈴子は一寸章作を睨む真似をした。鈴子がひそかに描いて、場末の三業地の待合や芸者屋の女将に売っているあぶな絵を覗き見した

疑いをかけられた為め、一時気まづくなった二人の間もやがて以前より一層くだけて来た鈴子の笑顔の前に、章作のへんにしこりかけた感情は忽ちほぐれた。鈴子は、母親が料理屋の女中なぞしているし、ろくに勉強もせず、に翻訳小説やより低俗な読物を読んでいる怠け型の章作を幾らか侮り出してもいた。そんな章作があぶな絵の画帳を見せられて、娯楽雑誌に描く時の絵筆の使いようとは別人のような繊細な、キメの細かいタッチで描かれた男女交歓図にどんなに重苦しい短夜を過ごしたか鈴子は考えても見なかった。

「出来たら見せたげる。でもこんなのはねちちりと描き込むから青少年の目の毒だナ、かと云って、また内緒で覗かれても困るしネ、フフフ」

鈴子は飽迄章作があぶな絵を盗み見したものと信じている。静かな、蚯蚓が鳴くような晩で、小柄な鈴子が章作にはスタンドの灯に妖精じみて美しかった。

☆

冷たい秋の雨が宵から降り出した。明治節に外苑で行なう分列行進の練習で疲れ切った章作は早々と寝床に入ったが、疲れていながらさして睡れそうにない。彼は文庫本で直木三

十五を読み出した。

鈴子が襖を軽く叩いた。

「章ちゃん、入ってもいい？」

紺無地の着物に、朱に銀で銀杏の葉を浮かせた帯をした鈴子は、章作の枕元に近く坐った。珍らしくお化粧して、小さな唇に紅を濃くひいている。

「あのネ、章ちゃん一寸モデルになって貰えないかしら？」

「——」

「いいえネ、例の人の註文の絵なの、姫君が腰小姓をいじめるところなんだ、あなた一寸そのお小姓になってよ、あなたの顔をモデルにしたいの」

「もう寝るところだったんだけど、いいや」

章作は何気なく承知した。

「じゃ、私の部屋へ来てよ、直ぐ済むから」

鈴子の部屋には真中に緋毛氈が敷いてあり傍に古道具屋でも探したのか古めかしい行燈が仄暗い灯影を投げていた。

「薄暗くしてあるのは気分を出す為めなの、さア、その毛氈の上に横になるのよ、仰向けによ」

章作は云われるが儘に行燈の灯に緋が錆びた朱色に見える毛氈の上に横たわった。する

と鈴木は俄に浮き浮きした身のこなしで、章作の胸の上に馬乗りに跨った。

「こうやって姫君がお小姓をいじめるのよ、少々苦しいだろうけど我慢してネ、ホラこんな風なの、読んで」

帯の間から小さな紙片を出して、章作に渡した。そして鈴子はその儘の恰好で煙草を喫った。あの初老の男、鈴子に倒錯的な絵を注文する紳士が喫っていた外国煙草の強い匂いが章作の面を蔽う。

○白い小袖に玉子色の中着、金糸で縫った緋綸子を羽織った姫は、その膝下に組敷いた小姓の喉を、弓の折れを以て圧しひしごうとする。姫の嗜虐的な、冷酷な美貌、下になった

小姓（美少年に描くこと）の苦しげな顔（而も苦痛のなかにも姫の手で責め殺される喜びの色が現れていなくてはならぬ。背景は桃山風の男女の花見姿を、細密に華麗に描かれたし）

紙片にはこう書いてある。円くなったHBで、まるっこい字で。

「さア、少しいじめるわよ」

鈴子の両手が章作の喉にかかった。

「あなたの断末魔の顔を、参考にして描くのを、フッフ、断末魔は大ゲサネ、そんなにはしないわ、大丈夫落すようなヘマはしないから、フッフ、それにこの前松の画帳を覗いた罪もこの際償うべきよ、そらッ、どうだ、こ

Mフォト・モデル募集

五月号にて「Mフォトのモデル」を募集しましたところ、多数の方々の真摯な御応募を頂き感謝しております。新しいS女性モデルの対象として、漸次御連絡の上撮影しております。

尚、引続いて左記の要領にてMモデルを募集いたします。女性又は男性を対象とす

るMモデル及び男性ヌード・モデル。女装モデル。口絵には発表しませんから顔面の撮影可能、日曜日以外出演可能の方。御希望の方は、年令、職業、身長、体重並に好まれる傾向などにつき明記の上御便り下さい。秘密厳守、採用の方には、撮影の日時場所など御連絡いたします。撮影の方には交通費日当を差し上げます。

△編集部▽

うしてあげる」

章作はあまり強く締め上げるので今更ながら驚いて、力一杯喉を締める鈴子の手を払おうとするが、彼の両手はどうしたことか麻痺したように動かない。寧ろ足の方が利くものこれ亦可成りしびれていて、とても小柄な鈴子でも跳ねのけるたしにならない。

「うう、うう——ん」

章作の目に紅を濃くした鈴子の唇がさながら牡丹の花のように大きくなり、それは間もなく赤い巨大な蝶になって飛び立った。同時に彼の目の前は真暗になった。顔の上に柔かい、重たいものがかぶさって、彼は息が詰まりそうになった。

「ハハハハ、章ちゃん案外意気地なしねエ、もう少して私のお尻の下で圧死するところ。もう大丈夫よ、これでおしまい、絵が出来上ったら見せたげる、章ちゃんによく似たお小姓の切ない表情が、よく描けてたらおなぐさみ、ハハハハ早くお部屋へ帰っておやすみなさい」

ハハハハ、フッフッフ、鈴子の妖しい笑声が段々遠ざかり、秋雨の音が代りに強く耳を打って来る。章作の枕元には春陽堂文庫が一冊開いた儘伏せてあった。

（おわり）

……サジスチック・ストーリー・シリーズ……

ある夜の政代

大 中 忠

秋の空は高く晴れ渡っていた。都会の俗塵も半ば高原のこの辺りまでは犯していない。人影も見えない昼下り。一段と高い所に立っている広い洋風の家の門を馬に乗ったまま、一人の娘が通った。年の頃は二十五、六。腰の線にピッタリした乗馬ズボン、秋の陽を浴びて黒光りする長靴、長袖のスポーツシャツに手袋、豊かな髪を押さえる帽子、手入れのよく行き届いた艶のある馬にまたがった姿は体格の良いことも相まって見事なものだ。政代の誇り得る趣味、すでに小学生の時から乗り続けているだけに馬は彼女の思うままに動

いた。今日も人気のない山路を一時間ばかり走らせて帰った来た所だ。

「お帰りなさいませ」

庭で出迎えたのは中年の良助。彼は召使としてもうこの家に十年余りもつとめている。召使という名は時代遅れの感がするが良助の場合は、この名が一番ふさわしかった。彼のこの家での立場は、全く身分が違うという言葉で表わすより方法がなかった。何かにつけて差別をつけられていた。そして、良助自身もそれを当然の事として受け入れているようだった。

「ああお嬢様、お靴にごみが」

良助は手にした箒を置いて、よく磨かれた政代の長靴に手を延ばした。

「何するのよ」

いきなり政代の手にした乗馬鞭が空を切った。良助は思わず頬を押さえて崩れ落ちた。その頬に赤い筋が見る見る浮かんで来た。

「放つという頂戴」

どういう誤解か、政代は良助を尻目に馬腹を蹴ると馬舎に向った。座り込んだまま彼女の後姿を見詰める良助の目に一瞬激しい憎悪の炎が燃えたのに気付かなかったのは、果し

て彼女にとって幸せだったろうか。

何しろ物心ついて以来、したい放題にして育てられて来た政代だ。良助などは一ヶの人間とは思っていないようだ。全て、自分の意のままになる奴隷としか考えていないのだらう。彼女の父が時々家を空けることも、彼女をこの家の女王の様にふるまわせる一因かもしれない。そして今夜も彼女の父は帰ってこないのだ。

広い屋敷の中には政代と良助だけだ。炊事も良助にまかせてあるこの家では、政代は唯自分のことさえしていれば良いのだ。

温いミルクを飲んでから政代は自分の部屋に入った。慣れていく為に淋しさは余り感じない。近くに家がない為、夜になると殆ど物音は聞えない。

政代は机に向って本を開いたが何だか頭がぼうつとなつて活字が目に入らない。疲れる程走らせたおぼえはないのだが、いつもより眠くてたまらない、ええいねてしまえ。政代はシャワーの温度を上げて白い体を温めた。寝る時は薄いネグリジェの下には何も着ないのが彼女の習慣だ。勿論彼女の若々しく美しい肉体は殆ど丸見えだが、彼女はそれを気にしていない。彼女はこの姿では決して他人の

目にふれる所には行かないのだ、例え父親の前にでも。それ所か、彼女は肌を他人の目にさらすことを極端に嫌った。その為わざわざ自分の部屋にバスを作らせたり、修学旅行にも行かなかった。真夏でも長袖シャツにストラックス、ズカートの時でもナイロンのストッキングは必ずはいっていた。

しかし、自分一人の時は、大胆だ。寝る時には、いつも鍵をかけた上で、この姿になるのだ。ふんわりしたネグリジェをさばいてベッドに横たわった政代は電気を消すとたまらない程の睡魔に襲われた。闇と共に彼女の頭の中を分厚い黒布がびったりと被ってしまったようだ。夜は音もなくふけて行く。

異状な程の悪夢に襲われた政代は目を開いた。まだ頭の中がはつきりしない。しかし、どうも辺りの様子がおかしい。何だか嫌に陰気な感じだ。闇の中で何もかもが沈んだ調子だ。体が自分のものでないようだ、手も足も重く動かない。まだ悪夢の続きのようだ。自分の手が、足がどうなっているか懸命に考えてみようとした時、急に電気がつき、現実が目の前に露わにされた。その現実の余りにも予想外なのに政代は我が目を疑った。

場所は地下室、普段は要らないものを放り込んであるだけ政代等、めったにのぞいたこともない。がらくたが一方に寄せられ裸電球の下の空間に頑丈な椅子が一つ、型が古くなつたという理由だけで放り込まれた椅子の上に政代は腰掛けさせられ、両手を後にまわして細いロープで縛りつけられているのだ。両足も椅子の脚に縛られている。薄いネグリジェ一枚のままだ。豊かな乳房が縄目の間から盛り上り、なまめかしい肉体の線を露わにしていた。

「お嬢さん、良い体してますなあ」

みだらな声と共に、自分の姿に驚いている政代の前に中年の男が姿を表わした。

「あ、良助！」

「おっとっと、そう簡単に呼び捨てにしてもらいますまい。今じゃお嬢さんの方が俺の囚人なんだ」

「この縄を解いて、どうするつもりなの」「だまれ娘！ 今迄良く俺を虫けら扱いしてくれたな。今夜はたんまり礼をさせてもらうのだ」

「嫌、寄らないで。駄目」

弱い音と共にネグリジェの胸元が政代の体からはがれた。丸い肩がむき出しになる、艶

のある白い肌だ。

「心配するな。俺はな、腰の怪我で、不能者なんだ。お前の体は汚しやしないさ」

良助は吐き出すように喋りながら政代のネグリジェをむしって行った。

腰、もも、腹、そして縄に噛まれたわずかな切れ端を残して、布切はすべて彼女の体から離れて行った。今迄他人に肌を見せる事を極端に嫌った政代、その政代の体が余す所なら最も軽蔑していた召使いの前にむき出しにされたのだ。しかも肌を隠そうにも両手は後にまわされ、縛りつけられているのだ。政代はもう意識が遠のいて行くようだった。

良助は後手の縄だけを解くと両手首を前で縛り上げた。その縄を天井に仕掛けられた滑車に通すと、初めて他の縄も解き放った。縄目に止められていたネグリジェの切れ端が落ちた。

自由になった腕と足で政代が抵抗しようと試みた時、いち早くそれを感じた良助は滑車を通った縄をぐいと引いた。彼女の細い手首に激しい痛みが加わり体は重心を失って、ぐんと吊られた。両腕が一杯伸ばされ、爪先がやっと下に着く姿勢で縄は止った。引き伸ばされた腋腹が、裂けるように痛い。

「もう止めて、お父さんが帰ったら、いってやるから」

囚われの娘の勢一杯の反抗だった。

「残念ながら、明日の夜迄には、俺は何処かへ行ってしまってるさ。いうんならどうぞ、お好きなように」

こんな男に、自分の体を自由にされては耐らない、いっそ舌を噛んで、と思うのだがそれ程の勇氣もなかった。

一本の棒のように伸ばされた政代の体は美しかった。二十を過ぎたばかりの肌は白く、若さに張り切っていた。丸く固くふくらんだ乳房と小さく締った薄紅の乳首、締った腰、むっちりとした肉のついた太ももと、型良く締ったふくらはぎ、どの一つを取ってみても、他の誰にも劣らぬ美しさだった。今迄彼女が、この体を他人に誇らなかつたのが不思議な位だ。

下唇を噛んで羞恥と恐怖に耐えている彼女の背中に突然鋭い音と共に、皮ベルトがふり下ろされた。

「ギューッ」

ふいをつかれた彼女の口からは人間らしくない悲鳴が洩れた。

「どうだ氣持が良いだろう。この一つ一つに

下男の恨みがこもっているのだ」

「ギューッ」

「俺はこの日の来るのを夢見ながら、今迄、我慢して来たんだ」

「グエーッ」

「ミルクに睡眠薬を入れておいたのには氣付かなかったろう」

「ヒューッ」

「確かにお前は良い体をしている。俺が普通の男ならお前を滅茶々々にしてやるのだが」

「ヒューッ」

ベルトの当たった白い背中にはたちまち赤い筋が走り、みみず腹れになって来た。苦痛に体をのけぞらせると、爪先を中心に体がくるくるとまわり、手首に縄が喰い込んで来る。彼女の白い背中はたちまち赤く痛々しく彩られてしまった。体中から汗が吹き出し、腋毛も肌にびったりとひっ付いている。

良助はぐったりとなった政代を下ろすと、ふたたび後手に縛り上げた。

「こんな汚い所は美しいお嬢さんには不向きだ。もっときれいな所へ行ってもらおう。さあ立って」

縄尻を取られて政代はよろよろと立ち上った。白い素足にむき出しのコンクリートが冷

い。背中が燃えるようだ。後手に縛られた政代は自然伏目になる。背中を突かれて足を運ぶ。長い脚の動きが美しい。政代は自分の部屋に連れて行かれた。時計の針は四時を指している。暗い部屋から急に明るい照明の下に出ると政代はくらくらとした。と同時に自分の姿が余計みにじめに恥しく思えた。

良助はバス・ルームの扉を開け、電気をつける。白いタイルがまぶしい位だ。良助は嫌

がる政代をひきずり込むと洋式の便器に逆に腰掛けさせ、目の前のパイプに上半身を縛りつけた。痛々しく腫れた背中が露わになっている。抵抗心を半ばもぎ取られた政代だったが、自分の今の姿を見、次に何が来るか考えると、じっとしては居られなかった。

「もう、いや、許して。助けて、ねえ、お願い。もう決して馬鹿にしないから」

良助は黙ったまま政代の後でしきりに何か

の準備をしていた。ガラス器具らしい音が聞える。その音を耳にして政代は冷たい物が背筋を走るのを感じた。誰でも、決して人に見せない時、人に見せない姿。それが、こともあろうに異性の下男の前に展開されようとしているのだ。

そして、やがて彼女の体内に冷い液体が注ぎ込まれ、下腹を表現しようもない感覚が走りまわり始めた。

「ああ、駄目、お願い。外に出て、一人にして、早く、お願いだから」

彼女のもだえに縛しめは、いよいよ深く柔肌に喰い込んで行った。後手に括られた手首はもう血の気を失っている。

「駄目だね、ゆっくりと拝見させてもらうよ。日頃とりすましたお嬢さんにだって、こんな一面があるのだからね。人間、裸になれば、皆同じってことさ。それぞれ、もう少しだ」

「嫌、駄目、お願い……ああっ」

政代の口から言葉にならない声が洩れると、張りつめた糸はプツリと切れた。がっくりと縄目に身をゆだねた政代。間もなく政代は後手に縛られたままバスの中に横たえられていた。良助の腕に抱かれて来たの



だが、良く発達した政代の裸身は良助にとって重過ぎたようだ。政代を横たえた後、彼はしばらく息を整えていた。

「さあ、体をきれいにしてやろう」

良助は栓をひねった。湯が音を立てて流れ込んで来る。伸ばされた形の良い脚を湯が浸し始めた。湯は段々とふえてくる。

「ヒューッ」

いきなり政代が悲鳴を上げた。背中の鞭跡に湯が達したのだ。頭迄つきささるようにしみ込む。不自由な体をもがかせて立ち上ろうとしたが、足は滑るし、両手を後手に縛られていては重心を取れない。無駄な努力だった。

「おっとっと。その体をきれいにしなくては駄目だ。もっとゆっくりつかってるんだ」

男の手がむき出しの彼女のすべすべした丸い肩を押えた。

「ヒューッ痛い。しみる。助けて」

鞭跡は段々湯に浸されて行った。

無駄と判っていても彼女はもがき続けた。

が、しばらくすると慣れてしまい、痛みは感じなくなる。政代はおとなしくなった。

彼女の肩を離れた男の手は石鹸を泡立て、彼女の裸身を洗い始めた。細部に亘る迄まで

まわす男の手、彼女は、今度は、その感触に耐えねばならなかった。水分を吸った縄が固く彼女の肌を締めつけて行った。乳房が益々奇妙に歪み、腕の血行は止められて行った。

「さあ、これできれいになった」

湯がぬかれる。シャワーの栓がひねられ、政代の体から泡が流れ去って行った。傷のない部分の肌が白く美しく光る。

美しい裸身をバスタオルで包み、良助は美しい囚人を寝室に連れて行った。もう政代はあきらめ切った様だ。美しい囚人と醜い中年の男、美女と野獣を图示したようだ。

政代はベッドに押し上げられ、柱に縄尻をつながれた。

「少し疲れたろ、何か食べるか」

良助は政代をそのままに出て行った。政代は縄目から逃れようともしせずにうなだれていた。もう彼女の心はすっかり打ちひしがれてしまっているのだ。いつものプライド高い彼女とは別の女が、そこに座っているのだ。

「さあ、お前さんも少し食べなよ」

良い香りをただよわせるトースト、熱い湯気を上上げるハムエッグ。その芳香に政代は自分の空腹を悟った。

「さあ、お口を開けて」

トーストの一切れが政代の前に持って来られた。腹の中がきれいに掃除されてしまったのは、食欲本能の方が先に立つ。政代は口を開けた。快い香り。

「ほら、卵だよ」

「熱い！」

柔らかく焼かれた卵の白味が、彼女のむちりした太ももに落ちた。

「おっと御免よ」

白い太もものそこだけが赤くなっていた。彼等の朝食は時間をかけて、半ば遊びながら進んだ。終わったのはもう陽は高くなっていたからだった。丁度、その時だった電話のベルが鳴ったのは。

「電話か。待てよ」

良助はベッドの横にぬき捨ててあった政代の下着を取った。

「さあ口を開けるのだ」

政代は首を横に向けた。ベルが高く鳴る。

「馬鹿野郎、いつ迄抵抗する気だ」

政代の頬が鳴った。白い頬に赤く指の跡が浮ぶ。否も応もなかった。政代の口一杯に下着がつめ込まれ、ストッキングで結ばれた。

「はいはい、お待たせしました」

良助はやっと電話に出た。

「ああ、御主人様ですか。お嬢様は馬でお出掛けになりましたが」

ああ、お父様からだ。助けて、政代は叫んだが、全然声にはならない。彼女は身をもだえた。柔らかい体に縄目は深い窪みを作っ

た。

「はい。八時頃ですね。お伝えしておきます。はいはい、何も別に。はい、では」

電話は切れた。政代は力を抜いた。そんな彼女を見て、かすかに笑みを浮かべる良助。

本誌次号(七月号)から定価三〇〇円になります。

毎月特集号形式にて、グラビヤ写真、オフセット口絵を大幅に増頁、充実した内容にいたします。

本誌予約申込者募集

○本誌の送料は、全部当社にて負担いたします。誌代のみ御送金下さい。

○六月号まで一部定価二五〇円ですが、次号七月号からは一部定価三〇〇円に値上げになります。従って予約購読料は一カ月一冊三〇〇円、三カ月分三冊九〇〇円、半年分六冊一八〇〇円に改訂いたします。

○予約お申込みの方には、毎月二十日頃印刷完成と同時に、外部から見えないように厳重包装の上、お送りいたします。

○毎月一冊宛お申込み下さる方は、誌代三〇〇円を、なるべく十五日頃までに御送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約者の分と一斉に発送できます。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号

から何カ月分とお書き願います。何月号からとお書きにならないときは、重複や欠号をきたしますので、お留意願います。

○予約金が切れましたときは、封筒の上に「本号にて前金切」の判を捺印いたしますから、継続お払込み願います。その際、継続でも何月号からとお書き添え下さい。

○局留にて雑誌をお受けとりになられる方は、毎月二十五日頃、局へおいで下さい。

局留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受取りに行きたい郵便局(特定郵便局でも結構です)と受取人のお名前とお知らせ下されば、当方では、御指定の局留としてお送りいたしますから、数日後その局で御受領願います。局での留置期間は十日間です。その間にお受取りにならないときは、発送人に返戻されます。

「判ったろう。八時にならないと帰らないとさ。今日は一日中おつき合い頼むぜ」

その日一日、政代が良助の責めの下にどのようなにあえいだか、そして美しい曲線をどのように歪ませたか、それは二人だけが知っていることなのだ。

その日の日暮。政代の白い体は一面傷で被われ、肌の張りも失って、もう良助のなすがままだった。

良助は政代を玄関を入った所にある柱に縛りつけた。脚も揃えて、丹念に縛りつけた。「御苦勞様、俺はもう消えるぜ。もう目の前に表われないからね」

良助は去って行った。政代はもうぐったりとむき出しの体を縄にゆだねているだけだった。間もなくお父様が帰ってくる、こんな浅ましい姿を見せなければならぬ。肉身であるだけに余計羞恥が激しかった。それ迄にどうにかしなければ。駄目、体が痛くなるだけ。何てしっかり縛ってるんだらう。ああ乳房にも傷がついてる。早く、早く、その時、玄関に足音が近付いた。

(完)

× × ×

解剖マニヤの手記

女 体 解 剖

嶋 田 雪 子



初めてお便りさせていただきました。
私は或る商事会社に勤めるBGでございます。
数年前から「奇ク」の存在は存じており
ましたが、私は愛読者ではありません。その
くせに投稿するのも妙ですが、「奇ク」は私

の好みと一致しないのです。なぜならば責め
とか切腹洗腸など、私には全然興味が無いの
です。私にとって一番興味あるもの、そして
私の心を奪って離さないもの、それは検死と
解剖です。「奇ク」にも時々解剖の記事がの

りますが、その時は絶対のがさず買い求めて
おります。

解剖という言葉を知ると、誰でも興味をお
ぼえることと思います。医師以外は私達の胸
腔や腹腔で毎日働きつづけ、私達の生命をさ
さえいてくれる色々な内臓を見たことはな
いでしょう。ですから死体を解剖して人体の
臓器を見たいという希望は誰の心にも潜んで
いるのではないかと思います。

しかし私の解剖に対する興味は普通の人々
と異なり、人体を解剖したいとか、する所を見
たいというのではなく、私自身の体を解剖し
てほしい、解剖台の上に丸裸で横わり、のど
元から股まで鋭いメスでざくざくと切り裂い
てもらいたいという所にあるのです。私は小
学校の頃、先生から解剖のお話を聞いてから
解剖に興味を持ち始めました。でもその頃は
普通の人々と同様人体の内部に対する好奇心
からでした。

中学時代には、生物部に入り犬を解剖した
こともあります。しかし成長するにつれ解剖
に対する興味の焦点が変化し、自分自身が解
剖されたいというマゾ的傾向を帯びる様にな
ってしまったのです。以前は犬の死体を解剖
しながら「人間を解剖してみたいわね。」と、

お友達と話合った私でしたが、現在では、そんな気持は全然ありません。おそらく解剖台の死体を見ただけで逃げだすでしょう。

一年程前偶然踏切事故を目撃してしまいました。内臓が露出した血まみれの惨死体が車輪の間から引き出されるのを見てからは数日間、食事も出来なかった私です。でも現在夜毎解剖台の上で血まみれの臓物をさらけ出しながら解剖されている自分を想像して、秘かに寝られぬ位、興奮してしまう私なのです。解剖されたいなどというのは、マゾの極地ともいえましよう。しかし、私は責めなどには全然興味はないのです。私は私なりに、自分の気持を考えてみましたが、男性に対する女のコンプレックスが原因ではないかと思うのです。男女平等、或は「女は強くなった。」といっても現在の社会はあくまで、男性中心、男性優位です。

ですから多くの女達は心の底では、男に生まれていたら、と思ひ今度生まれて来る時は男でありたいと願っているのではないかと思います。妊婦も多くは男の児が欲しいというではありませんか。要するに現在の社会に於ては、女は常に男に対してコンプレックスを持っているのです。コンプレックスが深ま

ると逆に必要以上に自己の長所を誇大視する様になります。女の長所即ち女性の方が男性より優れている点、それは新しい生命を育て生み出すという、女の生殖機能でしょう。従って女の多くは、その生殖器の内臓されている腹部に異常なまでの愛着と誇りを持つ様になり、腹部を切り開いて、それらの存在を異性に誇示したいという気持を持つ様になるのではないのでしょうか。ですから私は同性の執刀による解剖はいやです。必ず異性の執刀による解剖であってほしいと思います。また反対に変死した若い女性が解剖されるという記事を新聞などで読みますと、うらやましいなと感じると同時に、いい気味だ、という残酷な気持が生じて来るのを押えることが出来ません。

映画俳優のモンローが自殺し解剖されたときもそうでした。全世界の男性を悩殺した彼女がああ豊かな肉体を解剖台の上に横たえ、汚物の一杯つまった、腸をうねうねと露出させ、一糸まとわぬ裸体を血まみれにさせながら解剖を受けている、浅ましい姿を想像すると、男性に相手にされないオカメの私などつい快感を感じる、という、言過ぎかもしれないかもしれませんが、そんな気持に襲われてしまうので

す。女というものは同性に対しては非常に残酷なものです。

「奇ク」誌には解剖の記事はほとんど出ませんが切腹、特に女の切腹に関しては、毎月絵や記事がのせられています。しかし執筆者はほとんど男性ですね。このことは私は女は男性によって腹を裂かれることを望み、男性は女の腹を裂いてみたい望んでいることを意味するのではないかと思います。

数年前の事です。ある若い女性が三角関係清算の為相手の男によって殺されるという事件がありました。山林の中で発見された彼女の死体は下腹部が目茶苦茶に切りきざまれていました。犯人はすぐ捕えられましたが、なぜ死体に傷をつけたかという係員の質問に対し、犯人の男は、「女の体がどうなっているか調べて見たかったから。」と答えています。この様な気持は多くの男性の心の底にあると思います。おそらく男性達の夢の中で何十万人という女達が腹を立ち割られていることと思います。

私は男性達によって単に興味本位に腹を裂かれるというのではなく、ある目的を持った解剖を熱望します。私は解剖に興味を持ち初めてからはつとつと解剖に関する書物を集め

ており、人体がどんな手順で解剖されてゆくかは、かなり良く知っているつもりです。

一般に解剖の描写として、のどから下腹迄一文字に切り裂くという表現が現われて来ますが、これは主として、法医学解剖の場合です。法医学解剖は御存知の如く、変死者の死因や死亡時間を判定する為の解剖で、頭のてっぺんから足の先まで又眼や耳、鼻、口腔から陰部肛門まで、くわしく観察してから、頭部、胸腔、腹腔を開いて各臓器を検査します。

又病理解剖というのがあります。これは病死した人の死体を解剖し、手当の良し悪しや患部の状態を観察するものです。従って解剖する個所は患部及びこれと関係のある所のみということになります。最後に系統解剖というのがあります。これは人体の組織構造を知る為の解剖が医学生が行なう解剖などがこれに当たります。人体の構造を知る為の解剖ですから、単に内臓だけでなく、筋肉や血管、神経、骨まで解剖するもので、医学生が人体を完全に系統解剖するには数カ月かかるといわれています。

私が熱望するのは、この系統解剖です。といっても私も女ですから顔面の解剖など受け

るのはいやです。胸部や腹部が解剖されるのは望む所ですが、手足をバラバラに寸断されたり頭蓋骨を鋸でゴリゴリ切られたりするのはいやです。私が一番望むのは、いままで書いて来た事からおわかりでしょうが、私の体の女を系統解剖して頂きたいのです。大学医学部の産婦人科学科用の教材として、複雑な女性生殖器官の組織構造を学生達に理解させる為に、私の体を利用してほしいのです。産婦人科用教材としては、若い女体であるということが絶対必要です。何回もの妊娠や分娩の経験は女の体に大きな傷跡を残しますし、年を取りますと乳房だけでなくホルモンの関係から卵巣なども萎縮してしまうのだそうです。妊娠していれば理想的ですが、この場合は初産婦であることが必要です。

さわやかな初夏のある日、今日は私が産婦人科学講義の為の材料として女としてというよりは、ホモサピエンスの♀として解剖される日です。明るい教室の中央に顔を自分でおわれた私が生れたままの姿で解剖台ではなく婦人科用の診察台の上に、あの女としては最も屈辱的な姿勢で横わっています。

下腹部を解剖するには解剖台より診察台の方が便利なのです。医学生の実習で解剖

台の上で性器を解剖する場合は骨盤部を胴体から切断して両足で万才する様な姿勢にさせて解剖するのだそうですから。

さて、妊娠十カ月胎児もろとも息絶えた私は静かに解剖の時を待っています。やがて、若く健康で陽気な医学生達（全員男子学生）がノートや解剖図を片手にやって来ます。こぼれる様な大きなお腹の私の側には女体の神秘を切り開く大小の解剖刃やピンセット、海綿などがすでに用意されています。

やがて教授がやって来ます。「皆さん幸なことに非常に貴重な教材が手に入りました。それではこれから授業を始めますが貴重な遺体を提供された、この御婦人に心からの黙禱を捧げましょう。」黙禱がささげられると、教授がメスを取り、いよいよ解剖が始まります。まず両方の乳房が切開され、次で外陰部が克明に解剖されてゆきます。学生達は解剖図と解剖されつつある実物とを比較したり、ノートをとったり、スケッチしたりし、教授は馴れた手つきで要領よく解剖を進めながら各部分の説明をしてゆきます。

外部が終ると、臍の下一センチ位の所を、横一文早に大きく切り裂きます。部厚い脂肪層を見せる大きな切り口から、パンパンにふ

くれ上った子宮が露出します。さらに恥骨迄縦に切開し、下腹部全体が手ぎわよく解剖され子宮や卵巣その他女性生殖器全部が腹腔からえぐり出されます。大きな子宮が真二つにされ胎児が……。

この様な解剖を私は一番望んでいます。要するに私は複雑巧緻な女体を理解する過程としての解剖を望んでいるのです。

「奇ク」愛読者の中にも多くの解剖ファンがおられることと確信します。切腹だけではなく解剖に関する記事や絵が「奇ク」誌上にあられることが望んで止みません。ただ切腹という言葉は実際はどうあれ、壮烈なむしろ

美しくさともいったひびきを持っておりま

すが、解剖となると陰惨で残酷な感じを人を与える様です。解剖というと、薄暗くじめじめした地下の解剖室で、血と脂と汚物のしみ込んだ石の解剖台の上で、やせこけた老人や処刑された死刑囚の死体が切りきざまれる、という印象が一般的です。しかし今日では解剖室は何により採光が充分でなければなりませんし、又解剖台などもステンレス製の清潔なものです。

又アメリカでは病院で亡くなった人々は皆原則として、病理解剖を受けるそうです。おそらく将来には死亡した人は全員解剖を受け

た上で死亡証明書が交付される様な時代になり、又現在の様に医学部だけでなく、大学の教養の課程に於ても、死体解剖の講座が出来るのではないかと思います。何故ならば、人体の構造をも知らずして人間性を理解出来るはずがありません。解剖ファンが「奇ク」誌上に多勢現われます様、あえてペンをとりました。

どうか、若い女性の「解剖」について興味をお持ちの方、勇気をもって名のりをあげて下さいませ。羽村京子さん、「女体解剖」についてのお便りをお待ちしています。

限定版写真集
グラビヤ印刷

豊満と清楚

五月中旬発売予定

頒価一部一〇〇〇円（送共）

一般書店にては販売いたしません。直接お申込者に限り分譲いたします。

モデル——長野 良子、大塚 啓子

モデル——五月亜紀子、新井マリ子

豊満な肉体を誇る長野良子と大塚啓子の緊縛裸身を全画面いっぱい活躍させ、加うるに清楚なフェイスと肢体の五月亜紀子

と新井マリ子の両新人の痛々しいばかりに可憐な緊縛裸身を以て、誌面を飾ってゆきます。本誌口絵グラビヤには掲載できない超弩級品ばかりを揃えます。一見マニヤの方々の胸を抉ぐる力作の網羅です。次号にて詳細発表いたしますが、どうか御期待下さい。尚、新人モデル、ベテランモデルの特写フォト、モデル特集などを引続いて刊行するよう企画中です。

本限定版の略号（限二）

◎詳細七月号誌上に発表◎

長野良子、大塚啓子、五月亜紀子、新井マリ子の四人のモデルの特写フォトの原稿も全部揃い、直ち印刷できるよう準備が整っておりますが、臨時増刊「花と蛇」特集号発刊のため、「限二」は若干予定より遅れました。次号誌上にて内容の詳細を発表いたしますが、予約お申込み下さっております方々に対しましては、印刷製本完成と同時に確実に発送申し上げます故、何卒御諒承願います。只今のところ、その時期は五月中旬と予定しております。

KKグラビア悦虐フォト回顧

△昭和37年の10傑について▽



近 藤

一

社会的な制約がいろいろと重くのしかかって来たせいか、従来と違った幾つかの点が現われて来たように思います。

新しいモデルを探し出して、グラビアに新鮮な感覚をもたらすこと。マンネリズムに陥ることを防ぐための工夫が試みられ、例えば個性を活かした競演、思いきったアクロバティックなもの、刑罰や私刑風の厳しさのあるもの、SMプレイでも組写真などでストーリーを持たせるもの等々、企画演出に新鮮さをもたらすこと。他の類似誌のドギツサや陰うつさを排しながら、人間の潤いとなる程の良い刺戟と美と情感を盛込むこと。ETC、

既発表と同系列のフォトも含めて、昭和37年の分として発表されたグラビアフォトの総評です。

1月号

館典子の均斉のとれたヴォリュームはさすがにファッションモデルらしい。美貌で明眸洗練されたムードを漂わせているが、もう一歩突込んだ境地が欲しい。囚衣姿かヌードでの演技で真価を問うべき人ではなからうか。

梨花悠紀子の鼻責めは飲びが乏しいし、私の好みではない。むしろ囚衣に菱縄で首縄の姿に好感を持つ。惜しむらくは囚衣が新しす

ぎるのか硬い感じがする。紐を噛ませた猿轡が佳く、浅間しい女囚の晒しに体当りした熱演を買いたい。逆手足吊りの五葉は独壇場という感じで、リンチの味がよく出ているが腰巻がマイナスになっているのではないか。彼女は和服を着てもパンティがふさわしい近代娘なのだから。

大塚啓子のヴォリュームは表看板なのだが締りと美がなければ野暮ったくなってしまう。腰が抜群の逞しさなので胴をくびらなければ折角の膨隆が弱くなる。根性はあるし、明るい目鼻立ちも好感を呼ぶが、擦り責めや撮影会風景は物足りない。縛り人形の横顔が佳良。この緊縛と女体の弾力の美は他のモデルにはない。

絹川文代の美体も活かされていない。S役として遠慮がちな演技は無益と思うが。裸身に柔らかみが増したのに、表情に無理な硬さが出て、献身の極致は失敗。黒い手套が無難な作品といえようか。



竹野ひろ子、稍やせすぎて柔かな肢体と近代的なマスクが好ましい。瞳を活かす猿轡が不可欠。ビニールの袋詰めはアイディアとしては買えるが、効果は弱く、むしろロープで縛った新しい目なごしに味がある。彼女が古川裕子のファンであることも嬉しい。

愛川悦子、柔らかみのある量感、殊に乳房の豊かさはトップクラス、圧感に咽ぶは彼女の被虐美を如実に示しているが、髪が悪さまでが彼女のトレードマークになってしまったのだろうか。

2月号

絹川文代の粘着する嵌口具のトップは好適。表情、肩、乳房、腹と申し分ない女体美として推奨したい。筐底の牝豹は縛しめがヴォリュームに圧倒されて軽い感じ。

梨花悠紀子の妖奇の部屋と檻棲に至るまでは、企画も面白く、彼女の熱演も快いが、作為が目立ちすぎ、現実離れの感がする。竹野ひろ子、所を得た感じ。瞳が佳く、乳房も美しい。ロープ、繻絆、和室がマッチして、ベテランと比べても遜色がない。

大塚啓子の、排泄を耐える卓は佳作。彼女を活かしたアイディアで背景も演出も良い。オムツカヴァの使用にはやはり彼女のような肉体的条件が要求されるのだろうか。熱海容子の剝玉子と縄は可も不可もなし。

3月号

梨花悠紀子。鎖の縛しめに緊縛感がない。陶醉や悶悦の表性は流石に

見事なのだが、腰巻が悪く、ヨレヨレの袴のようで、折角の美しい乳房責めが死んでしまふ。美しき嵌口も作為が過ぎて割引かれるが最後の二葉は流石に素晴らしい。

絹川文代。手吊りのポーズと噛まれた黒布は対照的。手首だけの縛しめと全身を芋虫のようにギチギチと縄目にくびられた緊縛が、どちらも美しいのはやはりベテランといふべきか。

大塚啓子の逆海老は力作だが、表情が見えない背面中心なので弾力を楽しむだけ。

竹野ひろ子のさるぐつわ哀歓が佳い。いかにもマニアらしく、男の腕に身を委ねて裸身を屈曲させ、乳房をふるわせて、陶醉する姿に、本格的猿轡の妙味が窺われる。彼女はスリップも腰巻も似合うらしい。

4月号

絹川文代。演出と彼女の熱演が噛合わない。露出に必然性がないし、彼女のような風格で可憐な娘でもなからう。足縄のもたえが無難というところ。

大塚啓子の美畜ぶりは楽しい作品。ただ全般に暗いから光が欲しい。彼女の裸身は女畜にピッタリといえる一級品なのだ。

梨花悠紀子。後手吊りのファイトを買う。

しかし長縄絆だか袋だか分らないような着物は困る。散々責められた挙句なのだろうが、吊っている枝ぶり程度に美しくして欲しい。とにかく本格的吊責めには好感が持てる。足枷とくさりはSMプレイの女奴隷のムードで清潔さがある。彼女も演技派といえるだろう。

5月号

絹川文代の悦虐表情のアップは口許の面白さが印象に残る。

竹野ひろ子の私のよろこび。猿轡で精気が漲る肌、肉体美と言える彼女の裸体、豊かな表情、それらを総合して佳作といえる。

梨花悠紀子。さるぐつわの表情美は鼻孔までを覆った猿轡で乳房が飲ぶのが佳い。彼女は乳房も豊かになったし女体としての成熟が見られる上に、演技力が増したのだからNO1といわれるのも当然かも知れない。紐を噛ませられ、肩口を踏まれて紐を引絞られる姿にはゾクゾクする。脚下のドレイは人形的な美。海老しばりのひとこまは腰巻が邪魔だしバツクに不似合。



大塚啓子の二作。破れた下着の幻想よりオシメカバーとゴムの感触の方が上出来。下着のさるぐつわは良い効果をあげているがストッキングは不要ではなからうか。彼女ほどオ

シメカバーの似合うモデルは他にいないのだから、今後が楽しみだ。

6月号

梨花悠紀子。トップレベルの好演。濡れた塑像は恋人同志のプレイとしてのムードを持つ快い佳作といえる。黒蛇へのもだえはリンチというよりセクシーな美容体操という感じの軽快な作品。「そちらへ行くのはいやッ」や鞭うたれる女はアイディアが佳いが彼女にヴォリュームと弾力が望まれるところだ。

絹川文代の板の間の艶姿は彼女のデヴュー当時の作品に似ているが、ハリのある瞳が美しく大人びた美貌が良い。柔らかみのある女体で適度の肉つきも好ましい。裸身も美しく表情も豊かで、演技力に富んでいるのだからこのままで終らせたくはない。幽囚のくさは首から下のアップだが、何といっても脚が美しいことで救われる。ただこれで逃出さない必然性が欲しい。

大塚啓子のエビ責プレイへの過程は、首繩

と本格的猿轡がよい。腰が遅しく、体が厚みがあったて胸の膨らみがたっぷりしていることが安定感を示している。全身に漂う清潔感が楽しい。

7月号

絹川文代。美の幻想とパントマイム。彼女のマスクからして、柄の大きい、色彩の対照のはっきりした和

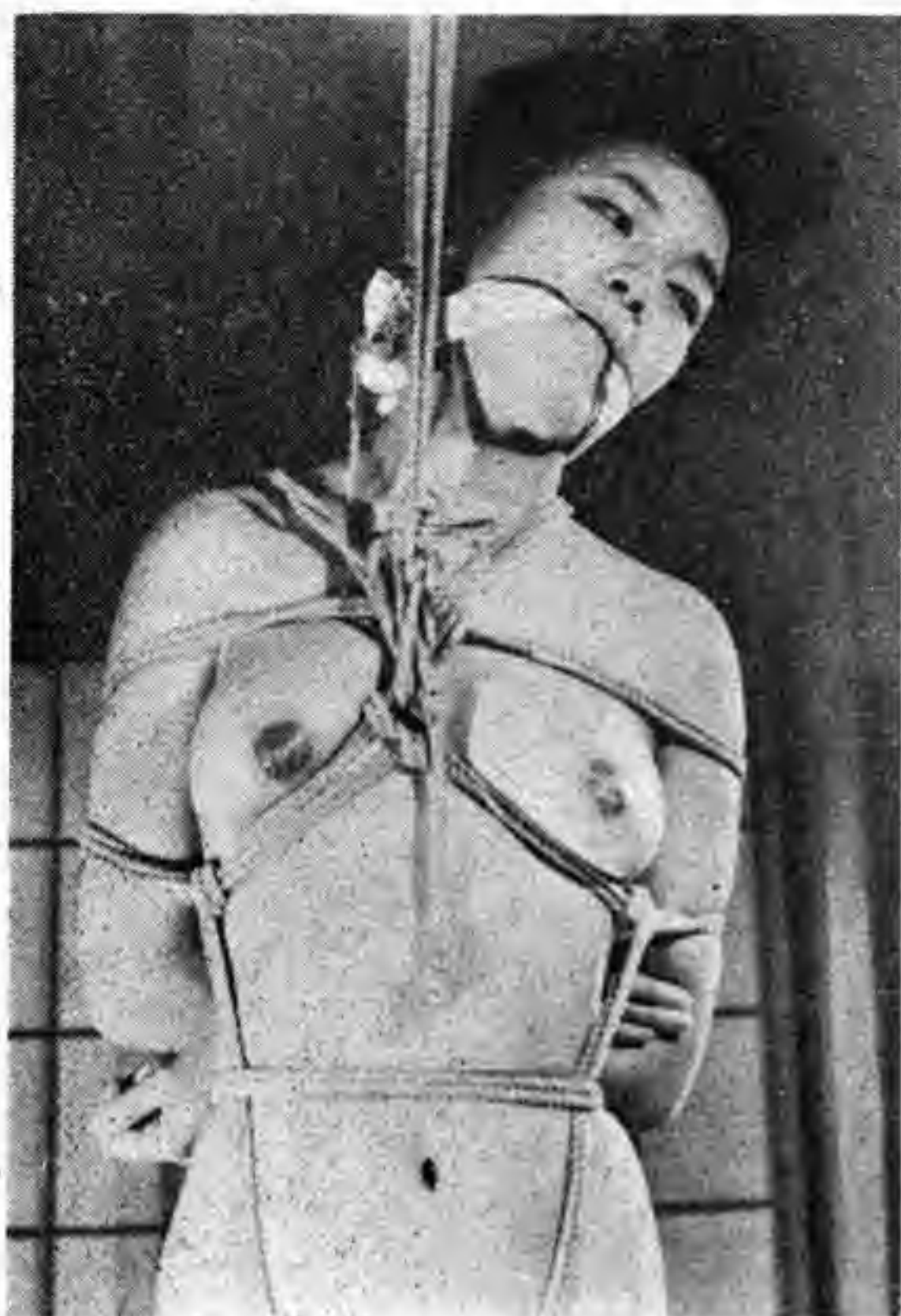
服を粹に着こなせる人だから佳作となった。かつて川端多奈子が演じたものとはまた異なった味があり、粋筋らしい女が林の中で襲われ、羽織や帯を剥取られ、縛り上げられ、立木に括りつけられ、白い肌を罵られるという想定は彼女の美体と演技力にうってつけといえる。首を縛られ、足袋はだして曳かれ、豆絞りの猿轡を噛まされるなど、美しいドラマがある。

梨花悠紀子。水着とスリップ姿でぐつとスポーティな味。喘ぐ白肌は股間縛りの綱目もよく、首に巻いた蛇も太いのがよい。プレイとしては表情が巧みで楽しめる作品、碁盤の重圧は、圧迫感が乏しく些か物足りない感じ、スリップ姿の彼女と碁盤がマッチしないように思う。

大塚啓子の粘着タッチとゴムカバー着は見事。長い髪の形も面白く、髪で首を巻いた所が楽しく、おむつカヴァごとの股間締めつけが何ともいえない。彼女のピチピチした肉体が光っている。

8・9月合併号

絹川文代の麗艶。無難な和装着衣の縛りで膝を覗かせる程度。猿轡と髪で顔を覆い、稍雑然として三面鏡も役立っていない。



桜井葉子。久々の登場。野外、樹間の晒しで裸足が佳い。豊満な乳房だけを露わにされ竹棒で締められる。浅ましさと淫らな女臭さを大いに買いたい。

梨花悠紀子。麗囚は思いきりみじめな彼女の姿といえる。棒縛り風の磔で、ヨレヨレの縋絆風の囚衣をはだけて女体の前面を露出し、股間縛りの縄で首を巻かれ身動きができない。美しい髪もバサバサに乱れ、眼と口許の表情がなまめかしい。汚れすぎが疵といえようか。枷の装着は絹川文代と違う色気が彼女の腿・足首・手首に漂っている。絹肌では若々しい女体の張りが見られ、優美と柔軟でも首縄がはっきりして肉体の弾力を示しているが、後者は稍暗く、それだけに後者は女奴隷の仕置のムードが充分にある。

竹野ひろ子。さるぐつわをつけたポーズは彼女の成熟した女体を活かし、多すぎる程の詰物をした猿轡を味わっているマニアの表情がよい。

大塚啓子。鼻責二葉は私の好みでなく、豊胸も無難な胸のアップにすぎず、彼女の特徴は活かされていない。

10月号

モデル陣は久々に多彩。

梨花悠紀子の二作、逆さ吊りのワンカットと鞭打ちの末。前者は真価を発揮した開股逆さ吊りで艶麗。後者も嗜虐味横溢のフォトだが、ストラックスが破れるまでの鞭撻なら、前屈みでヒップを突出した縛りがあってよい筈表情と上半身の縄目が美しい。

絹川文代の首縄の哀歓譜。上半身のアップだが成熟した女体の厚みがよい。

桜井葉子。囚衣を着た囚女第14号の引き回し。素肌に縋絆と腰巻様のセパレーツの囚衣が似合う。裾を縄目に挟んで端折り、膝から下は裸足。巨大な乳房と妊婦のような腹を浅間しく晒して曳廻され



竹棒でこじられるが、額の秀でた顔立ちで、諦めきつたような忍従の表情に風格がある。

大塚啓子のもだえる柔肌と緊縛は、やはり髪が活きる。猿轡で表情が輝やいているし、ムチムチと肉づいた裸身が美しいが、とりわけ上膊部と下腹部の厚みが情欲をそそって楽しい。お下げ髪の娘は逞しく成育しすぎてお下げ髪が何か異国風な感じ。縄目も多すぎて焦点を失ったと思われる。

須川令子。トイレのある風景はパンティが不要。スラリとした近代的モデルだったが、稍ヴォリューム不足のうえ、綺麗事の芝居に終始して印象に残る作品がなかったのではないか。

熱海容子。鏡に映えた麗身。個性の弱いマスクで損をしているよう。真剣さは窺

われるが、演技に独特の味がなく、先輩モデルを凌ぐ特技がないのが憾み。

水本茂美。梨花悠紀子の紹介だけあって、ファイトがあり、野性的というかピチピチしている。マニアだけに緊縛を好む表情がリアルだし、マスクは個性豊かで、女の生臭さが全身に漂い、殊に襟足から肩の辺りに何ともいえぬ哀れさがある。

11月号

柳初子の女囚姿は可憐。女囚というより昔の感化院の収容児という感じ。

絹川文代。白肌と黒紐は替ゴムの猿轡に苦悶や羞恥の表情が乏しく、ペティコート様のものがマイナスだろう。諦観のまなざしは諦観が見られない。正坐で引据えられた感じがあってもいいのではないか。飾られた美形の陳列は美しくすっきりしている。

梨花悠紀子。襲いくる悪魔の触手は責手が二人必要で、彼女は恐怖や不安の表情で顔をそむけるでもなく、哀願の瞳で縋るでもなくタイトルにそぐわない感じ。荒縄悦楽が佳い。こういう容赦ない苛責になると、彼女は指の先まで美しく演技する。浅間しい姿を露呈すればするほど好演するのは本来のマゾだからだろうか。吊り責め準備風景は陰惨

な荒縄緊縛で硬い表情が不安を漂よわせている所がリアル。責めも、一段落してがまた佳い。豆絞りの猿轡は本格的な詰物を示しているし、腹部のくびれもよい。手摺に括られ、眼を落とした彼女はやはり美女モデルの一人である。

大塚啓子、鏡のある緊縛風景は効果半減。鏡をそのまま写すと全部の道具立てが倍加して雑然たるものになる。丈なす黒髪と温かき肌が見事なマゾ女体。妊娠五月でとってもよい彼女の腹部に一層嗜虐感をそえられる。項垂れて差のべた首の丸みもなまめかしい。坐り方が淫らなのも楽しい。

桜井葉子。乳房の量感は一級を誇示しているが、平伏した場合の足指は立てるべきではない。

水本茂美の海老縛りは、彼女の好みでもあるだけに独特の妖しいムードがある。

12月号

関谷富佐子のデヴエウ。固ぶとりでムチムチと脂肪の乗った若妻ぶり。猿轡も縛しめも顔見せ程度だが膚が美しいので楽しみといえる。

梨花悠紀子。悦虐の表情とその刹那は立姿が買える。髪の流れが、男の手で掴まれたこ

との結果として、必然性があるし、女奴隷を責めの最中に休ませてはいけない。膺窩の愛嬌は緊縛感にもSMムードにも乏しい。

大塚啓子の二作、陳列窓の縛り女体と祭壇のいけにえはいずれも明るく楽しいプレイのムードが溢れている。彼女の全身にリファインされた美が満ちているのが実に愛らしい。

絹川文代。憂囚の麗人は逞しい裸身を誇って可憐さが薄い、乱れた髪と厳しい縛しめが好感を持てるし、彼女の表情も巧み。縛られた柔軟な姿態の種々相の彼女は前者よりスマートな感じで、ポーズもコミックな感じ。

水本茂美のエビ責めと逆エビや縄目アップセレクトションは、体当りで見事。嫌味のない顔立ちが隷従と悦虐へのファイトを秘めていて、奪いたくなるような女ぶりだ。

以上の結果、佳作と認められるものをピックアップしてみると24点に絞られる。その内訳は、梨花悠紀子7、絹川文代7、大塚啓子6、桜井葉子2、竹野ひろ子1、水本茂美1であるが、これをさらに検討してみる訳である。

梨花悠紀子

彼女の作品のうちには、体当りの労作が多

い。グラビアに登場する回数も多いが、内容の充実した点では抜群といえる。囚衣に本縄を打たれ、木製の首枷を装着され、口を縛られて引据えられた「白壁と首枷」、戸外での後手宙吊りの「後手吊りの変化」、股を開いた「逆き吊りのワンカット」、マゾ性発揮の「荒縄悦楽」などは美しい悶姿だが、強烈な印象を与えた敢斗ぶりでも賞讃に値する。さらに「さるぐつわの表情美」「濡れた塑像」も、新鮮なムードを持った作品で、清浄な美体と可憐な表情が佳く、捨て難い。

絹川 文代

成熟した女の美を誇る彼女にマッチした作品は、羞恥と屈辱のムードを持ち、落着いた和服の美を活かすと、近代的な美貌をいたぶるものであるべきで、「粘着する嵌口具」と「美の幻想とパントマイム」を落とせない。

3月号の「手吊りのポーズ」は彼女らしい柔らかな味の作品だし逆に「噛まされた黒布」は、珍らしい程の嚴重な苦縛で印象的だが、もう一步の迫力に欠け、残酷さや悦虐の烈しさが薄い。「板の間の艶姿」はデヴィウ当時の新鮮な魅力が偲ばれるが、全体のムードは「飾られた美形の陳列」より硬く、瞳は「憂囚の麗人のあるポーズ」の方が妖しく輝やい

◎読者の皆様へのお願ひ

○投稿原稿に限らず読者通信においても、すべてタテ書きにして下さるよう、かねがねお願いしているのですが未だヨコ書きの原稿が混っていて処理に困っております。殊に読者通信は便箋でもノートでも、すべてそのまま書き直さず印刷所へまわしていただきますから余りくずさず、必ずタテ書きでお願いします。用紙は問いません。

○代理部の注文品は、すべて略号にてご希望品をお書き願います。品名はお書きにならないとも結構です。略号をお書きにならないときは、対照に手間どり、どうしても発送が遅れがちになりますし、同名のものなどがあって誤送の原因になりますから、よろしくお願い致します。

ている。囚われの感じ、引据えられお仕置を受ける女の感じは後の二作の方がすぐれているようだが、背景の佳さや彼女の裸身の初々しさを考えると一長一短があかある。すでにペテランとなっただから、より完全な作品を期待することにした。

大塚 啓子

ムクムクと肥えた女体と黒髪の長いのは彼女の商標だろうが、その髪をアップに結って襟足を飾ったり、肌を美しく輝やかせて屈辱

○切手をご送付になるとき、紙に貼ってこられる方が非常に多いのですが、切手類は絶対に紙に貼らないように、また、一枚一枚切り離さないようお願い致します。一度紙に貼って剝したものや、べったりと紙に貼りつけた切手類はお受取りいたしかねますからご諒承願います。目録請求のため十円切手一枚を同封される際も、便箋に貼りつけられるのは、一体どうした原因なのでしょう。

○郵便物の局留受取りご希望の方で、封筒の裏に仮空の住所を書かれたりする方がございますが、誤送の原因となりますから、何々郵便局留、受取人氏名、というぐあいにお書き願います。

○発送人の個人名発送をご希望の方はお申出次第、ご希望に応じます。但し第三種便の別名発送はいたしかねます。

に喘ぶ所に進境があろう。

「祭壇のいけにえ」の右ページのフォトなどは彼女を美貌といえるまでにしている。彼女には失礼だが、彼女は他の美人モデルと異なり、男好きのする美人といえよう。「丈なす黒髪と温かき肌」は女奴隷か女畜として真価を示したポーズ。「もだえる柔肌と緊縛」は演技派の面目躍如というところ。しかし何といっても「粘着タッチとゴムカバー着」が中心であろう。長髪を活かした美しいヘアス

タイル、オムツカバーをはかせただけの裸女を股間縛りで悶えさせ、見方によっては排泄欲の悶えともとれるポーズは、新しい感覚の残酷な羞恥責めと言える。排泄を耐える卓と甲乙つけ難いが、その点を加味して「ゴムカバー着」をとる。「縛り人形の横顔」はスッキリした作品で落としたくないが、やむを得ないし、その点は「もだえる柔肌」に加味したい。

桜井 葉子

「囚女第14号の引回し」5葉のうち、左ページ上と下右の2葉が佳い。だがこれらを総合した上で、表情の現われている、「樹間の冷風」に絞りたい。



竹野ひろ子

幾度か、誌上に麗姿を現わしたが、本格的な古川裕子好みの責めが欲しかった。「さるぐつわ哀歎」の好演を賞う。

水本 茂美

「エビ責と逆エビ」の表情が印象的。いかにも体で味わっている感じ。他の諸作での好演も加味した。

完全な宙吊りとなると、梨花悠紀子の果敢な演技がトップを行き、すべてを高く評価したいのだが、衣裳が悪かったりバックや、縛しめに不満が出る。そこで惜しいとは思うが、開股逆吊りの点を合わせ後手吊りを推して、1月号の手足逆吊りの表情をも併せて評価

したい。また「濡れた塑像」は表情や緊縛度の点で選外とせざるを得ない。

昭和37年の10傑は次のようになろうか。

- 一、1月号「白壁と首枷」(左ページ上と下の2葉) 〔梨花悠紀子〕
- 二、2月号「粘着する嵌口具」〔絹川文代〕
- 三、3月号「さるぐつわ哀歎」(4葉) 〔竹野ひろ子〕
- 四、4月号「後手吊りの変化」(7葉) 〔梨花悠紀子〕
- 五、7月号「美の幻想とパントマイム」(27葉) 〔絹川文代〕
- 六、「粘着タッチとゴムカバー着」(8葉) 〔大塚啓子〕
- 七、合併号「樹間の冷風」〔桜井葉子〕
- 八、10月号「もだえる柔肌と緊縛」(6葉) 〔大塚啓子〕
- 九、11月号「荒縄悦楽」〔梨花悠紀子〕
- 十、12月号「エビ責と逆エビ」(3葉) 〔水本茂美〕
- 次点、5月号「さるぐつわの表情美」(6葉) 〔梨花悠紀子〕

新連載サディズム小説

心傷たむ遍歴

西 条 操

序 章 三つの手紙

〔第一の手紙〕

一九△三年八月五日

コンピエーヌ刑務所にて

ミシュリーヌ・ダリユー

ジェラルル・トリフォー様

やっと下されたお手紙、ここへ連れて来られる直前に拘置所で受け取りました。ここへ来て二週間余り、少しは落ち着きましたのでお返事を差し上げます。そして、これが私か

らの最後の便りとお思召し下さい。

昨年の末、私が逮捕されてから半年余り、其の間唯の一度も面会はおろか、手紙さえも下さらないあなた。そして、今漸く下されたお便りを読んで、私は涙も出ません。その様な男とは知りつつも、ついつい引き摺られて無一物となったばかりか、遂に刑を受ける身になってしまった自分の愚かしさを、腹の底から笑いたい気持です。あなたのお申し出はむしろ私の方からお願いしたい程で、喜んでお受け致します。

此の手紙にも、ミシュリーヌ・トリフォー

ではなく、ミシュリーヌ・ダリユーと署名してございましょう。今度一緒になられました女の方は、どの様な方なのでしょうかしら。何年か先、私が出獄しましても、決してお邪魔立ては致しませんし、嫉妬などの気持から申し上げて居るのではございせんが、私としましては、むしろ其の女の方がお気の毒なのです。どうぞ、其の方を憐れに上げて下さいまし。

あなたの様なお人には、そなが分ったかどうかは存じませんが、心身ともにあ上に捧げ尽した一人の女として、私にはそう申しあ



ける資格があると存じます。そうは申し上げても、あなたを恨み憎む気持など、私にはもうさらさらございませんの。生れて初めて入られた留置場や拘置所の中で着のみ着のまま寒さに震えて居た頃、そして又、底冷えきびしい検事局地下室の固いベンチに、鎖をつ

けられたまま一日坐って背骨を硬張らせて居た時には、あなたを呪う気持で胸一杯なこともございました。肉親や夫の奔走により保釈して貰って、嬉しそうに出て行く人達を見送る時には、弁護士を自分から頼む術もない私は、鉄格子に縋りついて泣いたことでもございました。けれども、既に

刑も定まり、こうして番号の打たれた服を身にまとった今日此の頃では、もう心にあるのは、あなたに対する憫れみの念だけでございます。当分、いえ一生涯、これでもうあなたにお会いすることもあるまいと思ひますと、胸もさばさばする心地です。許された時間も残り少なくなりました。最後に唯一つ、申し上げますとおかねばならないことがございます。

六年前の秋の日、霧深きコモ湖を渡ってあなたをお訪ねした私が、其の夜あなたの腕の中で申し上げたこ

と、つまり私が十八の時にあなたの子を産みジュヌビエーブと名付けて里子に出したと云うことは嘘でございます。私があなたに対し吐いた唯一つの嘘なのでございます。お詫び申し上げますわ。私はあの時、確かに女の子を人知れず産みました。けれども、あの子の父はあなたではございません。成程、私はあなたとも過まちな一夜を持ちました。しかし、ジュヌビエーブの父親は、あなたではございませんでしたの。ですから、あなたはもう、あの子の消息を探し求められるには及ばないのでございます。勿論此の私は、出獄しましたら草の根を分けてでも探し出すつもりですわ。だって、私はジュヌビエーブの産みの母なのですもの。父親でも何でも無いあなたとは訳がちがうのでございます。

では、さようなら。お元気で。

追伸、裁判の時、あなたを庇って差し上げましたが、そのことに就いては何も恩着せがましい事は毛頭考えておりません。その様なあなたではないでしょうが、若しいつの日にかお心が痛むとお気の毒ですから申し添えます。私としましては、どうせ今までのついでと位に存じております故、何卒御休心下さいませ。

再伸、私達の結婚は法的手続を済ませて居なかつたのですから、御同封の離婚承諾書は其のままお返し申し上げます。アルコール中毒でおつむが少しお弱りなのではないでしょうか。

では、ほんとうにさようなら。

〔第二の手紙〕

一九×三年七月十二日

ツーロン刑務所にて

ミシュリーヌ・ダリユー

アルベール・マストロ様

愛するアルベール。こう呼びかけさせて下さいまし。私の様な女からの手紙、そして此の様な書き出しの手紙をお受け取りになつてあなたが、愛するあなたが、もしや御迷惑ではなからうかと、胸は千々に乱れるのでございます。

もし、御迷惑とお思ひ召す様なあなたの現在でございましょうとも、唯一度だけ言わせて下さいまし。愛する私のアルベール。如何お過ごしでございましょうか？ 高く厚い壁と冷たい鉄格子とに遮ぎられて、あなたの御近況を知る術もない身が悲しうございます。ほんとうに悲しうございますの。

ここへ送られて来てから一年半、漸く月一回の発信を許して頂ける身となりました。此の日を待ち焦がれて居た私なのに、いざとなりますと、お便り差し上げていいものかどうかと思ひ悩み、そして思ひ切つて取つた鉛筆も、乱れる想いに洩り勝ちです。けれど、此の私には、あなた様の他には文通の相手が誰も居ないのでございます。哀れとお思ひ召してお許し下さいまし。

何から申し上げてよろしいのでしょうか。おお、いとしいアルベール。今日は私の丁度四十才の誕生日でございますの。一口の水すらも自由には飲めない身で迎える誕生日は、本当に侘しく悲しいものでございます。ごめんなさい、詰らないことを申し上げて。

ミシュリーヌは、元気で刑に服しております。贖罪意識とやらも充分に認められると賞めて頂いてもおりますの。辛らく味気ない毎日、あなたのことを想うと、胸も暖かく心嬉しい私なのでございます。あなたとのあの日も、二年前の丁度今頃でございました。あの時のことは、今もなおありありと、眼に耳に昨日のことの様に残っておりますわ。朝、ベッドの中で、あなたは「誓う」とおっしゃって下さいましたわね。それなのに、私はあ

なたの口を押えて生意気なことを口走ってしまいました。ほんとうに心から後悔しております。勝手な女と叱つて下さいまし。そして、もう一度「誓う」とおっしゃって下さいまし。

愛する私のアルベール。お声が聞きたい。お顔が見とうございます。ミシュリーヌは気が狂いそう。お手紙下さいまし。お忙しいでしょうから、どんなに短くとも我慢します。そして、面会を許して貰える様になりましたら、一度だけでいいですから、会いにいらして下さいまし。ああ、其の時のことを考えますと、今からもう胸が高鳴つて苦しい程でございます。

パリも今時分は、暑いことでございましょう。綺麗な女のひと達が軽やかに歩き回つて……。あら、又こんなことを。けれど、信じてはおりますものの、やはりミシュリーヌは心配なのでございます。いろいろな女のひととお会いになったり、お話しをなすつたりしておいでなんでしょうね。あなたを信じております。信じさせて下さいまし。そうでなければ、とても私は此の鉄格子の中で生きて行けませんの。正直なところ、ここはとてもきびしくて辛いのです。覚悟もし、諦めもし

ておりましたものの、累犯者に対する扱いが、こんなにもきついものとは知りませんでした。以前におりましたコンピエーヌ刑務所は初犯女囚ばかりだったので、此のツーロン刑務所は累犯女囚ばかりで、汽車で云えば一等車と三等車の違いなのです。勿論規則ですから当然で仕方ないことですが、本当に悪いことは出来ないとい心から思っております。

おお、いとしいアルベール。あなたの面影あなたのお声は、瞼に耳に灼きついて居て、思い出すことはございません。だって、片時も忘れることがないので。実を申せば私の護送のお仕事を終えられたあなたのお手から引き離され、パリ警視庁の地下留地場の独房に入れられた私は、其の日限りあなたの事は忘れてしまおうと決心したのでございました。それなのに、あなたは同僚の手前も構わずにいろいろとお情けをかけて下さり、そして裁判の時には弁護士まで御心配なさって下さいました。そのお心使いの数々を一つ一つ想い浮べますと、いつも涙がこぼれるのでございます。そして、其のお情けの数々を素直に、拗ねることなしに受け入れることの出来ました私が、自分ながらも嬉しいと思ひ返

すので、ございます。あの時に、もしひがんで受け入れて居らなかったならば、ミシュリーヌは後悔と悲しみの余り死んで居ることでもございました。ここでは、死のうと思えば簡単に死ねますのよ。

私は其の様なお情けを受けながらもなお、あなたとの事は忘れようと、齒を喰いしばって独房の床を涙でしとど濡らしたことでございました。そうするのがお互いの、いえ、あなた様のおためだと生意気にも考えたからです。公判の時にもいらして下さいましたのね。私はどんなに多勢の中からでも、あなたのお姿だけはちゃんと見付け出しますのよ。

此の蒸暑い書信室で、久し振りに字を書いておきますと、思い通りに動かぬ指のたどたどしさが切のうございます。監視なさって居る看守さんがあと少し時間を下さいました。そして、削った鉛筆と取り替えて下さいました。小さな字で少しでも余計に書けます。嬉しい。此の方はカロリーヌ・シニョレ様とおっしゃる、とてもお情け深い看守さんで、ミシュリーヌは運がよかったですわ。

どこまでお話し致しましたかしら？

そう、そして、あなたはとうとう駅にまでいらして、私を見送って下さいましたわね。

重い手錠の冷たさ硬さに凍え痺れた両手に荷物を持たされ、冬のさ中のプラットホームの屋根もない寒む空に、震えつつうなだれて立って居た私が、差し入れて下さったシャツの仄暖かさにあなたを偲んでおりました、其の矢先、お声が間近かに聞えたのでございました。どう云うおつもりなのか、お脱ぎになったお帽子を揉む様になさって、あなたは口ごもり勝ちのお声で言葉少なに何かおっしゃりそして数歩を隔てて私をじっと見詰めておいででした。ほんの指先だけでいいから、どんなにお体に触れたいと思ったことか。制止して立ちほだかり、私を睨みつけて居たあの厚い外套の看守の顔が、どんなに憎く思えたことだったでしょう。低く途切れ勝ちのお声でしたが、私にははつきりと聞き取れたのでございました。

あなたは私の名を呼んで下さいました。そして「体に気をつけて」ともおっしゃって下さいました。あなたの真実が私の胸深く沁み透り、手袋も靴下も許されない両手両足の先までが、ほのぼのと暖まって来る心地でございました。お眼をひたと見詰め合った時、もう決してあなたから離れまい、と深く思い定めたのでございます。腰を一系列に繋ぐ連鎖に

曳かれて荷物車に乗り込む時の私の胸は、垂れこめた雲も払われて晴々とした心地だったのでございました。避け逃げようとひたすらに努めた私の心をぐいぐいと追って、とうとう羽掻い締めに取り取っておしまいになったあなた。ほんとに罪なお方だこと。でも、もう決して、あなたから離れは致しませんことよ。あなたのためなら、どんなことでもミシユリーヌは致します。誓うわ。

愛するアルベール。いとしいあなた。どんな詰らないことでもいいの、走り書きでいいの、お手紙下さいまし。あなたのお手に触れた紙切れを、此の胸に押し当てて抱き締めたのです。あなた、今日のおひるには何を召し上ったの？ 今夜は何を喰べたいの？ 何でも作ってあげるわ。また汚れた靴下を穿いてる!! 洗ってあげるからそこらへ打ちちゃって。おお、私のアルベール。お体に気をつけてね。サン・レモのあの夏の一夜、あなたは寝相が悪かったわ。あんな風だと風邪をひいてしまうことよ。私のことは心配しないで。あなたがいらっしやるんですもの、元気で勤めて見せますわ。

一一三号と云う番号で呼ばれる様になって一年半以上経ちました。あと三年とちょっと

よ。累犯者には仮出獄の恩典も難かしい様ですが、一生懸命に服役して、一日でも早く出して頂ける様に致しますわ。ここはほんとにきびしい規則で昼も夜もがんじがらめ何かと云うと忽ち鉄枷と鎖をつけられてしましますの。独房の小さな鉄格子窓は、夏は西陽を受けて中は石鍋で炒られる様、そして冬は、窓ガラスがないのでローヌおろしがまともに吹き込み氷室の様。労役は毎日正味十時間で、休みは二週間に一日なの。毎日曜日に礼拝できないのが悲しいわ。今日が其の休みの日です。此のお手紙を書き終えたら、又あの狭い独房へ戻らねばなりません。ああ、こうしていつまでも書いて居たい……。又、詰らないことを申し上げてしまいました。ごめんなさい。けれども、ミシユリーヌはあなたがいらっしやると思うだけで、どんな辛い苦しいことにも耐えて行けますの。

そうそう、こうして発信を許される身になりますと、寝台と椅子をすら与えて頂けたのです。鉄の寝台は固いし、椅子は小さな丸椅子ですけれど、床にじかに寝たり、脚を折って床に坐らされた今までのみじめさに較べますと、ほんとに嬉しくて天国みたい。

最後に、思い切って申し上げてしまいたい

ことがございます。あなたの澄み切った深い瞳を臉に浮べますと、隠しておくことなど到底出来はしないのです。一昨年のリビエラ海岸、あの夏のサン・レモの砂浜で、どうしてもお金が要ったので盗みを働いてしまったのだ、と申し上げました。そして夜のホテルのベッドの中で、あなたの故郷がコモ湖の近くだとお聞きしました私は、自分の連命を狂わせてしまったあの碌でなしの男、ジュエール・トリフォーとのことを、お話ししましたわね。けれども、あの時には遂に申し上げなかった事がございますの。

私が十八の春の一夜、ジュエールと一緒に犯した唯一度の過まち、そして其の結果、私は身をもって娘を産んだのでございます。その子はジュヌビエールと名付けて里子に出しました。そしてあの戦争、老いた良人の死。行方知れずになった娘を私は必死になって探し求めたのです。コンピエーヌ刑務所を出獄した私は遂に、成人したジュヌビエールの娘姿を探し出すことができました。そして、もはや晴れて名乗れぬ私に出来ることは、ソルボンヌ大学に学ぶ娘の学資を、陰ながらひそかに貢いでやることしかなかったのでございます。

つい、愚痴をこぼしてしまいました。けれども、私は他人様の物に手をかける度に、あのジュエールのために失い果ててしまった財産のほんの一部でも残って居たらと、返らぬ悔いの繰言を何度此の胸に噛みしめて泣いたこととてございましたか。ああ又愚痴を……。ごめんなさいね。ともかく、私にはもう、成人した娘が一人あるのでございます。あなたに此のことを打ち明けて心が軽くなりました。

お慕わしきアルベル様。今まで隠して居た私をお赦し下さいまし。そして、こんな女の私に、あなたのお手を差し延べて下さいます。

カロリーヌ様が時計を御覧になりました。

来月までお別れです。小さい下手な字で泣きながら書きましたので、さぞお読み難いことと存じます。かんにんして下さいまし。けれども、カロリーヌ様がお慈悲で右手の手錠を外して下さいましたので、これだけ書けたのです。監房の外では、労役の時以外には必ずかけられるのが規則の此の重い手錠は、もう一階級昇らねば赦しては頂けませんの。今も左手には嵌まったままの此の手錠を、もうすぐ自分で両手にかけて、独房の鉄格子の中へ追い込まれて行かねばなりません。この手

錠は、びっくりする程に重く、両手首は鉄で痛められて傷痕だらけ、色も変わって元通りになるかしらと心配になる程です。それに、絶えて久しく鏡には映したことはございませぬが、水やガラスに辛ううじて見る私の顔には、日に日にしわがふえ、やつれも目立って来て居る様でございます。せめて、一昨年のサン・レモの海辺であなたが御覧になった姿と顔のままでお会いしたいものと、そればかりが気がかりな私なの。

お手紙下さいまし。お手紙を胸に掻き抱けばしわもやつれも吹き飛んでしまうことよ。

綺麗なドレスや帽子は今には要らないし、欲しいとも着たいとも思いません。見て頂く方も居ない今の私は、お化粧をしたいとも思いません。けど、せめて、肌の手入れと後のブラッシーだけは、毎日でなくてもいいからさせて頂けたら、と思いますの。ああ又々詰らないことを書いてしまいました。あなたに訴えた所で仕方ないし御心配をかけるばかり、先刻どんな辛いことも辛抱しますと申し上げた癖にねえ。

きつと、お手紙下さいましね。お願い。

あなたのミシュリーヌより。

「第三の手紙」

一九〇六年十二月九日

カンヌ刑務所にて

ミシュリーヌ・ダリユー

パリ警視庁様気付

シュザンヌ・マストロ（旧姓）様

思えば何度もお会いしながら、遂にあなたの姓を存じ上げませんので、失礼の程は何卒お許し下さいまし。

脱獄したばかりか殺人の大罪を犯した私には、手紙を出すことなど、まだまだ何年か先のこと、到底許されることではございませぬ。けれども、私が何度も何度もしつこく嘆願し、何回か懲罪を受けてもなお哀願を繰返すので、特別のお慈悲を以て此の一通だけと云うことで、発信を許して頂きました。それと申しますのも、今度は生きて出獄できるかどうかと思われまます此の身でございますのでせめてあなた様に対するお詫びを、心からの謝罪の言葉を、一日でも早くお手許にお届け申し上げたい一念からなのでございます。勿論、お返事などを下さるには及びません。下すつても読ませては貰えませぬし、お読み捨てになつて下さいまし。

ほんとうに申し訳のないことをしてしまい

ました。お赦し下さいまし。今はお赦し頂けなくとも、いつの日にか赦してやって下さいまし。勿論、最愛の夫をあなたのお手から奪い去ってしまった私の罪は、如何にお詫び申し上げたとして消えるものではございません。さぞ、私をお恨みのことと存じます。日の経つにつれて、お寂しさもお悲しみも募っておいでのこととお察し申し上げます。私が悪うございました。出来ることなら、何日でも、いえ何年間でも、お赦しを受けるまであなたの前に跪まずいて居たいと思うのでございます。

半年前の春の日、私を曳いてコモ湖畔を歩きながら、あなたは私を赦すとおっしゃって下さいました。アルベール様の死はミシュリーヌのせいではないと云って下さいました。そうでございます。成程、私は直接には手を下しませんでした。けれども、アルベール様の死は、詮じつめた所、やはり私の罪なのでございます。皮肉なことに、私が自分の罪に胸裂ける想いのアルベール様の死については法は無罪を宣しました。そして、悪いことをしたと思うどころか、むしろ喜びをさえも感じているジュエラル・トリフォー殺しに対しては、法はきびしい刑を言い渡しました。

私は、打たれた刑をアルベール様殺しに対してのものと思って、刑に服しております。コモ湖の水面を見詰めておられたあなたのあの時の、深い深い悲しみを湛えたお眸。思い出す度に私の胸は張り裂けるばかりでございます。今の私は重罪人の女囚十五号、課されるきびしい処遇に日夜呻吟しつつも、犯した罪の万分の一をでも償えるかと存じますと、もっともっと苦しみたいとさえ思うのでございます。

アルベール様をお喪いになった後、如何お過ごしでございましょうか？ パリ警視庁の婦人警官のお仕事をまだお続けでしょうか。それとも、御傷心の余り、お辞めになったのでございましょうか。いえ、此の様なことをお訊ね出来る身ではございませんでした。ただ、御住所を存じ上げませんので、パリ警視庁様氣付とさせて頂きました。お手許に届くことを祈っております。

私、女囚十五号のミシュリーヌは、一昨日も革鞭で一ダース程打たれました。今もなお激しく痛み疼く革鞭の恐ろしさは、とても御想像すら出来ないと思存じます。けれども、私はせめてもの償いに、あなた様のお手で鞭打って頂けたら、と日夜思うのでございます。

そうして頂けば、私の心の荷も少しは軽くなることとございましょう。もう一度申し上げますことをお許し下さいまし。ほんとうに申し訳ないことを致しました。いつの日にか赦して下さいます様に。私の体を鞭打つなり吊るすなりなされて、少しでもお心が晴れるものなら、存分になさって下さいまし。石を投げつけて下さいまし。殺したいとお思いなら殺しても下さいまし。どうせ此の身はもう、引き抜かれて打ち捨てられた雑草の様な体、死刑にして頂けなかったのが口惜しいとさえ思う私なのでございます。

手錠がきつくて、指が思う様に動きませんの。けれども、これからの何年間か、いえ、ひよっとすると、これでもう一生涯、文字を書くこと云うことは許されないかも知れませんが。そう思いますと、一字一字が切ない程でございます。番号で呼ばれる身は、自分の名を書く時には涙がこぼれます。今頃は、あのコモ湖畔の峰々に新雪が降り積って美しいこととでございます。

アルベール様が眠る雪山の姿、そして又此の私が、一生涯の中の数年間を平和に豊かに、ミシュリーヌ・クープドリュエとして其のほとりで暮したコモ湖の静かなたたずま

いを、もう一度だけ、一目だけ、此の眼で眺めたいと思うので、ございます。お笑い下さいまし。昼と云わず夜と云わず、四六時中、鉄鎖を身にまとった女囚の分際で、笑止千萬な望みとお笑い下さいまし。

ああ、お詫びのつもりが、くだらぬ泣き言となってしまうました。

もう、労役に行かねばなりません。中腰になつて書いて居る腰の後ろに、革ロープがカチリと鳴つて今つけられました。

最後にもう一言だけ。ほんとに、ほんとに申し訳のないことを致しました。どうぞ、御存分になさつて下さいまし。そして、私のことなどはお忘れになつて……。

そして、未だお若く美しいあなたに、再びお似合いの殿方が現われます様に。あなたはお忘れになつて下さつても、此の私、ミシュリーヌはいついまでも牢獄の壁と鉄格子の中から、あなたのお伴わせをお祈り申し上げて居たいのでございます。そうお祈りすることだけは、どうぞ許してやつて下さいまし。

罪深き女 女囚十五号

以上の三通の手紙。そう、女囚ミシュリーヌが、何年かの歳月を隔てて獄中から、粗末

な紙にただどしく涙ながらに書き記して出した此の三通の手紙。其の手紙を結んで織りなす糸の数々。物語は、第一の手紙の更にそのかみへと溯る。

第一章 そのかみのこと

(一) コモ湖畔の故伯爵邸

秋も漸く深まつたコモ湖畔の夕べ。

湖を望み峰を背に、典雅に古びた故クープドリユーエ伯爵の館。未だ若く美しい未亡人ミシュリーヌは、やや小柄な二十三才の体を黒い喪服に包み、亡き良人の書齋で遺品を整理して居た。

夏も終る頃にみまかつた良人のシャルルは享年六十一才。孫程に年の違つたミシュリーヌを、此の館のほとりから外へ出すことなく静かにやさしく愛して逝つた。

「おお、シャルル。あなたが亡くなつた今、あなたの静かな深い愛情の程が、泌々と分つて来たの。物足りなくて堪まらなかつたこともあつたけど、心から私を愛してくれて居たのね。もう少し御一緒に暮したかつたわ」

胸に収めて彼女が良人の写真を見上げた。喪章をつけた其の遺影は、夕暗のかに迫る

炉棚の上で、深いまなざしを彼女に投げかけて居た。

「ねえ、シャルル。私、これからどうしようかしら？ けれど、どう暮そうと私は、あなたと共にここで過ごした四年間のこと、決して忘れはしませんことよ。」

南アルプスの峰々に囲まれて蒼く澄むコモ湖の水面に、空行く秋の夕雲が流れて其の影を落とす、繞る山濤の頂きに早や積もる新雪が、夕陽に映えて美しい。舟着場で舟を納い込む庭番のアナトール爺さんの声がのどかに流れた。

「もう、冬がやつて来るぞう。雁が群れて南へ飛んで行くぞうお。」

「そうだよなあ。ロカルノの町じゃ初雪が降つたそうだよーお。」

ベネディクトーヌ婆さんの声が、どこからか答えて微かに聞える。

「お邸も今年の冬は淋しいよなあ。お気の毒に……」

ミシュリーヌの頬に涙が流れた。

（そうよ。淋しいわ。伯父も伯母も亡くなつたし、一人ぼっち。私どうしたらいいの？）

甘えて見詰める良人の面影が微笑んだ様に思えた。

(ジュヌビエーブが居るじゃないか、とおっしゃるの？あの子、どこに居るのか分らないのよ。寒いわ、もう)

彼女は窓を閉めに行った。角笛の音が風に乗って流れる。今年最後の角笛の音かも知れない。

(シャルル。黙ってらしたけど、やはり御存知だったのね、ジュヌビエーブのこと。あなたの日記、悪かったけど拝見して分ったの。隠して居てごめんなさいね。そう、あの子が居るのね、私には。きつと、きつと探し出しますわ。そして、もし出来たら……)

立つ時に手が触れてデスクから落ちた革表紙の大きな書物。彼女は身を屈めてそれを抱え上げた。挟んであった小さい物が、はらりと床に舞う。拾い上げて見ると、それは優雅な婦人用手帳だった。

(あら、私のだわ。こんな所にあつたのね) 再び窓辺に寄った彼女は、小さな手帳の愛らしい頁を繰った。去りし思い出の数々が、思いがけない鮮麗さで胸に甦えって来た。

(そうだわ、これは最初の舞踏会に出る時に伯母様が下さったのね。何だか怖くて胸がどきどきしたけど、それでもとても嬉しかったわ。最初に踊った相手の殿方はどなただった

かしら？ジュリアン？それともエミール？ああ憶い出したわ。フランソワよ。エミールもそうだったけど、フランソワだったら、それ以上に、私よりもおどおどとあがってたっけ。ほっそりと眼の大きな男の子だったわ) 昏れなすむコモ湖のおもを眺めつつ、ミシユリーヌは追憶にしばし耽るのだった。

彼女、ミシユリーヌ・ダリユーは、南仏はローヌ河のほとり、アル近郊の富裕な貿易商の一人娘として生まれた。八才にして父を、母は十一才にして失った彼女は、十一才の秋、パリの伯父母の手に引き取られた。子供のなかった伯父母に我が子の如く可愛がられて美しく成長した彼女は、やがて伯父母の属するパリ社交界にデビューした。

(十七の秋だったわ。丁度今頃だった……) 十七の乙女が初めて踏み入れた舞踏会。高い天井にシャンデリヤが華やかに、そして落ち着いた先で夜の大広間を典雅に照らし、漆黒のタキシードに身を包んだ殿方達にそれぞれ抱かれて舞うあでやかな女達。娘達や夫人達の純白のローブのゆるやかな裳裾が、衣摺れの音と共に床を優雅に流れて、殿方達の黒い脚にまっわっては離れ、たゆたい回って再びまっつわる。ガントレット(長手套)の片手

に舞扇。それを男の背に押し当ててローブの裾を蹴る貴婦人達のおでやかな微笑み、肩越しに交わされる上品な会話と情熱的な囁き。洪く光る舞踏靴は、磨き込まれた床を滑らかにすべり、宝石のきらめきの中に流れるはワルツの調べ。

(何という曲だったかしら？)

そう、それは「憂鬱なワルツ」。奥深い霧の底から滲み出る如く切々と、ミシユリーヌの胸に今甦えり来る其の旋律は、蕭々と吹き初めた夕風に乗ってコモ湖の水面も縹渺と渡り、佇む窓辺にも嫋々と漂い来たる様に思えた。仄暗い窓に身を寄せて灯もつけず、彼女は更に頁を繰る。記された十指に余る男達の名。或る者は拙なく、或る者は流暢に、それは乙女ミシユリーヌのうなじに愛の言葉を囁やきし若き殿方達の名前。

(あのひと達、今どうしていらっしゃるかしら)

長いまつげを閉じた彼女は、其の瞬間のときめきを一つ一つ胸に想い起しながら、昏れ行く窓辺に立ちつくすのだった。その中でも胸に刻んで忘れ得ぬ一人の男、その名はジェラルド・トリフォー。全身に湧き上がる甘く苦い其の思い出に、彼女の胸は痛んだ。

売切号続出、在庫僅少、乞至急御申込、

本誌既刊号在庫案内

○39年5月号誌上に(39月1月号
2月号、3月号、4月号)

○在庫品の定価、
(送料共)

○各月号の総目次は漸次誌上に掲載いたしますが、既掲載の分は左記の通りであります。

◎昭和38年11月号誌上に（38年6月号、7月号、8月号）

◎昭和39年1月号誌上に（38年9月号、10月号、11月号、12月号）

（35年9月号、35年6月号）

◎39年2月号誌上に（36年3月号、4月号、5月号、6月号）

◎39年3月号誌上に（36年7月号、8月号、9月号、10月号）

◎39年4月号誌上に（36年11月号、12月号、1月号、2月号）

昭和3636年6月号	昭和3636年5月号	昭和3636年4月号	昭和3636年3月号	昭和3636年2月号	昭和3636年1月号	昭和3535年12月号	昭和3535年11月号	昭和3535年10月号	昭和3535年9月号	昭和3535年8月号	昭和3535年7月号	昭和3535年6月号
(売切)	(定価一五〇円)	(売切)	(定価一五〇円)	(売切)	(売切)	(売切)	(売切)	(売切)	(定価三〇〇円)	(売切)	(定価三〇〇円)	(定価三〇〇円)

昭 和 38 年 3 月 号	昭 和 38 年 2 月 号	昭 和 38 年 新 年 号	昭 和 37 年 12 月 号	昭 和 37 年 11 月 号	昭 和 37 年 10 月 号	昭 和 37 年 9 月 号	昭 和 37 年 7 月 号	昭 和 37 年 6 月 号	昭 和 37 年 5 月 号	昭 和 37 年 4 月 号	昭 和 37 年 3 月 号	昭 和 37 年 2 月 号	昭 和 37 年 新 年 号	昭 和 36 年 12 月 号	昭 和 36 年 11 月 号	昭 和 36 年 10 月 号	昭 和 36 年 9 月 号	昭 和 36 年 8 月 号	昭 和 36 年 7 月 号
(売切)	(売切)	(売切)	(売切)	(売切)	(定価)	(売切)	(定価)	(定価)	(売切)	(売切)	(定価)	(定価)	(定価)	(定価)	(定価)	(売切)	(定価)	(定価)	(売切)
					一〇〇円						〇〇円	〇〇円	〇〇円	〇〇円	〇〇円		一五〇円	一五〇円	

[illegible]

「灯をおつけしてよろしくごいただきます?」

「ないものですから。」

小間使いのイヴェットが、そっと入って来

イヴェットがそこを片付けながら云った。

て云った。眼の大きな、おとなしいがしっか
り者の十七才の娘だ。我に返ったミシュリー

（私の手料理、とても喜んで召し上って下さったわね。もう一度召し上って頂きたいわ）

又はほんと吐息をついてうなずいた。亡き夫

亡夫の遺影を見詰めて、ミシユリー又は眼

シャルルのかんばせは彼女の逝きし乙女の日

をうるませた。

を悼むかの様に、そして又、彼女をやさしく

「何か云った？イヴェット。あら、そうお。

励ますかの様に、包み込む如き色を浮べて、

仕様のないクローディアね。」

おだやかに静かに微笑んで居た。

「あのひと、奥様を馬鹿にしていますのよ。前

「あの、御夕食になさいますか？ おそくなつ

からそうでしたけど、旦那様がお亡くなり遊

てすみません。クローディアがまだ帰って来

ばしてからはひどいですわ。奥様がお見えに

なるより早くから此のお邸に居たんだって……。そして、旦那様の奥様には若過ぎるって……」

八つ年上の女中仲間に対する怒りと、ミシユリーヌ奥様に抱く憧憬と同情とをこめて、純真なイヴェットは口をとがらせて云った。

「いいじゃないの。どうせ辞めるつもりなんじゃなくって？」

窓外のコモ湖は既にとつぷりと暮れて、夜のとばりに包まれて居た。

(続)

連載小説

花
と
蛇

(第十二回)

団
鬼
六

屈辱の猿ぐつわ

川田は、結び玉を作って、ねじりあげた縄尻をしごきながら、

「奥さん、覚悟はいいね」

と、静子夫人にいい、素早く縄をしごいて柔肌を力一杯しめあげる。

「あっ」

と静子夫人は、電気に打たれたように縛られた全身を痙攣させ

「い、嫌、嫌よ。待って、待って、川田さん！」

耳たぶまで真赤にして、静子夫人は悶え泣く。川田が縄にわざわざ固い結び玉をこしらえた意味がやっとわかり、途端に静子夫人は激烈な羞恥と屈辱に呼吸が止まるのではないかと思われた。

「お願いっ、川田さん、あっ、ああ——」

狂ったように悶え抜く静子夫人であったが

川田はニヤニヤ笑うだけ、

「今更、嫌といってもおそいぜ」

川田は、夫人の豊かな肌がくびれる程、縄でキリキリしめあげると、胴縄につないで、最後の縄止めを終え、前へ廻った。

うで卵の白味のように艶のある熟れ切った静子夫人の素肌には、上半身下半身とも、頑丈な麻縄ががちりかけられて、わずかの身動きも許さない。

「どうだい。川田式股間縛りの味は？ え、

何とかいってみなよ。遠山夫人」

川田は、夫人の麻縄にくびれた肢体を、しみみ見ながら、そういい、茫然として見とれている田代にいう。

「どうです、社長。長年、日本舞踊で鍛えあげたこの見事な奥さんの身体に、こういうふうに縄をかけると、美しさが一段と引き立つ

ようじゃありませんか」

田代は、何度も満足げにうなずき、ウイスキーをなめつづけている。

静子夫人は、毛穴という毛穴から血でも吹き出しそうな屈辱と苦痛の入り交った表情で必死な思いをこめて川田にいう。

「——か、川田さん、こ、これで気がすんだでしょう。さあ、約束通り、京子さんと美津子さんを——」

静子夫人は、充血した眼を川田に向け、あえぎあえぎ、京子と美津子の縄を解いて、台から降ろす事を哀願し始めるのだ。

朱美が、川田を押さえるようにして静子夫人の前へ出た。

「そんなに、メソメソしながらいうのは気に喰わないね。一つ、ニッコリ笑ってごらん。あんた程の美人が笑顔を見せないってのは、宝の持ちぐされじゃないの」

朱美がそういうと川田も調子を合わせて、「そうだ。俺は以前、奥さんの笑くぼを見てぞくぞくとした事があるよ。久しく、奥さんの百万ドルの笑くぼにお目にかからねえ。一つ、大きく笑くぼを作って、ニンマリ笑ってみな。それで、本日の打ち取めという事にしようぜ」

泣きの涙であえいでいる美女に、わざと笑顔を作らせようと、川田達は、調子に乗って夫人をいたぶりだす。

「ショーに出るスターが、客の前で笑顔一つ作れないと商売にならんからな」

森田がいつて、笑い出した。

「ただ、笑うだけじゃ芸がないから、奥さんこういういな。股間縛りって、すばらしいわ、ああ、たまらないわ、いい気持ちね」

銀子が、そういうと、やくざもズベ公も、どっとわいた。静子夫人は、歯をかみ鳴らし、がたがた震えるだけで、首を垂れてしまふのだったが、川田も朱美も、笠にかかって夫人を責めさいなみ、銀子は、豊かな肌をくびっている縄を更にきびしく上へしめあげて、夫人に悲鳴をあげさせるのだった。

遂に静子夫人は、その反吐にも似た屈辱の言葉を口に出す事を承認する。

静子夫人は、身をよじりながら、声を出し固く眼を閉じた美しい顔を切なげに左右へ振る。長いまつ毛の下から、涙が幾筋も尾をひいて頬を伝わる。

やっと、夫人が地獄の言葉をいい終ると、やんやとズベ公達は手を打って喜び、「さあ、ニッコリと笑うのよ。色っぽくね」

ズベ公達に、つねられたり、くすぐられたりして、静子夫人は、無理に笑顔を作ろうとするのだが、ひきつったような哀れな顔になつてしまう。

「イーと歯を出してみな。そうすりゃ楽に笑顔が作れるよ」

川田は、静子夫人の熱くなっている頬を突いて、笑う。そういう状態の夫人をカメラに写そうとしているズベ公もいた。

「さ、笑って。可愛い笑くぼを作らなきゃ駄目よ」

カメラをかまえたズベ公がいった。

静子夫人は、遂に抗し切れず、白い歯を見せ、何とか笑顔を作ろうと顔を歪めて必死に努力する。

「そうそう、もっと歯をイーと出して、可愛い笑顔をするのよ」

ズベ公達は、夫人に無理やり笑顔を作らせわあーと面白くてたまらないというふうにはやしたてるのだった。

「御苦労だったわね、奥さん」

銀子と朱美は、静子夫人の縄尻を鎖から外す。

「しばらく休憩させてあげるわよ。さ、さっさとお歩き」

銀子は、厳しく縄を掛けられたままの静子夫人を、森田組の地下牢へ引き立てようとするのである。この地下室の隅に、赤さびた扉があつて、それを森田組の男達が力一杯引っぱると、ギイギイ音を軋ませて、古びた扉が左右に割れる。その奥には時代劇に出て来るような牢屋が、三棟ばかり縦に並んでいるのだ。

森田組が秘密シヨウに使う女を飼育するため、炭倉か何かを改造したものらしく、牢舎の格子木は新しいものだった。

「さ、行くのよ」

銀子にどんと背をつかれて、よろよろと、前へつんのめった夫人は、うっと声を出して体をくの字に曲げる。

川田にかけられた結び玉つきの縄が、いよいよ、その本領を発揮し出したのである。

「ああ——許して」

静子夫人は、狂ったように首を振り、その場へ身を沈めようとしたが、

「何をしてるんだよ。ちゃんと歩きな」

銀子が、ぐいと縄尻をひいた。

川田が、ニヤニヤして、すすりあげている静子夫人の顔をのぞきこむようにしている。「奥さん、どうしたんだよ。歩けない理由を

聞かしてみな」

静子夫人は、恨みと哀願の入り混った瞳を川田に向ける。

「川田さん、ど、どうして、私、こんなにひどい仕打ちを受けなきゃならないの。ね、どうしてなの」

「ふふふ、それはね。奥さん、あんたがあんまり美しく過ぎるからなんだよ。さあ、がんばって、あそこの牢屋まで歩くんだ。そして京子と美津子は黴りものにならなくてすむんだぜ」

静子夫人は、眼を閉じ、一步、一步、踏みしめるようにして歩き出した。

「あんよは上手、手のなる方へ——」

ズベ公達は、キャッキャッと大笑いしながら、真赤な顔を横へ伏せるようにして、屈辱の歩みつつける静子夫人の前後をはさんで手をたたく。

やっと、一番奥の牢舎の前まで、静子夫人は、必死の思いで這うようにして、たどりついたのだ。

牢屋の中は三坪ぐらいの広さで、二米ほどの長さの柱が、二本並んで、その中に立っている。そして、一本の柱には、静子夫人と同様、厳重に縄を柔肌もくびれるばかり掛けら

れた若い娘が、がっちりと立縛りにされていた。

「あつ、桂子さん！」

静子夫人は、眼を見開き、絶句した。ぐったりしていた桂子であったが、その声に、ハツと首をあげ、

「あつ、ママ、ママ！」

と、声をはりあげる。遠山隆義の先妻の娘の桂子か、静子夫人が押しこめられた牢屋の中に監禁されていたのである。

静子夫人の縄尻をとっている銀子が、楽しそうにいう。

「特別に母娘、一緒にの牢屋につないでおいだげるわ。ふふふ、だけど、二十六才のママに二十一才の娘なんて奇妙ね。まるで、姉妹のようじゃないの」

銀子と朱美は、静子夫人のきらめくように白い肉体を牢内に打ちこまれてある角材に押しつけるようにして、ひしひしと縄をかけ、ゆわえつける。夫人と桂子とは、向かい合った形で、二本の柱にそれぞれ立縛りにされてしまったのだ。

「ふふふ、久しぶりで、母娘御対面というわけね。仲良く二人とも縄をかけられて——」

銀子が笑うと、朱美は桂子のあごに手をかけて、

「どう、桂子、縛られたママって、素敵だと思わない。よく、見てあげな」

桂子は、それに答えず、泣きはらした眼を静子夫人に向けて、

「ママをこんな目に合わしたのも、みんな、私のせいよ。ママ——かんにんして——」

たまらなくなったように、肩を震わせて鳴咽する桂子である。

静子夫人も、はらはら涙を頬に伝わらしつつ、

「桂子さん。貴女と同様、私も死ぬより辛い目に逢ったわ。だけど、負けちゃ駄目、生き抜くのよ。きっと、救われる時が来るわ。」

静子夫人は、半分は自分の心を励ますよう必死な思いで桂子にいうのだった。

銀子は、せせら笑うようにいう。

「ふん。救い出される時が来るだとか。笑わせるよ。まあ、そんな事をあてにするより、これから、母娘協力して、立派な秘密ショウのスターになる事を考えることね」

銀子は、悦子に目くばせした。

あいよ、と悦子がつまみあげるようにして出したものは、先程まで、静子夫人の腰をし

めていた紫の色緋、おしめとして、無理やり使用させられたものである。

静子夫人は、悦子のつき出したそれを見ると、ハッと顔を赤らめて、眼を伏せた。

失美は、悦子から、それを指でつまむようにして受取ると、桂子の前へ持っていく。

「ねえ、桂子。これを見てごらん。あんたのママって、美人のくせにずいぶんとお行儀が悪いわね。私達がせっかくしめてあげた品のいい色緋に粗相して、こんなに濡らしちまったのよ。」

静子夫人は、憎悪のこもった瞳を一時、朱美の方に向けたが、どうしようもないよう真っ赤な顔を落とし、身を震わせる。

「それでね。お灸をすえる意味で、股縄をかけてあげただけど、あんたのママったら、それを喜んじゃってね。皆んなに向かって嬉しいわ、いい気持だわ、なんていうのよ。全くあきれわ」

銀子は、朱美に代って、桂子にそう告げるのだ。そして、桂子にそんな事を聞かし、それを静子夫人がどういう風に辛く受取るか、意地悪く観察しようとするのである。

二人のズベ公が、静子夫人の美しい顔をのぞきこむようにして見る。そして、満足した

ようにうなずき合い、ナイフを使って、べつとりしている紫の布地を引きさいた。

「さあ、桂子、懐かしいママの匂いを充分にかがせてあげるわ。これで猿轡をするのよ」

銀子と朱美は、その汚れた布で桂子の口を覆うつもりなのだ。

静子夫人は、ズベ公達のあくなき残忍さに身震いし、たまらなくなつて顔をあげた。

「——馬、馬鹿な事はしないで！」

泣きはらした切長の美しい眼を見開いて、銀子と朱美を睨む静子夫人だが、

「さあ、奥さんも、これで猿轡をするのよ。早く水分を吸いにとって頂戴ね。自分が汚したものの洗濯ぐらいは自分でして頂くわ」

朱美と銀子は、桂子にそうした猿轡をはめ終わると、残りの布を適当な大きさに切りとり、夫人に近づいてくる。

桂子は、これまで散々ズベ公達に折檻されて、抵抗することの空しさを覚ったのか、二人のズベ公に鼻まで隠れるような、汚辱の猿轡をされるまま、観念しきっていた。

「け、桂子さん！」

静子夫人は、そんな猿轡をされる桂子を、まともに見ていなければならぬ辛さ、身を切り刻まれるような苦しさである。

「——が、がまんして、桂子さん！」

激しく泣きじゃくる静子夫人の顔の前に、屈辱の紫の布が迫る。

「奥さんの方は、一番よく汚れたところをお願いしなくちゃあね。さあ、アーンとお口を開けて——」

如何に哀願したとて、許すズベ公達ではない。静子夫人は、一切の望みを捨てたように固く眼を閉じ、小さく口を開けるのだった。

紫の布のきれはしが夫人の口の中に強引に押しこまれ、その上をべっとり水分を含んだ猿轡がかまされる。



「どう。奥さん、御自分の匂いってものは？ 甘いかい、すっぱいかい」

朱美は、鼻まで覆う猿轡をはめられた静子夫人をまじまじと見て笑うのだった。

「桂子、どうだい。ママの匂いは？ ふふふ明日は、あんたの匂いをママにたっぷりかかせてあげるからね」

銀子は、桂子をいたぶっている。

静子夫人も桂子も固く眼を閉じ、顔をよじるようにして、すすりあげているのだ。

「じゃ、お二人とも、そこで、よく反省するのね。明日の朝まで、そうしていな」

ズベ公達は、格子扉を押して、牢の外へ出る。悦子がガチャリと錠をおろし、

「猿轡の水分を明日の朝までに、しっかりと吸いとおかなきゃ駄目よ」

と捨台詞を残して、せせら笑うのだった。

浣腸競演

「どうしますかね、社長。この京子姐さんと美津子嬢なんですが——」

田代に向かって川田はいった。

二つの並んだテーブルの上に、輝くように白い素肌を仰向けにくくしつけら

れ、両足を高々と吊られている美しい姉妹。それを、今、静子夫人が演じた数々の屈辱的な行為に免じて、これからの責めを打切るかどうか、と川田は田代と森田に持ちかけたのである。

「涙ぐましい遠山夫人の努力に敬意を表して今日のところは、この別嬪さん方、解放してやろうじゃないか」

田代は煙草に火をつけながら、そういう。気が狂いそうな羞恥と、これから悪魔達の騷りものにされるといふ恐怖とで、生きた心地ではなかった台の上の美津子は、一時的とはいえ、情容赦のない責めから解放される喜びに、はっとしたように涙にうるんだ眼を開け、隣の姉の方を見た。

京子は、固く眼を閉じ、化石のように身動きしない。ただ、上下に厳しく縄をかけられている見事な乳房がかすかに息ずき、固く閉じている眼尻から屈辱の口惜し涙が、幾筋も白い頬を伝わって流れ落ちている。

「お姉さん——」

美津子が小さく京子と呼ぶと、京子は、すぐに眼を開いて、美津子の方へ顔を向けた。

「ああ、美ちゃん——」

京子は、すすりあげながら、

「——お姉さんが馬鹿なために、貴女にまでこんな目に合わせてしまったのよ。許して、美ちゃん」

京子は声を震わせて妹に、そう詫びるのだった。

そこへ、川田が来る。

「何を二人で、ぶつぶついつてるんだ。」

川田は、京子と美津子の顔を交互に見下しながら、

「せっかく浣腸の準備までしたんだが、社長が解放してやれとおっしゃるんだ。運がいい

ぜ、おめえ達は」

京子は、悪鬼のような川田にうるんだ瞳を向けて、

「——川田さん、お願い、早く美津子の縄を解いてやって——」

京子は、妹の美津子を一秒でも早く、このいまわしい境地から解放させてやりたい一心で、川田に哀願するのだった。

「そうがつつくねえ。浣腸責めをかんべんして下さった社長に、心からお礼を申し上げるんだ」

川田は、そういつて、田代と森田を手招きする。

田代と森田がニヤニヤして近づいて来ると

川田は、京子にいった。

「さあ、お礼を申し上げねえか。しっかり、社長のお顔を見て、心からいうのだぜ」

京子は、田代と森田の酒に濁った眼を見上げて、

「——お許し下さって——あ、有難うございます——」

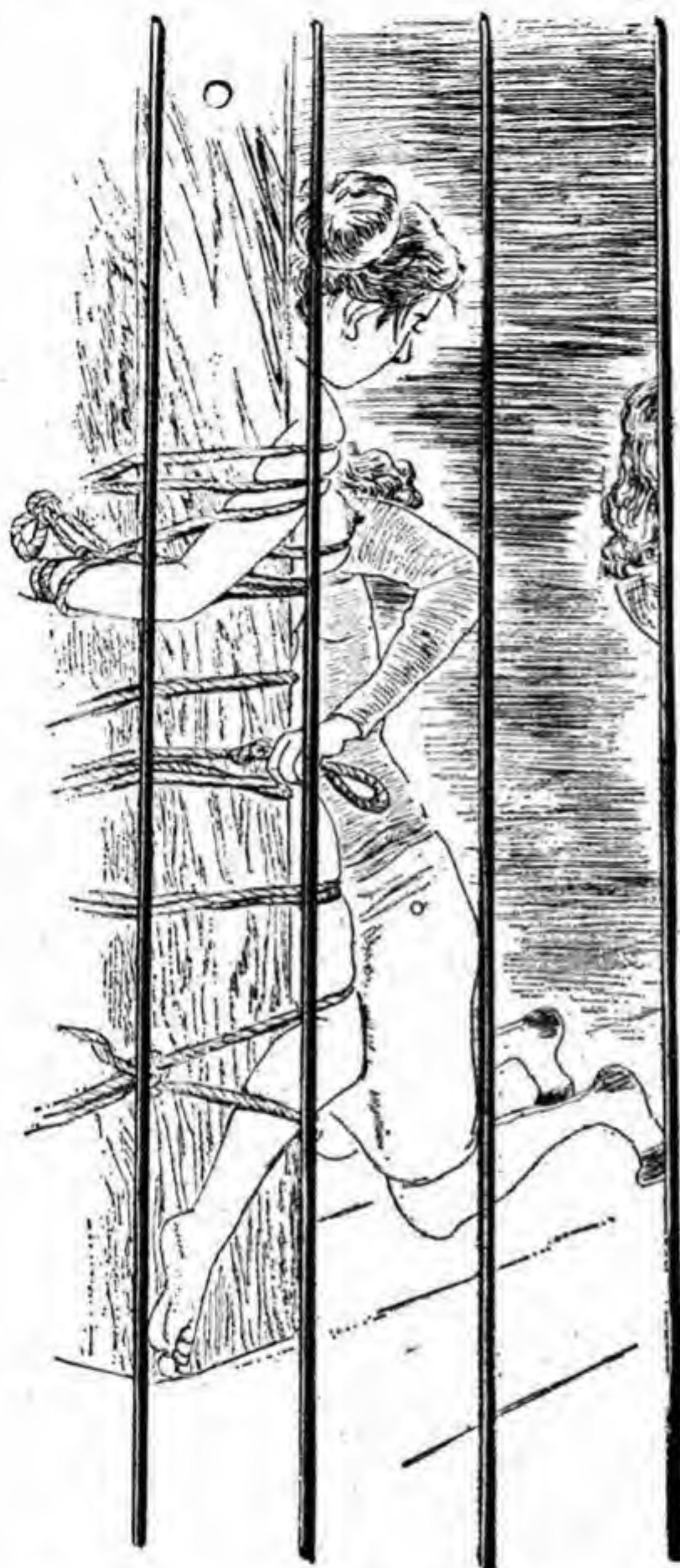
京子は、震える声でそういつた。

田代は、桜貝のような爪をした足首を高々と掲げて縛りあげられている京子を、小気味良さそうにしげしげ眺めている。

「まあ、今夜のところは、遠山夫人が色々の芸を見せて俺等を楽ませてくれたからね。解放してはやるが、明朝は京子姐さん、あんたには、俺のヒゲを剃り落した償いを、つけてもらうぜ。いいね」

つまり、報復の私刑を明朝、行おうというわけだ。

京子は、紅潮した顔を横へ伏



せて、小さくうなずくのだった。美津子が捕われの身となつてゐる限り、京子は、どうしようもない。鬼畜達の拷問に身を任すより、方法はないのだと観念したのである。

「長い間、御苦労だったね。じゃ、お嬢さん台から降ろしてあげるぜ」

川田は、美津子の高々と吊り上げられてゐる足の縄を解こうとしたが、その時、静子夫人を穴倉牢へ押しこんできた銀子と朱美が帰つて来て、

「ちよつと、お待ちよ」

と、けわしい顔になつて、川田の手を押さえた。

「せっかく、ちゃんと支度が出来上つてるというのに、何故、浣腸責めを中止するのさ。

あれ位の芸を静子夫人が見せたからって、それだけで、この二人を許すつてことがあるかよ。葉桜団の恐しさを、充分この二人に味わさしてやるんだ」

朱美は、キバでもむき出しそうな表情で川田にいうのだった。

「どうします。社長？」

川田は、顔をくずして田代に相談を持ちかける。

急に一変した空気に、台の上の京子と美津

子は、おろおろした表情になり、助けを乞うように田代の顔へ哀切極まりない瞳を向けるのだった。

「民主的に、多数決で極めようじゃありませんか」

川田はそう提案する。よからう、とうなづく田代。

川田は、周囲の森田組のやくざ、そして、葉桜団のズベ公達に、

「この別嬪さん方に、浣腸の御馳走をやるべきだと思ふ者は手をあげて下せえ」と声をはりあげる。

わあーと、やくざもズベ公も一せいに手をあげた。

「なんでえ、一人残らず手をあげたぜ。こいつは驚いた」

川田は、万更でもないといった顔つきだ。

京子は、胸をしめつけられるような口惜しさに歯ぎしりし、吊られてゐる両肢を悶えさす。死ぬより辛い浣腸責めを免れたと思つたのも束の間、朱美と川田のために、再び、汚辱地獄へ蹴落されてしまった感じだ。

「か、川田さん、お願い、お願いです！」

京子は、激しく身をもみながら、傍にニヤニヤ突っ立っている川田を呼ぶ。

「何だい。京子姐さん」

川田は、京子のせつぱつまった表情を楽しげに見ながらいう。

「後生です。美津子だけは許してやって。お願いです！」

「駄目だね。今、民主的に決定したんだ。姉妹仲良く葉桜団と森田組のお仕置を、たっぷり受けるより仕方がないよ」

川田が閉め出すようにいうと、京子も美津子も一きわ激しく泣きじゃくるのだった。

用意にかかりな、と銀子がズベ公達に命ずる。あいよ、と調子良くズベ公達は、便器や

グリセリン五十CCを吸いこんだ浣腸器を持つて、台の上の二人に近ずいて来た。

「待ちな。このお嬢さん方の浣腸を誰がするか、それをまず決めようじゃねえか」

川田が手をあげていう。

「京子に空手で痛めつけられた男達に任したら、どうでえ」

と森田がいう。

「おっと、それなら、俺だ」

と、吉沢に村田という森田組の幹部級が立上つてやって来る。

二人は、腕をまくりあげて、青ずんでゐるところを親分の森田に見せる。

「この阿女に空手チョップで打たれたところ
でさあ。その礼を返させておくんなさい」

よからう、と森田はうなずく。

銀子は、浣腸器の一つを吉沢に渡し、台の上で、すすりあげている京子のあごに手をかけていう。

「吉沢兄貴と村田兄貴に、お前さんの浣腸をお願いする事にしたからね。女だてらに、このお二人に空手打ちを食わした事を充分反省しながら、浣腸して頂き、お二人に満足して貰えるようしっかり排泄しなきゃ駄目だよ。わかったね」

京子は、もう流す涙も涸れたよう、苦しげに眉を八の字に寄せ、矢鱈に首を左右へ振るだけであった。

朱美が、それに付け加えていう。

「あんたの体から出たものは、明日、あんたの体から剃り落したものと一緒に、ビニールの袋につめて、山崎さんに送ってやるよ。恋人に対するプレゼントとしては、最高のものじゃないの」

京子は、狂ったように真っ赤になった顔を振り、泣きじゃくる。そんなもので、愛人の山崎のもとに送り、京子に赤恥をかかそうとする葉桜団の残忍さに、京子は気が遠くな

りかけるのだった。

川田が、ウイスキーを一飲みしていう。

「ところで、こちらの可愛いお嬢さんの方は、誰が受持つ事にするかね」

チンピラやくざの竹田と石山が立上った。

「そのお嬢さんを裸にする時、ひっかかれた傷です。見て下せえ」

二人は、顔についた引っかき傷や、噛みつかれた腕の傷などを、口をとがらすようにして川田に見せる。

「なるほど、男の眉間に傷をつけられたとあっちゃ腹が立つのは当然だ。じゃ、お嬢さんの方は、お前さん方に任すでしょうか」

竹田と石山は、小躍りせんばかりに喜んで、今一つの浣腸器を手にする。

「——嫌、ああ嫌よ——」

台の上に、どうしようもない姿で緊縛されている美津子は、吊るされているすらりとした両足をのたうたせて泣きじゃくる。

川田は、そんな狂乱の美津子に近ずくと、

「お嬢さん、男の顔に傷をつけるってのは、よくねえな。この二人に浣腸してもらって、お姉さんと一緒によく反省するんだな。」

森田がニヤニヤして、美津子の顔をのぞきこんでいう。

「それによ、お嬢さん。あんたを浣腸するこの二人は、森田組じゃ一番年若のハンサム・ボーイだ。恋人にでも、浣腸してもらっている気分で、安心してのびのびと排泄するがいぜ」

京子も美津子も、絶体絶命、地獄の羞恥図をいよいよさらけ出さねばならぬ事となる。「どちらが先に排泄させるか、競争しようじゃねえか」

吉沢が、ニヤニヤしながら竹田達にいう。すると、賭の好きなズベ公達は手をたたいて、私は京子の方に賭ける。私は妹の方よ。と眠々しくなり出す。

京子と美津子の傍には、各々、ブリキ製の便器が用意されて、いよいよすざまじい浣腸の幕は切って落とされたのだ。

「せっかくだから、こいつも撮影しておこうじゃねえか」

こういう場面の撮影が商売でもある森田は乾分達に命じて、部屋の隅に撮影機をすえつけさせる。

京子も美津子も生きた心地はない。身体全部を針のように緊張させて、歯をカチカチ恐怖に噛み鳴らしつづけているだけだった。

撮影機が回転を始め、川田が、

「準備OK、スタートだ」

と、大声をたてる。

浣腸器を持った男達が、靴音を鳴らして接近して来ると、京子は、激しく吊られた両肢を悶えさしながら、必死な眼を美津子の方に向けた。

「ああ、助けて！ お姉さん！」

「畜生、竹田の奴等、もう始めてやがる。気の早い奴等だ」

吉沢と村田は笑いながら、美津子の方を顛倒した気分で見つめ、嗚咽している京子の鼻先へ、五十CCのグリセリン溶液を含んだ浣腸器を近づけた。ハツとしたように京子は、眼を伏せる。

「へっへへ、京子姐さん。この間は、こびつどい目に合わせてくれたね。今から、こいつ一本で、たっぷりお礼させてもらうからね」

吉沢は、京子の頬を浣腸器の先でつつく。

嘴管からグリセリンの溶液が溢れて頬を濡らす。

京子は、たまらなくなつたようにかっと眼を開いた。

「け、けだもの！」

「何だと——」

「何の罪もない妹をなぶりものにして、お前

達は人間の皮をかぶったけだものだわ。」

「この阿女、そんな大きな口をたたいて、あとで後悔するな」

京子は、再び、固く眼を閉じ、観念しきつた口調でいった。

「さあ、か、覚悟は出来てます。どうでも、

気のすむようにして頂戴」

「いい度胸だ。吠面をかくなよ」

吉沢は、額に青筋を立て、浣腸器を持ち直した。

唇を固く噛みしめて観念していた京子であるが、思わず、あっと声が出て、大きく顔をのけぞらす。

京子も美津子も、遂におぞましい五十CCの溶液を体内に注入されたのだ。そして、酒に濁った男と女の好奇な眼の前で、浣腸の次に起る当然の苦痛と戦わねばならなかった。

油汗を流して、身悶えする美しい姉妹の顔を田代、森田、川田等が近づいて、しげしげと見つめている。

「無理にがまんする事はないんだぜ。声さえかけりゃ、何時でも便器を当ててやるんだ」

川田が笑いながら、京子と美津子にいう。

京子は、鬼共の期待するみじめな姿を演じぬ事が、鬼共に対するせめてもの抵抗として

齒を喰いしばり耐え抜こうとする。が、しかし、そんなはかない忍耐も段々と限界に近ずきつつあることが、はっきりしてきたのだ。妹の美津子の苦しさを思うと、京子は、我身の苦痛も忘れ、首をねじるようにして、隣を見る。

「——ああ、お姉さん、どうしよう——」

美津子は、全身を鳥肌だって襲ってくる激しい便意に、口を小さくあけ、白眼を向いた。りして耐えに耐えている。少しでも、息を抜けば、魂も炸裂するばかりの光景を展開させることになる。と美津子は、あえきながら耐え続けているのだ。

「——美ちゃん——」

京子は、高まっていく便意をキリキリこらえつつ、美津子と呼ぶ。

「——お姉さん、駄目、美津子、もう駄目だわ」

のたうつように美津子は身をもみながら、喘ぐ。

川田が、そんな美津子の上気している頬を指でつついていった。

「お嬢さん。もう駄目なら、遠慮せず、浣腸係の竹田と石山にお願いするんだよ。便器を当てて下さいとね」

ああ——と、美津子は、真珠のような白い歯を見せて、美しい顔を大きくのけぞらす。

もう美津子には、耐える力はなかった。

やくざとズベ公達が好奇の眼を光らせている真只中で、いよいよそういう姿をさらさねばならぬ口惜しさと羞しさ、まして、けがれを知らぬ十八の乙女にとって、それは、身をズタズタに引きさかれるよりも辛い羞恥の極であろう。

竹田と石山が、そんな状態の美津子に便器

を当てがうと、川田が、息もたえだえといっ

た顔つきの美津子の頭の下に手をかけるようにし、首を心持上へ持ち上げるのだった。

「お嬢さんの美しい顔もカメラに入れましょうね。そうすりゃうんと値打ちが出る。さあカメラの方へ顔を向けて」

体中がしびれてしまつて、美津子は、もう抵抗する気力もなく、カメラの目に顔を向けられてしまう。

そういう恐しい目に合っている妹を眼にし

臨時増刊号 『花と蛇』 特集号 定価五〇〇円 (送共)

四馬孝画 「花と蛇」 各章巻頭口絵十六葉

グラビヤ写真 // 花と蛇// 各場面描写特撮フォト

五月中旬刊行予定。堂々第十五回完結まで一挙登載

昭和三十七年八月号から本誌上に連載して、大好評を博しました団鬼六氏作「花と蛇」の第一回から第十五回の完結までを、四馬孝氏の挿絵を以って、一冊の特集号にまとめ上げました。尚、巻頭十六頁のオフセット口絵には、四馬孝氏描くところの各

章のクライマックス・シーンを掲げ一段と凄味を加えております。グラビヤ・フォトとしましては、特別に撮影しました「花と蛇」の各場面フォトを以って飾りました。文字通りサジズム小説の決定版として、是非一冊お備え下さい。

た京子は、狂ったように首を振り、眼を閉じた。もう美津子の方を正視することの出来ぬ京子である。だが、川田やズベ公達が、美津子をいたぶる声は、嫌でも京子の耳に入ってくるのだ。

「何をしているんだよ、お嬢さん。さあ、景気よくすましちいまいな。」

と朱美の声。

最後の気力をしほるようにして、便意をたえつつける美津子のうめき声——だが、遂に最後が来たのだ。美津子は、断末魔の悲痛な声をあげた。腹の中でグリセリン溶液がごろごろと荒れ狂っているのだ。

美津子の悲痛な最後の哀願とは逆に、京子の方を環視していたやくざやズベ公も、見逃がしてなるものかとばかり、どっと、美津子の側に寄りたがる。

京子は、美津子の死んでしまいたいような辛い口惜しい気持を思うと気が狂いそうになる。自分の隣で、囂りものになっている妹を助ける事の出来ぬ自分が口惜しい。

突然、わあ——とズベ公達の嬌声とやくざ達の哄笑が隣で巻き起った。

(つづく)

〔本誌既刊号総目次〕

昭和三十七年三月号

(定価二百円)

△目次裏▽「風流いろは歌留多」
(三十九夜同人作・滝れい子画)
△戯画▽「どう似合うでしょう」
(南村俊平)
△グラビア▽「組写真」暗黒の麗人▽「柔肌は縄にくびれて▽手吊りのポーズ▽逆海老の態勢▽二等辺三角形▽嵌口に憑かれて▽さるぐつわ哀歎▽囁まされた黒布▽美しき嵌口
△口絵▽女相撲熱戦譜「激突」(雪崎京人) 滝れい子画集「真紅の色彩」「離室の一夜」四馬孝選「密輸品運搬」「夜空に浮かぶ風」少女検診(南村俊平) こんなにしてやろうか? (黒川不二夫) 高原の散華(滝れい子) 緊縛フオト撮影の実際(水責めと煙草責めのテーマ) 人間馬の調教「女主人と奴隷——飼育中」足舐めの構図「女臭にむせぶ」マゾの境地「牝豹の凌辱」法悦境——足拭き台「捕えられた女の哀愁」△奇クサロン▽「テレビにおけるサジシオン」通信——僕の願い○詩「破れ易き紙」○マゾ女性を結婚の対象としたい男性からの便り○生活の中のM「尻に敷かれる」○モデル嬢の飼育ぶり○切腹小咄集○マゾ川柳、玉のおん手○ガン作・マニヤのノート○フェチ通信

昭和三十七年六月号

(定価二百円)

「我が愛するもの」○新年号を読んで思うこと○マニヤ放屁譚○座食職人の空想○告白「昆輝記」○最近号の読後感○小麦色の肌○アブストラクト○女体切腹「夜散る梅」M写真「舌釣り」「穿孔」○お灸を得意とする継母を求めて△グラビア▽連続組写真○女性の切腹「マニヤの切腹ポーズ」「吊りへの移行」「切り裂く皮下脂肪」「耐える女体」△本文▽編集手帳控から(編集子) 追想小説「黒衣の若妻」(瀬戸澄子) 女性の切腹「切腹を賭した恋」(数寄咲) 宇宙のどこかで(佐治麻造) 浣腸相談(栗瀬長) 柔肌の激突(雪崎京人) 麻葉密売団検査秘話「泣き濡れし肌」(鏡獄聖一郎) 体験小説「ある娼婦」(西田仁) マニヤの手帳「ビニール雑考」(阿留品又恕) 暮夜の戯れ(井田南枝) ウィクリー輝「僕の輝日記」(東輝一) 戦国哀話「残照」(石井章造) ルポルタージュ「未決監に蠢く(蓮池和邦) メンチシストの告白「メンス考現学」(古井真哉) 輝ける星を見て(武中郁) フイクション「K子の手記」(羽村京子) ある生活「襦袢抄」(関根彰) 奇譚三十九夜物語(辻村隆) 通信・読者モデル誕生に想う(近藤一) 名作小説に描かれた女性の素足(木村清) 私はこの醜悪さを愛する(とやま・かずひこ)
△目次裏▽「風流いろは歌留多」
(三十九夜同人作・滝れい子画)
△幻想画▽「艦飾」(南村俊平)
△口絵▽重量テスト(黒川不二男) 蠟涙文学(四馬孝) 橋の袂の仕置(四馬孝) 海の幻想「オットセイと美女」(滝れい子) フォト「逆手」(春日ルミ・愛川悦子) 物置小屋の花(黒川不二男) あくどいいたずら(黒川不二男) 或るビジネスガールの自害(滝れい子)
△グラビア・フォト▽「濡れた塑像▽板の間の艶姿(絹川文代)▽黒蛇のもだえ(梨花悠紀子)▽エビ責プレイへの過程(大塚啓子)▽幽囚くさり(絹川文代)▽そちらへ行くのはいや(梨花悠紀子)▽鞭うたれる女(梨花悠紀子)▽女体切腹の幻想(大塚啓子)▽Mフォート「幸福なる隷属」(絹川文代)
△奇クサロン▽「綿ネルの素肌に對する感觸」女子寮の争い○外国映画にみるMシーン○社長と女秘書○私はしもべ○女装愛好家へ○モデル嬢へのお願ひ○鼻はかわい愛玩物○竹野ひろ子さんへの私信○短信往来「浣腸の実験」○女相撲思い出話○四月号の読後感○ガン作・マニヤのノート○夏の昼の夢○まぞ川柳わけ知り○京町柳一郎個展○アブ散歩「何でも書

こう○アブストラクト

△本文▽裸形の略(雪俊通) わたくしの体験(松本達智子) 鉄の指(西田仁) 銀幕の残酷シーン(吉田和夫) 女優漂泊記「身悶えるあけみ」(近藤一) 解剖異聞「哀恋腑分奇談」(伊藤悦代) 或る妻の記(牧高志) 宇宙のどこかで(佐治麻造) 臍とサディズム(南方佳男) 不浄なる聖物(とやま・かずひこ) ファンタジヤ・マゾヒステイカ(山本節夫) 夢幻小説「牧神の饗宴」(香推隆彦) 掟について(近藤一) 奇譚三十九夜物語(辻村隆) 大蔵映画「肉体市場」を観て(近藤一) 足についての文獻と記録(木村清) 告白「刺青マニヤの弁」(田中文男) マゾヒズム天国(田沼醜男) 体験告白「愛責記」(斎藤京一) 体験記「学校の保健婦として」(渡部かね) 悪の半生記(日影狂太郎) 女性の切腹「英雄になった芸者」(数寄咲) 襦袢マニヤ「高原の一夜」(多摩宏)
昭和三十七年七月号
(定価二百円)
△目次裏▽「風流いろは歌留多」
(滝れい子画)
△戯画▽「演劇・あべこべの国」(南村俊平)
△巻頭口絵▽首振り人形(四馬孝) 異臭の中の芳香(四馬孝) 回転する苦痛(四馬孝) M画「御挨拶」(栗原伸) 祖国敗れたり(滝

れい子) いぶし責め (四馬孝) さ
てどうしてやろうか (四馬孝) 手
中の珠玉 (四馬孝)

△グラビヤ・フォト・セクション▽

▽美と幻想とパントマイム (絹川
文代) ▽喘ぐ白肌 (梨花悠紀子)

▽粘着タッチとゴムカバー着 (大
塚啓子) ▽女体切腹の幻想 (大塚

啓子) ○Mフォト——幸福なる隷
属▽基盤の重圧 (梨花悠紀子)

△本文▽アブ・ストーリー「奴隷
学園優等生」 (影本晃) 奇譚三十

九夜物語 (辻村隆) 児童社審議会
の勧告に対する私見 (毛利三雄)

女人紅記 (須藤律夫) 告白「私の
趣味」 (梅川幸三郎) 宇宙のどこ

かで (佐治麻造) お灸マニヤの回
想「いつかあのころ」 (水木清

一) 住み慣れた地獄をたち去るた
めに (福田久文) 切腹体験者藤村

陵子への手紙 (明石満寿男) ガン
作・マニヤのノート (芳野眉美)

妻の体験「被虐の春」 (西田仁)
曲馬団の娘 (上田隆子) 手記「輝

一」 (白山緊) 女相撲思ひ出話 (津
谷正春) 女相撲実録 (伊万里進)

当代女武勇列伝 (諸岡堅男) まぞ
川柳自註「海辺にて」 (西田仁)

女形役者の回想告白「わたしの青
春」 (阪東秀美) 洗濯夫の幻想

「秋元悦男」告白「バックナンバ
ー」 (川端多奈子) 吊責めへの誘

い (中田明) 社長と女秘書 (中野
三郎) 法谷四郎論 (中康弘通) 私

の闘病記 (島崎収) 新聞記事のイ

メージによる小品 (桐野次郎) 地
下第三特高調室の女 (高宮良一)
緊縛フォト撮影の実際 (塚本鉄
三)

昭和三十七年十月号

(定価二百円)

△グラビヤ▽夢の緊縛特選集▽

逆さ吊りのワンカット (梨花悠紀
子) ▽首繩の哀かん譜 (絹川文

代) ▽囚女第14号の引き出し (桜
井葉子) ▽もだえる柔肌と緊縛

(大塚啓子) ▽トイレのある風景
(須川令子) ○美しきいましめ▽

鏡に映えた麗身 (熱海容子) ▽乱
れ髪の新ニューフェイス (水本茂

美) ▽鞭打ちの末 (梨花悠紀子)
お下げ髪娘 (大塚啓子)

△巻頭口絵▽皮革の臭気 (四馬
孝) 柳の部屋——曲馬団の少女 (黒

川不二男) 切腹——腰元血斗の果
て——殿のあとを慕いて (滝れい

子) M画——尻に敷かれた亭主——
人間馬の調教 (滝れい子) 女斗

美絵巻 (滝れい子)
△本文▽倒錯性の芽生 (勝浦美佐

緒) 奴隷志願 (獅子鼻明) 告白へ
の考察 (谷村鉄玄) 宇宙のどこか

で (佐治麻造) 乗馬ズボンシリ
ズ「近作に寄せて」 (藤山秀緒)

捕われの少女のうた (菅谷はる
み) 「おしめ」への幻想 (土丸大

三) 輝義兄弟 (江戸輝男) 愛憎讃
歌 (庄司美津彦) 三面鏡と浣腸

(山岸操) 高校女子相撲選手権大
会 (雄松比良彦) 運命の桎梏に泣

く女 (福田ヒデ子) 波羅木利クラ
ブ入会 (馬場守) ゴムマニヤのプ
レイ (梅川幸子) 女奴隷物語 (佐
治麻造) 女子寮の「降参ごっこ」
(高木紀久枝) 再び吊責めへの誘
いを (中田明) 狂宴の泥海 (桂牧
次郎) 奇譚三十九夜物語 (辻村
隆) 暴君になつて頂戴 (泉慶子)
腹を切る (川口富由) サルジニア
探訪記 (阿留品又怒) 肥満体犯崇
(河場象之助) 最近の縛り映画
(東山映史) 綿ネルお腰の感触
(福田千時) トイレへの郷愁 (山
田那津子) SよりMへの移更 (木
村定吉) 当代女武勇列伝 (諸岡堅
雄) 演劇教室 (岡本正治) 華麗な
お仕置 (大中忠)

○麦秋増大号

(昭和三十五年七月号)

定価三〇〇円 (送料共)

巻頭口絵 四馬孝画「白線地帯の
飼育室」 (中村淳三) マゾフォト

「マゾプレイのワンカット」穴倉
幽閉、責め絵「女体エビ責地獄」

「せむしの刺青師」滝れい子 縛
り絵「折檻」 (北原純子) 「女体

切腹図」「颯爽たる馬上の麗人」
「女性人形利用のマゾフォト」

「グラビヤ・セクション」組写真、
「異国船の密航者」 (絹川文代)

新入荷陳列 (津川路子) 折檻場へ
の道程 (桜川葉子) 俺にもポーズ

をとらせろ (絹川文代) 黒髪は乱
れて (大塚啓子) 縛られポーズの

好演戯 (春丘リル) さるぐつわを
つけたポーズとその点景 (春丘リ
ル) 珍妙な首飾り (絹川文代) 女
装緊縛「高島田」 (杉江美津子)
縛り人形 (愛川悦子) 新教組出現
(絹川文代) 「本文」——絵物語
解説、白線地帯の「飼育室」……
中村淳三。随想、不死鳥に似て……
松井頼子。告白「宇宙服と私」
……飯田靖子。女性切腹の作品と
作家……兵頭庫一。零の舞踊会……
氷見竜也。愛好者の記録……と
やまかつひこ。女装愛好者の記録
「倒錯への道」……成舞芳夫。あ
るソドミニストの哀話「特高室」
……榎村奏。マニヤ観照記「観客
席」……牧高志。縛られた女優達
……大河原珠樹。青山京子緊縛事
件考察「女優就縛の図」……中谷
国夫。演ってほしい責め映画……
浮家鷹三。ファンタジア・マゾヒ
スティカ……山本節夫。空想のマ
ゾ閑話……中沢一郎。宇宙のどこ
かで……佐治麻造。サド通信「君
死に給うこと勿れ」……鷹取仙吉
新緑躍進号を戴いて思うことなど
……南方佳男。「浣腸に関する資
料」……島直樹。酒樽……蒼野礼
麻生保氏の生活と意見……麻生保
「バスガールの運命」滝畑三郎。
告白「ふんどし奇譚」……内田武
男。マゾヒズム百景……馬場好
男。「影の国」……雪俊遙。回想
録「縄のない緊縛」……菅良太。
沼正三だよりと雑報欄……三沼正

代理部分護品一覽

○妊婦女体資料の部○

臨月腹ヌード	大手札二枚一組 略号「りく」	三〇〇円
安原さゆり	大手札二枚一組 略号「りく」	三〇〇円
臨月腹アップ	大手札二枚一組 略号「りと」	三〇〇円
安原さゆり	大手札二枚一組 略号「りと」	三〇〇円
臨月妊婦の全身	大手札二枚一組 略号「りせ」	三〇〇円
安原さゆり	大手札二枚一組 略号「りせ」	三〇〇円
臨月腹の側面	大手札三枚一組 略号「りそ」	四〇〇円
安原さゆり	大手札三枚一組 略号「りそ」	四〇〇円
臨月腹の背面	大手札二枚一組 略号「りも」	三〇〇円
安原さゆり	大手札二枚一組 略号「りも」	三〇〇円
臨月垂れ腹	大手札三枚一組 略号「りみ」	四〇〇円
安原さゆり	大手札三枚一組 略号「りみ」	四〇〇円
妊婦ヌード	大手札三枚一組 略号「やま」	三〇〇円
安原さゆり	大手札三枚一組 略号「やま」	三〇〇円
妊婦しぼり	大手札三枚一組 略号「やむ」	三〇〇円
安原さゆり	大手札三枚一組 略号「やむ」	三〇〇円
臨月妊婦三態	大手札三枚一組 略号「よむ」	三〇〇円
安原さゆり	大手札三枚一組 略号「よむ」	三〇〇円
産み月のお腹	大手札三枚一組 略号「よま」	三〇〇円
安原さゆり	大手札三枚一組 略号「よま」	三〇〇円
動物的な腹部	大手札三枚一組 略号「ゆは」	三〇〇円
遠藤百合子	大手札三枚一組 略号「ゆは」	三〇〇円

○女体緊縛資料の部○

安原さゆり	略号「よみ」	四〇〇円
妊婦の股間縛り	大手札三枚一組 略号「には」	四〇〇円
児玉 昌子	大手札三枚一組 略号「には」	四〇〇円
妊娠八カ月の緊縛	大手札三枚一組 略号「にあ」	四〇〇円
児玉 昌子	大手札三枚一組 略号「にあ」	四〇〇円
妊娠五カ月の緊縛	大手札三枚一組 略号「にこ」	三〇〇円
児玉 昌子	大手札三枚一組 略号「にこ」	三〇〇円
妊娠前期縛り	大手札三枚一組 略号「まさ」	三〇〇円
児玉 昌子	大手札三枚一組 略号「まさ」	三〇〇円
妊娠初期の緊縛	大手札三枚一組 略号「ぬろ」	三〇〇円
児玉 昌子	大手札三枚一組 略号「ぬろ」	三〇〇円
妊婦の股間縛り	大手札三枚一組 略号「にふ」	四〇〇円
児玉 昌子	大手札三枚一組 略号「にふ」	四〇〇円
妊婦の股間縛り	大手札三枚一組 略号「にと」	三〇〇円
児玉 昌子	大手札三枚一組 略号「にと」	三〇〇円
分娩後縛り	大手札三枚一組 略号「につ」	三〇〇円
児玉 昌子	大手札三枚一組 略号「につ」	三〇〇円
分娩後股間縛り	大手札三枚一組 略号「にて」	三〇〇円
児玉 昌子	大手札三枚一組 略号「にて」	三〇〇円
全裸緊縛姿態	大手札四枚一組 略号「ゆり」	四〇〇円
遠藤百合子	大手札四枚一組 略号「ゆり」	四〇〇円
鼻をいたぶる	大手札三枚一組 略号「ゆは」	三〇〇円
遠藤百合子	大手札三枚一組 略号「ゆは」	三〇〇円

鼻の穴責め	大手札三枚一組 略号「なく」	三〇〇円
大塚 啓子	大手札三枚一組 略号「なく」	三〇〇円
鼻なぶり	大手札三枚一組 略号「ない」	三〇〇円
大塚 啓子	大手札三枚一組 略号「ない」	三〇〇円
鼻責めの陶酔	大手札三枚一組 略号「なは」	三〇〇円
大塚 啓子	大手札三枚一組 略号「なは」	三〇〇円
苦悶の裸身	大手札四枚一組 略号「くせ」	四〇〇円
関谷富佐子	大手札四枚一組 略号「くせ」	四〇〇円
裸身の晒し	大手札三枚一組 略号「わあ」	三〇〇円
関谷富佐子	大手札三枚一組 略号「わあ」	三〇〇円
全裸股間縛り	大手札四枚一組 略号「せら」	四〇〇円
関谷富佐子	大手札四枚一組 略号「せら」	四〇〇円
強烈エビ責め	大手札三枚一組 略号「えり」	三〇〇円
大塚 啓子	大手札三枚一組 略号「えり」	三〇〇円
蒲団に悶ゆ	大手札三枚一組 略号「なき」	三〇〇円
関谷富佐子	大手札三枚一組 略号「なき」	三〇〇円
悦虐の果て	大手札三枚一組 略号「なみ」	三〇〇円
関谷富佐子	大手札三枚一組 略号「なみ」	三〇〇円
椅子エビ責め	大手札三枚一組 略号「おき」	三〇〇円
東浦ひかる	大手札三枚一組 略号「おき」	三〇〇円
六尺縛り	大手札三枚一組 略号「ろは」	三〇〇円
東浦ひかる	大手札三枚一組 略号「ろは」	三〇〇円
弓吊り責め	大手札二枚一組 略号「つき」	二五〇円
梨花悠紀子	大手札二枚一組 略号「つき」	二五〇円

手足宙吊り	大手札三枚一組 略号「つた」	三〇〇円
梨花悠紀子	大手札三枚一組 略号「つた」	三〇〇円
オムツの股間縛り	大手札四枚一組 略号「むく」	四〇〇円
東浦ひかる	大手札四枚一組 略号「むく」	四〇〇円
強烈責め、被虐の果	大手札五枚一組 略号「りお」	五〇〇円
梨花悠紀子	大手札五枚一組 略号「りお」	五〇〇円
乳房いじめ	大手札二枚一組 略号「とお」	二五〇円
大塚 啓子	大手札二枚一組 略号「とお」	二五〇円
激痛ノ逆エビ責め	大手札四枚一組 略号「きえ」	四〇〇円
大塚 啓子	大手札四枚一組 略号「きえ」	四〇〇円
美貌の裸身に縄目	大手札三枚一組 略号「きん」	三〇〇円
絹川 文代	大手札三枚一組 略号「きん」	三〇〇円
腰元吊り責め	大手札二枚一組 略号「こり」	二五〇円
村井知可子	大手札二枚一組 略号「こり」	二五〇円
腰元間諜の拷問	大手札四枚一組 略号「こく」	四〇〇円
村井知可子	大手札四枚一組 略号「こく」	四〇〇円
強烈エビ縛り	大手札三枚一組 略号「もい」	三〇〇円
関谷富佐子	大手札三枚一組 略号「もい」	三〇〇円
乳房責めの苦悶	大手札二枚一組 略号「もろ」	二〇〇円
関谷富佐子	大手札二枚一組 略号「もろ」	二〇〇円
全裸ムチ打ち	大手札四枚一組 略号「もた」	四〇〇円
関谷富佐子	大手札四枚一組 略号「もた」	四〇〇円
強打に泣く裸身	大手札四枚一組 略号「むち」	四〇〇円
関谷富佐子	大手札四枚一組 略号「むち」	四〇〇円

狙われた和装の娘 大手札十二枚一組 略号「ねい」 一〇〇〇円	愛川 悦子 略号「ねい」 一〇〇〇円	強烈エビ責め 大手札三枚一組 略号「えひ」 三〇〇円	水本 茂美 略号「えひ」 三〇〇円	ゴム衣緊縛 大手札三枚一組 略号「みす」 三〇〇円	水本 茂美 略号「みす」 三〇〇円	バンド開股 大手札三枚一組 略号「はこ」 三〇〇円	東浦ひかる 略号「はこ」 三〇〇円	バンド責め 大手札五枚一組 略号「はん」 五〇〇円	東浦ひかる 略号「はん」 五〇〇円	夫人の表情 大手札三枚一組 略号「せや」 三〇〇円	関谷富佐子 略号「せや」 三〇〇円	後手吊り足挙げ縛り 大手札五枚一組 略号「うら」 五〇〇円	東浦ひかる 略号「うら」 五〇〇円	二つ折りエビ責め 大手札五枚一組 略号「うり」 五〇〇円	東浦ひかる 略号「うり」 五〇〇円	足挙げ椅子責め 大手札五枚一組 略号「うる」 五〇〇円	東浦ひかる 略号「うる」 五〇〇円	吊り打ち 大手札三枚一組 略号「やり」 三〇〇円	関谷富佐子 略号「やり」 三〇〇円	股間縛法悦境 大手札三枚一組 略号「ぬこ」 三〇〇円	絹川 文代 略号「ぬこ」 三〇〇円	踊り子緊縛 大手札三枚一組 略号「りこ」 三〇〇円	絹川 文代 略号「りこ」 三〇〇円
責め衣 大手札三枚一組 略号「せめ」 三〇〇円	大塚 啓子 略号「せめ」 三〇〇円	猪 吊り 大手札三枚一組 略号「いの」 三〇〇円	梨花悠紀子 略号「いの」 三〇〇円	足挙げ開股責め 大手札三枚一組 略号「あけ」 三〇〇円	梨花悠紀子 略号「あけ」 三〇〇円	緊縛女体撮影風景 大手札四枚一組 略号「むら」 四〇〇円	大塚 啓子 略号「むら」 四〇〇円	〇フエチ資料の部〇	白晒六尺襷 （正面） 大手札四枚一組 略号「しは」 四〇〇円	遠藤百合子 略号「しは」 四〇〇円	白晒六尺襷 （背面） 大手札四枚一組 略号「しろ」 四〇〇円	遠藤百合子 略号「しろ」 四〇〇円	黒 襷の女 （正面） 大手札三枚一組 略号「くま」 三〇〇円	遠藤百合子 略号「くま」 三〇〇円	黒 襷の女 （背面） 大手札三枚一組 略号「くう」 三〇〇円	遠藤百合子 略号「くう」 三〇〇円	相撲襷を締め込む 大手札四枚一組 略号「すい」 四〇〇円	遠藤百合子 略号「すい」 四〇〇円	変形六尺襷 大手札三枚一組 略号「ふい」 三〇〇円	細川アヤ子 略号「ふい」 三〇〇円	六尺襷開股 大手札三枚一組 略号「ふは」 三〇〇円	細川アヤ子 略号「ふは」 三〇〇円	
六尺フンドシ 大手札五枚一組 略号「ろい」 四〇〇円	東浦ひかる 略号「ろい」 四〇〇円	六尺襷の女性像 大手札四枚一組 略号「くろ」 四〇〇円	関谷富佐子 略号「くろ」 四〇〇円	レインコートの拘束 大手札四枚一組 略号「いろ」 四〇〇円	大塚 啓子 略号「いろ」 四〇〇円	ゴムフエチ 大手札四枚一組 略号「こま」 四〇〇円	梨花悠紀子 略号「こま」 四〇〇円	バンドを脱ぐ女 大手札三枚一組 略号「ゆお」 三〇〇円	遠藤百合子 略号「ゆお」 三〇〇円	月経帯縛り 大手札三枚一組 略号「ゆす」 三〇〇円	遠藤百合子 略号「ゆす」 三〇〇円	相撲襷着用 大手札十一枚一組 略号「すま」 一〇〇〇円	大塚 啓子 略号「すま」 一〇〇〇円	股に喰い込む黒フンドシ 大手札三枚一組 略号「とし」 三〇〇円	東浦ひかる 略号「とし」 三〇〇円	股を開いた黒フンドシ 大手札三枚一組 略号「とひ」 三〇〇円	東浦ひかる 略号「とひ」 三〇〇円	バンド晒し 大手札三枚一組 略号「はと」 三〇〇円	東浦ひかる 略号「はと」 三〇〇円	バンド足挙げ 大手札三枚一組 略号「はそ」 三〇〇円	東浦ひかる 略号「はそ」 三〇〇円	バンド見せ 大手札三枚一組 略号「はめ」 三〇〇円	東浦ひかる 略号「はめ」 三〇〇円
白フンドシ 大手札四枚一組 略号「ふん」 四〇〇円	大塚 啓子 略号「ふん」 四〇〇円	黒フンドシ 大手札四枚一組 略号「くふ」 四〇〇円	大塚 啓子 略号「くふ」 四〇〇円	ゴムぐるみ人形 大手札四枚一組 略号「こみ」 四〇〇円	東浦ひかる 略号「こみ」 四〇〇円	ゴム包みの束縛 大手札四枚一組 略号「こは」 四〇〇円	東浦ひかる 略号「こは」 四〇〇円	ゴムと女体アップ 大手札四枚一組 略号「こあ」 四〇〇円	東浦ひかる 略号「こあ」 四〇〇円	パリスバンド前開き 大手札三枚一組 略号「おい」 三〇〇円	東浦ひかる 略号「おい」 三〇〇円	パリスバンド縛り 大手札三枚一組 略号「おか」 三〇〇円	東浦ひかる 略号「おか」 三〇〇円	携帯用白バンド 大手札三枚一組 略号「おた」 三〇〇円	東浦ひかる 略号「おた」 三〇〇円	サカエ軽便型バンド 大手札三枚一組 略号「おし」 三〇〇円	東浦ひかる 略号「おし」 三〇〇円	パリスSSSバンド 大手札三枚一組 略号「おこ」 三〇〇円	東浦ひかる 略号「おこ」 三〇〇円	パピアバンド 大手札三枚一組 略号「おし」 三〇〇円	東浦ひかる 略号「おし」 三〇〇円	サカエバンド 大手札三枚一組 略号「おえ」 三〇〇円	東浦ひかる 略号「おえ」 三〇〇円

女体切腹資料 分譲品

血紅使用、腸露出

女体切腹シリーズ

大手札十二枚一組 一〇〇〇円

大塚 啓子 略号(せい12)

血紅切腹絶命ポーズ

大手札四枚一組 四〇〇円

梨花悠紀子 略号(せん)

血紅切腹祭壇の女体切腹

大手札三枚一組 三〇〇円

大塚 啓子 略号(せぬ)

裸女血紅切腹

大写真連続迫力フォト

大手札五枚一組 五〇〇円

大塚 啓子 略号(おお)

血紅使用苦悶表情悦楽

大手札五枚一組 五〇〇円

大塚 啓子 略号(くえ)

肉体美裸身切腹写真

大手札五枚一組 五〇〇円

長野 良子 略号(なせ)

女体切腹態

大手札二枚一組 三〇〇円

細川アヤ子 略号(ねは)

女体自刃態

大手札三枚一組 三〇〇円

細川アヤ子 略号(ねに)

血紅使用血塗れ下腹

大手札五枚一組 五〇〇円

大塚 啓子 略号(わい)

殿中の自決

大手札三枚一組 三〇〇円

大塚 啓子 略号(わこ)

切腹美態から絶命へ

大手札五枚一組 五〇〇円

大塚 啓子 略号(わは)

豊満に挑戦

大手札五枚一組 四〇〇円

東浦ひかる 略号(えん)

介添切腹

大手札四枚一組 四〇〇円

甘木 春子 略号(あか)

腹を切り裂く

大手札三枚一組 三〇〇円

大塚 啓子 略号(やい)

下腹に刺す刃

大手札三枚一組 三〇〇円

大塚 啓子 略号(やお)

柔肌を切り裂く

大手札三枚一組 三〇〇円

大塚 啓子 略号(やえ)

浣腸関連フォト

只今浣腸実施中

大手札三枚一組 三〇〇円

東浦ひかる 略号(かみ)

強制空気浣腸

大手札三枚一組 三〇〇円

東浦ひかる 略号(かく)

百CCの浣腸

大手札三枚一組 三〇〇円

東浦ひかる 略号(かな)

浣腸責の極

大手札三枚一組 三〇〇円

東浦ひかる 略号(かむ)

浣腸シリーズ

大手札十二枚一組 一〇〇〇円

梨花悠紀子 略号(れち)

強制浣腸三態

大手札三枚一組 三〇〇円

絹川 文代 略号(きか)

イルリガートル

大手札十二枚一組 一〇〇〇円

梨花悠紀子 略号(いるり)

太い浣腸器

大手札三枚一組 三〇〇円

東浦ひかる 略号(かふ)

浣腸をする女

大手札三枚一組 三〇〇円

遠藤百合子 略号(ゆか)

浣腸器と女

大手札三枚一組 三〇〇円

絹川 文代 略号(ほの)

エネマ・シリーズ

大手札四枚一組 四〇〇円

大塚 啓子 略号(るい)

イルリの嘴管挿入

大手札五枚一組 五〇〇円

大塚 啓子 略号(るは)

浣腸プレイ

大手札三枚一組 三〇〇円

大塚 啓子 略号(ほは)

進ばしる液

大手札三枚一組 三〇〇円

大塚 啓子 略号(ほい)

浣腸後排便

大手札五枚一組 五〇〇円

大塚 啓子 略号(へき)

便意苦悶像

大手札五枚一組 五〇〇円

大塚 啓子 略号(へか)

【新版】 女体緊縛コレクト・フォト集

E組百花選

大手札印画紙 (9×13 ㎝) 焼付

各組一枚一組 (送料共)

一組一枚	一五〇円
五組五枚	五〇〇円
十組十枚	九〇〇円
二十組二十枚	一七〇〇円
三十組三十枚	二五〇〇円
四十組四十枚	三二〇〇円
五十組五十枚	四〇〇〇円
六十組六十枚	四七〇〇円
七十組七十枚	五四〇〇円
八十組八十枚	六〇〇〇円
九十組九十枚	六五〇〇円
百組百枚	七〇〇〇円

E 1	全裸の悦虐プレイ (愛川)
E 2	仕置を受ける裸身 (大塚)
E 3	荒縄に苦悶する肌 (愛川)
E 4	ムチに耐える美肌 (関谷)
E 5	豊臀と豊胸しほり (愛川)
E 6	捨身の後手観念像 (大塚)
E 7	足から眺めた裸身 (水本)
E 8	全裸エビ責尻強調 (関谷)
E 9	ハリツケられた娘 (大塚)
E 10	強烈後手高手小手 (愛川)
E 11	責め抜かれた疲労 (梨花)
E 12	逆エビにもだえる (大塚)

E 13	拘禁された美囚女 (大塚)
E 14	浴室に覗く股間縛 (愛川)
E 15	海老責に泣く足首 (大塚)
E 16	乳房強烈締めつけ (愛川)
E 17	牢獄で泣く縛り娘 (大塚)
E 18	美しき全裸股間縛 (大塚)
E 19	全身に溢れるマゾ (関谷)
E 20	ベッドにもだえる (関谷)
E 21	身体中に強烈な縄 (愛川)
E 22	放置された海老責 (東浦)
E 23	ゴム衣で縛られる (東浦)
E 24	ローソクで責める (大塚)
E 25	寝台の排便ポーズ (絹川)
E 26	足指先に漂う媚態 (関谷)
E 27	後手吊り正面裸像 (関谷)
E 28	嚴重な高手小手縛 (東浦)
E 29	女体の全部を晒す (愛川)
E 30	激しいムチ打の果 (関谷)
E 31	若肌も縄にくびれ (東浦)
E 32	投げ出した脚線美 (絹川)
E 33	臍中心の腹部緊縛 (梨花)
E 34	セーラー服の哀飲 (梨花)
E 35	赤いムチ痕の臀部 (関谷)
E 36	仰向けの囚衣の女 (梨花)
E 37	制服の女学生縛り (梨花)
E 38	悦虐にむせぶ若妻 (関谷)

E 39	痛打にくねる裸身 (関谷)
E 40	乳房に加える金具 (大塚)
E 41	鼻責めにあえぐ顔 (大塚)
E 42	あぐら縛りを拒む (大塚)
E 43	浣腸ポーズの裸身 (梨花)
E 44	激烈なエビ責苦悶 (大塚)
E 45	敷布の上ののびて (絹川)
E 46	鼻いじめのアップ (梨花)
E 47	柔肌に喰込む麻縄 (東浦)
E 48	縄にくびれる裸身 (東浦)
E 49	椅子に晒された女 (大塚)
E 50	臍そうじをされる (大塚)
E 51	荒縄のトゲに狂う (絹川)
E 52	火のついた煙草責 (四方)
E 53	踏みつけられた胸 (梨花)
E 54	裸身をゆだねた娘 (大塚)
E 55	手足猪吊りの美態 (絹川)
E 56	囚女の美しき緊縛 (絹川)
E 57	諦めた観念全裸像 (水本)
E 58	縄にもだえぬく姿 (絹川)
E 59	黒髪を吊られた女 (大塚)
E 60	女奴隷美しく悶ゆ (絹川)
E 61	袋の中の緊縛裸身 (竹本)
E 62	ビニール袋に蒸す (竹本)
E 63	亀甲型の雁字搦目 (大塚)
E 64	緊縛裸像の舞踏会 (絹川)
E 65	野外の後手宙吊り (梨花)
E 66	足首に鎖錠実施中 (四方)
E 67	室内の後手宙吊り (梨花)
E 68	雨装束の悦虐姿態 (梨花)
E 69	乳房いじめ踏つけ (大塚)

E 70	足の裏ハネ擦り責 (梨花)
E 71	乳首プライヤ挟み (竹本)
E 72	野外の逆さ吊り責 (梨花)
E 73	梯子責にあう美女 (梨花)
E 74	逆さ吊りに揺れる (梨花)
E 75	娘十六しほり加減 (花坂)
E 76	踏みにじられた顔 (大塚)
E 77	逆エビニ反る足先 (大塚)
E 78	両手吊りのお仕置 (絹川)
E 79	責折檻に呻く若妻 (梨花)
E 80	豊麗を誇る正面像 (大塚)
E 81	食卓上の縛り人形 (大塚)
E 82	むしられる下着 (大塚)
E 83	月経帯の羞恥縛り (梨花)
E 84	寝台上的の若妻狂態 (関谷)
E 85	強烈全裸エビ縛り (東浦)
E 86	禪姿後手縛り吊り (東浦)
E 87	後手縛豊満臀部晒 (関谷)
E 88	黒髪いじめ凌辱図 (大塚)
E 89	令嬢後手高手小手 (絹川)
E 90	臍部乳房強調緊縛 (東浦)
E 91	責衣にくるまれて (東浦)
E 92	全裸逆エビ責め (水本)
E 93	ローソク乳首ゼメ (梨花)
E 94	全裸後手縛り閨晒 (関谷)
E 95	強打全裸のあえぎ (関谷)
E 96	肉体美の責衣ゼメ (東浦)
E 97	バンド二ツ折縛り (梨花)
E 98	全裸正坐縛り猿轡 (関谷)
E 99	豆しほりの猿轡 (絹川)
E 100	強烈縛り臍いじめ (東浦)



先ず、皆様の健在お喜び申上ます。読書のあとで先輩諸兄姉の深い経験と鋭い智能に、敬服しました。早速乍ら、僕はどうも男性に對して魅力を感じません。五月号では、ただ二人の女性の文章を興味をもって拝見しました。先ず津田亜紀子先生の奴隷募集、手はワナワナツ、胸はキューッときました。もとより貧乏で無学で賤しいやもめの僕には、応募資格がないものと自覚してはいましたが、どうしてよいか解らなくなっちゃいます。

ました。結論として彼の文章はシニッキイズムとバラドックスに富んだコントと解釈してよろしいでしょうか。然し若し許されたらお弟子になりたいです。指導料などに就いては其の機会として、又若し仮りに僕が応募するとしたら、生卵五ヶ牛豚もつ三〇〇g一級酒四合、消毒用アルコールガーゼ脱脂綿の準備それからカメラ、録音、三者存在、一切謝絶、当生、独身四〇才小心温和臆病の山男。と条件を記します。お笑い下さい。未経験、作者なのですから。宇野さん。会社勤めの途次、目撃した外部のある事件に依存するあなたの意識の流動。少しも異常ではないと思います。現代社会のそれも都会生活者に特に多い共通の例でしょう。但しより以前の素因の世界の発展過程は単に一つの文章では証明が得られません。露出傾向も凡らくあなたの場合、至極自然的な無垢なもので何かを反映した性衝動の現れの一つであって社会的にも道徳にも障害のない程度そして又神経障害でもないものと想像しますが当たっていますか。でなければあなたの現在の境遇が保証されていない筈です。僕も偶然あなたと似た様な体験を有して

います。但し僕の場合は夢の世界のことであり、詳しくは自分の姿を自分が見ていたというあの平凡な心的形態だけのことです。あなたの話を読みたいですね、といったところですが、僕は編集子ではなし、フアンの立場に居ますから、矢張り罪悪感に悩むのは嫌です。(東京ハSM、生V)

雪深い東北の寒村にも春らしいものがやってきました。しかし町へおりてゆけば三軒の書店中、奇クがおりてある店は僅か一軒になっていきます。迫害の嵐はまだ続くのでしょうか。グラビヤも梨花、大塚両嬢が私の好みにあった姿をみせているのですが、いずれも制約のためか充分満足できないのは残念です。新宮、前川両氏も不出場とは淋しいかぎり「S小説作法」いろいろ教えられる点がありました。見事に料理された食物はたしかに大多数の人を満足させるでしょう。しかし生物を好む人も居るし、また愛妻の手料理ならならんでもうまい様に、同好者の作品なら、いかに幼稚拙劣を極めても面白いものです。私自身の好みをいうなら、無駄な形容詞は省いてどしどし美女を殺して生首にして

もらいたく、何枚もかかってやつと裸にするのでは気の短い私はそれこそ読む気になれません。この点必ず何十人かを殺してくれる佐出氏とは、好みがピッタリ合っています。尚、私自身も何回か投書し、採用になったのは二回だけですが、もとより作家などとは思っておらず、ただ自分の書いたものが活字になればよく、稽料としてフォトを何枚かもらえば、もう満足する程度のもの。文芸雑誌でなくマニア雑誌ですから、めいめい好き勝手なことを書くうちはありませんか。それにしても挿絵にはしばしばがっかりします。「殺し屋」でようやく生首のアルコール漬ができたのは良いのですが、二場面とも和服姿です。登場人物はあちらの女なのですから、これではイメージがこわれます。いままで一番気に入ったのは「斬首篇」のズバリ並んで吊るされた絞首死体。この様に死んでいる絵を願います。限定版の第二集ができるとのこと。グラビヤに期待できなくなつた今、この様なものをどしどし願います。毎月でもかまいません。某誌が値上げになりましたが、本誌もその必要があるならグラビヤを廃止して値段はそのま

まとし、分譲品を充実させたらと思っております。(黒田寿)

貴社発行の奇譚クラブの愛読者です。貴誌貴読者通信に一度投稿致したいと思ひながら、延び延びになり、初めてお便り致します。小生は大の女斗美ファンであります。素裸に縋をキリキリと絞め上げもみ合い吊合う姿、又腹と腹をぶっつけ合わせての寄り投げ等女相撲ならではの場面にみりよくを感じて居ります。又リング上倒るか倒されるか、双方相手がノビる迄相打ち闘う女子レスリングの大ファンです。女同志がますます格闘し争い組打つ美しさ。女斗美は無敵であると思ひます。小生女相撲女子プロレス女斗美の写真とし絵切抜記事等をコレクション致して居ります。現在プロレスリングの写真をも所有致して居ります。同好者との交換及び文通を希望致します。(神戸八田中一生)

奇クのみなさま方お元気のことと思ひます。僕は、奇クをみますと、毎日毎日のはげしい労働のつかれもあつというまにとれてしまひます。梨花さんをみるとなおさらずです。僕は小さい(気持)方な

ので、おたよりをだす勇気がでなかつたのですが、こんど「美しき縛しめ」完成したとのこと。肌の美しい美女モデルさんが、裸をおしまず僕たちにプレゼントしてくれる。これでは僕も勇気をむねにかせてもらふことにしました。女体緊縛百二十態、あなんともいえないです。どうか、僕のものみをかえてやって下さい。おねがいします。これからの奇クの発展にかけながら応援しています。ガンパッテ下さい。(岐阜八長良生)

○ 団先生の「花と蛇」ますます好調で、諸者諸兄の反響も高いらしく、全く同慶のいたりです。特に五月号では先生の自作を語る言葉と共に愛読者の方と思われる佐土氏の「花と蛇に期待する」がのりそれと呼応するかのよう編集部より「花と蛇」単行本化の計画が発表されるなど、全く期待に胸のおどる心地がします。小生「奇譚クラブ」とは長年のつきあいですが、久しく渴をいやす物語りに接することができなかったのを、この一作で満たされた思いをしている者です。そこで、今後の団先生の健筆に期待し、又編集者の方に

愛読者としての希望をのべようと筆を取りました。何らかの御参考——といえどもことにセンエツですが、意を御汲み取りただければさいわいこれに過ぎる事はありません。先ず単行本化に際して是非具体化していただきたいことかからず。一、限定出版とし、体裁は「奇ク」と同じにする。価格は問わない。ファンの熱望を満たすものであれば、千円になろうと二千元になろうと問題ではない筈だ。二、限定出版とする理由として、天星社発行の他の限定本と同じく、一般青少年の眼に入る事を防ぎファンの渴を少しでも多くいやす内容とする事ができるということが第一にあげられる。で、私の最も望みたい事は、原稿を可能な限り忠実に活字とすること。

これは五月号で作者の団先生ものべておられる事だが、かなり削除が行なわれていると想像されるからである。限定出版とすれば、この種の配慮は、かなりゆるめると思う。又作者の意にもかう事になる。若しどうしても削除せざるを得ないと考えられる部分があれば、これを伏字で表現しておく。これは往年の「伏字マニヤ」をよるこばせ、また一般の想像をかきたてる有力な助けとなると信じる。従来「奇ク」に発表されたそのままといふのでは、あまりにも情なく、単行本化の意義がうすらぐのではないか。その意味で、三、これは先生にお願いしたいのだが、単行本化に際しては、もう一度全篇にわたって整理するという労をとっていただきたい。先

印画紙焼付 梨花悠紀子吊責写真 再分譲

連続吊り責めフォートの決定版、未発表の秘蔵写真

A5判感光紙焼付にて分譲していましたが、未だに御注文や照会が参つておりましたので、ここに再び印画紙焼付として再分譲いたします。(内容は以前分譲のものと同じです)

第一集 逆エビ吊り

第二集 逆胴吊り

略号(りつ1)

略号(りつ2)

大手札印画紙焼付

大手札印画紙焼付

六枚一組 五〇〇円

六枚一組 五〇〇円

生も五月号で申されているようにかなり舌足らずで、冗漫な部分も通読して見ると感じられるようだから、これを第一回——第三回あたりのような緊密な構成のものに書きあらためていただければ申し分ない。しかし、お忙しい先生にはムリな注文かも知れないから、二にいったように、せめて原稿になっっているものだけでも、忠実に再現してもらいたいのである。

四、挿絵に四馬先生をわずらわすのは大賛成だが、これも団先生が申しておられるように、原文に忠実を期してもらいたい。原文に忠実でない挿絵はむしろ無い方がよい。第二回と第十一回における挿画（多分滝先生と思うが）は素晴らしいと思ったが、あのように描いていただけなら滝先生でもよいと思ったりする。四馬先生におねがいしたい事は（少しセンエツかも知れないが）先生の描かれる女の立ち姿（正面）においては常に腰まわりの描写に不満を強く感ずる。腹がなく、胸からすぐ腰につながるように見えるのである。この点「花と蛇」においては十分御研究ねがいたい。言いかえれば、腰のあたりの色気が少なすぎるとい事にうなるだろうか。静子夫人

が、京子が、こういう風に描かれたのではやり切れないのである。（全くの雑言かも知れませんがフアンの妄言と思つて下さい）以上「花と蛇」単行本化に際して希望を述べて見ました。次に団先生におねがいがあります。その一部は前述した通りですが、以下は、今後ストーリーをお進めになられる際の希望です。一、羞恥責めを主としておられるようですが、賛成です。しかし、それには発表の関係で、限度があり、いきおい、マソネリズムになるおそれがあります。その点充分御留意の上軽い苦痛を与える責めなどをおり込まれることを希望します。例えば、縄でしばるばかりでなく、首輪、鎖手錠等で変化を与えよ。二、羞恥責めの方法として、静子夫人又は美津子にエロ本を大きな声で朗読させて、ムリヤリ、それを聞かせる。又は、静子夫人と田代、森田の房事をテープに録音しておいてそれを美津子と静子、京子に同事に聞かせるなど。その意味で静子の自己紹介の部分など、もっとくわしく描写してほしかった。三、大部御無沙汰している桂子をそろそろ引っ張り出してもよいのではないか。四、ハッピーエンドは絶対

三条春彦画

極彩色印刷

時代物責絵巻

画帳

詳細解説付 八枚 一組 三〇〇円 略号「時代」

さけること。以上思いつくままの事を乱筆ながら書いて見ました。団先生と、編集部の方の一層の御努力をお願いつつ筆を置きます。

（石川県八飯田生）

四月号の読者通信欄に悪書追放の圧力に屈せずにある貴誌を称讃してある。小生も新聞等に強固な追放運動が報ぜられた時貴誌の消滅を心配し又書店にもすっきり姿を見せなくなり方々の書店をさがしやっとなら四月号を手に入れて貴誌を拝読した。そして次に失望が沸いて来た。やはりさすがの貴誌も圧力に屈しつつあるのだなと。四月号のグラビアの貧弱さに今までの努力が馬鹿らしく思われる。読者も二三年前のKKと比べて見給え。明らかに圧迫されている事は否定出来ない。読者が貴誌を買って先ず何を見るだろう。構成からそうだが、先ずグラビアを見るにちがいない。とすると

つと圧力をはらいのける様なグラビアにしてみたいと読者否小生だけでも知れないが、そう望んでいる。又本文にしても非現実的なものが多いと思う。だから小生はそれを十分消化し切れない。読者の諸君はこの様な事はないですか？ もっぱら体験談とかレポートとかを読んで捨てる。毎号一位は筋の通った骨組のしっかりした小説を入れてもらいたい。読者諸君も××マニヤの方便を等や○の案等ばかり読者通信欄に出さないで本誌の批評をどしどし出す方がよいと思う、それがKKを充実さす第一歩だから。（東京八口だけの男）

編集部それから愛読者のみなさん御気嫌いかがですか。またしばらく失礼してしまいました。一社同人としてある小企業の会社で働いております。鼻責めといつてはちょっと大げさですか簡単な鼻の

【代理部新版分譲品一覽】

全裸脚挙姿態

大手札三枚一組 三〇〇円
長野 良子 略号(てい)

全裸アグラ縛り

大手札三枚一組 三〇〇円
長野 良子 略号(てへ)

全裸屈伸縛り

大手札三枚一組 三〇〇円
長野 良子 略号(てほ)

六尺禪の変形姿態

大手札三枚一組 三〇〇円
長野 良子 略号(てに)

蹲踞と拍手

大手札二枚一組 二〇〇円
長野 良子 略号(てり)

鬼面と接吻する

大手札二枚一組 二〇〇円
長野 良子 略号(てち)

強烈エビ責め

大手札三枚一組 三〇〇円
松本アサ子 略号(まと)

裸身に羞らう

大手札三枚一組 三〇〇円
松本アサ子 略号(まつ)

女賊捕縛

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(へい)

女賊処刑

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(へは)

全裸緊縛姿態開陳

大手札四枚一組 四〇〇円
遠藤百合子 略号(ゆり)

鼻をいたぶる

大手札三枚一組 三〇〇円
遠藤百合子 略号(ゆは)

白晒六尺禪(正面)

大手札四枚一組 四〇〇円
遠藤百合子 略号(しは)

白晒六尺禪(背面)

大手札四枚一組 四〇〇円
遠藤百合子 略号(しろ)

黒フンドシの女(正面)

大手札三枚一組 三〇〇円
遠藤百合子 略号(くま)

黒フンドシの女(背面)

大手札三枚一組 三〇〇円
遠藤百合子 略号(くう)

相撲禪を締め込む

大手札四枚一組 四〇〇円
遠藤百合子 略号(すい)

浣腸をする女

大手札三枚一組 三〇〇円
遠藤百合子 略号(ゆか)

バンドを脱ぐ女

大手札三枚一組 三〇〇円
遠藤百合子 略号(ゆお)

月経帯のまま縛り

大手札三枚一組 三〇〇円
遠藤百合子 略号(ゆす)

手術をうけたのです。簡単といつても、その苦痛と恥かしさは生涯忘れることができないでしょう。鼻がつまりますので奥の穴を広げる手術です。耳鼻科にある、あのいやな椅子に座って鼻の奥に注射器ですくいがされます「うっ」私はあまりの痛さにうめき声をあげました。目をとじ口で息をして私

は医者になすがままになっていきます。「ぞりぞり」と鼻を大きく広げて奥を切っていて、ものすごく痛みます。私は気が遠くなるのをじっとこらえて、医者と若い看護婦の目が私の鼻と苦痛にゆがむ顔に集中しているのを意識していました。手術が終ると出血をとめるため、ガーゼが鼻の中におしこま

れます。はいはいはおどろくほどのたくさんのガーゼが鼻には入りづたみたいにくくふくれあがりました。それから約四時間ほど患者達の待合室にあるベッドに寝かされ、みにくい鼻をさらされました。こんなに大変な目にあったのですから、どうか許して下さい。やっと三月号を古本屋で入手

しました。まず私のへたな文を通信欄に載せていただき大変うれしく思います。三月号を見て感じたのですが、尾上ゆかりさんの「旅役者」「お妙」が他のベテランを尻目に最高の作品になっていきます。何ぜかといいますと加虐者の力が非常に大きいと思います。竹野ひろ子さんの作品にも加虐者が

いますが、服装がいけません。これからのグラビアとして加虐者も登場させるとよいと思いますがいかがでしょう。加虐者のにくくしい顔も撮って映画の一場面みたいにしたらどうでしょうか。それから大阪市東住吉区の長井英子さん、男性を恐いなどといわずに何度お逢いしませんか、四月には入って12日と19日の日曜日午後六時頃、南海電車平野駅の改札口でまっています。手に週刊誌を丸めていますから、気にいったらおたずね下さい「あきらさんですか」と奇クについていろいろ話したいと思います。(八尾市八沼章V)

○ 隆盛の段御喜び申し上げると共に編集の方々の御苦勞に対して感謝致して居ります。発売日を楽しみに手に入れた時の嬉しい事は有りません。毎号鮮明となり若鮎の如く精氣溢るるの感が致し、芸術的の豊さが有る様ですが、惜しい事に実際の気分が足りない様に思われ読者より如何にもと云う感が出ないのです、もう少し頑張ってください。他誌と違って話題がいっぱいで笑ったり感心したり、此んな面白い本を読んだ事がないので、読む事が慰安で明日の労働の

糧として居ります。東西古今共人間の心底には変りがないと思われしました。今後共面白く楽しませて戴き度く益々内容の充実と貴社の発展を、心からお祈り申し上げます。(東京都荒川区八軒種屋V45才、運送業)

○ 貴誌四月号から内容刷新ということで所謂女体各部の露出という事がタブーとして扱われるようになってきているようですね。そのために大人の楽しみが一つ減ったというような事が二月号奇クサロンに書いてありました。それでは果して露出のみが、この種マニアの唯一の楽しみであったのでしょうか。ひとによってそれぞれ好みはありましようが、この種マニアにとっては露出などなくても、琴線にふれるものはいくらでもあるのです。そういうことに貴誌をはじめめとして、他誌も一向に気を配ってこなかったことをむしろ不思議に思うのです。ずい分以前からたまにムード派の投書がチラホラしていましたが、どうも一向に実現しないままに……或いは実現しようとしても不徹底のままに放置されていたように思うのです。しかし、いよいよ露出を避けなくては

女性種マニア(愛読者)

フンドシ姿写真分譲

本誌の読者通信に投稿された愛読者の栗本ミチ嬢のフンドシ・フォートですが、御本人がグラビアに登場するのを恥かしがって特に分譲品としてほしいと希望を申し出られましたので、ここに芳紀二十一才のBG栗本ミチ嬢の白晒六尺襪一本のりりしい姿をマニヤの方にごらんにいれます。彼女は一六二センチの身長につりあう均整のとれた中肉中背、ピチピチと張りきったスポーティな肢体、愛らしい童顔の持主です。

フンドシ姿の魅力

大手札三枚一組 三〇〇円
栗本 ミチ 略号(ふの)
しなやかな肢体にきりりと締めたフンドシ姿の魅力が開股し横臥しかがむことによって画面いっぱいむんむんと発散される。

ならなくなった今日、この種マニア誌は少しづつでも、ムード派の要素をとり入れなくてはならなくなつた、と私は思うのです。それによってさらに一段程度の高いものになると我います。単なるエロ

フンドシ姿の羞らい

大手札三枚一組 三〇〇円
栗本 ミチ 略号(ふへ)
六尺襪を締めるのが好きだということは、それを裏がえせばフンドシ姿に対して異常なまでの羞恥心を持っているというところである。彼女の初々しい羞らいの、フンドシ姿をごらん下さい。

フンドシの前後左右

大手札四枚一組 四〇〇円
栗本 ミチ 略号(ふな)
フンドシをきりりと締めた栗本嬢の魅力を、そのまわりからあまざず狙いうちしました。

フンドシの変わった姿

大手札三枚一組 三〇〇円
栗本 ミチ 略号(ふに)
両股を開いてかかんだポーズや尻の割目に喰い込んだ晒を強調する尻振りポーズ、前袋をあらわにした横臥ポーズなどを揃えました。

グロ誌とは根本的に異なるというところを次第に發揮してほしいと思うのです。たとえば四月号のグラビア中に、黒いビニール靴を頭からかぶせられて手錠をかけられている女の写真があります。胸の部分

新宮明夫氏提供

「処刑」フォト 分譲

新宮明夫氏から「夫婦のSMプレイ」として提供を受けました。本誌口絵発表が不適当です。分譲品として処刑マニヤの方々にお分けいたします。

一、絞首刑 略号(こけ)

大手札三枚一組 三〇〇円

後手高手小手、胴じばりにされ目かくしをされた麗人が、首に痛ましい吊り縄をかけられて絞首にされる哀れな処刑の姿を、前、後、側面からごらんいただけます。

二、磔 略号(はみ)

大手札三枚一組 三〇〇円

両手を左右いっぱいひろげて側木に厳じつけられた可憐な女囚が、大の字に、或は十の字に将又哀れみを乞う膝立の姿勢でハリツケられる美しい裸身はどうぞ。

三、晒し 略号(さら)

大手札三枚一組 三〇〇円

両手首を揃えて高々と吊り上げられ、或は万才の形に左右にせい一杯ひろげて吊り上げられ、衆人の目の中に、かくすことなき裸身の隅々までを視線に近づられる晒しの処刑ポーズ。

は止むをえず白地にしておりますが、なかなかマニアにはピンとくるものです。なにも裸の必要はありません。水着、支那服、体操服、スラックス等々着衣のものが手錠をかけられているのは、この種マニア誌にはめったにない趣好です。又は、手錠をかけられる順序等を組写真にするのもよいでしょう。又浣腸ものにしても、必らずしも裸の女性は登場しなくても看護婦姿で浣腸器を取扱っているとところとか普段の服装をした娘さんがイチヂク浣腸をにぎっているところとか……。こうした分野を工夫してみることが、ダブーにふれずに今後この種マニアをよろこばせる一法と思うのですが、いかがでしょうか(福岡八たかぎ生)。

KK誌の皆様、お元気ですか。

最近本誌入手しにくくなったのは本当に残念なことですが、しかしそれらの点にも負けず、本誌を発行される編集部の皆様にご敬意を表します。更に同好誌としての本誌を更に近づけられることをお願いいたします。小生は、大阪府下に住むものです。毎月市内迄購入に行きますが、発行日が楽しみです。最近新人のモデルの方々の活やく

は仲々楽しみですね。唯少し、色々の制約のためかグラフがマンネリ気味の感じがしないでもないのは、編集部の方の苦勞を思いながら、ちょっぴり残念。お許し下さい。大分前のグラフに出られた藤田さん、和服の姿が小生大好きで最近はお出になりませんが、忘れられませす。是非一度御消息をお知らせ下さい。小生も妻を相手に少しばかり、プレイをやっています。仲々女の人をしぼるのはむづかしいですね。どなたか、同好の女の方で、文通を下さる方はいませんか。プレイは無理でしょうからお互に「個人生活を守る秘密」をモットーに文通のみで、楽しむのも宜しいではないでしょうか。経験、体験等を通じ合うのは宜しいことと思いますが、局止でお便り下されば、又、当方も局止でお便りしても宜しいです。どうぞ勇気を出してお便り下さい。お待ちします。お便りは月初めから十五日迄につくと助かります。では皆様お元気で。(大阪府岸和田局止八山田達夫)

積雪のなか、六尺縄一本で就縛され二時間余、転々苦呻する。解

放されて温泉にとびこみ、疲れを居間で一杯飲む心地は千金に値する。雪責めも極寒地では凍傷をおこすから山岳地帯はさける。と体験者の告白。水責めは豪雨のなか庭で、六尺一本就縛、雪駄をはいた女に皮鞭で乱打たれ、水泉に蹴落され水漬け、引き上げられて、縄の前袋を下駄の歯で踏みつけられて、ついに……。こんな責めもチャンスなく私は未経験だが、羨望の至りである。SMの諸氏嬢の信書を得り、(東京都新宿区、中村一雄)

はじめてお仲間に入れて頂きました。あたくし22才。喫茶店につとめる浣腸マニアでございます。お恥しいことですが、ここ数年というものの便秘症で悩んでいました。が、このプレイを知ってから苦にならなくなりました。あたくしが浣腸プレイを知りましたのは一年程前、今のお店にきたばかりのとき便秘が嵩じて気を失ったことがございます。その時にママからイチヂク浣腸をされたのがはじまりでした。フツと気がつくといてもたってもいられない便意で、急いで起きようとしみますと、ママが「気がついたわね、今浣腸したの

一寸ガマンしてね」といわれたときのはずかしさ。そして、暫らくして放されトイレに入ったときの感激は忘れることができません。本当に生れてはじめて味う快感でした。後でわかりましたが、同性愛で浣腸マニアのママは、妾が日頃便秘で困ったといっていたので、前から機会を待っていたと云うのでした。本誌もママとのプレイをもえたため毎号愛読しました。ところが、このママも、三月に結婚してお店をやめるので（やとわれマダムですから）寂しくてなりません。同じ様な体験をおもちの方、お手紙下さいませんか。（東京八河合芳子）

貴誌四月号を読んで、「内容刷新」とは「内容後退」の感を強く受けました。連載の小説はマンネリズムに陥り同一個所の「カラマワリ」であり、グラビア写真は種々の規制のため、全くつまらないものになった様に思います。写真は一般人に直接ふれるものであるため、書店売りの方法をとる場合、ある程度後退はやむおえないと考えますが、そのかわり、小説等をおもしろいものにしてほしいと思います。現在のようになむずかしい状況のもとで編集される苦

労はわかりますが、昭和三十六年頃の内容のある貴誌にするには、「直送方式」に頼るほかないと思います。直送にすれば経費もかかり、経営上の問題も生ずるでしょうが、内容の豊かなものならば、定価を現在の倍にしてもかなりの特定の人々が購読すると思います。最近、読者の自己体験？ による文が発表される様になったのは喜ばしいことだと思います。技術的にはマズイ写真でも貴誌がそのためにスペースをさき、皆が自分の身近かなものに理解をもたせて、自分の好きな写真なり絵なりを作るため、「読者の写真集」といったものを編集されてはいかがだと思います。私も妻をモデルに作品を作っておりますが、写真の技術的な問題（現像、引伸等）はこまりませんが、室内で撮影する関係から、バックや小道具がいつも同じものになったり、採光がストロボの電とう線に電源をもとめてとるため「ベタ光」のものになったり一対一で撮影するため、長いシリーズを使用しておりますが、なかなか「動きのある写真」が出来ずいろいろと研究中です。機会があ

生首フォト 分譲

△新宮明夫氏提供△

大手札印画紙焼付 三枚一組 三〇〇円 略号(のく)

本誌口絵グラビアに発表して大好評を博した新宮明夫氏が美しき愛妻をモデルとして撮影された生首フォトの中、氏が生首の乱れ髪を掴んで晒首台の上に置かんとしていたところなど、分譲品ならではの傑作を特に氏の御好意により生首ファンにござらんにいれます。

斬首フォト 分譲

△新宮明夫氏提供△

大手札印画紙焼付 三枚一組 三〇〇円 略号(のき)

自晒フンドシ一本の裸身を後手にきびしく縛り上げられた可憐な死刑囚の細首に振り下され目かくしをされ首の座にすわり、今や身首を異にしようとしていた残酷美のなかに、そこはかとなく漂う哀れさとエロチシズム。

りましたら、ぜひ一度お見せしていろいろと御指導願いたいと思っております。四月号のごとき「内容刷新」のものでは予約して購入したいとは思いませんが、前に記しました様にかつてのような夢のあるものでしたら喜んで予約いたしますから編集者のお考えをおききたいと思えます。いろいろ注文をつけましたが、一雑誌がこの様に長く続いた編集者の苦心には頭が下がります。（名古屋八小川輝）

私共夫婦が奇巧に関心を持ちましたのは、夫婦生活に刺激を求め始めた二年程前の事です。現在では奇巧に掲載される様々な事に理

解を持ち又実際にプレーを行ってみる事もあり増々私共二人の夫婦生活を豊かに、そして楽しくして呉れます。読者通信も毎号拝読しています。私共と同様に御夫妻で本誌を愛読されている方が居られるのを知り是非共同好の御夫婦の方と交際度き度く思い妻と相談の上此処に投書致す次第です。氣遣いなく互いに様々な話題やアイデアの交換とそして機会あればプレイも御一緒に研究してみればと考えます。MSその他全ゆる事に理解を持っていますので様々な事に就てお話しする事が出来ると思います。又様々なプレイの自作フォトもアルバムに収めてありますので作品の交換も望んで居ります。

今月の新版分譲品

女体切腹「血紅立腹」

大手札五枚一組 五〇〇円

モデル 大塚 啓子

略号(るな)

フンドシ一本の裸身ですくっと立った大塚啓子が下腹を血だらけにしなが、キリキリと切りさばいてゆく連続切腹フォト。

木馬責三態

大手札三枚一組 三〇〇円

モデル 大塚 啓子

略号(もく)

後手高手小手に縛しめられて、両手の自由のきかない女体を鋭い三角板の頂点にまたがされて、痛い痛い悶え苦しむ木馬責め。

椅子責の果

大手札三枚一組 三〇〇円

モデル 大塚 啓子

略号(いす)

二月号の口絵にのった椅子しぼりの女体を、弓のように逆エビに反ったまま、あっちへ転がしこっちへ転がし、さんざんに責んだ果太鼓のような胸部腹部の正面からその苦痛のさまに狙いをつけました。

双胸の強調縛り

大手札三枚一組 三〇〇円

モデル 長野 良子

略号(そう)

全く素晴らしく大きく恰好のよい乳房ですね。彼女は自分でもそれを意識して殊更強調しようとし、す。縄は只さえ巨大な乳房をくくり上げて更に大きくくびる。

動感エビ縛り

大手札三枚一組 三〇〇円

モデル 大塚 啓子

略号(とう)

柔肌を喰い込むばかりに縛られたばかりか、胸、二の腕の厳しい縄目と両足首の縄目を連結した上右に左に、ごろごろと転がし、お尻を中心にくるぐると回したりする。喰い込む縄にもだえる表情と姿態を早いシャッターでキャッチしました。

色禪開股縛り

大手札三枚一組 三〇〇円

モデル 長野 良子

略号(いふ)

縛られた縄もはじきかえすばかりのポリウム。喰い込む色フンドシ一本で、思うままにあはれまわる美麗な裸身のもたえ。

妻はS傾向でありレスボスも望んで居ります。私共夫婦共三十才です(東京都目黒区八内田洋一V)

○

是非グラビアに採り入れてほしいと思って、再びお便りいたしました。というのには野外での完全ゴム雨装による美女責めの姿態です。レインコート姿というのは時たま登場しますが、ほとんどビニール透明のもので、これの本当のファッションというのは案外少ないのではないのでしょうか。それよりはゴム・ファンが圧倒的に多いと思います。私もそのぞむのは大塚、関谷夫人あたりをゴム引レインコート(またはゴム合羽)を、もちろんフーディーも深々とつけさせ、白いゴムブーツをはかせて、室内よりはむしろ屋外で、いろいろと責め上げたものです。泥んこの道にくつわもかませ、足にゴム長(黒)、手にブーツ(白)ではわせるもよし、しぼり上げて下半身だけでも軽く水浸しになる程度でぐったりしているのもよし、連縛ーそれも二人・三人とするのも興が湧きます。何とぞ次号あたりには私ども多くのゴム・ファンを喜ばせて下さい。さようなら(大阪八森中雨奇男V)

○

早いもので小生貴誌を始めて拝読致しましてよりもう四年に成ります。最初は古本屋でふと見ましてすっかり其の魅力に取りつかれてしまいました。しかし、まだ年少の故か、直接申込、あるいは新刊を買う事が何か気遅れして出来ず、其の後ずっと古本を買いあさって来ましたが、一年程前より、別に悪い事をするのではない。確かに普通よりは、変った性質のものが好きには違いないが、誰にでもそれは存在するものだ、恥しい事ではないと自分に云い聞かせ、今では平気に成り、発売日に欠かさず買ってあります。小生の最も強くひかれる文字、それは浣腸の二字です。幼少の折から身体が弱く度々医者(折から身体が弱ナース)にある時はやさしく、ある時はきつく浣腸された事も数知れず。十六才の時に入院しました。付き添いのまだ若い、当時二十五才位の女性に毎日の様に浣腸されて居る内に、初めは嫌だったのが一週間程で何か其の事に期待を持つ様になり、そしてついには自分から云い出さずには居られなくなりました。三カ月程付き添って貰ったままに以来七年、未だに其

の小柄な美しい女性を忘れる事が出来ません。すっかり元気に成った今も浣腸の2字から抜けられず又抜けようとも考えず自らの手で施行しております。しかし淋しくなりません。今小生の最も求めて居るもの、それは此の淋しさを本当に打ち明けられる、そして理解して下さる女性なのです。誰にも云い様のないもどかしさを、心のころもを全てぬぎすてて何もかも云える女性、交際がお嫌なら、たとえ文通だけでも、理解ある方は居ないでしょうか？ もちろん交際しましても貴女にも、そして我が愛読書たる、貴誌の方々にも迷惑はかける筈はありません。年令は強いて希望するならば二十、三十二、三才位の女性です。そして浣腸の二字が有りましたらそれがされるのが好きな方、するのが好きの方がいずれも何一つ不足はありません。又それ等に関連した、オムツカバー、生理バンドにも強くひかれます。今小生の一番の願いは、それら全てが出来るものとして、大人のくせに恥かしいのですが、お医者さんゴッコがしたいという事です。お互が患者と医師、あるいはナースと立場をかわえて交互にプレイすれば（プレイと

いう言葉は何か不真面目な思いをして好みませんが）すばらしいと思います。医師と患者の立場、そして大好きな浣腸の事ですので恥かしさはある程度少いでしよう。編集部の方、どうか勝手なこの私の文章、貴誌の文面を汚させて下さい。そして女性の方々、どうか勇気を出されて私にお手紙下さい。（大阪市東淀川区八黒田英文）

所詮マゾヒストは生涯孤独な苦悩を背負い続けてゆかねばならぬものでしょうか。四月号のこの欄への切なる願いも私の文章が拙かった故か、サディスティンの方々は、遂にお聞き届けいただけず、未だお便りを寄せて下さる女性も無いままに、といって他に術を知らない私は再び果ない望みを托して、私の願いを叶えて下さる女王様の出現を念じつつ、こうしてお呼びかけを繰り返す次第です。サディスティンの方に完全に人間性を無視された奴隷としてご奉仕し、貴女様方のどのような苛酷なお仕打にも又どのような気まぐれの思いつきから出たご命令にでも、尊い女神様のお恵みとして高貴な女王様のお言葉として、随

喜の涙にくれながら服従する事でございましょう。貴女様の御前にひき出された時、私はも早一人前の男性ではなく、貴女様の御意のままに犬ともなり馬ともなり、便器にもなりましょう。犬として如何ような屈辱的な芸でもご命令通りに覚え込みましょう。馬にされたら貴女様のお臀の下で息も絶えだえに乗り潰されるまで這い廻りましょう。貴女様が気分が晴れずいらいらなさる時はどうか私を心ゆくまで鞭で打ちのめして下さい。貴女様がグラスにネタールを注いで下さるなら、私はそれにどんな高価なブランドよりも高い値段をお支払いしましょう。奴隷が人間並みの食事をするのがお気に障りますなら、貴女様の尊いお体を通った奴隷用のエサを芳香にむせびつつ戴く事でございましょう。貴女様お一人では私の苦しみ様が足りないとお考えでしたら、グループでお責め下さい。人目につく傷のつかない限り、そして不具になつたり命に別条与えられない限り、どの様な苛酷な責めにも思いつく限りのお仕置にも耐える事を誓います。若し貴女様が犬をお飼になりたいなら、私をお飼下さい。犬小屋に入つて、貴女

「今月の新版」

全裸の切腹悦楽

モデル 大塚啓子

△第一組V略号（ひと）

大手札印画紙焼付

四枚一組 四〇〇円

△第二組V略号（ひと）

大手札印画紙焼付

四枚一組 四〇〇円

女体切腹プレイの醍醐味は、一糸まとわぬ全裸になつて演ずるそれであるという事は、切腹マニヤの若き女性、例えば信太啓子さんの告白をはじめ多くの女性の方々の言によつて裏づけられていきます。三宝を前にして、衣服をきちんとつけ、腹巻に身を固めて切腹プレイに興じていた彼女も、次第に衣服を脱し、それらの散乱した中に、一糸まとわぬ全裸の肉体をさらして、さまざまポーズによつて柔肌を白刃によつて切りさばいてゆく。

様のお体から排泄されるエサだけで命をつながして頂く事こそ私の夢なのです。私の背中やお臀は貴女様のムチが味いたくて待ち焦がれています。貴女様に召される事を一生の夢として、今は満たされ

「今月の新版分譲品」

オシメ・フオート

・シリーズ

おしめ着用

連続写真

第一集

前開きゴム製カパー

大手札印画紙焼付

十二枚一組 一〇〇〇円

略号(しま)

第二集

前開き布製防水カパー

大手札印画紙焼付

十二枚一組 一〇〇〇円

略号(しな)

オシメ・マニヤの方々の強い要望によって、ここに大塚啓子嬢を煩して、連続写真を新しく撮影しました。一糸まとわぬ全裸となった彼女が、自らオシメを整え、中腰になって当てつつオシメ・カパーをつけてゆく有様を刻明に捉えました。尚、カパーの間からオシメがはみ出ている状態も、オシメだけ前に当てた状態も、仰向けになってオシメを当てられている状態も加えました。マニヤの方々のお申込みが多いようでしたら、更に御希望のアイデアによって、次々に撮影したいと思えます。何

卒奮ってお申込み下さい。

乳房しぼり

略号

(うは)

大手札三枚一組 三〇〇円

モデル 長野良子

凄く恰好がよくて大きな乳房は、彼女の自慢のものである。只でさえ、むっくりと突き出て両手でも掴みきれないほど立派な乳房のまわりを、ロープでぎゅうぎゅう力一杯しめつけられ、只さえ大きい乳房が一層強調されて物凄いくらい見事な張りきりぶりをかせている。同じ責めらるなら、これぐらいの乳房をいたぶるのが効果的である。

鼻責と緊縛

略号

(うい)

大手札五枚一組 五〇〇円

モデル 大塚啓子

何にもつけていない豊かな胸に縄が喰い込み、後手首は背中であんなに縛られて、後手首は背中で痺れるように括られている。で、も早や彼女はどのよう鼻をいたぶられようとも、無抵抗の状態におかれていた。鼻の穴を上に向けてあお向けにころがされ、上、ドキドキと光る短刀で、金属棒で足の裏で、グイと鼻の先をあぐらにされる。無抵抗な女性の鼻責めに、関心をお持ちの方のために最近撮影の写真の中から選びました。

ぬ願いを一人拙い絵に托して慰めていきます。その絵を見てお前がどんな事を夢想しているかみてやろうという女王様がおいでになりまして、編集部にご連絡になって下さい。そして、何卒、この私を貴女様の奴隷として、そして、貴女様がもっともとお美しくなられるための肥料として、貴女様のせいたくのための踏み台として、それから貴女様の快楽のための生きた道具としてご利用になって下さい。私は女性にその様な目に遭わされるために生きていた男なのです。貴女様のご命令をお待ちします(東京都中央区八三原寛)

初めてお便り致します。私は二十七才になる男性ですが、今度初めて昨年十二月号の「奇ク」という本を書店にて買い求め、その内容のあまりにも、自分の今抱えている気持とびつたりなのに驚き夢中になりました。世の中にはこんな得難い本と、同好の人達があったのかと——それは嘘のない私の気持であり、私はいつも忘れて読みたい、なかなでも、読者分信欄の明石市伊東恵子さんのいってられる言葉は、私をまるで、美しい夢の様な世界へ運んでしまい、い

ても立ってもいられない気持ちにさせられました。私はどちらかというとといじめる傾向の方が強いのですが、多少マゾの傾向もあり、その意味で、互いにいじめ、いじめられてそれも危険のまったくない方法でプレイを楽しみたいと思っています。若いきれいな白肌を持つ女性をいじめる。それは、私のかねてからの念願であり、この文書を機会にぜひ、ぜひ、お会いしたいものと思います。全身ぎり、ぎり縛りあげ、少しづつ加虐を加える。そして女性のもっとも恥かしい姿態をそこに現出して、時にはそれが女性の方からの希望でも、かならず果してみたい衝動——。なにぶん初めてではあり、少し恥かしい様な、恐ろしい様な気もいたしますが、もし心の内気なまじめな女性の方が近くにおりましたら、年令に関係なく極秘に一度お会いしたいものと思えます。とくに私の好むものは、浣腸、全身縛り、鼻いじめ、乳房いじめ、排便ポーズ等。今度出る新刊で、早くそんな方の現われることを通信欄を通じてお待ちしております。もしお会い下さるのでしたら適当な場所と時間をお知らせ下さい。住所はお会い下さるまで

最近撮影 (未発表)

新作Mフォト

一、女の尻の下敷

大手札印画紙焼付二枚一組
略号(まぬ) 五〇〇円

二、女の足に踏まれる

大手札印画紙焼付二枚一組
略号(まあ) 五〇〇円

三、女の股責め

大手札印画紙 二枚一組
略号(ませ) 五〇〇円

四、足舐めの奉仕

大手札印画紙 二枚一組
略号(まし) 五〇〇円

以上のマゾフォトは、いずれも分譲用としてではなく、プレイとして最近撮影したものの中の一部です。Mフォト撮影の再開を望まれる方も多いので、一応打診的に分譲品としました。従って以上は全部未発表のものです。

秘しておきます。(神奈川県川崎市八中川寛)

うたかたの浮世と知れど、それ故にゾッと身に浸む楽しみを求めて、ここに幾年ぞ。あえかに匂うたおやめの、花の顔弄ぶ、サジとフェチとの兼ね合いに、指頭の乱

舞の有り難たや、殊に御誌のスタッフに、さるものありと知られたる梨花、絹川に大塚嬢、さては遠藤、四方清美、多鼻才々のその鼻を、つまみ、裏天、あぐらかき、縦横無尽に責めさいなみ、それにも飽きず、この上は、瞳孔、鼻腔、歯牙点検、ありとあらゆる変貌の陶酔境にひたるこそ、せちがらき世のオアシスぞ。なおこの上の願いには、華鼻受難記の限定版、それに梨花女の眼の検査、むし歯診査に舌苔のお調べなども加味さして、われら弄顔愛好の切なる願い、お汲みとり、そんじよこれらのもろもろの野暮天達の圧迫を切り抜け切り抜け、御慈悲をば与え給えとしか申す。心の内こそ哀れなり。(東京八墨堤生)

奇譚クラブ毎月、たのしく愛読いたしております。その後も御誌益々ご発展の由、愛読者の一人として誠に喜びに耐えません。モデルにしても関谷さん、遠藤さん、五月さん、新井マリ子さん等、奇クならではの顔ぶれもほんとうに私の目をたのしませてくれます。特に遠藤百合子さんの肉体はすばらしいですね。乳房、二の腕に喰い込めとばかりに厳しい縛りにも

だえる百合子さんは、ほんとうにしやわせです。ところで焼津市内の奇ク愛読者に呼びかけします。私も奇ク愛読者の市内の一人です。「サド」「マゾ」お互に人はいえないひみつは誰にもあると思います。そうした人にもいえない様なことを、自分自身でなやんでいても味も、そっけもありません。お互いに勇気を出して(読者通信)をおかりして名のりを上げて下さい。お互いに縛ったり縛られたり色々のプレイをたのしもうではありませんか。くれぐれもよろしくお願いします。どうか私の希望を叶えて下さい。では、ご奮闘と、ご発展をお祈りします。(焼津市八吉田一義)

ブラボー! Mフォト製作再開。陽春五月号によってもたらされた一大朗報は他のいかなるニュースも問題にしない最大ニュース。身も心も躍動する春の訪れを一足先に味合った気持です。この喜びはかつて入試試験に合格した時、あるいは仕事で非常に順調に進んだ後の快感以上の筆舌に尽しがたい喜びでした。製作中止になりました。以来久しい間、悶々の日々を送っております。この間悪書追放

運動も起り、奇クそのものが廃刊になりはしないかと心配しながら毎月の発行を心待ちに入手、安堵とともにその都度Mフォト製作再開、あるいはMものの分譲計画の案内が載っていないかと、ムサボリ探しておりましたが、儚ない春の淡雪のごとく空しさとともに力キ消され空虚だけが残っております。辛うじて、Mストーリー読者通信等で渴をいやしておりました。中止の理由として申込が非常に少ないということ、この点個人がいかに踏ん張ってみてもどうにもならず、活発なSフォト等の分譲案内を横目で眺め、例えば少種類でもMものの分譲をして貰えないものかといいたずらに抵抗心を奮めておりました。他人にも明かせず、胸の奥底に積り積っております。した気持が今回の発表により一ペんにケシ飛び本当に晴ればれとした満足感にひたっております。同好の氏であれば容易に想像して貰えることと思えます。色々の隘路を甘愛し、Mフォトの分譲再開に踏切っていただきました。編集部の方々に心からお礼を申し上げます。どうかこの上は私共M派をして息詰らんばかりの強烈タッチで圧倒していただく様な傑作を分譲

して下さる様お願い致します。

(青森八坂井昇)

○ 拝啓湯谷照夫様五月号にて記事
を拝見致しました。長い間の念願
が同志? に本当に泣きたい位で
す。私はM七〇生です。たまに誌
上に採用させて貰い本当に幸福で
す。私以上に難工事中の由、その
上に、S女性(失礼しました)が
おられるとは、私は駄目です。こ
んな記事を書きますと、実際に目
の前で見られないと信用されない
と思います。現在7mmでして最大
の器具は直径12mmです。女性の所
謂白魚の様な指でしたら親指以外
でしたら鼻穴に挿しその儘で引張
ることが出来ます。それ以上に拡
大致しますには、軟骨が邪魔でし
て一度錘を挿しましたが駄目でし
た。本誌フォトに鼻責が載ります
が、私にいわせますと序の口、単
に鼻に金輪を付けたかまた鼻柱を
押える位。私見たいな自称ベテラ
ンには大不足です。湯谷さん、他
に特技? があります。以下何れ
も実験済みです。下腹部から内
腿、股から尻へ、タコ糸で縫い付
け一日その儘でした。また舌を
出し下から気胸用に使用する針を
貫通させました。声も出ません。

ただ、ヨダレのみ、また下唇から
舌も上唇に貫通させます。東京と
名古屋で余り距離が遠く残念な
り。鼻責を主体の写真がほしくて
勿論私自身のを。でれ、これにて
失礼頑張ろう。(名古屋M七〇
生)

○ 豊橋吉村英子様誌上に一言、
何時もあなたのお便り、本当に楽
しく、拝見致しております。四月
号のお便りは拝見して五体が
ジーンとして来るのをおぼえます
実際に私には、病院のベッドの上
で経験して来たからです。その時
は正直にいつて羞恥しきで一杯で
したが、手術して三日目の事でし
たが看護婦さんが「カン腸します
から」という事で附添いの叔母さ
んは三本を利かしての事でしたが
大きなオシメカバーにオシメを用
意して体が動かす事さえ出来なか
った故もあって赤ん坊の格好よろ
しくで一五〇cc注入されヌメヌメ
したゴムのオシメカバーをピッチ
リと、はめられてしまったのでし
た。その後もベッドから降りる事
が出来るまでオシメの世話になっ
たのです。私はあなたがどの様な
オシメカバーやオシメを愛用され
てるでしょうか、私が若し縁あつ

て一緒にプレーをする機会があり
ましたら、この様に……。柔いフ
トンの上でヌメヌメした粘着タッ
チ十分の総ゴム製のオシメカバー
に赤ちゃんのと同じあの魅惑的な
柄雪花絞りのオシメをセットし
てそうしてカン腸、グリセリン原
液を否「ドンナ」浣腸液を五〇cc
一〇〇cc注入します。ジーンと
して来るドナンの便意刻々と募つ
て来てあなたはオシメカバー姿で
美しく悶える事でしよう。ピッチ
リ嵌めた総ゴム製のオシメカバー
のゴムをきしませて、そうしてや
がてオシメカバーはベツトリと汚
れ「マァーこんな汚して」と母
親が子供のオシメを取り替える様
にして熱いタオルでキレイにお尻
を拭いてサッパリした新しいオシ
メとオシメカバーを嵌めて上げ度
いサッパリした顔はカン腸に就い
て、ソフトなサッパリしたオシメ
の感触、ピッチリしたオシメカバ
ーの密着心にあなたはウツトリと
して、オシメの持つ魅力を十分に
満喫される事でしよう。そしてカ
ン腸やオシメに関してのいろいろ
な楽しい話、フォート資料といっ
た物を披露し合へたらどんなにス
バラしい事でしようか。市販の大
人用のオシメカバーも種々ありま

月経帯(バン)フォト

モデル 大塚 啓子

○ダイアナ・デラック
ス・バンド(黒色)
大手札 三枚一組 三〇〇円
略号(たい)

○ローズ・パリス・ソ
フト・ネット・バンド
大手札 三枚一組 三〇〇円
略号(たね)

○ローズ・パリス・バ
ンド
大手札 三枚一組 三〇〇円
略号(たろ)

○ローズ・パリス・バ
ンド・バンロン・フ
ラワー
大手札 三枚一組 三〇〇円
略号(たう)

○着脱・ダイアナ・デ
ラックス・バンド(黒)
大手札 三枚一組 三〇〇円
略号(たか)

○鑑賞・ダイアナ・デ
ラックス・バンド(黒)
大手札 三枚一組 三〇〇円
略号(たあ)

鼻責めのアップ。

る啓子鼻料理の大胸をわくわさせ
穴が真上を向くほどあおむかせ片
方の穴へ小指を突っ込んで無理矢
理穴を押しひろげたり、コヨリを
鼻の奥深くさし込んで掃除をした
り、果ては二本の棒を穴に突っ込
んで、こじあげるといった若い女
の鼻に對する責めフオト。

膨満正面の縛り

大手札三枚一組 三〇〇円
長野 良子 略号（へな）

ある定評のある素晴しくポリウムの
豊かに二つの乳房に掛けられた縄の
臍。正面むいて縛られた長野良子
の肉体美の緊縛を心ゆくまで眺め
ることのできるフオト。

血紅切腹絶命態

大手札三枚組 三〇〇円
絹文代略号 (ちの)

フンドシー本の真白な裸身を荒むしろの上に横たえて、切腹の屍をさらす凄惨なポーズ。傍には血にまみれた脇差が、ころがつている。脇差による真白い下腹は対する腹切りに加えて、切腹のあとの絶命屍体のポーズを描いた。

血紅美女の切腹

大手札三枚一組 三〇〇円
絹川 文代 略号 (ちた)

色白で伸びやかな肢体の絹川文
代が自らの下腹を小刀によって、
きりきりとかつさばいてゆく有様
を血紅を使用して、思いのままの
奔放なポーズによって、美しくも
あえかに表情した切腹姿態

オムツ着用写真

大手札七枚一組 七〇〇円
大塚 啓子 略号 (むね)

オムツマニヤの待望久しき本格
的なオムツ着用の各種写真です。
この写真には、きつとマニヤの方
なれば、随喜の涙を流されること必
至の自信ある作品です。男の手に
よってオムツを当てられ、カパー
をさしてゆく順序が刻明に七枚の
フォトの中に組み入れられており
ます。是非御一見を——。

バンド着用開股

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号 (つん)

又々、バンドマニヤの方々に
して贈る魅力あふれるフォト。特
に着用の模様をあからさまに鮮
に見せるために、開股のポーズに
よって替ゴム、当ゴムの部分には
つきり焦点をあてました。

マニヤ全裸緊縛

す。ピンクナイロン、無地にビ
ニール製、レザードで作った三角型
グリーン総張ゴムのオシメカバー
と、それぞれの変わったムードもま
た楽しいものです。どうか楽しい
お便りを下さい。すぐ近くです、
大いに語り合うではありません
か。(岐阜／＼赤井茂)

私は現在、ある水商売をなさつておられる女性にお願ひして、一ヶ月に一度自分の給料の三分の一程を飼育料として支払い「ブチ」なる名前を命名され犬として扱つていただいております。足舐めから始まり犬の芸仕込み果ては擦り責など肉体的苦痛よりも凌辱のよきな精神的苦痛に重点がおかれております。足舐めも、わざと汚したおみ足をきれいになるまで続け少しでもなまけると鞭がようしやなく飛んできます。犬の芸仕込みも尻尾のかわりにバナナを差し込まれ、チンチン、お手、三べん廻ってワンなど、その方が飽きるまで続けねばなりません。またお食事の時など食卓がわりになり時々残飯を手を使わず食べねばなりません。この他にも色々変った事を、命令されますがその通りにしなければ思いきり鞭でひっぱたか

れるのです。私は時々、わざわざお金まで払って欲望を満たさねばならぬ自分の浅ましい根性に情けなくなりますが、これが私に課せられた宿命とあきらめている次第です。こんな私でも週に一度か二度づつ飼育してくださる阪神間在住のBGもしくは三十五才位までのご理解ある素人の女性がおられましたら、お手紙いただきたく思うのでございます。津田亜紀子様のような理想の女王様がご出現されますようお願いいたす所存でございます。念のため私は二十八才で、すでに結婚しております。(西宮市八高田生▽)

津田亜紀子様へ五月号サロンにて貴女様の記事を拝見致し、早速ペンをとらせて戴きます。小生は当年二十六才、体重六〇kg、色白中肉の男です。千葉県松戸の方から神田にある会社に通勤致しているサラリーマンで、勿論独身です。貴女様の文を拝見致しぜひとも奴隷として、貴女様に酷使されたく、伏してお願ひ申上げる次第です。私はマゾツ気ある男ではありませんが、残念ながら実際に女性の方にご飼育戴いた経験は皆無です。その点、実際に飼育酷使され

大手札三枚一組 三〇〇円
栗本 ミチ 略号 (いな)
特に彼女の希望によって口絵には掲載しませんでした。分譲フォトとして全裸緊縛ポーズをどろんにいます。若々しく伸々とした美しい肢体に蛇のようにまといつた美しい新しいモデルのフォト一組をコレクションの一端に。

斬首処刑場面

大手札二枚一組 三〇〇円
新宮氏提供 略号 (くし)
目かくしをされ、全裸の柔肌に厳しく捕縄をかけられた女囚が大刀一閃、むごたらしく斬首されようとする緊迫した場面。

た場合、果してご命令を完全に遂行し得るか、その点が問題ではあります。少く共、全く白紙の人間としてご命令通り忠実に実行するべく忍耐という形で精神面の統一には常々はげんでおるつもりです。首輪なき奴隷が常々思う事でしょうが、果して実際にどんな事でも耐えた上にそれを与え下されたものとして自己の喜びに昇華出来るだろうか、という点が一番の疑問として、私自身の心中にも存在しているのですが、少く共、汚辱恥辱といった面では私自身の精神の持ち方によって、恵み賜わったものとして喜びに昇華し得る自信がご座います。従って、もし貴女様が私をご使用戴いた場合、必ずやご満足戴けるべく最大の努力を惜しまず、また一方において私自身全能なる女王様にご奉仕しつくづく自己内の精神昇華につとめる所存です。条件列記要云々、

この事ですが、生命のみの保障やお願い申上げる他、いかなる事も甘んじてお受け致す所存です。仮りにご採用賜りました時には以下の誓約書を差上げるつもりでございます。いかがなものでしょうか。(1)私事森山は津田様に自づから捧げるべく生命以外の全ての社会的人間的権利を津田様に委託するものである。(2)その期間は津田様のご命令により現場へ一步入った時から、ご命令により現場を離れるまでであり、その間、私事森山に加えられる全ての肉体的精神的損傷に対しては、私事森山は全て権利を放棄した事になり、何ら法律的権利も有さない。(3)ご命令によって永久に津田様の眼前及び周囲より消える事を確約するものである。署名以上よろしくご検討戴く様お願い申し上げます。なお、私はセールスマンのビジネスに従事しておりますので時間的な

融通は相当あります。もし、一度現物を下見されたい場合には、毎週月、水、金と四月と六月末まで午後三時三〇分と四時三〇分まで神田の喫茶店にて待機致しておりますので、目印及び指定場所をご命令戴ければその場所にて拝見して戴く所存であります。その上でご採用なり何なりご検討戴ければ幸いです。神田の喫茶店のテレナンバーは(二四一)五〇〇〇または一です。それでは只今より御慈悲におすがりすべくお待ち申し上げます。つつペンを置かせて戴きます。

(東京八森山安雄)

五月号二十五日に入手しました。例の問題以来発行日がおくれ勝ちで、毎月末には不安な日を送っていたわけですが、まず一安心しました。来月以後も発行日は厳守してください。ただし早くなるのはかまいません。グラビヤの「森の中の美形」「ハリツケ」は私の好みに合うのですが、前者は暗すぎ後者はふたつになっただけはがっかり。この様なものしかだせないのなら、グラビヤを全廃しかわりに「美3」のような分譲品を年に四、五回出したらいかがでしょう。ところでこの「美3」に

目次がついてないのと、四月号の内容一覧にはのっていた新人新井、五月両嬢の姿が消えていたのは残念。次回の「豊満と清楚」に期待します。「処刑場面特集号」でも出ればもう感謝感激なものです。女斗彦様の通信もまことに喜ばしいもの。美女決闘マニヤを満足させるものをお願い致します。「大決戦」も投稿はしましたが東西二百人の美女が首を失う話などとうてい私の手に負えるものではなく、果して前後が結びついていくか疑問です。四月に予定されていた欧州行もしばらく延期になったので、これからはますます美女を殺すつもり。殺人にしか興味のないマニヤは、わが奇巧にも少ないと思うのですが、幸い採用になっっているかぎり出発前日までイメージをしばらくだすつもりです。女斗彦様をはじめ今までもおほめの言葉をおくださった方々に感謝致します。(佐出須登)

五月号を拝見して益々充実し発展されることについて御祝い申し上げます。私の愛読しておりました「花と蛇」が単行本になるとのこと、文章の末尾で拝見し、心躍るばかりの喜びを感じました。ど

本誌は七月号より、定価三〇〇円になります。

うか四馬孝氏の絵をたくさん入れて下さるよう望みます。「花と蛇」が単行本になりましたら、私は第一番に買い求めたいと思っています。(高松市仏生山町八黒木敏男V)

大分春らしくなつてまいりました。はじめはお便りいたします。

私は昨年暮に九州から上阪してまいりました女性です。はからずも書店で御誌を拝見しまして、矢もたてもたまずお便りするしだいです。もし余裕がございましたら通信欄の片すみへでも、おのせいただければ幸いです。実は私、御誌を読ませていただき、大変共鳴いたしました。お恥しいことながら、一度モデルとして使っていただけないかと、胸をおのかせております。只今の気持では、どんなきついモデルにでも、ならしていただきたい。喜んでそんなモデルになりたいと思っています。そう思うだけで、私の胸は自分でもわ

かるくらい、ドキドキと高鳴ってきます。でも、私は若くはないので駄目でしょうね。本年二十七才になります。それに、故郷で一度結婚に失敗して、田舎にもいたたまれず上阪してきた身です。只今洋裁店の下請けのお針子をしておりますので、いつでも身体はあきますが、街へ出たことがあります。市内的の地理には不案内です。小柄なので令よりは二つ三つ若く見えますが、肌の色は小麦色で美人というほどの顔立でもございせん。こんな私でもおよろしければ、是非モデルとしてお使い下されば、有難いと思います。こんなお便りを書いていくだけでペンを持つ手がふるえるくらいです。もし御誌の方で、お差支えの節は、読者の方の中で、確実な方を御紹介いただけないでしょうか。尚、私の住所は親戚の内ですので、公表下さらないようお願いいたします。(大阪府布施市八森田峰子V)

次号(七月号)は五月二十五日発売いたします。

貴社益々御繁栄の程およろこび申し上げます。つきましては、奇クファンとしては是非おねがい致したいと思ひます。貴誌の写真、グラビヤは、他の類似雑誌にくらべ、緊縛写真などは誠に迫力があり、楽しく見せていただいております。が、私は特に日本調のものが大好きなのです。着物、長じゆばん、腰巻、そして特に日本髪などによる緊縛写真に興味を持っております。貴誌の以前の雑誌には、たまに見かけたことがありましたが、最近全く姿を見かけず誠に残念です。そこで何枚かの写真の内、一枚か二枚で結構ですから、そうしたファンのために写真のせていただきたいと思ひますし、又、そうした特集号等も是非企画していただきたいと思ひますが、如何でしょうか。いろいろと問題もあると思ひますが、現在の優秀なモデルをつかつて、そうした望みをかなえていただきたく存じます。何かにつけて純然たる日本調が失われようとしている今日、こうした考えをもっているファンも多々あることと思ひますが、どうか、そうした面にも一層の御配慮下さいますよう、重ねてお願い致します。(大阪八懸孫一V)

私はスプリング及び国鉄、私鉄のポイントでは、日本一流の工場に働いている工員です。そして貴誌のファンです。いつも毎月号を駅前の露店で求めております。貴誌は私にとりましては、毎日の生活に欠かせない心と生活の糧です。今後共、悪書追放とやらの弾圧に屈せず、毎月確実に続けて発行して下さいよう心からお願い致します。貴誌のない生活を考えますと、私の心は暗たんたるものになってしまいます。尚モデルの皆様も皆様の背後には大勢のファンがいることを忘れずに御健闘下さるようお願い致します。編集担当者の方々の御労苦に感謝すると共に、今後の御活躍を御祈りいたします。(静岡八三島生V)

分類するとサド、それもクリスターマニヤに入るとしようか。KC誌を手にとると、いつも真先に浣腸記事を探しております。オム

代理部分護品総目録

十円切手封入の上お申込み下さい。

ツ等を使った羞恥責を好みます。同好の女性の方、文通でお話を聞かせて下さい。四年ほど愛読しておりますが、近頃、本誌の内容が通俗化したような気がして、さびしく思います。世間の無理解が大きな原因でしょう。いっそうの発展をいのります。「十三人の女死刑囚」は素晴らしい作品です。文章にもハリがあり、エネルギーを感じます。最近の大量生産されるコクの無い一般の小説類なぞ足元にもおよばない健全な生命感さえ感じるので。美しいさし絵を望みます。かなり古い号ですが、畔亭数久先生の「鉄路に散る花」で、二人の女学生が列車にひかれて身体バラバラになるイメージを絵面化したものがありました。ああいう口絵をなんとか現在の本誌にものせることができないものでしょうか。南村俊平先生にも、大いに活躍していただきたいものです。諸先輩の中には、すでに御存知の方も多いと思いますが、白土三平の「忍者武芸帳」という十七冊ぞろいの児童マンガ本を御紹介したいと思えます。忍者マンガの

古典とされているとおり、歴史感のしっかりした立派な作品です。

白土三平という作家は、本来、社会主義リアリストなので、耽美的な絵の美しさは有るのです。みごもった女忍者が十数人の敵忍者群に追いつめられ、腕、足、首と斬り断たれ、ついに五体ズタズタにされたり、百姓達が片はしから生首をそがれていたり、主人公の忍者がとらえられ、五頭の牛に手足を引きぬかれて、八つぎにきされたり等々です。残酷マニヤの方に一読をおすすめします。どこの貸本屋にもあります。(虫も殺さぬ室井亜砂路一)

初めてお便り致します。先日、神田の某書店で「奇クラブ」誌を初めて知り、同好者の多きを心強く感じました。長年にわたる悩みも、ここで解消、夢を実現させて頂けるものと感謝して居ります。その私は二十七才のサラリーマンM男です。首乗り、顔乗り、逆馬乗り等、貴女様の下敷きとなって御奉仕致します。小柄な女王様、何卒私の願いを叶えて下さい。従

順な奴レイとしてお仕え致します。お呼びかけは編集部様より御回送して戴ければ幸いです。(北多摩・N生)

芳野眉美氏の文章、いつも快く読ませてもらっています。軽快なタッチとテンポで進められてゆく筆は、モダンジャズでも聴いていく楽しい気持です。ガン作・マニヤのノートも、本家のとやま・かづひ氏が姿を見せぬ以上、ガン作という文字を取り除いて、本格的な、芳野式マニヤのノートを連載していただくようファンとしてお願い致します。さらりとした淡白な味わいのコントは、上品な風格と、芸術的な香気さえ感じられます。私は実際に生きた女性から踏まれたり、蹴られたり、特に肉体的を恥かしめを受けたりすることには、嫌悪のようなものを感じるのですが、芳野氏のような文章を拝見すると、妙なるミュージックにすら酔うような気持になるのです。その点、連載されている万田不仁氏の悦虐絵灯籠も、芸術的な美しさに包まれた大人のメルヘンです。私は残念ながら、自分でうまく文章を書く技術を持っていませんので、以上のお二人を常に羨

ましく思っています。私の胸の中には、常にもやまとした雲のような挿話が、いっぱいあるのですが、よう文章にしないです。それだけに、自分と同じ気持の文章がのっていると、全くなつかしく思われてしまうのです。御二方の御健筆を祈ります。(東京都八長井生V)

はじめてお便りさせていただきます。私は御誌の数年来の愛読者ですが、いつも興味深く拝読しております。誌上では妊婦マニヤの方々も相当おいでの様子ですが、私の家内も只今妊娠中で、分娩予定は五月中旬です。大阪と近ければお伺いして、撮影のモデルにさせてもいいのですが、汽車で十数時間の行程ですから一寸無理だと思えます。妻も自分の初産の腹部の大きなところを是非撮影してほしいと申しておりますので、若し編集部の方で、おでむき下さるのでしたら、お願いできれば幸いです。そのうち、いずれ私達夫婦のSMのプレイについても書かせていただこうと思っています。その節は、どうかよろしくお願い致します。

(福岡市八田中弘V)

新人異色原稿募集

一、告白

「私は、こんな趣向を持ちます」
○自分はこのような人に言えぬ変った趣向を持っているという方はペンに托して、その偽らざる真実の告白をお寄せ下さい。どのように奇想天外のものでも驚きませんから、どうか、全国のファンの方々に、貴方（貴女）の真実の告白を引っさげて、お呼びかけ下さるよう心からお待ちします。

二、手記

「私は、このように思います」
○真面目な御批判をお寄せ下さるよう、お待ちします。御自分の生活のこと、社会一

三、体験

「私はこんな変った体験をしました」
○長い人生の中には、誰でも一度や二度は凄く体験をするものです。ぜひ、とっておき異色体験記をお書き下さい。また、特に変った体験でなくとも、御自身で非常に強い印象を受けられた事柄を、この際再び追体験して下さい。
○以上の「告白」「手記」「体験」の三項目の応募原稿は、近く発行予定の「特集号」に一括掲載したいと思ひます。採用篇には、相当稿料お支払い致します故、奮って御応募あらんことを。
○締切日、毎月三十日

愛読者原稿募集

△体験、告白、手記△

どなたにも一つや二つの思ひ出とか、体験とかいったものが必ずあるものです。物言わざるは腹ふくるるのたとえどうか皆様の真実の叫びをどしどし文字にしてお寄せ下さい。採用には本誌三月分乃至一年分贈呈します。

△創作、小説、物語△

御自分の描く夢をまとめて

△（映画、雑誌）通信△

下さい。採用篇には本誌五月分以上贈呈します。
映画や既刊雑誌の中で、特に興味をお持ちになった事項を通信下さるようお待ちします。掲載の分には本誌三月分贈呈いたします。

△レポートマニヤ通信△

新聞記事等で関心をお待ちの事項或はマニヤ各傾向の本誌に対する通信をお寄せ下さい。本誌二月分贈呈します。

○尚、以上の五項目の採用原

△読者通信△

編集者、執筆者、投稿者への通信、呼びかけ、前号の批評、本誌に対する希望や御意見、感想、思ひ出話、或いは読者相互の交歓文通、応答などをお寄せ下さい。

△奇クサロン△

奇クサロン向きの短文、マニヤ通信、写真絵画などを募ります。文章は原稿用紙三枚まで。採用篇には薄謝進呈します。

☆本誌御購読の榮☆

一月分（1冊）三〇〇円△送共△
三月分（3冊）九〇〇円△送共△
半年分（6冊）一八〇〇円△送共△

本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書店にて一斉に発売いたしますが、入手困難の方は直接代金御送付の上、御予約下されば、毎月二十日前後、印刷完成と同時に厳重包装して確実に発送申し上げます。局留の方々は二十五日頃受領して下さい。

奇譚クラブ 定価二五〇円

六月号

（第十八巻第六号）
（通刊第一九〇号）

昭和三十九年五月二十日 印刷
昭和三十九年六月一日 発行

編集印刷兼発行人 箕田 京二
大阪阿倍野局私書函第十四号

発行所 天 星 社

（振替口座大阪五〇〇四二番）
（昭和三年四月三日第三種郵便物認可）
（国鉄大局特別扱承認雑誌第一二二二号）

☆代理部分譲品について☆

○代理部分譲品は本誌に広告してある分は全部在庫しておりますから、略号明記の上お申込み下さい。尚、分譲品の詳細は、目錄を御請求の上ごらん願います。

○既刊雑誌の旧号は別項の通り在庫していませんから、売切れぬ中御注文願います。

○口絵写真の複写転載は固く禁じます。